博　多　34

—博多遺跡群第56次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第326集

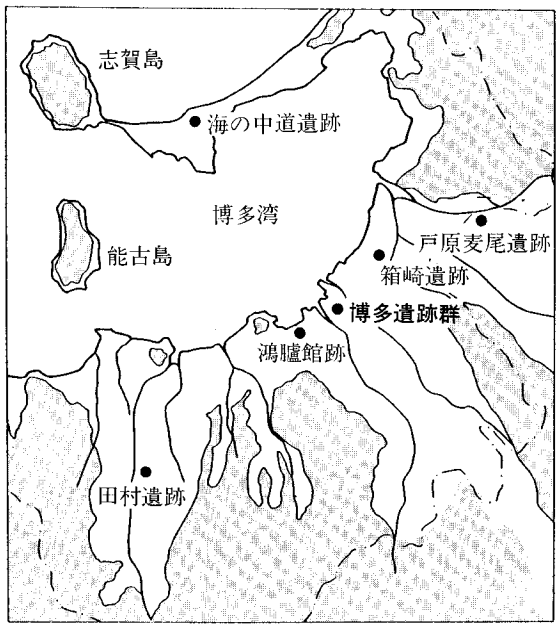
1 9 9 3

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　34

—博多遺跡群第56次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第326集



遺跡調査番号8943

遺跡略番　HKT-56

1 9 9 3

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。これを保護し未来へ伝えていくことは、云うまでもなく行政の務めであります。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は平成２年度に発掘調査を行った博多遺跡群第56次調査の成果を報告するものです。博多は古くから対外貿易の一大拠点として栄えてきた地域であります。この調査でも、古墳時代から江戸時代にいたる数多くの遺構と貿易陶磁器類を中心とした様々な遺物を確認しました。これは博多の歴史的変遷を復元する手がかりのひとつとなるものと考えられます。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成５年１月

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1．本書は福岡市博多区店屋町４番１号の福岡市住宅供給公社およびインター・カレッジのビル建設に伴い、福岡市教育委員会が平成元（1989）年９月８日から翌年１月31日まで発掘調査を実施した博多（はかた）遺跡群第56次調査の報告である。

1．遺構の実測は濱石哲也、菅波正人、林田憲三が行った。

1．遺物の実測は林田が主に行い、他に英豪之、黒田和生があたった。

1．遺構写真は濱石、菅波、遺物写真は菅波が撮影した。

1．製図は濱石、菅波、林田、英、村上かをり、撫養久美子、入江のり子、樋口久子、亀井律子、野村智栄が行った。

1．本書の作成にあたっては他に有島美江、緒方まきよ、前田みゆき、上田保子、太田順子、山田由美子、西島信枝の協力を得た。

1．遺構は検出順に通しで番号をふり、その頭に遺構略号を付けて本書に用いた。遺構略号SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）、SX（土器溜、土壙墓）である。付図と挿図の一部ではこの遺構略号を省いている。

1．本書の遺物は通し番号で示し、挿図・図版とも一致する。

1．遺構実測図などに用いた方位は磁北である。

1．本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される。

1．本書の執筆は３・５・６・７－５）、12）を菅波、７－７）、９）、11）を林田、他を濱石が分担した。

1．本書の編集は濱石、菅波、林田が行った。

本　文　目　次

本文頁

1　調査にいたる経緯……1

2　調査の組織……1

3　遺跡の位置と歴史的環境……3

1）位置……3

2）周辺の遺跡……3

3）これまでの調査……5

4　調査の概要……9

1）調査経過……9

2）層序……10

3）各面の概要……10

5　第Ⅰ面の記録……12

6　第Ⅱ面の記録……16

7　第Ⅲ面の記録……24

1）概要……24

2）井戸……24

3）井戸出土遺物……39

4）土坑……55

5）土坑出土遺物……78

6）土器溜……143

7）土器溜出土遺物……145

8）溝……149

9）溝出土遺物……151

10）土壙墓……157

11）土壙墓出土遺物……158

8　その他の出土遺物……159

9　小結……164

図　版　目　次

図版１	第Ⅰ面	１　全景（東から）	２	西側部分（東から）
図版２	１	SK0023（東から）	２	SK0024（東から）
図版３	第Ⅱ面	１　全景（東から）	２	第Ⅱ面西側部分（東から）
図版４	１	第Ⅱ面東南部分（北東から）	２	SK0116（南から）
図版５	１	SK0072（北から）	２	SK0076（東から）
図版６	１	SK0104（西から）	２	SK0106（南から）
図版７	１	SK0131（北から）	２	SK0132（西から）
図版８	１	SK0133（西から）	２	SX0067（西から）
図版９	第Ⅲ面A区	１　全景（東から）	２	中央部分（東から）
図版10	第Ⅲ面B区	１　全景（東から）	２	近接全景（東から）
図版11	１	SE0280周辺（東から）	２	SK0332周辺（南から）
図版12	１	SE0411周辺（東から）	２	SE0490周辺（北東から）
図版13	１	SE0428周辺（東から）	２	SX0486周辺（東から）
図版14	１	SE0127（南から）	２	SE0135（北から）
	３	SE0137（南から）	４	SE0166（北から）
図版15	１	SE0188（南から）	２	SE0208（北から）
	３	SE0233（南から）	４	SE0280（東から）
図版16	１	SE0295（西から）	２	SE0296（西から）
	３	SE0302（南から）	４	SE0347（南から）
図版17	１	SE0401（北から）	２	SE0402・0483（南から）
	３	SE0405・0430（西から）	４	SE0411（東から）
図版18	１	SE0428（西から）	２	SE0478（北から）
	３	SE0490（東から）	４	SE0494（北から）
図版19	１	SE0496（北から）	２	SE0507（北から）
	３	SE0521（北から）	４	SE0561（西から）
図版20	１	SK0170（東から）	２	SK0281（北から）

図版21　1　SK0140（南から）　2　SK0142（南から）
3　SK0196（東から）　4　SK0205（東から）
図版22　1　SK0206（北から）　2　SK0226（北から）
3　SK0346（南から）　4　SK0425（南から）
図版23　1　SK0427（南から）　2　SK0437（南から）
3　SK0463（南から）　4　SK0467（東から）
図版24　1　SK0469（東から）　2　SK0477（北から）
3　SK0512（南から）　4　SX0432（南から）
図版25　1　SX0400（南から）　2　SX0422（南から）
図版26　1　SX0465（北から）　2　SX0486（北から）
図版27　出土遺物1
図版28　出土遺物2
図版29　出土遺物3
図版30　出土遺物4
図版31　出土遺物5
図版32　出土遺物6
図版33　出土遺物7
図版34　出土遺物8
図版35　出土遺物9
図版36　出土遺物10
図版37　出土遺物11
図版38　出土遺物12

挿　図　目　次

本文頁
第１図　博多遺跡群と周辺の遺跡（1/50000）……2
第２図　博多遺跡群調査位置図（1/9000）……4
第３図　博多遺跡群第56次調査地点位置図（1/1000）……6
第４図　調査風景１……9
第５図　調査風景２……9
第６図　調査風景３……9
第７図　調査区土層断面図（1/100）……折り込み
第８図　第Ⅰ面全体図（1/120）……13
第９図　炉跡実測図（1/40）……14
第10図　第Ⅱ面全体図（1/120）……17
第11図　石積遺構実測図（1/40）……19
第12図　第Ⅱ面遺構出土遺物実測図(1)（1/3）……20
第13図　第Ⅱ面遺構出土遺物実測図(2)（1/3）……21
第14図　第Ⅱ面遺構出土遺物実測図(3)（1/4）……22
第15図　第Ⅲ面井戸配置略図（1/200）……25
第16図　SE0127・0135・0137・0145実測図（1/60）……26
第17図　SE0166・0172・0176・0195実測図（1/60）……28
第18図　SE0188・0233・0280・0295実測図（1/60）……29
第19図　SE0208・0296実測図（1/60）……30
第20図　SE0302・0347・0401実測図（1/60）……32
第21図　SE0402・0405・0411・0420・0423実測図（1/60）……33
第22図　SE0421・0428・0430・0468実測図（1/60）……34
第23図　SE0464・0478・0483・0490・0494・0496実測図（1/60）……36
第24図　SE0507・0509・0521・0560・0561実測図（1/60）……37
第25図　SE0127出土遺物実測図（1/3）……40
第26図　SE0135・0137出土遺物実測図（1/3）……41

第27図　SE0166出土遺物実測図（1/3）……42
第28図　SE0172・0195出土遺物実測図（1/3）……44
第29図　SE0208出土遺物実測図（1/3）……45
第30図　SE0233出土遺物実測図（1/3）……46
第31図　SE0280・0302・0347・0401出土遺物実測図（1/3）……47
第32図　SE0402・0405・0408出土遺物実測図（1/3）……48
第33図　SE0411・0420・0421・0423出土遺物実測図（1/3）……50
第34図　SE0428・0464出土遺物実測図（1/3）……51
第35図　SE0468・0478出土遺物実測図（1/3）……52
第36図　SE0483・0490・0494・0507・0509・0521出土遺物実測図（1/3）……54
第37図　第Ⅲ面土坑配置略図（1/200）……56
第38図　SK0119・0130・0140・0142・0144実測図（1/40）……57
第39図　SK0149・0167・0170実測図（1/40）……58
第40図　SK0173・0182・0189A・0189・0190・0191・0193・0194実測図（1/40）……60
第41図　SK0196・0197・0198・0199・0205・0206・0207実測図（1/40）……62
第42図　SK0210・0214・0218・0224・0226・0232実測図（1/40）……64
第43図　SK0281・0282・0287・0304・0305実測図（1/40）……66
第44図　SK0306・0321・0340・0341・0346・0412実測図（1/40）……70
第45図　SK0413・0419・0424・0425・0426・0427・0429実測図（1/40）……71
第46図　SK0435・0437・0438・0439・0463・0467・0477実測図（1/40）……74
第47図　SK0469・0508・0510・0512・0513実測図（1/40）……76
第48図　SK0128・0140・0149・0167・0169出土遺物実測図（1/3）……79
第49図　SK0170出土遺物(1)（1/3）……80
第50図　SK0170出土遺物(2)（1/3）……81
第51図　SK0170出土遺物(3)（1/3）……83
第52図　SK0170出土遺物(4)（1/3）……84
第53図　SK0170出土遺物(5)（1/3）……85
第54図　SK0170出土遺物(6)（1/3）……87

第55図　SK0171・0182・0189(1)出土遺物実測図（1/3）……88
第56図　SK0189(2)・0190・0192出土遺物実測図（1/3）……89
第57図　SK0193・0194・0196(1)出土遺物実測図（1/3）……90
第58図　SK0196(2)・0198出土遺物実測図（1/3）……92
第59図　SK0199・0205・0206・0210・0214出土遺物実測図（1/3）……94
第60図　SK0218・0220・0223・0224・0226出土遺物実測図（1/3）……96
第61図　SK0232・0236・0239・0259・0260・0270・0277出土遺物実測図（1/3）……97
第62図　SK0279・0281(1)出土遺物実測図（1/3）……99
第63図　SK0281出土遺物実測図(2)（1/3）……102
第64図　SK0281出土遺物実測図(3)（1/3）……103
第65図　SK0281出土遺物実測図(4)（1/3）……104
第66図　SK0281出土遺物実測図(5)（1/3）……105
第67図　SK0281出土遺物実測図(6)（1/3）……106
第68図　SK0281出土遺物実測図(7)（1/3）……107
第69図　SK0281出土遺物実測図(8)（1/3）……108
第70図　SK0281出土遺物実測図(9)（1/3）……109
第71図　SK0281出土遺物実測図(10)（1/3）……110
第72図　SK0281出土遺物実測図(11)（1/3）……111
第73図　SK0281出土遺物実測図(12)（1/3）……112
第74図　SK0281出土遺物実測図(13)（1/3）……113
第75図　SK0281出土遺物実測図(14)（1/3）……114
第76図　SK0281出土遺物実測図(15)（1/3）……115
第77図　SK0281出土遺物実測図(16)（1/3）……116
第78図　SK0281出土遺物実測図(17)（1/3）……117
第79図　SK0281出土遺物実測図(18)（1/3）……118
第80図　SK0281出土遺物実測図(19)（1/3）……119
第81図　SK0281出土遺物実測図(20)（1/3）……120
第82図　SK0281出土遺物実測図(21)（1/3）……121

第83図　SK0281出土遺物実測図㉒（1/3）……122
第84図　SK0281出土遺物実測図㉓（1/3）……123
第85図　SK0281出土遺物実測図㉔（1/3）……124
第86図　SK0282・0287・0288出土遺物実測図（1/3）……126
第87図　SK0300出土遺物実測図（1/3）……127
第88図　SK0304・0305・0306・0326・0346・0412出土遺物実測図（1/3）……129
第89図　SK0413・0415・0418・0419・0424・0425・0426・0427・0434・0439出土遺物実測図(1/3)…131
第90図　SK0437出土遺物実測図（1/3）……132
第91図　SK0438・0463(1)出土遺物実測図（1/3）……134
第92図　SK0463(2)・0467(1)出土遺物実測図（1/3）……135
第93図　SK0467出土遺物実測図(2)（1/3）……136
第94図　SK0469出土遺物実測図（1/3）……138
第95図　SK0471・0473・0477・0480出土遺物実測図（1/3）……139
第96図　SK0508・0510・0512出土遺物実測図（1/3）……140
第97図　SK0559・0568・0580出土遺物実測図（1/3）……141
第98図　第Ⅲ面土器溜・溝・土壙墓配置略図（1/200）……142
第99図　SX0183・0400・0422・0486実測図（1/20）……143
第100図　SX0183・0400・0422(1)出土遺物実測図（1/3）……144
第101図　SX0422(2)・0465・0466・0484(1)出土遺物実測図（1/3）……146
第102図　SX0484(2)・0486出土遺物実測図（1/3）……148
第103図　SD0129・0139・0141・0164・0237・0298(1)出土遺物実測図（1/3）……150
第104図　SD0298(2)・0407(1)出土遺物実測図（1/3）……152
第105図　SD0407(2)・0436出土遺物（1/3）……154
第106図　SX0432実測図（1/40）……156
第107図　SX0432出土遺物実測図（1/3）……157
第108図　包含層出土遺物実測図(1)（1/3）……160
第109図　包含層出土遺物実測図(2)（1/3）……161
第110図　包含層出土遺物実測図(3)（1/3）……162

表　目　次

第１表　博多遺跡群調査地点一覧……7
第２表　第Ⅰ面遺構一覧……15
第３表　第Ⅱ面遺構一覧……23
第４表　SK0281出土陶磁器一覧……100
第５表　出土銅銭一覧 ……163

付　　図

博多遺跡群第56次調査第Ⅲ面遺構配置図（1/100）

1　調査にいたる経緯

昭和52年（1977）の地下鉄工事に端を発した福岡市教育委員会による博多遺跡群の発掘調査は、以後道路拡幅、民間再開発ビル建設などにより1992年３月末で91次に及んでいる。これにより、弥生時代から江戸時代にいたる博多の歴史が具体的に解明されつつあるとともに、中世を中心とした全国に類のない膨大な輸入陶磁器などの資料が蓄積されることとなった。

1988年、博多区店屋町４番１号で福岡市住宅供給公社およびインター・カレッジのビル建設が決定し、市住宅供給公社および国際交流課から建設地内の埋蔵文化財事前審査願が、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に申請された。申請地は博多遺跡群の西側部分に含まれ、また隣地のビル建設の際も11世紀の遺構が多数検出されており、遺構の存在は確実であった。課では遺構の種類や遺構面の確認のため1989年３月20日に試掘調査を行った。試掘は申請地が遺跡群の西側落ち部にあたるため、西端と東端の３ケ所で東西方向のトレンチ（A～C）を設定し開掘した。西端のAトレンチは戦災の瓦礫が地表下２mまで続いた。同じく西端のBトレンチは1.5mまで攪乱層、その下部は暗茶褐色砂質土があり、この層から井戸状の遺構と多量の白磁類の出土を確認した。地表下３mで地山の黄色砂に達した。東端のCトレンチは地表下1.4mまで攪乱層があり、その下部は黒褐色土層となり、2.5mで地山面となった。地山面ではピットを確認した。すなわち申請地では地山が東から西に傾斜し、その上に東側で厚さ約１m、西側で約1.5mの生活跡の層があることが判明した。

これらの結果から埋蔵文化財課は、建設に際しては発掘調査が必要との報告を申請者に回答した。この後課は申請者との間で協議を持ち、開発に先立ち発掘調査を行うこととし、条件の整った1989年９月８日から本調査を開始した。

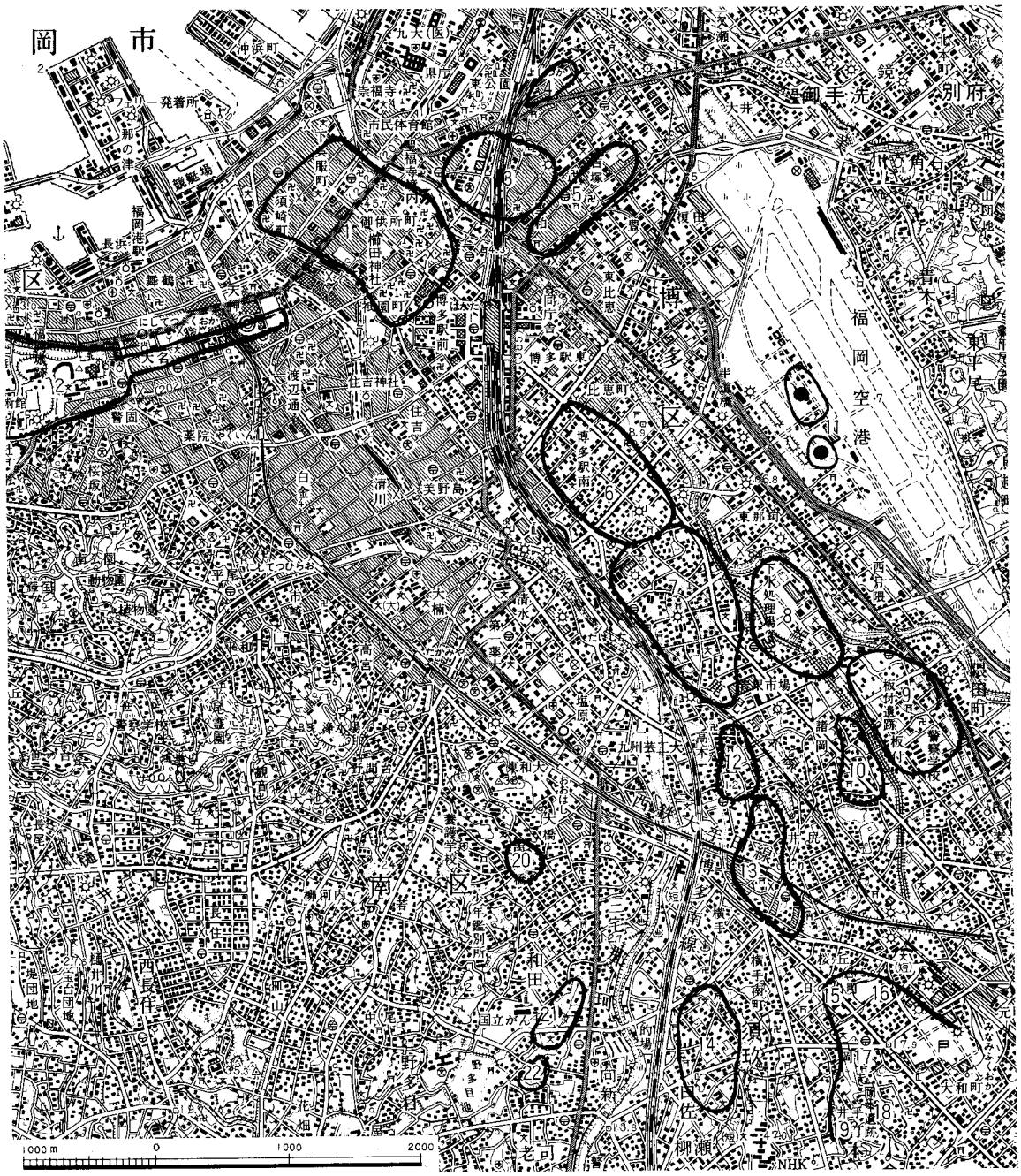
2　調査の組織

調査委託　福岡市住宅供給公社・福岡市国際交流課

調査主体　福岡市教育委員会文化財部（前文化部）埋蔵文化財課

課長	柳田純孝（前任）	折尾学
第１係長	飛高憲雄	
庶務	松延好文（前任）	吉田麻由美
試掘調査	小畑弘巳	
調査・整理	濱石哲也　菅波正人	
調査・整理補助	林田憲三　英豪之　黒田和生　村上かをり	

発掘調査、整理作業にあたっては数多くの方々の御助力を得た。



1. 博多遺跡群
2. 福岡城
3. 堅粕遺跡群
4. 吉塚本町遺跡群
5. 吉塚遺跡群
6. 比恵遺跡群
7. 那珂遺跡群
8. 那珂深ヲサ遺跡、那珂君休遺跡
9. 板付遺跡
10. 諸岡遺跡
11. 雀居跡跡
12. 五十川高木遺跡
13. 井尻遺跡群
14. 曰佐遺跡群
15. 須玖唐梨遺跡
16. 須玖永田遺跡
17. 須玖岡本遺跡
18. 須玖四丁目遺跡
19. 赤井手遺跡
20. 三宅廃寺
21. 野多目遺跡
22. 野多目拈渡遺跡

第1図　博多遺跡群と周辺の遺跡（1/50000）

3　遺跡の位置と歴史的環境

1）位置

博多遺跡群がある福岡平野は南北に延びる洪積台地と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけ三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から御笠川、那珂川が北流し、北端には砂丘が形成される。博多遺跡群はその砂丘上に立地し、東は江戸時代に開鑿された石堂川、南を旧比恵川、西は那珂川によって画される。遺跡の範囲としては博多駅から北側、大博通りを中心にして、東西約１㎞、南北約1.5㎞で想定されている。現在、この地域は博多駅前の商業地域として市街化し、ビルが立ち並んでいる。標高は４～５ｍを測り、遺構は地表下約１～２ｍの深さで検出される。

遺跡の立地する砂丘は大きく「息の濱」と「博多濱」と呼ばれる２つの砂丘に分かれ、その境はおよそ現在の地下鉄１号線にある。内陸側の「博多濱」は祇園町交差点を中心とする地域に最高位があり、それから北西側にはいったん谷が入る。砂丘の形勢は博多濱から息の濱に拡大していき、それに並行した遺跡の拡大が考えられている。

2）周辺の遺跡

博多遺跡群がある福岡平野は「魏志倭人伝」に記されている「奴国」に比定され、特に春日丘陵とそこから北に延びてくる丘陵上には弥生時代以降、重要な遺跡が分布する。春日丘陵には須玖岡本遺跡をはじめとして、その周辺の須玖永田、須玖坂本、須玖唐梨、赤井手遺跡など墳墓、青銅器工房などが検出され、他の弥生集落を圧倒した様相を呈している。春日丘陵から北では弥永原、井尻、五十川、那珂、比恵遺跡などの遺跡が間断なく続いていく。また、丘陵の東側では初期水田、環濠集落で知られる板付遺跡、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪等が出土した諸岡遺跡等がある。また、砂丘上においても御笠川の東にある堅粕遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居、方形周溝墓が検出され、遺物では五珠銭や銅鏃等が出土している。

古墳時代では那珂川領域に首長墓クラスの前方後円墳が展開する。最古式の那珂八幡古墳に始まり、安徳寺大塚古墳、老司古墳、博多１号墳、貝徳寺古墳、日拝塚古墳、剣塚古墳という系譜が想定されている。古墳時代後期では536（宣化元）年、筑紫の那の津に官家が設置される。「那津官家」の所在地については福岡市南区三宅に置かれたとする説もあるが、比恵遺跡で大型の倉庫群や建物、柵等が検出され、現在、そこを「那津官家」とする説が有力である。

律令時代になると、福岡平野の最深部に太宰府が置かれ、「遠の朝廷」として、九州の総監、対外交渉にあたることとなる。また、対外交渉の拠点である鴻臚館（筑紫館）は博多湾岸の那珂川西側の丘陵上で発見された。1987年12月の平和台球場スタンド下の調査にはじまる鴻臚館跡の調査は現在も進行中であり、数々の重要な成果が得られている。

第２図　博多遺跡群調査位置図（1/9000）

3）これまでの調査

博多遺跡群の調査は1977年の高速鉄道（地下鉄１号線）建設に伴う調査に始まり、都市計画道路博多駅築港線関係の調査や民間・公共事業に伴う80次近い調査が行われてきて、現在も調査進行中である。その結果、中世都市「博多」と呼ぶに相応しい多くの遺構、遺物が検出された。それに加え、弥生時代に始まり、古墳時代、古代の遺構、遺物も検出され、博多遺跡群は弥生時代から近世、現代に至る複合遺跡であることが判明した。

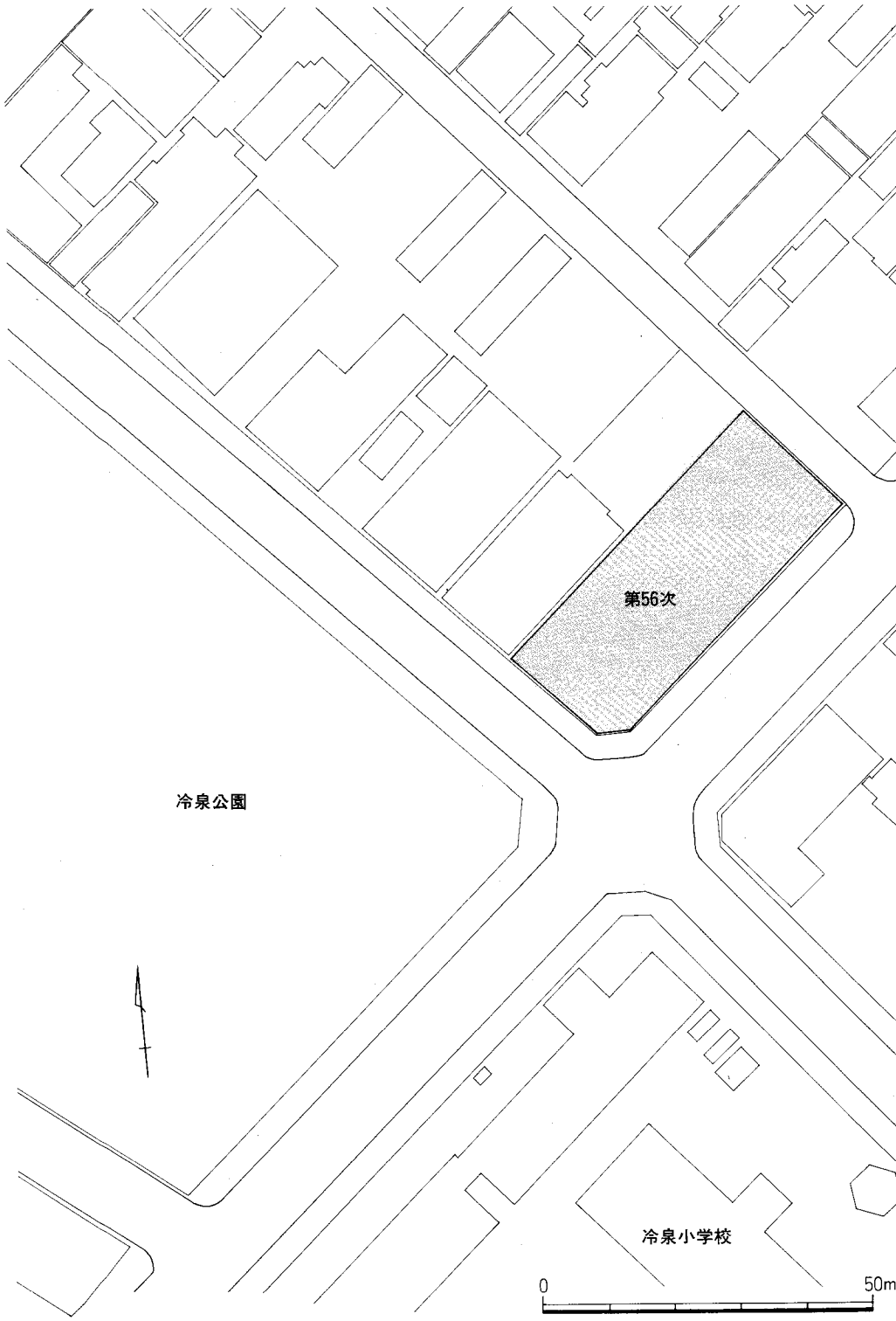
遺跡を時期毎に概観すると、遺跡の初現は弥生時代前期まで遡る。この時期の遺物としては板付Ⅱ式土器や金海式甕棺片等が出土している。中期前半には祇園交差点を中心とする砂丘の微高地に竪穴式住居や甕棺墓が営まれる。

弥生時代後期から古墳時代前期になると、砂丘の拡大に伴って、北の上呉服町や店屋町まで遺跡は広がるが、中心はやはり祇園町を中心とする地域にある。この地域では竪穴式住居跡や方形周溝墓（第17、20、24、27、32次他）、玉造り工房（第17次）や製鉄関連遺構（第59次、65次）、遺物では山陰系、東海系の搬入土器が検出されている。また、第28、31次調査地点では全長56m以上の前方後円墳（博多１号墳）が検出されている。この古墳は埴輪等から５世紀初頭に位置づけられ、那珂川流域に展開した首長墓の１つと考えられている。

律令時代では博多遺跡群には良好な遺構は少ないが、石帯、銅製帯金具、墨書土器、円面硯、皇朝十二銭、鴻臚館式瓦等が数多く出土しており、官衙の存在が推定できる。このほか、越州窯系青磁、刑州窯系白磁、長沙窯系青磁、イスラム陶器等の輸入陶磁器類や緑釉陶器、灰釉陶器等の国産陶器も出土しており、交易の一端を担っていたと考えられる。博多遺跡群の官衙的遺構を「鴻臚中島館」とする説もある。

律令体制の崩壊とともに、貿易の中心は鴻臚館から博多に移る。11世紀後半から12世紀半ばには、「宋人百堂」や「大唐街」といった文献の記述から分かるように、博多に中国商人の居住区が営まれ、彼らによる活発な交易活動が始まる。博多遺跡ではこの時期の輸入陶磁器、特に白磁は多量に出土する。第14次調査では波打ち際に捨てられて多量の白磁が山積みになって出土し、貿易船から陸上げの際に壊れた品物を廃棄したものと考えられている。また、今回報告する第56次調査地点でも多量の白磁を廃棄した土坑などが検出されている。

鎌倉時代になると、文永、弘安の２度の元寇で戦火に巻き込まれるが、その後、鎮西探題が設置され、博多は貿易都市という性格に加え、九州の政治の中心という性格を持つことになる。また、この時期、都市景観にも画期が見られ、息の濱の開発が進み、博多濱、息の濱一体となった都市が形成される。13～14世紀にかけては砂丘の長軸に沿って道路が造られるようになり、第35次調査地点では幅６m程の道路が、第40次調査地点ではそれと交差すると考えられる道路が検出されている。これに見られる町割りは豊臣秀吉による「太閤町割り」が行われるまで続くことになる。



第3図　博多遺跡群第56次調査地点位置図（1/1000）

第１表　博多遺跡群調査地点一覧（1992年３月現在）

公共事業関係

符号	調査番号	調査原因	所　在　地	調査面積(m²)	調査期間	報　告　書	備　　考
A	7725	地下鉄建設	御供所町	1,412	77.12～78.11	高速鉄道Ⅳ・Ⅴ	店屋町工区・本体部A・B
B	7833	〃	御供所町他	4,500	79．3～12	高速鉄道Ⅵ・Ⅶ	祇園町工区・E～Q
C	7835	〃	店屋町・上呉服町他	200	78.11～79．5	高速鉄道Ⅶ	呉服町工区
D	7949	〃	博多駅前1丁目他	4,500	79.12～80．8	高速鉄道Ⅶ	博多駅前工区
E	8037	〃	上呉服町	100	81．3	高速鉄道Ⅶ	呉服町換気塔
F	8038	〃	冷泉町・祇園町	435	80.10～12	高速鉄道Ⅶ	祇園駅２・３号出入口
G	8148	〃	御供所町	70	81．9	高速鉄道Ⅶ	祇園駅４号出入口
H	8149	〃	祇園町	184	81.10～11	高速鉄道Ⅶ	祇園駅５号出入口
I	8150	〃	上呉服町・中呉服町 網場町・店屋町	380	81．4～5	高速鉄道Ⅶ	呉服町出入口
J	8435	〃	博多駅前２丁目	215	84．4	高速鉄道Ⅶ	祇園駅P２出入口
K	8224	道路拡張	上呉服町	630	82.11～83．3	築港線Ⅰ	築港線第１次
L	8331	〃	〃	564	84．2～9	築港線Ⅱ	築港線第２次
M	8404	〃	〃	417	85．1～12	築港線Ⅲ	築港線第３次
N	8527	〃	御供所町	383	85.12～86．6	築港線Ⅳ	築港線第４次
O	8653	〃	〃	380	86.10～87．2	築港線Ⅴ	築港線第５次

民間事業関係

次数	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m²)	調査期間	報　告　書	備　　考
1	7810	納骨堂建設	御供所町・東長寺境内	360	78.11～79．1		本調査
2	7928	ビル建設	店屋町	約100	79．4		立会、土層図作成
3	7929	納骨堂建設	祇園町・萬行寺境内	240	79.11		本調査
4	7930	ビル建設	冷泉町７－１	1,100	79.12～80．3	博多Ⅰ・Ⅱ、図版編	本調査
5	7931	〃	下呉服町346		79.12		試掘調査
6	7932	〃	冷泉町155	640	80．3～4		本調査
7	8023	〃	祇園町130	210	80．6～8		本調査
8	8024	本堂建設	御供所町・東長寺境内	600	80．8～10		本調査
9	8025	ビル建設	上呉服町75		80．9		試掘調査・礎石出土
10	8026	〃	冷泉町474－９	54	80.12	博多Ⅰ	本調査
11	8027	〃	御供所町３－30		80.12		試掘調査
12	8127	〃	中呉服町152・153		81．6		試掘調査
13	8128	〃	駅前1丁目121～127		81．7		トレンチ調査
14	8129	〃	店屋町４－15	255	81．8		本調査
15	8130	駐車場建設	上呉服町569	100	81．8		試掘調査
16	8131	ビル建設	店屋町246～248	150	81．9		本調査
17	8132	〃	駅前１丁目98	910	81.11～82．2	博多Ⅲ	本調査
18	8156	〃	駅前２丁目８－14		82．1		試掘調査駅前センタービル(地図範囲外)
19	8323	社務所建設	上川端町櫛田神社境内	200	83．4		本調査
20	8324	ビル建設	駅前１丁目99	980	83．3～7	博多Ⅲ	本調査
21	8325	〃	駅前２丁目181他	150	83．5～6	博多Ⅲ	本調査
22	8327	〃	冷泉町189他	840	83．9～84．2	博多Ⅲ	本調査
23	8334	本堂建設	冷泉町龍宮寺境内	約300	84．2		本調査
24	8433	ビル建設	冷泉町１－１	250	84．4～5	博多Ⅳ	本調査
25	8434	〃	祇園町１－１	100	84．5～6	博多Ⅴ	本調査
26	8506	〃	上呉服町34	134	85．5～6	博多Ⅵ	本調査
27	8507	〃	祇園町１－１	350	85．5～6	中部埋文報告Ⅱ	本調査
28	8508	〃	御供所町70－２	1,745	85．5～8	博多Ⅶ	本調査

次数	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m²)	調査期間	報告書	備考
29	8509	ビル建設	綱場町22－67	330	85.7～9	博多 Ⅷ	本調査
30	8605	〃	御供所町36･37･38･39	495	86.5～7	博多 Ⅸ	本調査
31	8606	〃	御供所町65・66	160	86.5～7	博多 Ⅹ	本調査
32	8608	〃	祇園町21－1	約1,000	86.5～7		本調査
33	8618	〃	祇園町8他	898	86.7～11	博多 11	本調査
34	8645	〃	冷泉町238－2他	40	86.10～11		本調査
35	8648	〃	上呉服町56	655	86.11～87.5	博多 12	本調査
36	8725	〃	祇園町42他	332	87.8～10	博多13、同16(補足)	本調査
37	8740	〃	博多駅前1丁目129他	1,427	87.12～88.3	博多 16	本調査
38	8805	〃	店屋町1－30	366	88.4～8	博多 25	本調査
39	8806	〃	店屋町2･3･4他	612	88.5～8	博多 14	本調査
40	8833	〃	呉服町251他	565	88.9～12	博多 15	本調査
41	8834	〃	店屋町4－10	60	88.9(2日間)		本調査
42	8843	〃	綱場町8－25	710	88.12～89.6	博多 17	本調査
43	8852	〃	店屋町8－9	240	89.1～4	博多 18	本調査
44	8857	〃	冷泉町201－3	178	89.2～3	博多 19	本調査
45	8862	納骨堂建設	祇園町4－50	248	89.3～6	博多 20	本調査
46	8903	共住建設	古門戸町1	150	89.4～5	博多 26	本調査
47	8911	ビル建設	祇園町390－2、393	(438)	89.4		立会
48	8915	共住建設	御供所町40他	263	89.5～8	博多 29	本調査
49	8916	駐車場建設	上川端町272、273	90	89.5		本調査
50	8918	共住建設	祇園町317他	730	89.6～10	博多 21	本調査
51	8925	〃	祇園町154－1・2	200	89.6～7	博多 28	本調査
52	8929	防水水槽	博多駅前1丁目155－1	29	89.6～7		本調査
53	8930	給油所建設	中呉服町154他	190	89.6～7	博多 27	本調査
54	8941	店舗建設	冷泉町2丁目128－2	(99)	89.7		立会
55	8942	事業所建設	奈良屋町61－1	128	89.8～9		本調査
56	**8943**	**庁舎建設**	**店屋町4－1他**	**650**	**89.9～90.2**	**本報告**	**本調査**
57	8947	ビル建設	祇園町557	184	89.10	博多 22	本調査
58	8948	〃	綱場町20･21－1･21－2	70	89.10	博多 23	本調査
59	8957	駐車場建設	祇園町187－226	226	89.11～90.2		本調査
60	8959	ビル建設	綱場町115他	730	89.11～90.5	博多 30	本調査
61	8962	共住建設	店屋町182－1－5	95	89.12～90.1	博多 24	本調査
62	8963	ホテル建設	御供所町195他		89.12～91.2		本調査
63	8974	共住建設	冷泉町90－3他	275	90.2～4	博多 31	本調査
64	8976	ビル建設	博多駅前1丁目101	620	90.2～7		本調査
65	9017	〃	祇園町161－1	1,335	90.7～12		本調査
66	9022	〃	御供所町129－1他	170	90.7～9		本調査
67	9028	共住建設	冷泉町1－6	210	90.8	博多 29	本調査
68	9042	老人ホーム	古門戸町98－1他	1,731	90.11～91.1		本調査
69	9055	事業所建設	奈良屋町267	260	90.12～91.1	博多 33	本調査
70	9062	ビル建設	冷泉町338他	571	91.2～91.5		本調査
71	9111	〃	御供所町235－1他	600	91.5～10		本調査
72	9113	〃	上川端町264－2		91.6～7		本調査
73	9120	事務所･共住建設	御供所町15	76	91.8～9		本調査
74	9126	共住建設	上呉服町131－2		91.9～11		本調査
75	9136	店舗･住宅建設	奈良屋町9－19－2	165	91.11～12		本調査
76	9137	事務所建設	上呉服町594他		91.11～92.3		本調査

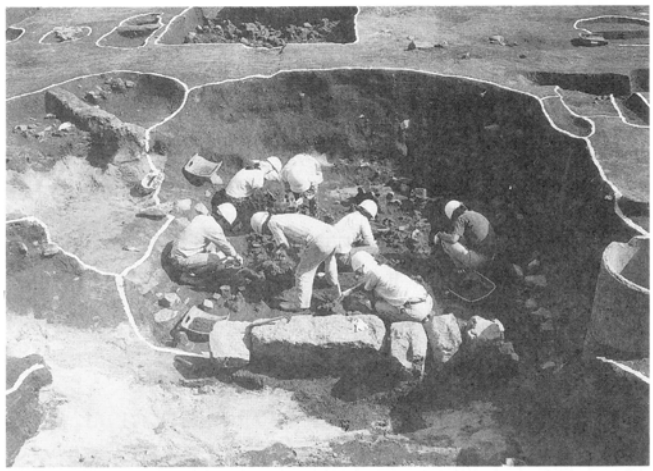
4　調査の概要

1）調査経過

第56次調査地点は博多遺跡群中央西側、旧博多浜の西北縁に位置する。周辺では第14次調査、第41次調査などがこれまでに行われている。

調査地点の現標高は4.10m。発掘調査は1989年9月8日から開始した。廃土処理の関係から調査地を東西に2分し、まず西側のA区から発掘を始めた。試掘で確認された地表下1.5m前後までの攪乱部分は調査に先立ってすでに除去してあり、露出した標高3.20～3.30mを第Ⅰ面とし、遺構検出作業を開始した。近現代の遺構、攪乱が多く、特に製鉄関係の遺物の出土が多かった。開始時の9月は雨が多く、調査は停滞気味であった。第4図の写真はSK0024の調査風景である。

10月下旬から第Ⅰ面を約30cm掘り下げ第Ⅱ面の調査に入った。11月中旬にはさらに掘り下げた地山面近くを第Ⅲ面として調査を進めた。井戸を主体とした遺構は足の踏み場もないほどの密集度であった。またSK0281をはじめとした陶磁器類の多量の出土がみられた。第5図はその調



第4図　調査風景1

第5図　調査風景2

第6図　調査風景3

査風景である。

12月21日からは東側のB区の調査に入ったが、著しい攪乱のため第Ⅲ面だけをその対象とした。しかし遺構の密集度はA区を上回るものがあった。第6図はB区の調査風景である。

調査は翌1990年2月3日、器材の撤収をもって終了した。

工事に関わる面積は1000㎡、調査対象面積は800㎡であったが、対象地内に調査事務所を建てざるを得なかったことと、安全のため規面を大きくとったため調査面積は第Ⅲ面で650㎡にとどまった。A区の第Ⅰ・Ⅱ面をあわせた総調査面積は1510㎡であった。

2）層序

第7図に調査区北壁および東壁の土層図を示した。見て分かるように土層図に現れているのは、上面から1.5m以上に及ぶ瓦礫を含む近現代の攪乱であり、さらにその下も複雑な遺構の切り合いで、明瞭な層序をとらえる箇所はほとんど見あたらない。現地表から地山（黄色砂）までの深さは東側で2.30m（標高2.80m）、西側で2.70m（標高2.00m前後）であるが、東側で92・96・97層などの古代の包含層である褐色砂の水平堆積が見られるのに対し、西側の15層は分層できなかったが明らかに遺構の覆土であり、確実なところは分からない。大勢として西側への傾斜は明らかに認められる。

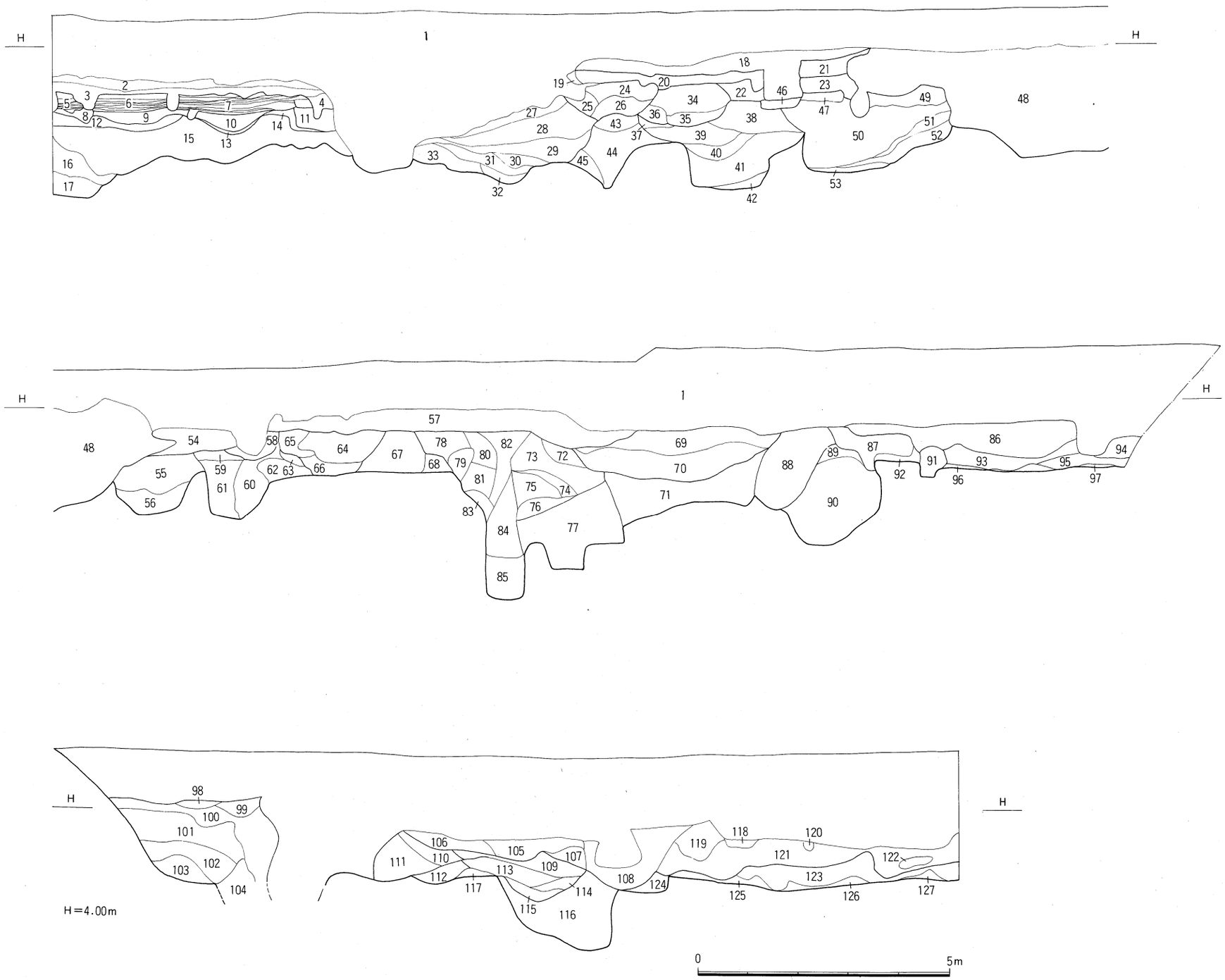
第Ⅰ面として検出を開始したのは2・18層などの上面からであり、最終的にはその下面で遺構を確認したことになる。第Ⅱ面はそこから30cmほど下げた面である。北壁西側にみられる5・6・7層の整地面は部分的に確認できたもので東西両側に溝をもった道路となる可能性が高い。その下の9層から朝鮮通寶（1423年初鋳）が出土しており、整地層はそれ以後の築造となる。第Ⅲ面は西側（A区）では15層の上面、東側（B区）では57・86層の下面近くから検出を開始した。最終的には地山の黄色砂まで掘り下げたが、先に述べたように褐色砂の水平堆積が見られるところ、すなわち古代末から中世の遺構が及ばなかった場所には奈良時代の遺構が濃く残存していた。また古墳時代の遺構も同じ面にあるものと考えられる。平面的にも足の踏み場もないほどの遺構の密集度であったが、土層断面にもそれが現れている。

3）各面の概要

第Ⅰ面

検出した遺構は溝1条、井戸5基、土坑43基、石組遺構2基、製鉄関係の炉5基、埋甕、それにピット多数がある。これらの遺構の大半は18世紀～19世紀前半代に位置付けられる。

この面で目を引くのは、鋳造に関した遺構・遺物の多さである。炉は云うまでもなく、土坑の大半もこれに関連するものである。炉壁、鞴の羽口、鉄滓、銅滓、鋳型（特に鋤、分銅、銅製容器など）などが多量に出土した。本調査地点は天正15年開業の鋳物業者磯野家、また深見



第７図　調査区土層断面図（1/100）

1．攪乱層（瓦礫など混る）
2．暗褐色砂質土（炭化物、炉壁、鉄滓混る）
3．黒褐色砂質土（炭化物、炉壁、鉄滓混る）
4．暗灰色砂質土
5．黒色砂質土、暗灰色粘質土などの互層（炭化物混る）
6．５と同じ
7．５と同じ
8．灰黒色砂（炭化物混る）
9．暗褐色砂（炭化物混る）
10．９と同じ
11．灰褐色砂質土（炭化物混る）
12．青みをおびた暗褐色砂
13．灰黒色砂
14．暗褐色砂質土
15．暗褐色砂（炭化物混る）
16．暗灰色砂（炭化物混る）
17．黒色砂＋褐色砂
18．淡赤褐色砂質土（炭化物、炉壁、鉄滓混る）
19．赤褐色砂質土（炉壁混る）
20．淡褐色砂質土
21．20と同じ
22．褐色砂質土（炭化物混る）
23．淡灰褐色砂質土（炭化物、炉壁混る）
24．暗褐色砂質土（炭化物、炉壁、鉄滓混る）
25．淡暗褐色砂質土
26．灰褐色砂質土
27．暗褐色砂質土（炭化物混る）
28．暗褐色砂（炭化物混る）
29．褐色砂
30．淡褐色砂
31．26と同じ
32．灰黒色砂＋淡褐色砂(炭化物混る)
33．淡灰色砂
34．暗灰褐色砂質土（炭化物、炉壁、鉄滓混る）
35．暗灰色砂（炉壁混る）
36．暗褐色砂（炭化物、炉壁混る）
37．黒褐色砂
38．36と同じ
39．黒褐色砂＋褐色砂
40．暗褐色砂
41．39と同じ
42．灰黒色砂＋淡褐色砂
43．淡灰褐色砂（炭化物混る）
44．灰黒色砂
45．灰黒色砂＋褐色砂
46．黒褐色砂質土（炭化物混る）
47．34と同じ
48．18と同じ
49．暗褐色砂質土
50．39と同じ
51．暗褐色砂＋淡褐色砂
52．褐色砂＋黒褐色砂
53．茶褐色砂
54．３と同じ
55．灰黒色砂質土（炭化物混る）
56．灰黒色砂
57．34と同じ
58．36と同じ
59．茶褐色砂質土(炭化物、炉壁混る)
60．55と同じ
61．黒褐色砂
62．61と同じ
63．淡黒褐色砂
64．36と同じ
65．59と同じ
66．暗褐色砂（炭化物混る）
67．暗褐色砂質土
68．淡褐色砂
69．暗褐色砂質土（炭化物混る）
70．暗褐色粘質土（炭化物混る）
71．69と同じ
72．灰黒色砂質土
73．69と同じ
74．66と同じ
75．黒褐色砂
76．褐色砂
77．淡褐色砂
78．暗褐色砂質土（炭化物混る）
79．黒褐色砂質土（炭化物混る）
80．暗褐色砂質土
81．暗褐色砂
82．茶褐色砂質土
83．褐色砂（炭化物混る）
84．黒褐色砂（炭化物混る）
85．淡褐色砂
86．灰黒色砂質土
87．黒褐色砂質土（炭化物混る）
88．黒褐色粘質砂（炭化物混る）
89．暗褐色砂質土（炭化物混る）
90．褐色砂
91．灰黒色砂質土（炭化物混る）
92．褐色砂
93．灰黒色粘質砂（炭化物混る）
94．93と同じ
95．暗褐色砂
96．92と同じ
97．92と同じ
98．淡褐色粘質土
99．灰黒色砂質土
100．暗褐色砂質土（炭化物混る）
101．黒褐色砂質土（炭化物混る）
102．黒褐色砂
103．暗褐色砂
104．褐色砂＋暗褐色砂
105．黒褐色砂質土
106．暗褐色砂質土
107．99と同じ
108．100と同じ
109．茶褐色砂質土
110．暗茶褐色砂質土（炭化物混る）
111．100と同じ
112．101と同じ
113．101と同じ
114．黒褐色砂＋褐色砂
115．102と同じ
116．褐色砂
117．116と同じ
118．98と同じ
119．茶褐色粘質土（炭化物混る）
120．98と同じ
121．灰黒色砂質土＋茶褐色砂質土(炭化物、レンガ混る)
122．淡褐色粘質土
123．茶褐色砂（炭化物混る）
124．116と同じ
125．116と同じ
126．116と同じ
127．黒褐色砂質土

家の工場の所在地あるいは近接地で、検出した遺構・遺物はこれらの工場跡であろう。

ただ整理の都合から、概要程度の報告となってしまった。他日を期したい。

第Ⅱ面

検出した遺構は井戸6基、土坑37基、石積土坑6基、集石遺構3基、埋甕、ピットなどがある。遺構の大半は16世紀後半～17世紀に位置づけられる。

土坑の1基（SK0116）はアサリ、ハマグリ、カキなどの貝殻を廃棄したものである。石積遺構は上坑壁に石あるいは瓦を積み上るもので、裏込めや粘土による補強は認められない。地下蔵、溜め升、便槽などと考えられるが、確定はできなかった。

遺物としてはSK0077から出土した「衆生…」の文字を刻んだ陶製品、SK0131などから出土した大乗寺銘のある瓦、埋甕に使用された壺などがある。

第Ⅰ面同様、概要程度の報告にとどまった。

第Ⅲ面

検出した遺構は井戸41基、土坑150基、溝13条、土器溜8基、その他ピットが多数ある。これらの遺構は古墳時代から鎌倉時代にわたっており、奈良時代と平安時代後期（11世紀後半～12世紀）にそれぞれピークがある。

古墳時代は土坑1基だけで中期に属する。奈良時代の遺構は溝、井戸、土坑（竪穴住居の可能性をもつものもある）、ピットなどであるが、古墳時代の遺構ともども、後世の遺構に破壊され残存状態は悪い。しかし調査区のほぼ全域にその広がりが認められた。

平安時代後期には井戸、土坑をはじめ多くの遺構が作られている。いずれも白磁を中心とした輸入陶磁器の出土が多い。SK0281では木箱状の中に600個体以上の白磁・陶器が廃棄されていた。

この面で検出した溝は大半が磁北方向に走り、太閤町割以前の博多の町並を示している。鎌倉時代に入っても、遺構は確認できるが、14～15世紀の遺構・遺物は少ない。

第Ⅲ面から出土した遺物は多種多様で、出来る限り図化に務めたが、図示できずに終ったものもかなり多い。鉄製品、銅銭を除く銅製品、石製品などは、ほとんど実測できないままであった。整理の不備を深く反省したい。

5　第Ⅰ面の記録（第８図）

調査は試掘結果に基づいて、一律に地表下約1.4mの客土を重機で除去した面を第Ⅰ面として遺構検出作業を行った。標高3.2～3.3mを測る。遺構面は暗灰色の砂質土である。この高さでは煉瓦積みの建物基礎やコンクリート枠の井戸、戦災の瓦礫等の近代～現代の遺構、遺物がまだ幾つか見られる。これらを除去し、精査すると、近世の遺構、遺物が検出できる。

近世期、本調査地点は上土居町にあたり、戦前まで続いた磯野家、深見家の鋳物工場があった場所である。前者の磯野家の開業は天正15年の秀吉の博多復興の頃に遡る。以後連綿と武器、農具、梵鐘、銅像等を鋳造している。したがって、第Ⅰ面では鋳造に関連した遺構、遺物が数多く出土している。第Ⅰ面で検出した近世の遺構は溝、井戸、土坑、石組遺構、炉、埋甕、柱穴等がある。遺構の方位は概ね太閤町割りに規定されている。第Ⅰ面は近世～近代の時期幅を持つが、近世の遺構は大半は18世紀～19世紀前半代に位置づけられるものと考える。

溝は調査区西側で１条検出した。0001は方位はN－40°－Wをとり、幅2.2～2.5m、深さ20～30㎝を測る。埋土は暗灰色粘質土で、溝の底や壁は鉄分の沈着のため、硬化している。

井戸は５基検出した。いずれも調査区西側に集中する。SE0004、0010は桶もしくは曲物の井戸側、SE0003、0017、0021は瓦組の井戸側を持つ。

土坑は43基検出した。土坑の多くは鉄滓、炉壁、鋳型、鞴の羽口等の廃棄土坑である。

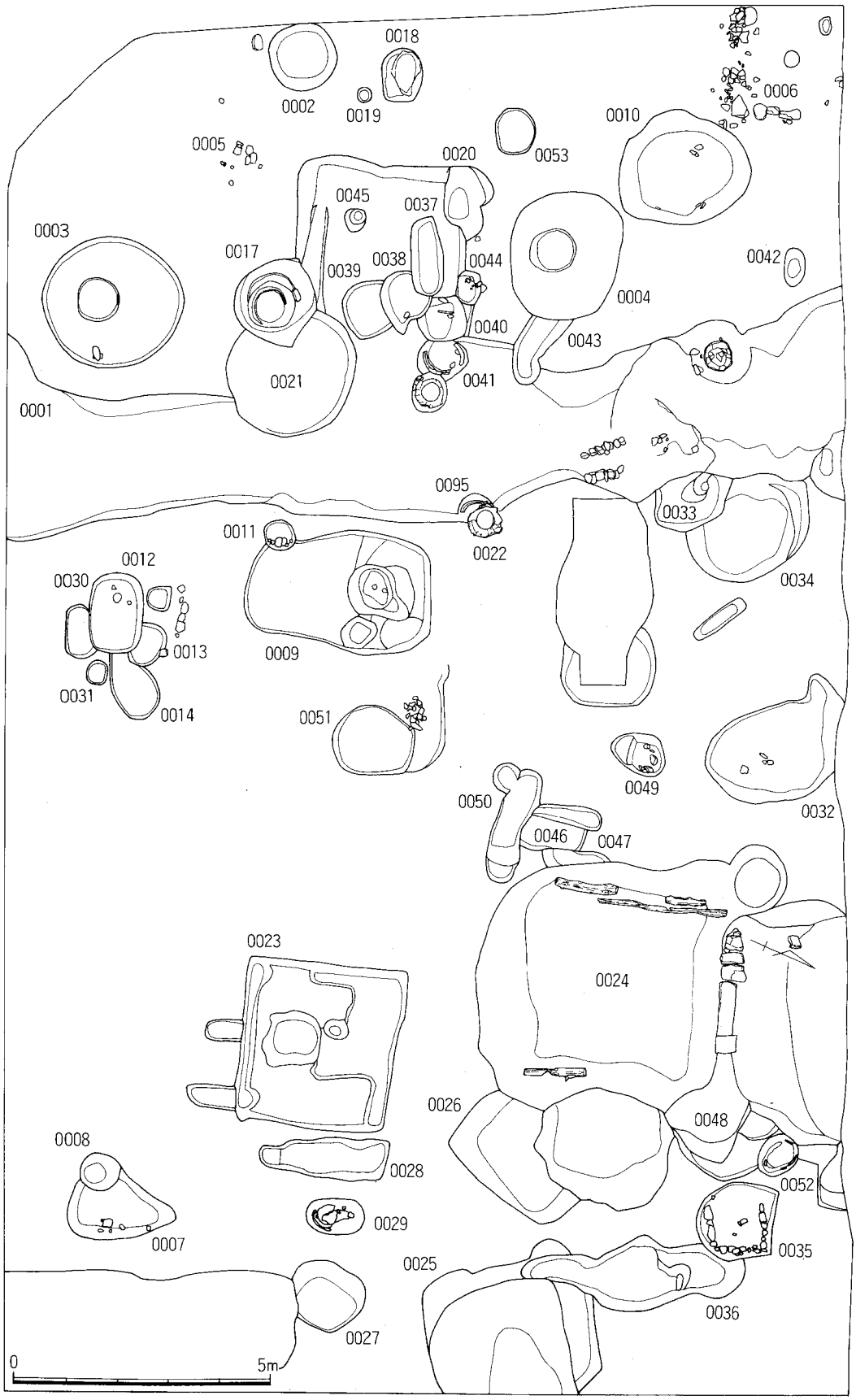
SK0002は調査区西端にあり、円形プランを呈する。直径約1.3mで、坑内から炉壁、鉄滓等が多量に出土した。北側１mには炉底滓0018があり、SK0002はその炉体の廃棄土坑と考えられる。また、SK0002の南側の遺構面で鉄滓、鞴の羽口、炉壁等が出土している。

SK0023は調査区東側にあり、方形プランを呈する。長さ3.2m、幅3.0m、深さ1.0mを測る。坑底の南側と北側には浅い溝がある。坑底直上で炉壁、銅滓、鋳型、鞴の羽口、瓦等が多量に出土した。炉壁は厚さ５㎝を越えるもので、完全に壊された状態で出土した。鋳型には分銅、銅製容器（？）等がある。

SK0024はSK0023の北側にあり、方形プランを呈する。北側は近代の遺構で切られる。長さ5.0～5.5m、深さ1.8mを測る。埋土は黄褐色砂で炭を多量に含む。埋土中から銅滓、礫、炉壁等が出土した。SK0023では炉壁等が多量に出土したのに対して、SK0024では銅滓、炭等の出土が目立つ。坑底の西側と東側の壁際で丸太が出土している。

SK0032はSK0024の西側にあり、不整楕円形プランを呈する。長さ2.5m、幅1.8m、深さ20～30㎝を測る。坑底中央で多量の炭、銅滓、鋳型等が出土した。

石組遺構は２基検出した。SX0006は調査区北西隅にある。掘り方はなく、５～20㎝の礫を方形に配している。遺構は調査区外側に広がる。SX0035は調査区北東隅にある。方形の掘り方で坑底壁際にコの字形に石を配置する。残存する石積は１段で、長さ1.1m、幅0.9mを測る。



第８図　第Ⅰ面全体図（1/120）

炉は５基検出した。いずれも炉床のみで遺存状態は良くない。（第９図）

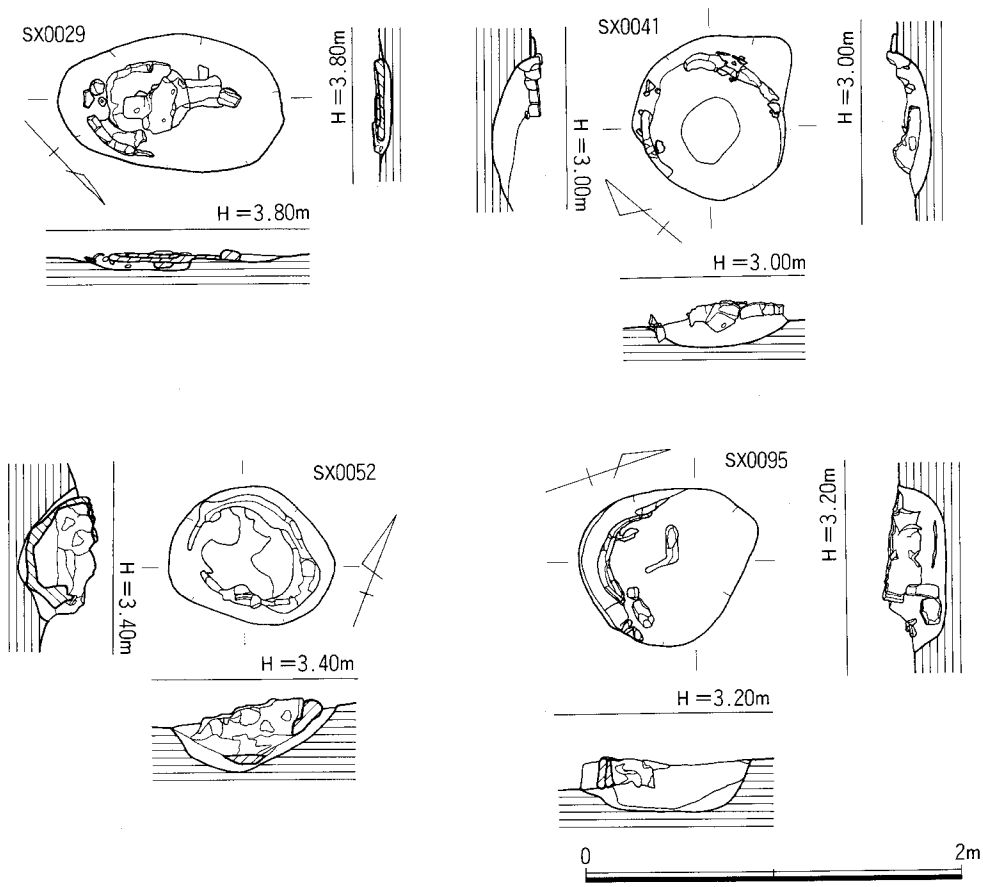
SX0018は調査区西端にある。炉底滓のみ残存する。炉底滓は長さ80cm、幅50cmを測る。すぐ脇の0002やその周辺からは炉壁や鞴の羽口等が出土している。

SX0029は調査区東側にある。掘り方は楕円形を呈し、長さ1.25m、幅0.7mを測る。炉壁は南側部分でわずかに残存する。炉底滓は45cm×40cmの楕円形を呈し、北側部分に鉄滓まじりの粘土が認められる。

SX0041は調査区西側にあり、埋甕に切られている。掘り方は円形を呈し、長さ0.85m、幅0.7mを測る。炉壁は北側部分でわずかに残存する。炉壁の外側は粘土で補強される。

SX0052は調査区東側にある。掘り方は楕円形を呈し、長さ0.85m、幅0.7mを測る。炉体の内法は60cm×40cmで楕円形を呈し、炉底には鉄滓まじりの粘土が認められる。

SX0095は調査区西側にあり、埋甕に切られている。掘り方は楕円形を呈し、長さ0.9m、幅0.8mを測る。炉壁の外側は粘土で補強される。炉底にはわずかに鉄滓が認められる。



第９図　炉跡実測図（1/40）

第2表　第Ⅰ面遺構一覧

遺構番号	地　区	遺構種類	法量(長さ×幅×深さm・形態)	出 土 遺 物	時　期	備　考
0001	A－Ⅰ	溝	2.0～2.5×0.3	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0002		土坑	1.3×1.3×1.5・円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	炉壁出土
0003		井戸(瓦組)	2.75×2.5×－・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0004		井戸	2.5×2.15×1.1・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0005		鉄滓溜まり		唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0006		石組	2.3×2.2×－・方形	唐津焼、瓦	近世	炭化物が多い
0007		土坑	2.15×1.35×0.15・不整楕円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鉄滓出土
0008		土坑	0.8×0.8×0.6・円形	土師器	近世	
0009		土坑	3.6×2.35×0.2・隅丸長方形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0010		井戸	2.6×2.2×1.1・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0011		ピット		唐津焼、瓦	近世	
0012		土坑	1.55×1.05×0.12・隅丸長方形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0013		土坑	0.9×0.5×0.15・楕円形	肥前染付、唐津焼	近世	
0014		土坑	1.4×0.85×0.1・楕円形	肥前染付、唐津焼	近世	鉄滓
0015		——		陶器	近世	
0016		——		肥前染付	近世	
0017		井戸（瓦組）	1.65×1.6×1.7・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0018		炉底滓	1.05×0.8×－・		近世	鋳物関係
0019		ピット		瓦	近世	
0020		土坑	1.45×0.75×0.5・楕円形	陶器	近世	
0021		井戸	2.5×2.5×－・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0022		埋甕			近世	
0023		土坑(廃棄坑)	3.3×3.0×0.8・正方形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0024		土坑(廃棄坑)	4.9×4.7×1.8・方形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0025		土坑	3.3×3.0×0.6・隅丸長方形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0026		土坑	2.75×1.9×0.4・長方形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0027		土坑	1.5×1.3×0.3・楕円形	明代白磁、青磁	16世紀代	
0028		土坑	2.55×0.8×0.15・不整形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0029		炉	1.15×0.7×－・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0030		土坑	1.05×0.45×0.1・楕円形			
0031		ピット				
0032		土坑	2.95×1.85×0.3・楕円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	炭化物が多い
0033		土坑	1.65×1.0×0.25・楕円形			
0034		土坑	2.55×1.9×1.4・楕円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0035		石組	1.5×1.5×0.1・方形	白磁、陶器、瓦	近世か	
0036		土坑	4.3×1.2×0.3・不整形	陶器、李朝、瓦	近世か	
0037		土坑	1.55×0.65×0.1・楕円形	陶器、瓦	近世	
0038		土坑	1.25×1.0×0.1・楕円形			鉄滓
0039		土坑	1.05×0.75×0.08・楕円形	肥前染付、瓦	近世	
0040		土坑	0.9×0.9×0.1・楕円形			
0041		炉	1.0×0.85×－・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0042		土坑	0.75×0.4×0.3・楕円形			
0043		土坑	1.35×0.6×0.4・不整形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0044		土坑	0.65×0.5×0.25・楕円形	瓦	近世	鉄滓
0045		ピット				
0046		土坑	1.2×0.65×0.1・不整形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0047		土坑	1.35×0.4×0.12・不整形	陶器	近世	
0048		土坑		磁器	近世	
0049		土坑	1.05×0.8×0.25・不整形			
0050		土坑	2.3×0.5×0.35・楕円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0051		土坑	1.6×1.4×0.1・楕円形	陶器	近世か	
0052		炉	0.9×0.7×－・	肥前染付	近世	鋳物関係

6　第Ⅱ面の記録（第10図）

第Ⅱ面は第Ⅰ面から一律に約30cm下げて遺構面とした。この面は暗灰色の砂質土で、調査区東側では部分的に地山の黄白色の砂層が検出できる。標高2.8～3.0mを測る。第Ⅱ面で検出した遺構は井戸、土坑、石積土坑、集石遺構、埋甕、柱穴等がある。遺構の方位は第Ⅰ面、同様太閤町割りに規定されるものと磁北から10°前後西にふれるものとが見られる。博多の町割りが変化する時期の様相として興味深い。遺構は第Ⅰ面で検出できなかった遺構も幾つか見られるが、大半は16世紀後半～17世紀に位置づけられるものである。

井戸は6基検出した。いずれも瓦組の井戸側で、Ⅰ面で検出できなかったものである。18世紀以降に位置づけられる。

土坑は37基検出した。平面形は不整形で、浅いものが多い。

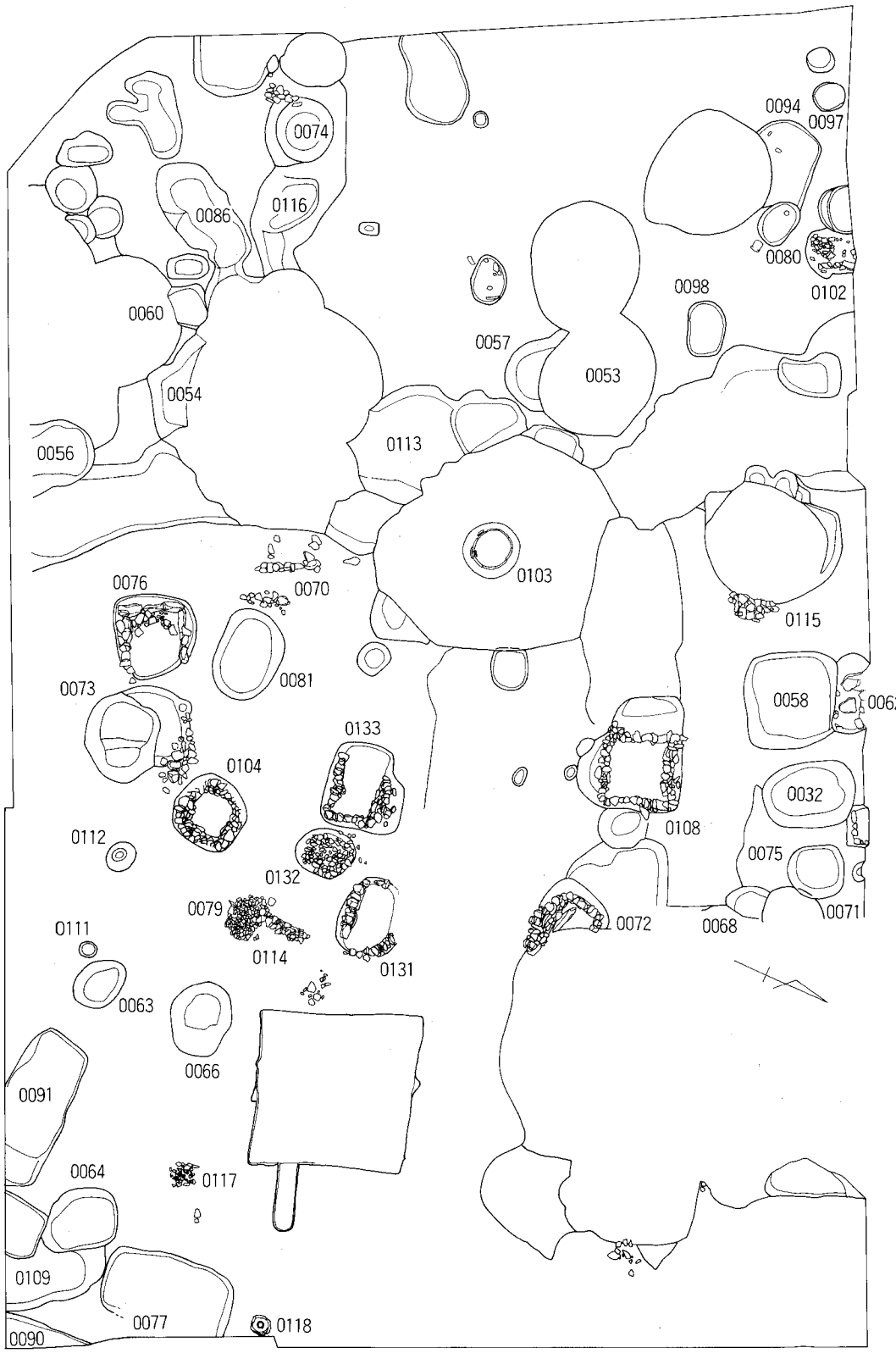
SK0077は調査区東側にあり、平面形は長方形を呈する。遺物は肥前系陶磁器、瓦等が出土した。24は埋土中出土の陶製品で、表面に文字が彫られる。右から「衆　生（？）」「父　母　堂（？）」「子　不　□」「□　□　□」とある。近世期に位置づけられる。

SK0116は調査区西側にある貝殻の廃棄土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、長さ1.8m、幅1.4m、深さ0.5mを測る。埋土は暗灰色粘質土で、坑底から厚さ25cmの貝殻を検出した。貝殻にはアサリ、ハマグリ、カキ等がある。時期は16世紀代に位置づけられる。

石積土坑は7基検出した。石積土坑は土坑の壁際に石、瓦を積み上げるもので、方位、形態等、幾つかのバリエーションがある（第11図、遺物－第12～13図）。方位は近世の町割りに沿うもの（SK0076、0104、0108）と磁北に近い方向をとるもの（SK0072、0131、0133）とがある。出土遺物を見るかぎり、明確には時期差はつかめないが、前者の方が時期的には下るものと考える。形態には平面形が長方形、方形、円形を呈するものがある。石積は土坑の壁に沿って積み上げられ、裏込めや粘土による補強等はない。遺構の性格については、地下蔵、溜め升、便槽等が考えられているが、今回の調査ではそれらを確定することはできなかった。また、これらの石積土坑の近接して集石遺構も2基見られた。

SK0072は調査区中央北側にあり、SK0024に切られる。掘り方は楕円形を呈する。石積は長方形を呈し、内法は1.25m×0.6m、深さ0.7mを測る。主軸の方位はN－85°－Eをとる。石は5～30cm程の転石を使用する。石積の中位には瓦を横積みする。遺物は国産白磁、瓦質火鉢(2)、瓦(1)等が出土した。遺構の時期は17世紀代に位置づけられる。

SK0076は調査区中央南側にある。掘り方は不整方形を呈する。石積はコの字形を呈し、内法は1.25m×0.8m、深さ0.35mを測る。主軸の方位はN－53°－Eをとる。石は20～40cm程の転石を使用する。石積の内側で廃棄された炉壁、瓦等を検出した。遺物は唐津焼皿(3)、瓦等が出土した。4は混入品で、国産の緑釉皿である。胎土は灰白色を呈し、釉は緑色を呈する。高台内



第10図　第Ⅱ面全体図（1/120）

側は露胎となる。遺構の時期は17世紀前半代に位置づけられる。

SK0079は調査区中央南側にある石積土坑で、SK0114に隣接する。拳大の礫や瓦が、1.0m×0.7mの範囲に集中する。明確な掘り方は見られない。遺物は備前焼すり鉢(5)、李朝白磁碗(6)、明染付皿(7)、瓦等が出土した。8は混入品で、12～13世紀に位置づけられる中国製陶器壺で、底部に花押が墨書される。遺構の時期は16世紀末～17世紀前半に位置づけられる。

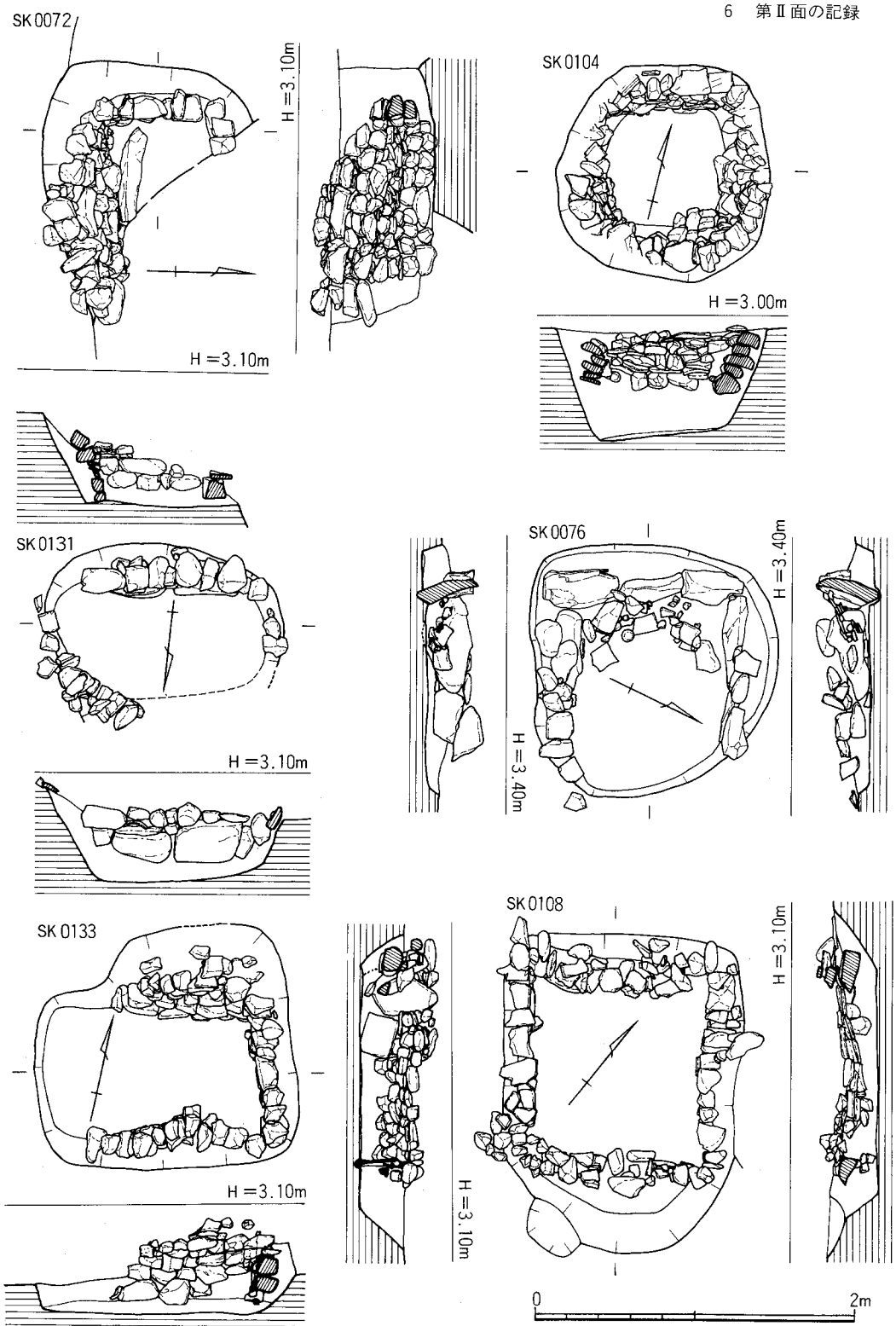
SK0104は調査区中央南側にある。掘り方は円形を呈する。石積は不整円形を呈し、内法は0.8m×0.7m、深さ1.0mを測る。石は5～30cm程の転石を使用する。石積の下、中位には瓦、炉壁を横積みする。遺物は明染付皿(9)、瓦等が出土した。10、11、12は銅製の鍵である。10は把手は断面八角形を呈し、先端に紐通しの部分が付く。鍵の部分がJ字形を呈する。上面から見ると先端のみ横に張り出すが、側面から見ると張り出しは中位につく。長さ14.4cm、先端幅0.9cmを測る。11は把手は断面六角形を呈し、先端に紐通しの部分が付く。鍵の部分がJ字形を呈する。上面から見ると、10と先端の形態は類似するが、側面から見ると、張り出しは上位にあり、同一の鍵としては使えない。長さ13.8cm、先端幅0.9cmを測る。12は先端部分は欠損している。把手は断面円形を呈する。遺構は17世紀前半代に位置づけられる。

SK0108は調査区中央北側にある。掘り方は方形を呈する。石積は方形を呈し、内法は1.0m×1.0m、深さ0.4mを測る。主軸の方位はN－38°－Wをとる。石は5～30cm程の転石を使用する。石積の下、中位には瓦、炉壁を横積みする。遺物は明白磁八角鉢(13)、唐津焼、瓦(14)等が出土した。遺構の時期は17世紀前半代に位置づけられると考える。

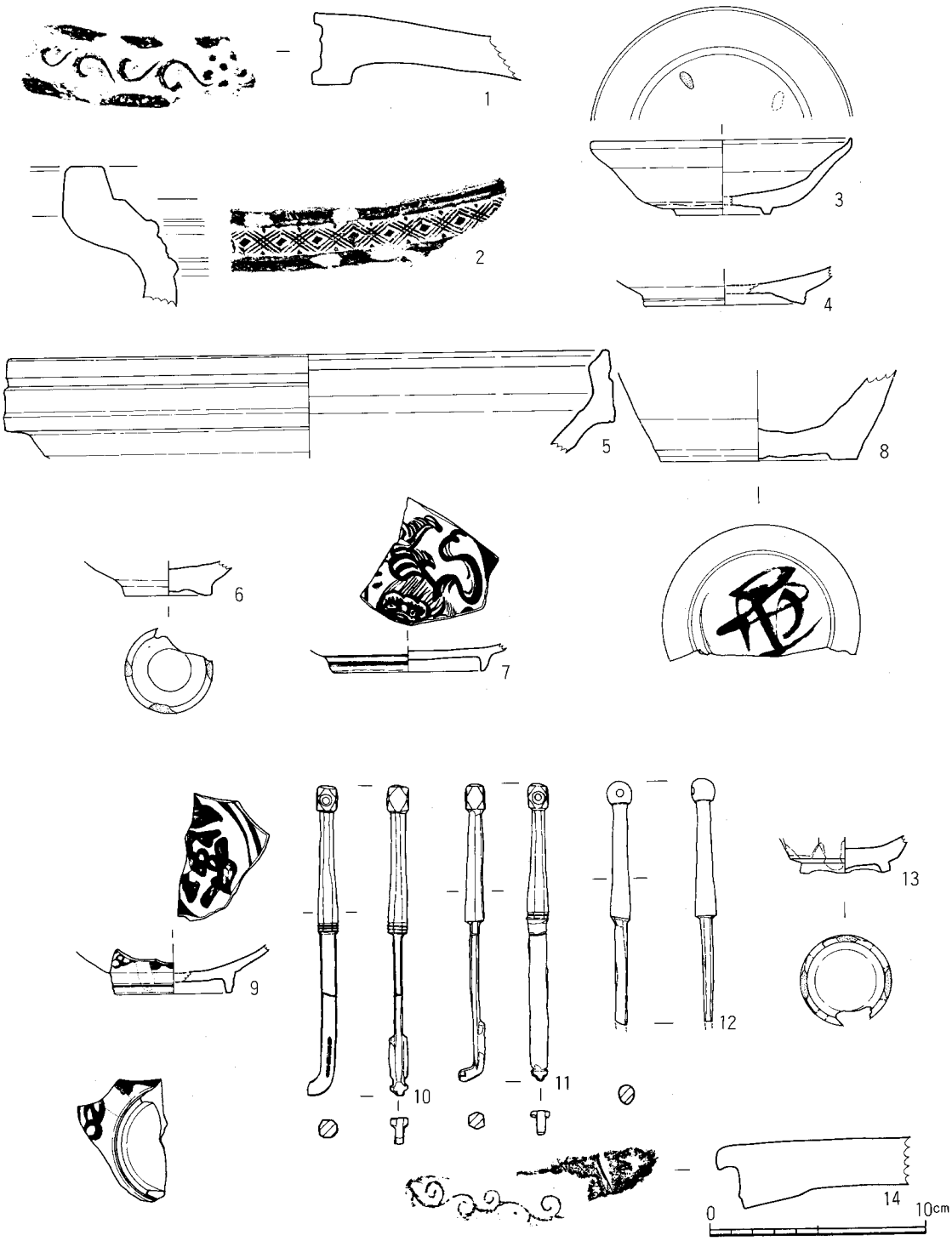
SK0114は調査区中央南側にあり、0079に隣接する集石遺構である。掘り方はなく、長さ0.9m、幅0.3m、高さ0.3mで、石を積み上げている。石は5～30cmほどの転石を使用する。石積土坑の一部が残存した状態の可能性がある。明染付、李朝陶器碗(15)、瓦（16、17）等が出土した。遺構の時期は16世紀末～17世紀前半代に位置づけられる。

SK0131は調査区中央南側にあり、遺構の北側を後世の遺構によって切られる。掘り方は楕円形を呈する。石積は楕円形を呈し、内法は1.25m×0.6m、深さ0.5mを測る。主軸の方位はN－85°－Eをとる。石は5～50cmほどの転石を使用するが、1段目に40～50cmの石を使用し、その上に5～20cmの石を積み上げる。遺物は明染付碗(18)、瓦等が出土した。19は平瓦で、凸面に「乗」の文字がある。凹面は布目で、色調は暗灰白色を呈する。本調査地点西側は中世期は大乗寺の門前町であり、この瓦は大乗寺に関連する瓦と考えられる。この遺構以外にも包含層から「乗」「寺」の文字がある瓦が出土している。遺構の時期は16世紀末～17世紀前半代に位置づけられる。

SK0132は調査区中央南側にある、集石土坑である。掘り方は楕円形を呈する。坑内には拳大の礫や瓦、鉄滓等が集中する。長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。遺物は明青磁皿(20)、瓦、鉄滓等が出土した。遺構の時期は17世紀前半代に位置づけられる。

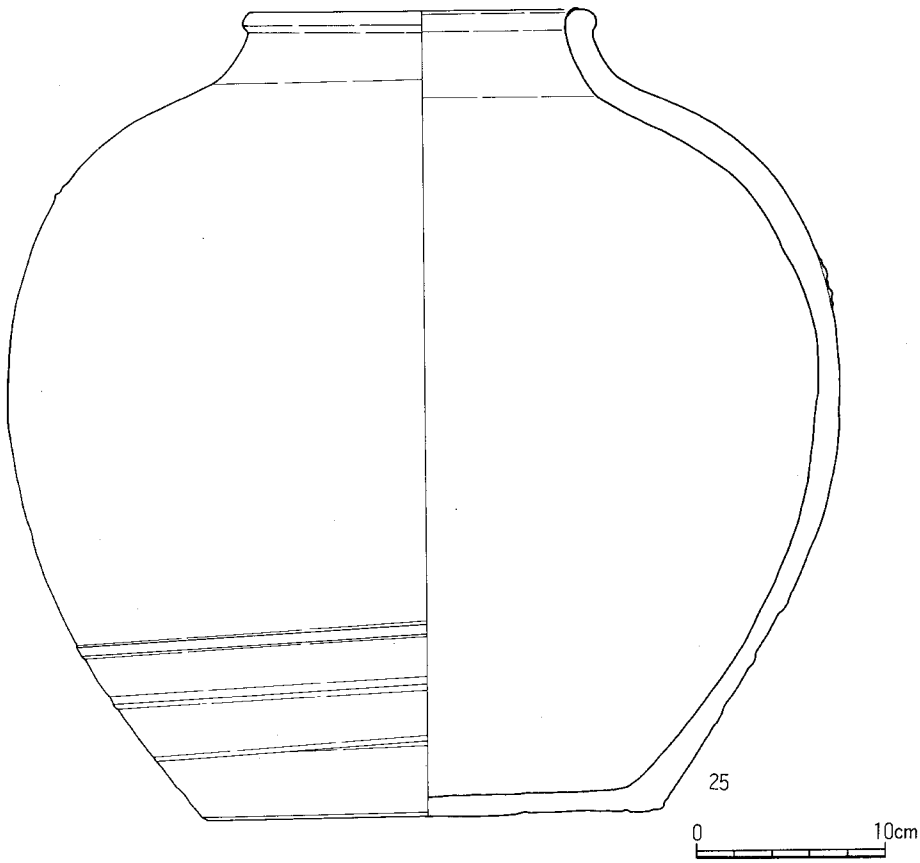


第11図　石積遺構実測図（1/40）



第12図　第Ⅱ面遺構出土遺物実測図(1)（1/3）

第13図　第Ⅱ面遺構出土遺物実測図(2)（1/3）



第14図　第Ⅱ面遺構出土遺物実測図(3)（1/4）

SK0133は調査区中央南側にある。掘り方は隅丸長方形を呈する。石積はコの字形を呈し、内法は1.00m×0.6m、深さ0.6mを測る。主軸の方位はN－75°－Eをとる。石は５～30cm程の転石を使用する。遺物は明染付、備前焼すり鉢(21)、李朝陶器碗(23)、青磁(22)等が出土した。遺構の時期は16世紀末～17世紀前半代に位置づけられる。

埋甕は調査区東側で１基出土した（第14図－25）。口縁は玉縁を呈し、肩部はあまり張らず、胴部中位に胴部最大径がある。内外面に緑がかった黄褐色の釉がかかる。底は露胎である。胎土は粗く、２～５㎜の砂粒を含む。器高42.8cm、口径17.0cm、底径24.4cmを測る。口縁端部と肩部に鉄が付着しており、埋設時には鉄製の蓋があったと考えられる。産地は不明である。

第3表　第Ⅱ面遺構一覧

遺構番号	地　区	遺構種類	法量(長さ×幅×深さm・形態)	出土遺物	時　期	備　考
0053	A－Ⅱ	土坑	0.9×0.8×0.05・円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0054		土坑		瀬戸	近世か	
0055		——		肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0056		土坑	1.3×1.2×0.3・不整形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0057		土坑	1.45×0.7×0.5・楕円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0058		土坑	1.8×1.8×0.5・隅丸方形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0059		井戸	3面	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0060		土坑	0.8×0.6×0.4・円形	明代染付、天目碗	16世紀代	
0061		土坑	1.3×0.9×0.6・楕円形	明代染付、唐津焼	近世か	
0062		土坑	1.5×0.6×－・楕円形	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0063		土坑	1.1×0.8×0.15・楕円形	白磁、青磁、土師器	12~13世紀か	
0064		土坑	1.3×1.1×0.2・楕円形	唐津焼、李朝碗	16世紀代	
0065		——		明代染付	16世紀代	
0066		土坑	1.4×1.2×0.2・楕円形	肥前染付、瓦	近世	
0067		土坑	3.25×1.7×0.2・不整楕円形	唐津焼、李朝碗	16世紀代か	
0068		土坑	0.7×0.6×0.5・楕円形	青磁、土師器	16世紀代か	
0069		土坑	0.7×0.6×0.35・円形	青磁、白磁、土師器	12~13世紀か	
0070		石組		青磁、土師器	16世紀代か	
0071		土坑	1.0×1.0×0.4・円形	明代染付、李朝碗	16世紀代か	
0072		石組	1.3×0.7×0.6・長方形	白磁、瓦	17世紀代	
0073		土坑	2.0×1.6×0.5・楕円形	明代染付、李朝碗、唐津	16世紀代か	上面で鉄滓多数
0074		土坑	1.15×1.2×0.9・円形	明代染付、李朝碗、唐津	16世紀代か	
0075		土坑		肥前染付、唐津焼	16世紀代か	
0076		石組	1.0×1.2×0.35・方形	唐津焼、瓦	17世紀代	炉体、瓦が出土
0077		土坑	2.5×1.6×0.1・楕円形	青磁、白磁、瓦	近世	
0078		土坑	0.8×0.7×0.1・楕円形	明代染付	16世紀代か	
0079		石組	1.0×0.7×－・楕円形	明代染付、唐津焼、瓦	16~17世紀	
0080		土坑	0.9×0.65×0.1・楕円形			
0081		土坑	1.7×1.2×0.3・楕円形	肥前染付、唐津焼	16世紀代か	
0082		——				
0083		——		肥前染付、瓦	近世か	
0084		土坑		明代染付、李朝碗	16世紀代か	
0085		——				
0086		土坑	2.4×1.1×0.3・楕円形	唐津焼	16世紀代か	
0087		土坑	0.9×0.9×0.9・円形	陶器、瓦	近世か	
0088		土坑	1.4×1.1×0.2・楕円形	白磁、陶器	近世か	
0089		——				
0090		溝か	3面			
0091		土坑	2.9×1.2×0.15・長方形	明代染付、瓦	16世紀代か	
0092		——				
0093		——				
0094		土坑	1.6×0.9×0.15・楕円形	明代染付、唐津焼、瓦	16世紀代か	
0095		炉		肥前染付、唐津焼、瓦	近世	鋳物関係
0096		——				
0097		土坑	0.5×0.6×0.15・円形	白磁、青磁	12~13世紀か	
0098		土坑	1.0×0.65×0.4・楕円形	李朝	16世紀代	
0099		土坑	1.8×1.2×0.2・不整楕円形	李朝	16世紀	
0100		ピット				
0101		土坑	0.9×0.5×0.3・円形	青磁、白磁	12~13世紀か	
0102		土坑	0.9×0.9×0.06・円形	青磁、白磁	12~13世紀か	
0103		井戸(瓦組)	0.4×0.45×0.8・	肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0104		石組	0.7×0.7×0.6・隅丸方形	明代染付、瓦	17世紀代	石積みに瓦、炉体
0105		ピット				
0106		ピット				
0107		ピット				
0108		石組	1.0×1.0×0.4・方形	明代染付、唐津焼、炉壁	17世紀代	石積みに瓦、炉体
0109		土坑	1.8×1.6×0.3・不整形	明代染付、李朝、唐津焼	16世紀代か	
0110		土坑	1.0×0.6×0.3・長方形	李朝、唐津焼、瓦	16世紀代か	
0111		ピット				
0112		ピット				
0113		土坑か	3.5×1.5×0.6・不整形	明代染付、青磁、瓦	16世紀代	
0114		石組	0.9×0.3×－・長方形	明代染付、瓦	16世紀代か	
0115		——				
0116		土坑		明代染付、瓦	16世紀代か	
0117		石組		明代染付、李朝、唐津焼	16世紀代か	
0118		埋甕				
0120		井戸(瓦組)		肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0121		井戸(瓦組)		肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0122		井戸(瓦組)		肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0123		井戸(瓦組)		肥前染付、唐津焼、瓦	近世	
0131		石組	1.3×0.6×0.4・楕円形	明代染付	16~17世紀	
0132		石組	1.1×0.9×0.3・楕円形	明青磁	17世紀代	瓦、鉄滓が多い
0133		石組	1.3×0.6×0.6・長方形	明代染付、李朝、唐津焼	16~17世紀	

7　第Ⅲ面の記録

1）概要

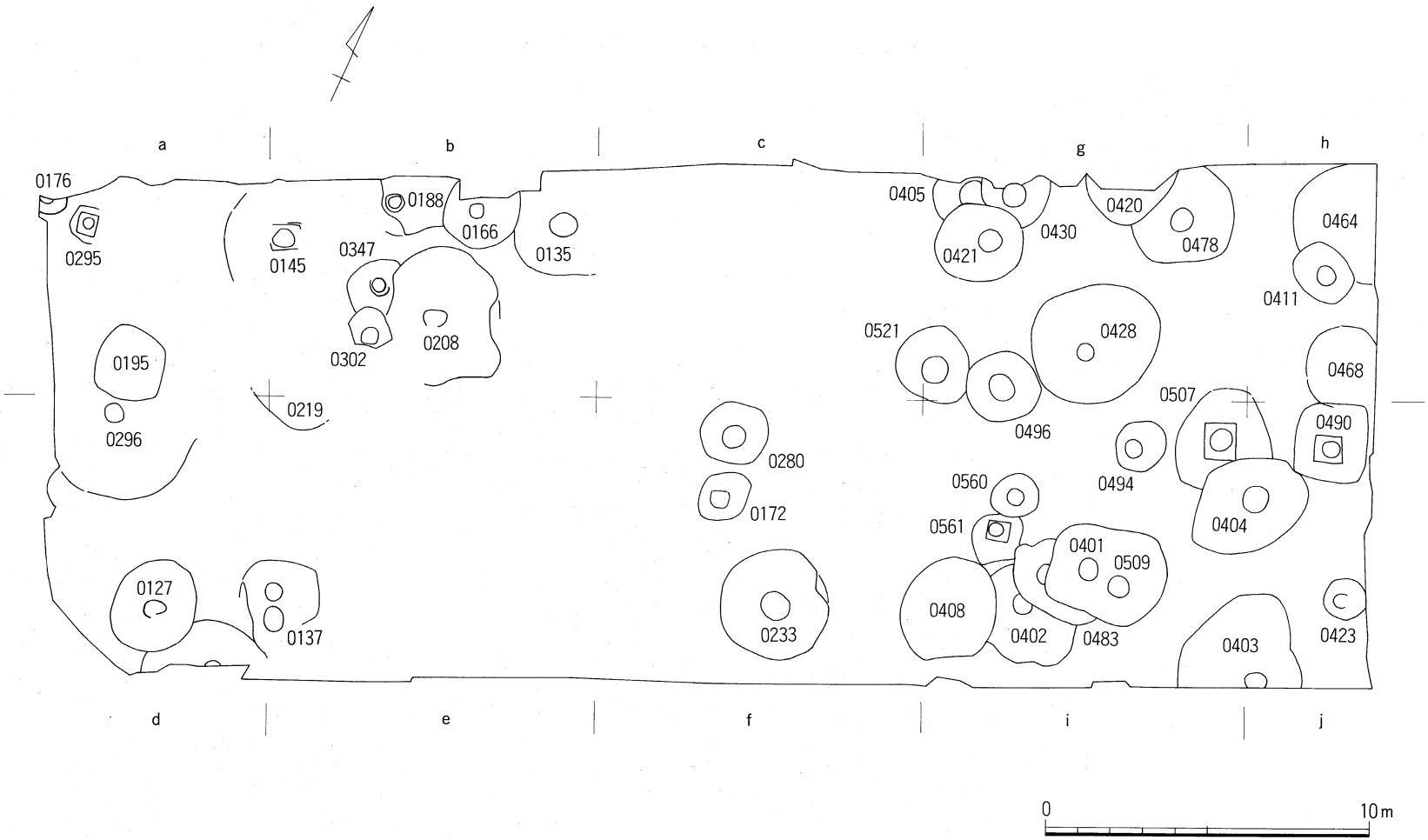
第Ⅱ面を30cmほど下げた黄白色砂の地山上面を第Ⅲ面として調査した。標高は2.60m～2.80m。東側はそれよりやや高い。地山面は西側に傾斜する。この面に至っても遺構の重複は著しく、２面（上面・下面）の調査を余儀なくされた。下面では場所によって奈良時代遺構の広がりを確認できたが、多くの場合それは上面隣接遺構間の時期差（切り合い）の確認に終わった嫌いがある。下面と記述した遺構以外は上面の遺構である。検出した遺構は井戸41基、土坑150基、土器溜り７基、溝13条、土壙墓１基、それに多数のピットである。ピットには建物の柱穴も含まれると考えられるが、別遺構の重複で面的な把握ができなかった。SK0281をはじめとした遺構および包含層から大量の遺物が出土した。この面はそれら遺物などから判断すると、一部古墳時代の遺構があるものの、奈良時代、平安時代後期～鎌倉時代初めが主体で、特に11世紀後半から12世紀中頃までの遺構が多い。この面は最初西側のA区を調査し、その後でB区へうって返した。ここではその区を分けずに報告する。ただ遺構位置の確認のため便宜的にa～jの10mブロックを設定した。a～fがA区、他がB区に相当する。また遺構番号0400以降がB区となる。

2）井戸

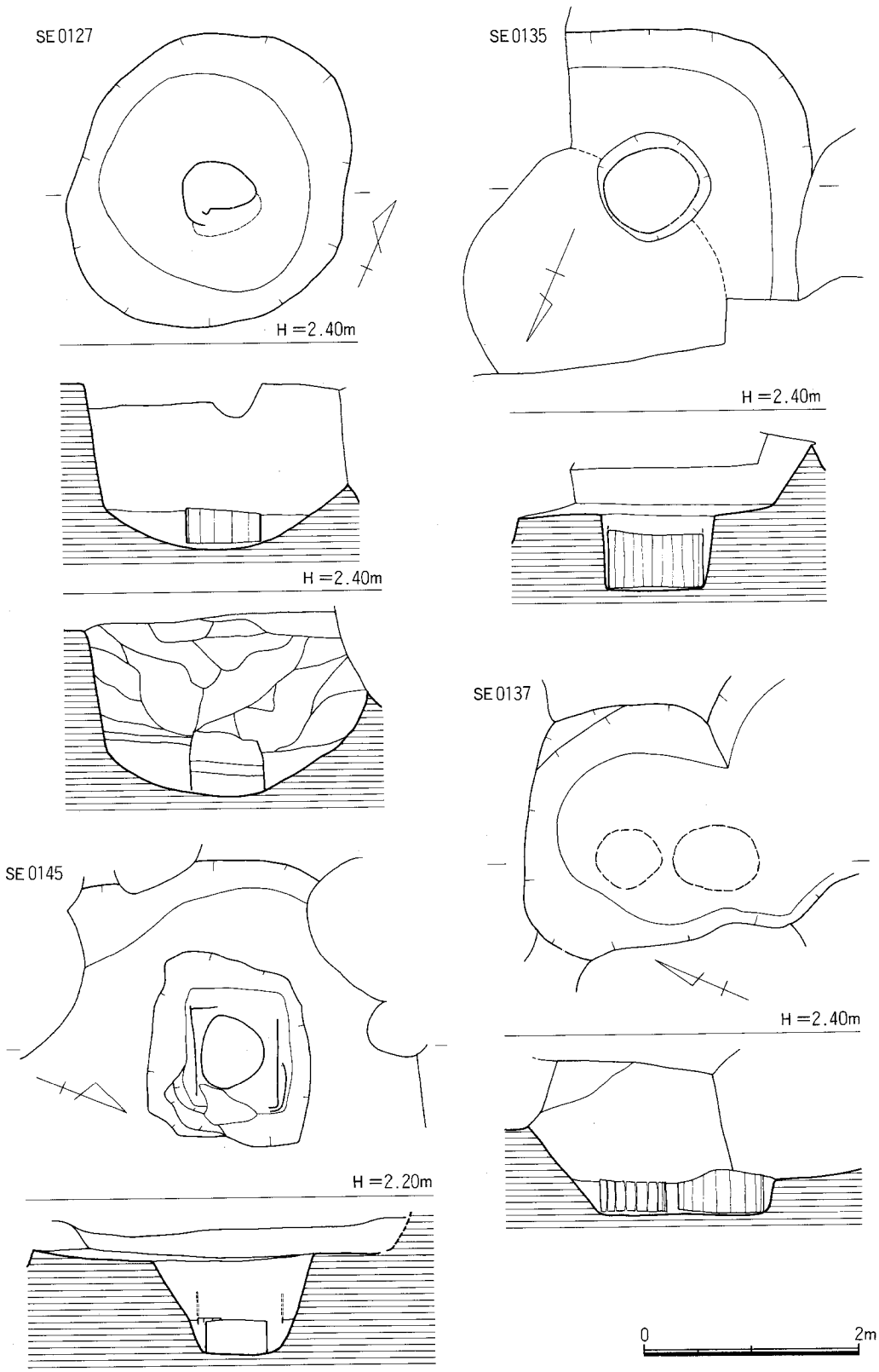
第Ⅲ面で検出した井戸は41基である。このうちB区で確認したSE0403、SE0404は瓦組井戸側、またSE0408はコンクリートの井戸側をもつ近世～現代の井戸で、ここでの記述は割愛した。他は奈良～鎌倉時代にわたる井戸で、その分布は調査区全域に広がる。その掘形は多くの遺構を破壊しているのみならず、各時代の生活面の確認を困難なものとしている。井戸側は桶、板組があり、また水溜を設けるものも見られる。井戸側構築材の残存状態はおおむね悪く、特にB区はかろうじて材の痕跡をとどめるに過ぎない。井戸底はおおむね標高0.60～0.70mにあり、井戸によっては調査時に湧水が認められた。井戸の廃棄状況を示すため土層図を入れたが、土色・土質の説明は省略した。

SE0127（第16図、図版14）　d区。井戸側は桶。掘形は径2.5～2.7mの円形で、その中央に井戸側を設ける。土層図からも解るように、井戸廃棄時に桶は最下段を残し抜き取られる。桶は西南側が破損するが径70cmほどで、幅約10cmの板材を11～12枚組み合わせて作る。井戸側内底近くには陶磁器細片の堆積がみられた。

SE0135（第16図、図版14）　b区。井戸側は桶。残存する西南側の掘形をもとに復元すれば一辺3.00m前後の隅丸方形となる。掘形は標高1.50mでいったん平坦面を作り、その中央に径1.00mの円形竪坑を穿ち、井戸側の桶を置く。残存する桶は径77～84cm、高さ50cmで、幅８～10cmの板材を24枚組み合わせて作る。内側下部にタガ状のものを確認した。西側をSE0166に切られ、



第15図　第Ⅲ面井戸配置略図（1/200）



第16図　SE0127・0135・0137・0145実測図（1/60）

南側でSK0128を切る。

SE0137（第16図、図版14）　d区で円形状の遺構を掘り下げたところ、底面近くから桶の井戸側を２基確認した。２基の井戸の切り合いであろうが、調査時に先後関係は確認できなかった。ここではSE0137北井戸側、南井戸側として報告する。検出面にかろうじて残る径2.50m前後の円形状掘形は北井戸側に伴うものであろう。北井戸側の桶は径60cmで、現存幅10cm前後、厚さ0.5cmほどの板材17枚を組み合わせる。底面から30cm残存する。南井戸側の桶は南北80cm、東西60cmの楕円形で、幅約10cm、厚さ0.5cmの板材を20枚組み合わせて作る。底面から40cm残存する。南井戸側内には拳大の礫の堆積がみられた。井戸側はともに収縮して隙間が開く。

SE0145（第16図）　a区。井戸側は方形縦板組で、中に水溜をもつ。掘形は残存する西側の一部と井戸側の中心をもとに復元すれば、径3.50m前後の円あるいは隅丸方形となる。掘形は標高1.70mでいったん平坦面を作り、その中央付近に一辺1.50mの方形竪坑を穿ち、この中に井戸側および桶の水溜を置く。井戸側は東西75cm、南北100cmの長方形であるが、残存するのは底部の５cm程度で、かろうじて縦板と窺えるだけである。東南側は、一部板が二重となる。水溜の桶は径58cmで、底から30cmほどの高さを確認したにとどまり細部は不明である。南側の井戸側と水溜の間には粘土がみられる。SK0144、SE0347、SD0187などに切られる。土師器皿・杯（ヘラ・糸切り混在）、瓦器、白磁、龍泉・同安窯系青磁などが出土した。

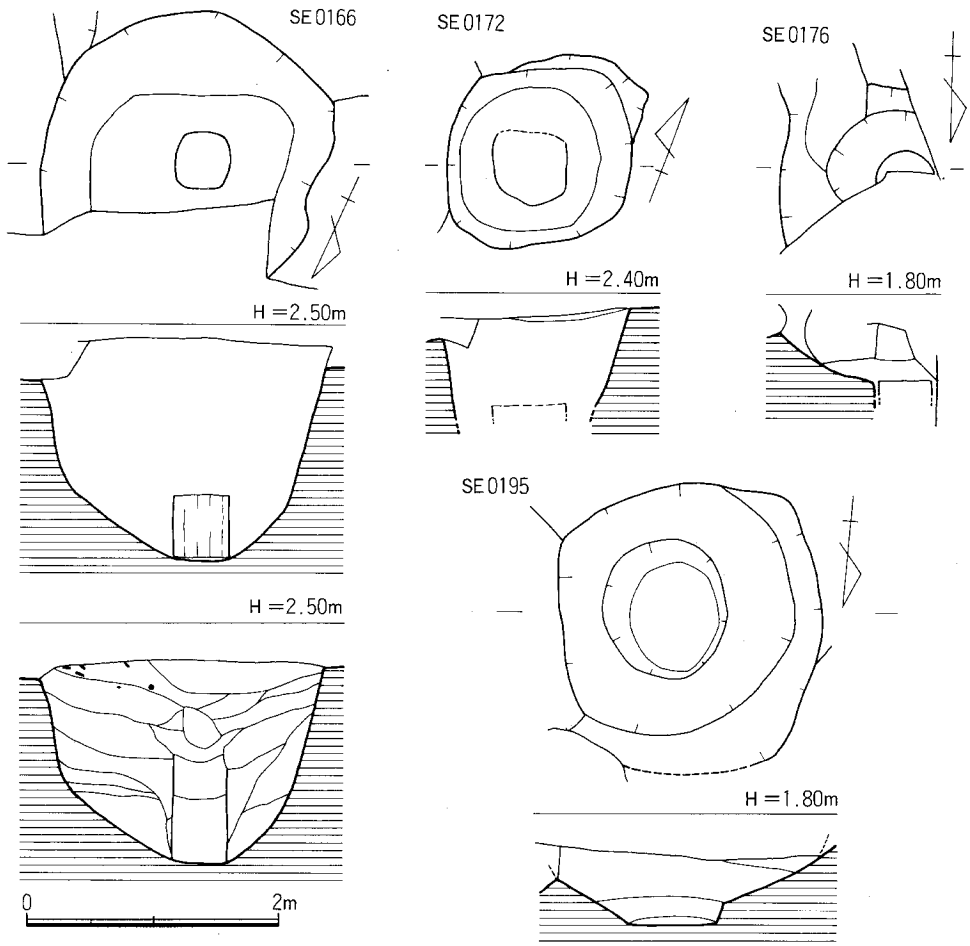
SE0166（第17図）　b区。井戸側は桶。掘形は径2.40m前後の円形。その中央やや西寄りに井戸側の桶を置く。桶は径45cmで、幅５～12cmの板材を12～13枚組み合わせて作る。収縮が激しく、一部は欠損する。土層図で桶は下から２段目近くまで確認できるが、実際に検出できたのは最下段部分だけで、高さは50cm。西側でSE0188に切られ、東側でSE0135を切る。

SE0172（第17図）　f区。井戸側は曲物。掘形は一辺1.40～1.45mの隅丸方形で、その中央に井戸側の曲物を置く。残存する曲物は径55cm。残存状態はきわめて悪い。標高1.40m以下は未掘である。西側でSK0171を切る。

SE0176（第17図）　a区西北隅で検出した井戸である。大半が調査区外にかかり、また上面をSD0129に切られ掘形はほとんど窺えない。井戸側は曲物の痕跡があり、径45cmをはかる。標高1.00m以下は未掘である。土師器杯（ヘラ切り）、須恵器、白磁などが少量出土した。

SE0188（第18図、図版15）　b区。井戸側は桶で、中に水溜をもつ。掘形は円形状で径２m以上。掘形は標高1.10mまで緩やかに下り、そこから径0.85mの円形竪坑を穿ち、その内側に井戸側および水溜を設ける。井戸側は桶で径63cm、幅狭い板材を組み合わせる。残存高は18cm。水溜は径45cmの曲物で、底部から17cmほど残存する。ともに残存状態は悪い。東側でSE0166を切る。掘形下部から白磁碗V類が完形で出土した。他に土師器皿・杯（糸切りが多い）、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などがある。

SE0195（第17図）　a区で検出した井戸。掘形は南北2.30m、東西2.10mの楕円形である。標

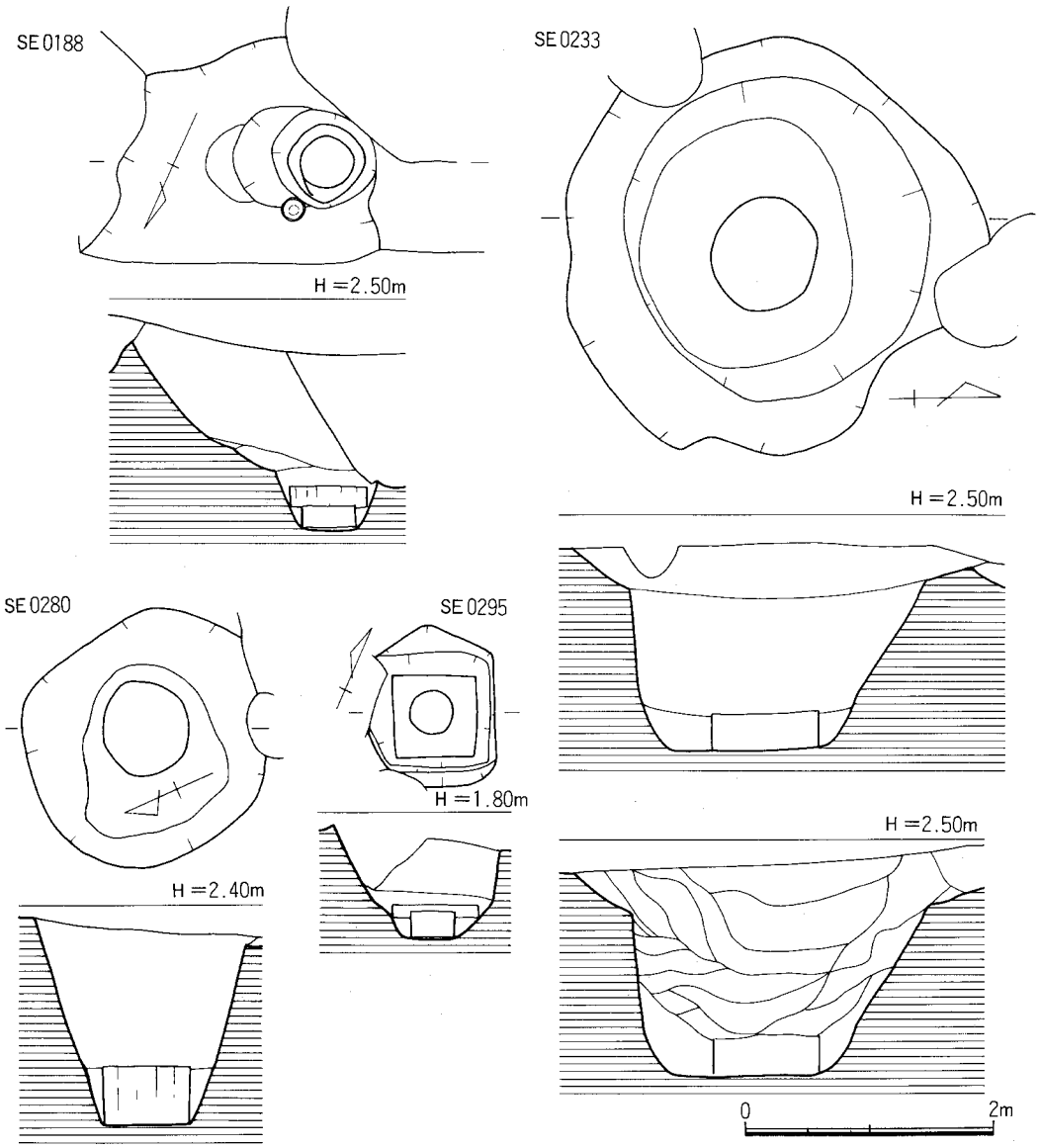


第17図　SE0166・0172・0176・0195実測図（1/60）

高1.15mで段がつき、南北1.10m、東西0.98mの楕円形竪坑を作る。井戸側は痕跡もないが、この竪坑の中に設けたものと考えられる。底面の標高は0.90m。SD0141、SD0187に切られ、SE0296を切る。

SE0208（第19図、図版15）　b区。井戸側は桶。掘形は径4.10m前後の円形で、標高1.50m付近でいったん段がつき、そこから底部に向かい狭くなる。掘形底面やや西北寄りに井戸側の桶を置く。残存する桶は径65cmで、幅10cmの板材が21枚残存する。径から25枚組み合わせの桶と考えられる。材の状態は悪い。土層図では井戸廃棄時の井戸側の抜取りは認められず、桶は下から3段目近くまで残る。実際に検出できた桶は最下段の下半部だけで、高さ24cmにしか過ぎない。西でSE0347、東でSK0130、SK0346を切る。

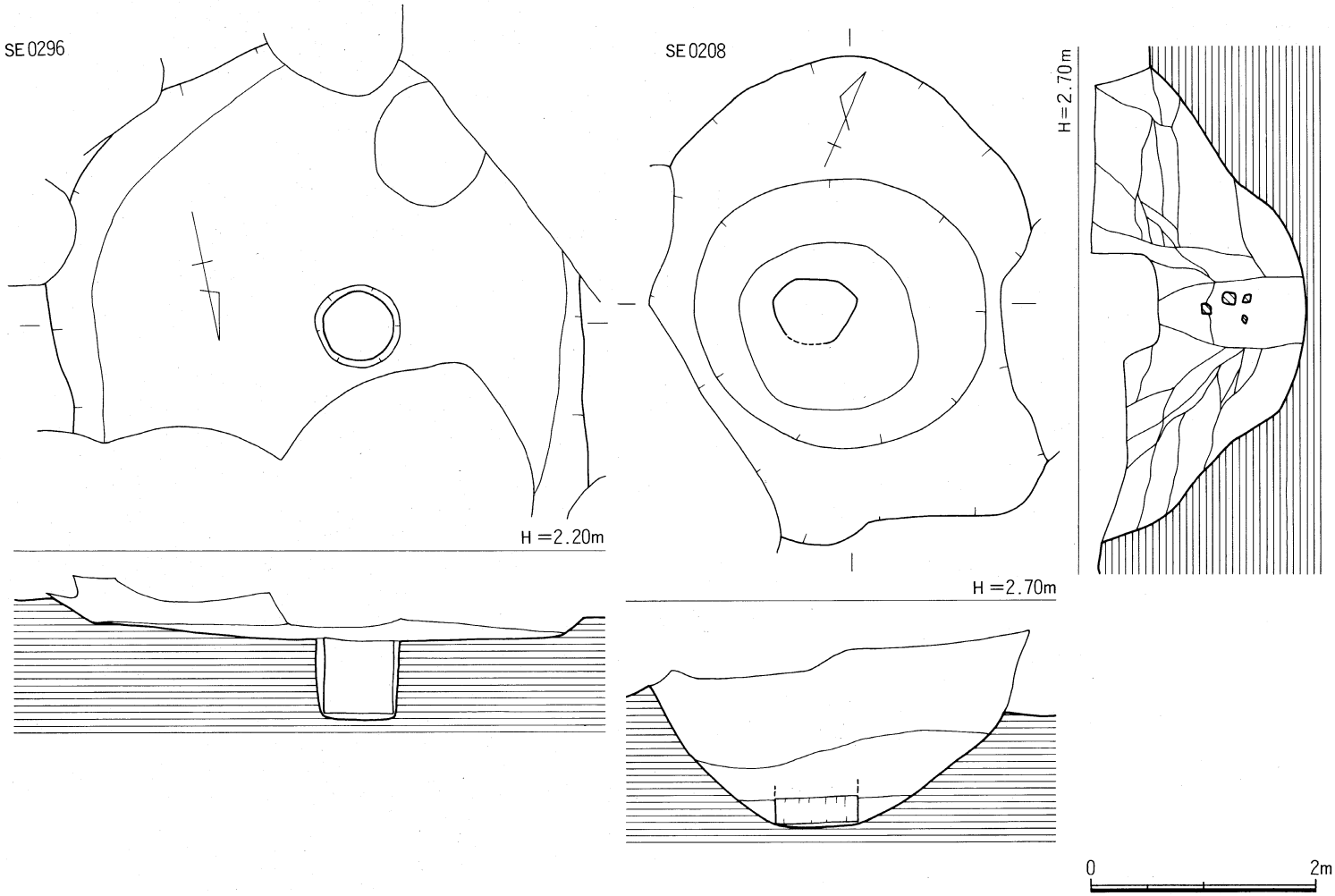
SE0219　e区。上面の遺構に破壊され南側の掘形の一部を残すだけである。確認できる深さは118cm。土師器皿・杯（糸切り）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、明藍釉皿、国産陶器などが出土。



第18図　SE0188・0233・0280・0295実測図（1/60）

SE0233（第18図、図版15）　f区で検出した井戸。掘形は径3.25mの円形。標高2.00mまで緩やかな傾斜をもち、そこから東西2.60m、南北2.50mの円形竪坑を掘り下げ、その中央に井戸側を設ける。井戸側は径85cmの円形で、底から28cmが確認できるが、状態が悪く詳細は不明。痕跡からすれば曲物。土層図は井戸廃棄時に井戸側がほとんど取り除かれた状況を示す。

SE0280（第18図、図版15）　f区で検出した井戸。掘形は径1.85mの円形で、その中央東寄りに井戸側を設ける。底面で検出したのは径68～78cmの桶で、高さ45cm分を確認したが、材の状



第19図　SE0208・0296実測図（1/60）

態が悪く詳細は不明。その上部の５～10cm外側に上方に延びる板痕跡が部分的に認められる。桶とも方形縦板とも断定できないが、これが井戸側となり最下部の桶は水溜となる可能性が高い。西側をSK0281などの土坑に切られ、東側でSK0309を切る。

SE0295（第18図、図版16）　a区。井戸側は方形板組で、中に水溜をもつ。確認できる掘形は南北1.20mの方形に近い。その中央に井戸側と水溜を設ける。井戸側は一辺65cmの板組であるが、底から10cmが痕跡としてある程度で、横板か縦板かは判然としない。水溜は径35cmの曲物で、底から20cmが痕跡をとどめる。東側をSK0143、西側をSD0129に切られる。土師器皿・杯(ヘラ・糸切り混在)、瓦器、白磁、龍泉窯系青磁などが出土。

SE0296（第19図、図版16）　d区。井戸側は曲物。確認できる掘形は径4.70m前後の円形である。標高1.40mでいったん平坦面を作り、その中央付近に径0.75mの円形竪坑を穿ち、内側に井戸側を置く。井戸側は径62cmの曲物で、底から70cm残存するが、残存状態は悪くそれが一段か二段かは確定できない。SE0195、SD0141、SD0187に切られる。土師器皿・杯、黒色土器、白磁、中国陶器などが出土。

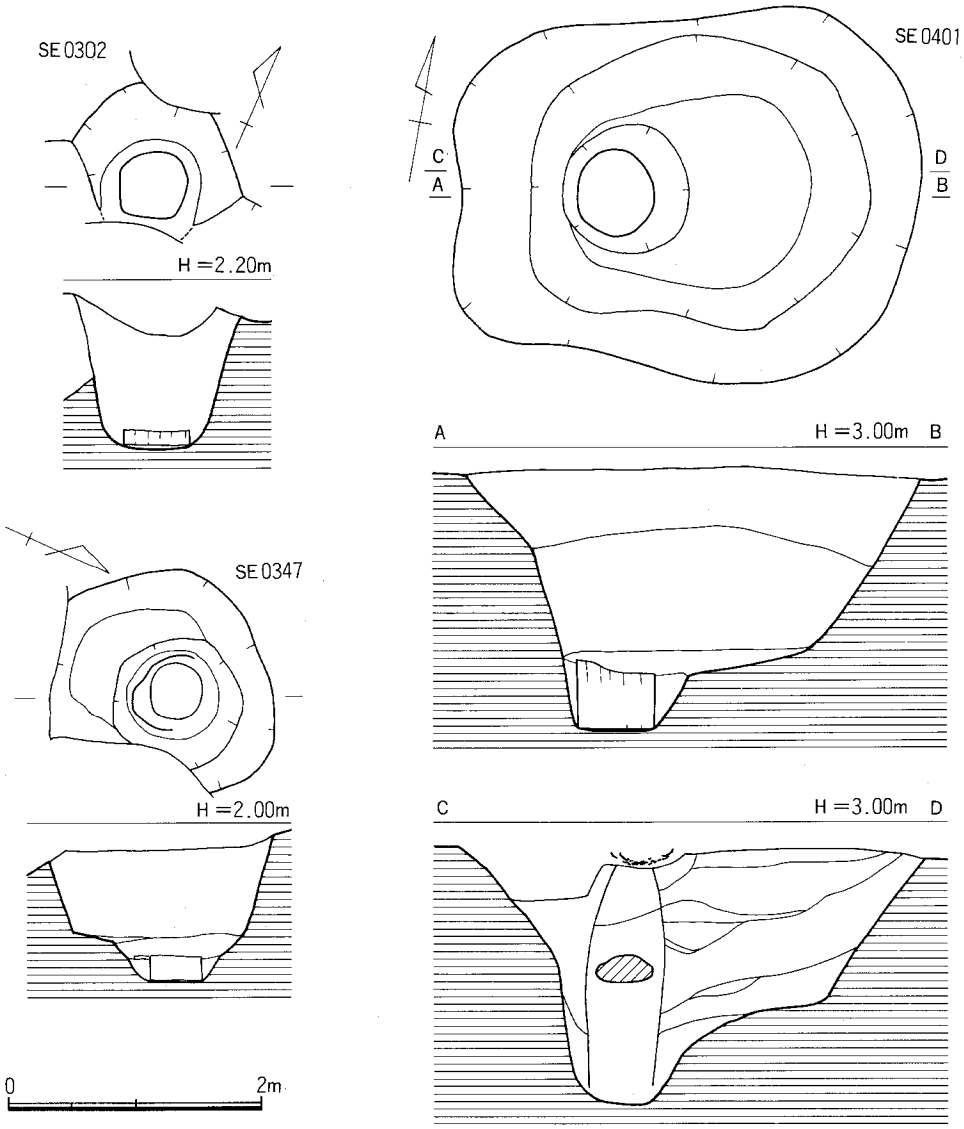
SE0302（第20図、図版16）　b区。井戸側は桶。掘形は径1.40m前後の円形で、その中央に井戸側の桶を置く。桶は径54cmで、底から10cm残存する。板幅は10cm程度であるが、状態が悪く細部は不明。北側でSE0347を切る。

SE0347（第20図、図版16）　b区。井戸側は桶で中に水溜をもつ。掘形は円形で径1.80m。標高1.10mでいったん平坦面を作り、その北側部分に径0.90mの円形竪坑を穿ち、内側に井戸側および水溜を設ける。井戸側は桶で径60cm、南側に幅10cm前後の板材10枚が残存する。状態が悪く残存高は５cmに満たない。水溜は径40cmの曲物で、底部から18cmほど残存する。状態は悪い。東側をSE0208に、南側をSE0302に切られる。

SE0401（第20図、図版17）　i区。井戸側は桶。掘形は東西3.65m、南北3.00mの楕円形。標高2.00～2.35m付近で段がつき、そこから底部に向かいさらにすぼまる。標高1.20mで平坦面を作り、その西端に径1.00mの円形竪坑をあけ、井戸側の最下段を置く。桶は径62～72cm、底面から50cmほどその痕跡を確認した。土層図を見る限り井戸廃棄時に井戸側の抜取りはなく、桶は下から３ないし４段目近くまで確認できる。また井戸側上面のSX0400土器溜は、井戸廃棄の祭祀関係の遺構であろうか。SE0509、SE0483、SK0412などを切る。

SE0402（第21図、図版17）　i区。井戸側は桶。掘形は径2.55m前後の円形あるいは隅丸方形で、そのほぼ中央に井戸側の桶を置く。桶は径63～66cmで、底面から64cmほど確認した。材はその痕跡をとどめるだけである。井戸側内の最下部には厚さ25cmの灰黒色粘土が溜り、その中には獣骨が堆積していた。土層図を見ると井戸廃棄時に下部の二段を残し桶は抜き取られ、また二段目の井戸側内には大小礫を詰めている。SE0408、SE0483に切られる。

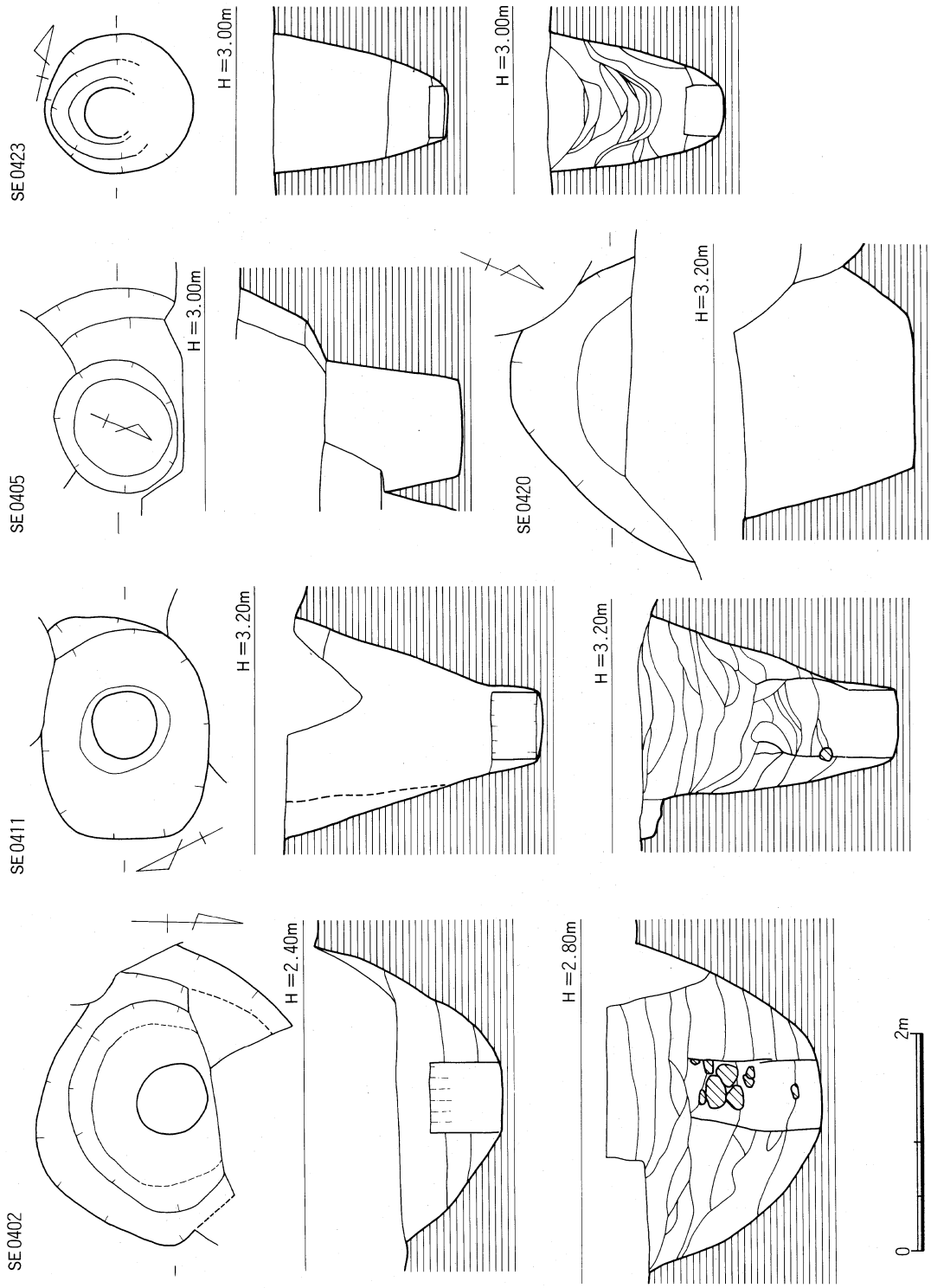
SE0405（第21図、図版17）　g区で検出した井戸。上面遺構に破壊され掘形の平面形は不明。



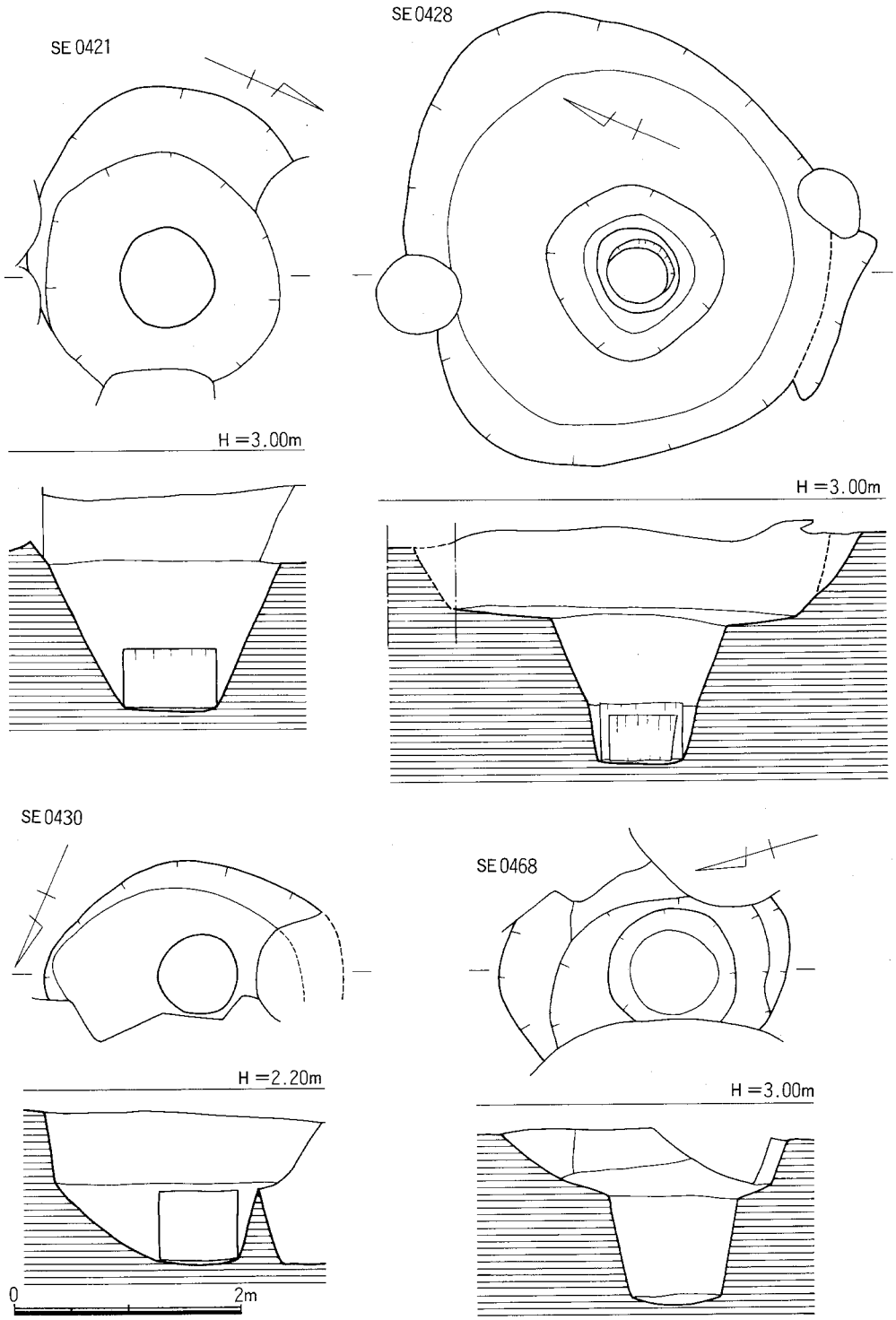
第20図　SE0302・0347・0401実測図（1/60）

復元すれば径2.50m前後の円形になる。標高1.90mでいったん平坦面を作り、その中央に径1.1～1.2mの円形竪穴を掘り込む。底面は標高0.64m。井戸側などの検出はなかった。SE0421とSE0430に切られる。

SE0411（第21図、図版17）　h区。井戸側は桶。掘形は図では長さ2.00m、幅1.53mの楕円形を呈するが、調査時に西北側が崩壊しており、実際は径1.65m前後の円形である。急な角度で掘り下げ、そのほぼ中央に井戸側の桶を置く。桶は径60cmで、底面から43cmほど確認した。材は



第21図　SE0402・0405・0411・0420・0423実測図（1/60）



第22図　SE0421・0428・0430・0468実測図（1/60）

ほとんど痕跡を残すだけである。土層図を見ると井戸廃棄時に桶は下部の二段を残し抜取られている。SE0464を切る。

SE0420（第21図）　g区で検出した井戸。北側調査区外にかかり、最下面までの掘り下げはできなかった。掘形は円形状で、確認幅は2.50m。標高1.38mまでしか掘り下げができず、その範囲内では井戸側などの検出はなかった。SK0410に切られ、SE0478を切る。

SE0421（第22図）　g区。井戸側は桶。掘形は径2.60～2.70mの円形で、標高2.00m付近で段がつき、そこから底面に向かいすぼまる。掘形中央に井戸側の桶を置く。桶は径82～87cm、底部から52cmが残存するが、収縮し状態は悪い。北側でSE0405、SE0430、SK0410を切る。

SE0423（第21図）　j区。井戸側は桶。掘形は東西長1.35m、南北幅1.27mの楕円形。急な角度で掘り下げ、標高1.60mで浅い段を設け、そこから底面に向いすぼむ。掘形中央に井戸側の桶を置く。桶は径47cmで、底面から14cm残存する。かろうじて桶と確認できる状態である。土層図を見ると井戸側の桶は廃棄時に下部の二段を残し抜き取られている。東側は一部未掘である。SK0438を切る。

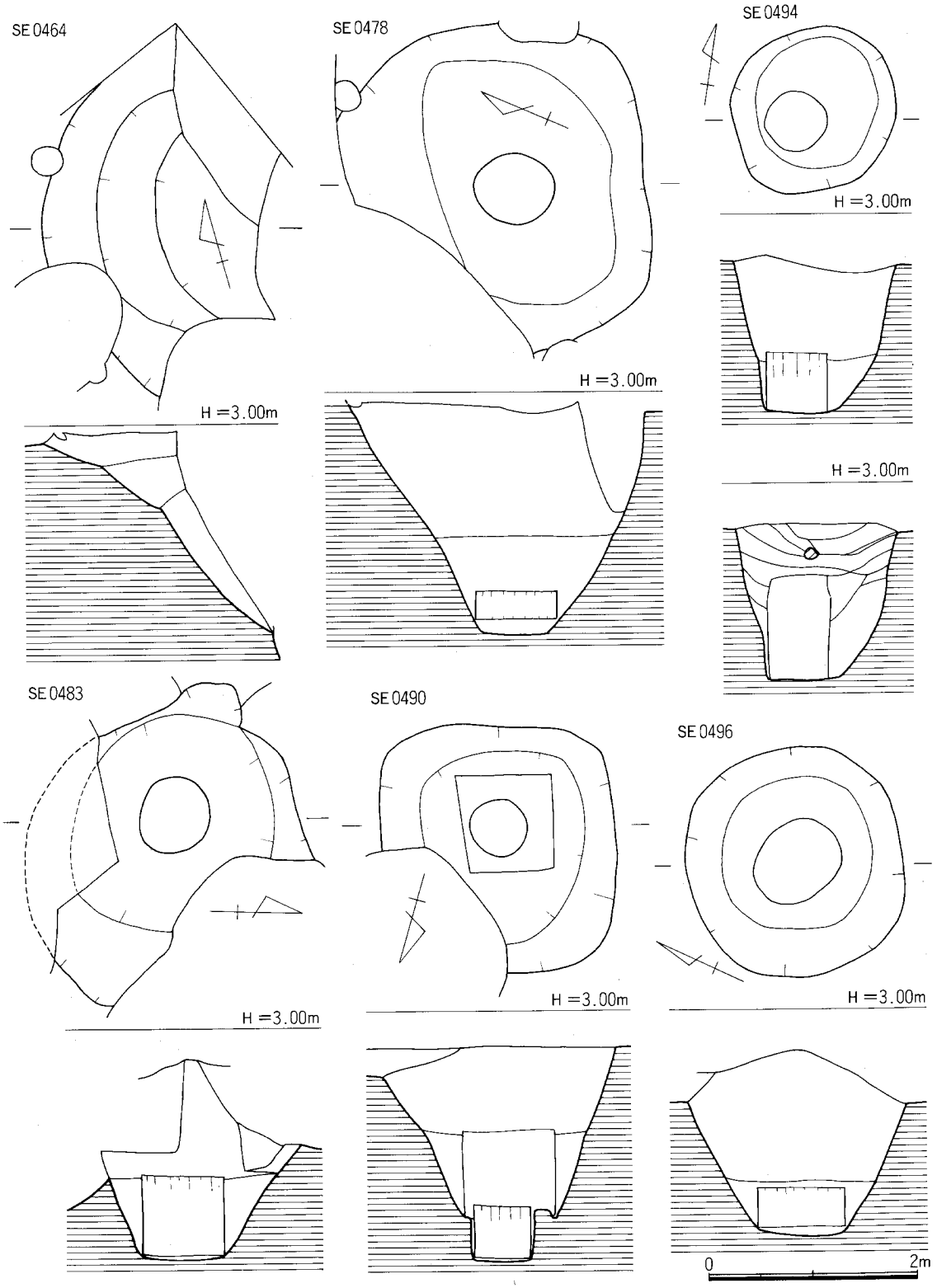
SE0428（第22図、図版18）　g区。井戸側は桶で、中に水溜をもつ。掘形は東西長4.10m、南北幅3.71mの大型のもので、南側がやや膨れた円形状を呈する。標高2.00mでいったん平坦面を作り、そのやや北側部分に径1.45m前後の円形状の竪坑を穿ち、中に井戸側および水溜を設ける。井戸側は桶で径67～79cm、底部から50cm残る。水溜は径55cmの桶で、底部から40cmほど残存する。ともに残存状態は悪い。SE0496、SK0414、SK0415、SK0567に切られる。

SE0430（第22図、図版17）　g区。井戸側は桶。掘形は径2.60m前後の円形。標高1.40m付近まで周壁は直立し、そこで段を作ってなだらかに底面へ向かう。掘形中央やや西寄りに井戸側の桶を置く。桶は径70cmで、底部から62cmが残存する。かろうじて桶と窺える状態である。西でSE0405を切る。土師器杯（糸切り）、白磁、中国陶器などが出土。

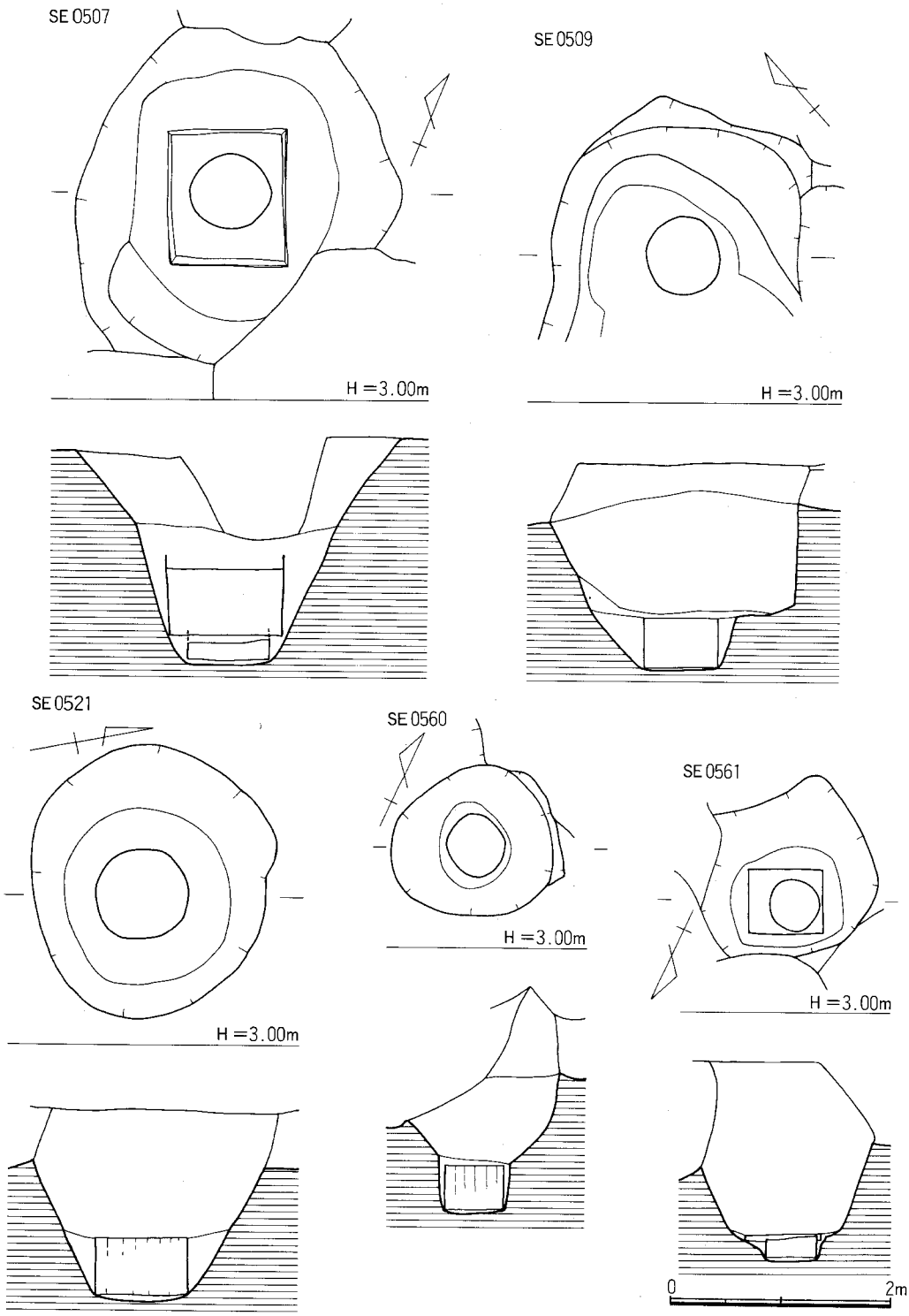
SE0464（第23図）　h区北東隅で検出した井戸。SE0411や攪乱坑に切られ、西北部分しか残らない。掘形の平面形は円と考えられ、残存部から復元すれば径3.60m前後となる。標高2.70mおよび2.20m前後の段を作り、底面へ掘り下げる。調査区壁面近くであったため標高1.00mまでしか確認できなかった。この間井戸側材などの検出はなかった。

SE0468（第22図）　h区で検出した井戸。掘形の平面形は円もしくは楕円形で、確認できた南北幅は2.55m。標高2.20m前後でいったん平坦面を作り、その中央付近に径1.2mの円形竪穴を開ける。確認したのは標高1.20mまでで若干掘り足りなかった嫌いがある。井戸側などの検出はなかった。東南側をSK0467に切られる。

SE0478（第23図、図版18）　g区。井戸側は桶。掘形は東西長3.20m、南北幅2.80mの隅丸長方形状で、そのほぼ中央に井戸側の桶を置く。桶は径68～79cm、底面から26cmほどその痕跡を確認した。SK0510を切り、SE0420、SK0476に切られる。



第23図　SE0464・0478・0483・0490・0494・0496実測図（1/60）



第24図　SE0507・0509・0521・0560・0561実測図（1/60）

SE0483（第23図、図版17）　i区。井戸側は桶。掘形は南側が残るだけで、そこから復元すると径2.80m前後の円形となる。そのほぼ中央に井戸側の桶を置く。桶は径67～73cm、底面から75cmほどその痕跡を確認した。SE0401、SE0509に切られ、SE0402を切る。

SE0490（第23図、図版18）　j区。井戸側は方形板組で中に水溜をもつ。掘形は南北長2.37m、東西幅2.26mの隅丸長方形で、その中央南側に井戸側と水溜を設ける。井戸側は一辺90cmの方形板組で、標高1.80m付近から下に80cmほど確認したが、ほとんど痕跡的で横板か縦板かは判然としない。水溜は径55cmの桶で、井戸側底部のやや東寄りに底面から高さ50cm分の痕跡を確認した。SE0468、SK0467に切られる。

SE0494（第23図、図版18）　i区。井戸側は桶。掘形は径1.60m前後の円形で、その西南隅に井戸側の桶を置く。桶は径58cmで、底面から高さ58cmほどその痕跡を確認した。SK0508、SK0568などを切る。土師器皿・杯（ヘラ・糸切り混在）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器、国産陶器などが出土。

SE0496（第23図、図版19）　g区。井戸側は桶。掘形は東西2.24m、南北2.09mの楕円形で、その中央西寄りに井戸側の桶を置く。桶は径70～90cmで、底面から高さ37cmほどその痕跡を確認した。東でSE0428、SE0521を切る。土師器杯・皿（ヘラ・糸切り混在）、黒色土器、白磁、同安窯系青磁、天目碗、中国陶器などが出土。

SE0507（第24図、図版19）　i区。井戸側は方形横板組で中に水溜を設ける。掘形は東西幅2.94m、残存部からすれば南北に長い楕円形である。その中央に井戸側と水溜を設ける。井戸側は東西107cm、南北124cmの長方形板組で、標高1.60m付近から下に70cmほど確認した。その痕跡から横板組であることがかろうじて窺えた。水溜は井戸側底部近くの中央に、底面から高さ14cmだけを確認した。残存状況は悪く、径は75cmをはかるが、桶とも曲物とも判断できない。北をSK0469、南側をSE0404に切られる。

SE0509（第24図）　i区。井戸側は桶。掘形は東西幅2.23m、残存部分からみれば東西に長軸をもつ楕円形あるいは隅丸長方形となる。標高1.10m付近で平坦面を作り、その北寄りに東西幅1.35mの竪坑をあけ、底面西寄りに井戸側の桶を置く。桶は径65～70cm、底面から45cmほど確認したが、その痕跡をとどめるに過ぎない。西側をSE0401に切られる。

SE0521（第24図、図版19）　g区。井戸側は桶。掘形は確認時で東西2.44m、南北2.07mの楕円形。そのほぼ中央に井戸側の桶を置く。桶は径85cmで、底面から高さ52cmほど確認した。桶外側、底部から10cmほど上にタガらしきものを確認した。板の組合せ枚数などは不明である。SE0496、SK0474、SK0578に切られる。

SE0560（第24図）　i区。井戸側は桶。掘形は東西1.54m、南北1.34mの楕円形。標高1.10m付近で段がつき、そこから井戸側幅だけの竪坑となる。井戸側は桶で径52～57cm、底部から高さ40cmの痕跡を確認した。南側でSE0561、SX0432を切る。土師器杯、黒色土器、須恵器、白

磁、中国陶器、緑釉陶器などが出土。

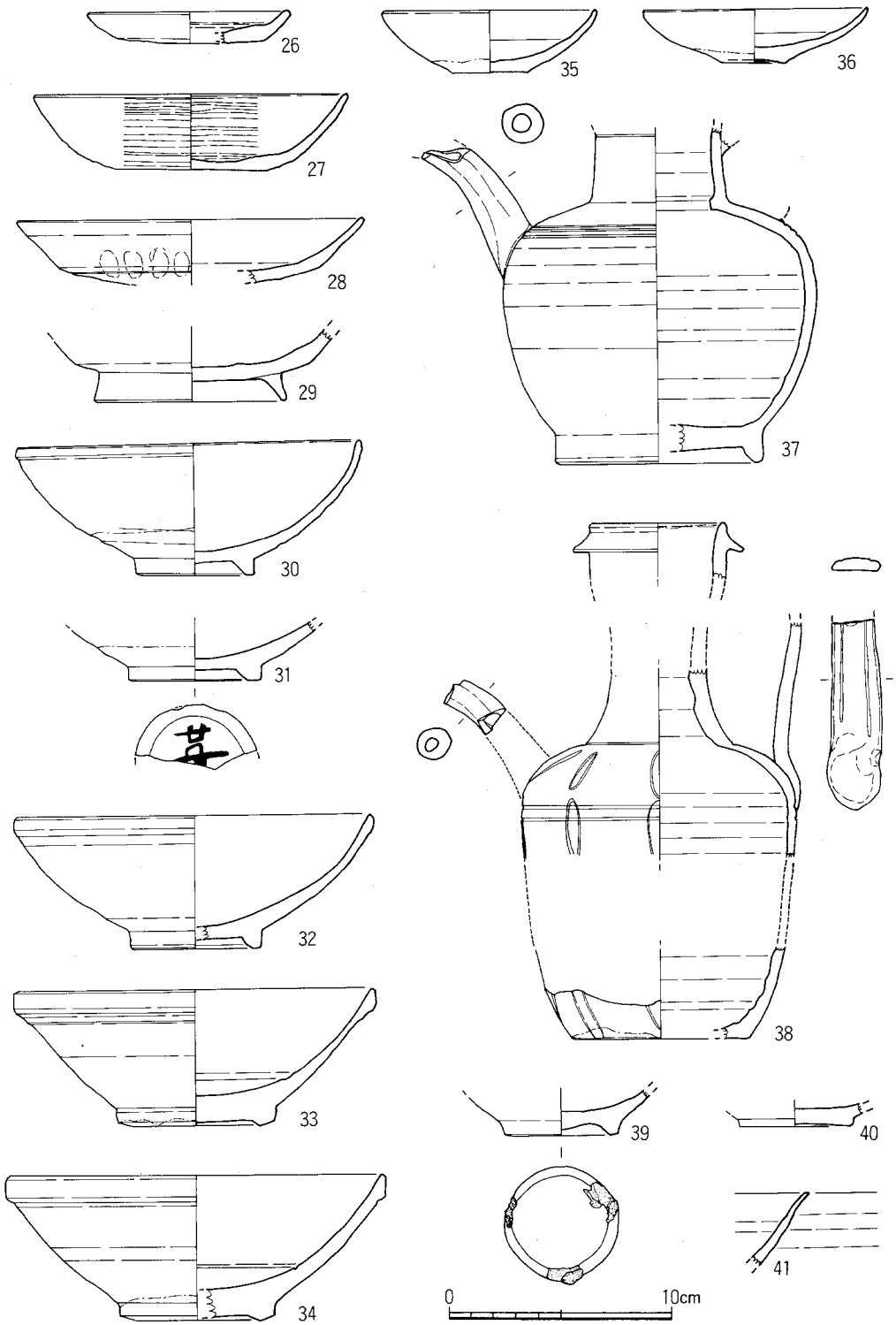
SE0561（第24図、図版19）　i区。井戸側は方形横板組で中に水溜を設ける。掘形は南北幅1.60m、残存部からすれば方形に近いもので、その中央に井戸側と水溜を設ける。井戸側は東西70cm、南北60cmの長方形の横板組で、底部から6cmその痕跡をとどめる。水溜は径45cmの曲物で、井戸側底部近くの西寄りに底面から上に20cmその痕跡を確認した。SE0483、SE0560に切られ、SX0432を切る。土師器杯・皿、黒色土器、須恵器、白磁、緑釉陶器などが出土。

3）井戸出土遺物

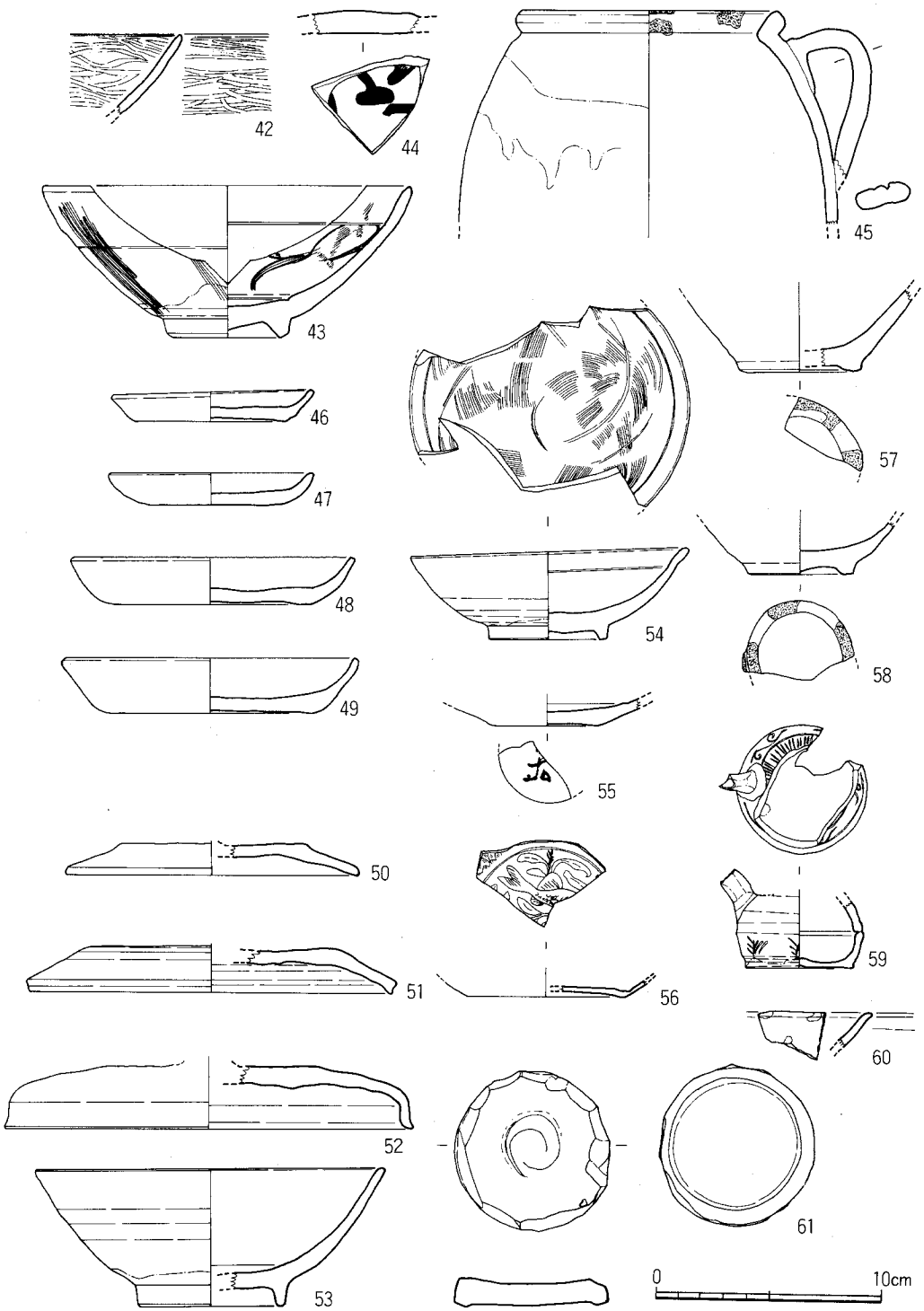
SE0127出土遺物（第25図26～41）　26～29は土師器。26は小皿。口径8.9cm、器高1.4cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。27･28は杯。27は口径14.0cm、器高3.4cm。底部は回転ヘラ切り。調整は内外面とも丁寧な回転ヘラ磨きを施す。28は復元口径15.4cm、残存器高2.9cm。底部はヘラ切り。29は高台付の椀。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。内底はナデ調整。30～38は白磁。30～32は碗Ⅱ類。いずれも見込みに段を作らない。31の底部には墨書が見られる。33･34は碗Ⅳ類。33は見込みに段を作り、また34は沈線を巡らす。33の施釉は高台外面まで及ぶ。35・36は皿。体部から口縁部は内湾気味に外傾する。内面中位には段がつく。35は平底、36はわずかに上げ底となる。37・38は水注。37は高台をもつ。胎は白色、釉は淡灰白色で高台内側を除き外面に施す。38は平底で、口縁には断面三角形の凸帯が巡る。把手は扁平、頸部は細長い。胎は淡灰白色で黒色粒を含む。釉は少し緑味を帯びた白色で、外底を除いた全面に施す。39は高麗青磁碗。胎は淡灰色で、砂粒が多く混じる。釉はやや灰色をおびた緑色で、全面に施す。釉下には黒色の斑点が多くみられる。高台畳付の3ケ所に砂目跡があり、目跡間の釉は削り取る。40は緑釉陶器の皿。胎土には少量の砂粒が入り、釉は黄緑で全面にかかる。41は高麗系の陶器碗。体部は直線的に外傾し、口縁は尖り気味になる。胎は茶褐色で砂粒が少量入る。釉は暗緑色で全面に施す。他に褐釉陶器甕、黄釉陶器鉄絵盤などが出土した。

SE0135出土遺物（第26図42～45）　42は黒色土器B類椀片。口縁端部内側に沈線を巡らす。楠葉型か。43は同安窯系青磁碗Ⅰ類。内面上位に沈線を入れ、見込みには段を作る。内面体部には片彫の花文と櫛描文を施す。外面上位にも沈線が巡り、また細かい櫛目を入れる。44は黄褐色釉の陶器壺底部片。露胎の外底に墨書がある。胎は淡褐色で砂粒が少量混じる。45は灰緑色の釉を全面に施す陶器。口縁は肥厚し、小さく外反する。把手は扁平で上面には2条の溝が入る。胎は灰色で砂粒が多く入る。口径11.2cm。口縁上部には砂目跡が見られる。水注か。

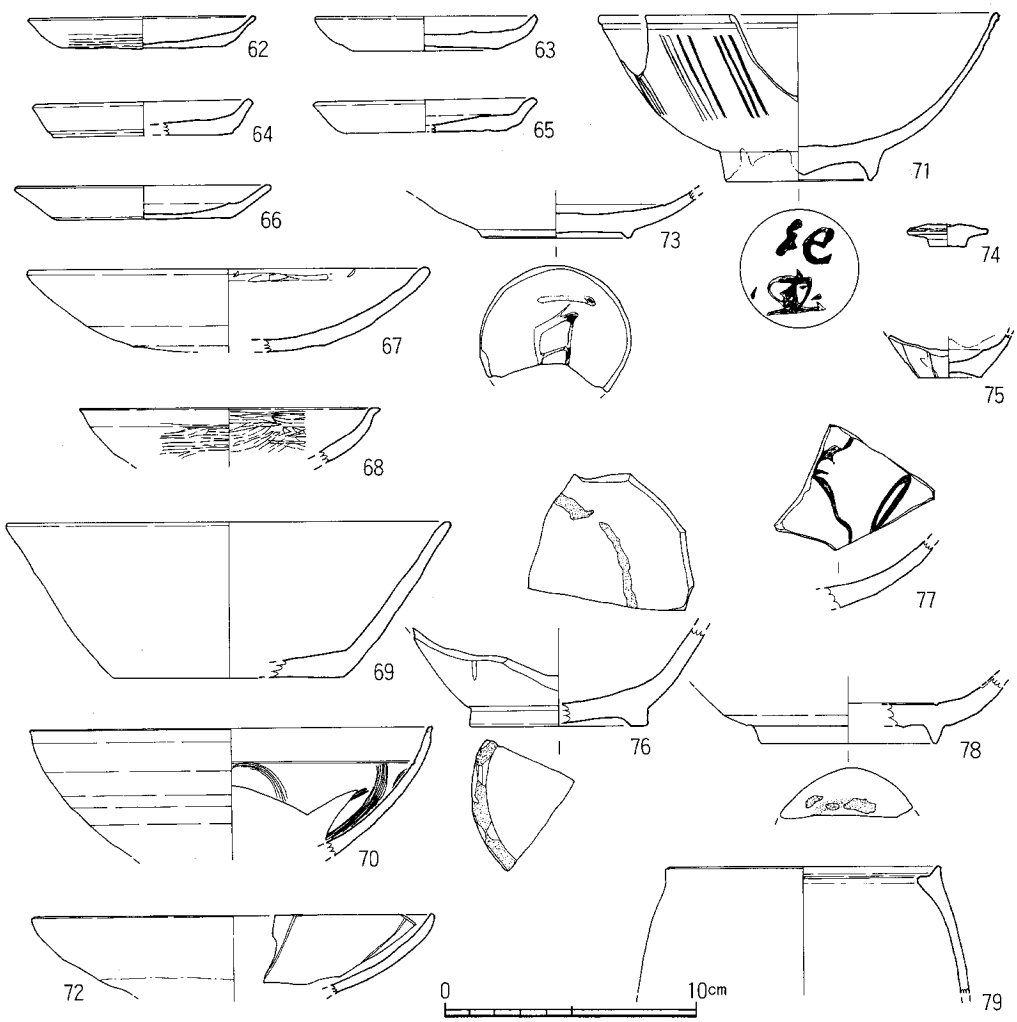
SE0137出土遺物（第26図46～61）　46～49は土師器。46・47は小皿で口径8.8～9.0cm、器高1.3～1.4cm。底部は糸切りで、47には板状圧痕がある。46は内面から外面にかけての一部に煤が付着する。48・49は杯。口径12.2～12.8cm、器高2.1～2.5cm。底部は糸切りで、ともに板状圧痕が残る。49の外面は煤の付着が著しい。50～52は須恵器蓋。いずれも破片からの復元であ



第25図　SE0127出土遺物実測図（1/3）



第26図　SE0135・0137出土遺物実測図（1/3）



第27図　SE0166出土遺物実測図（1/3）

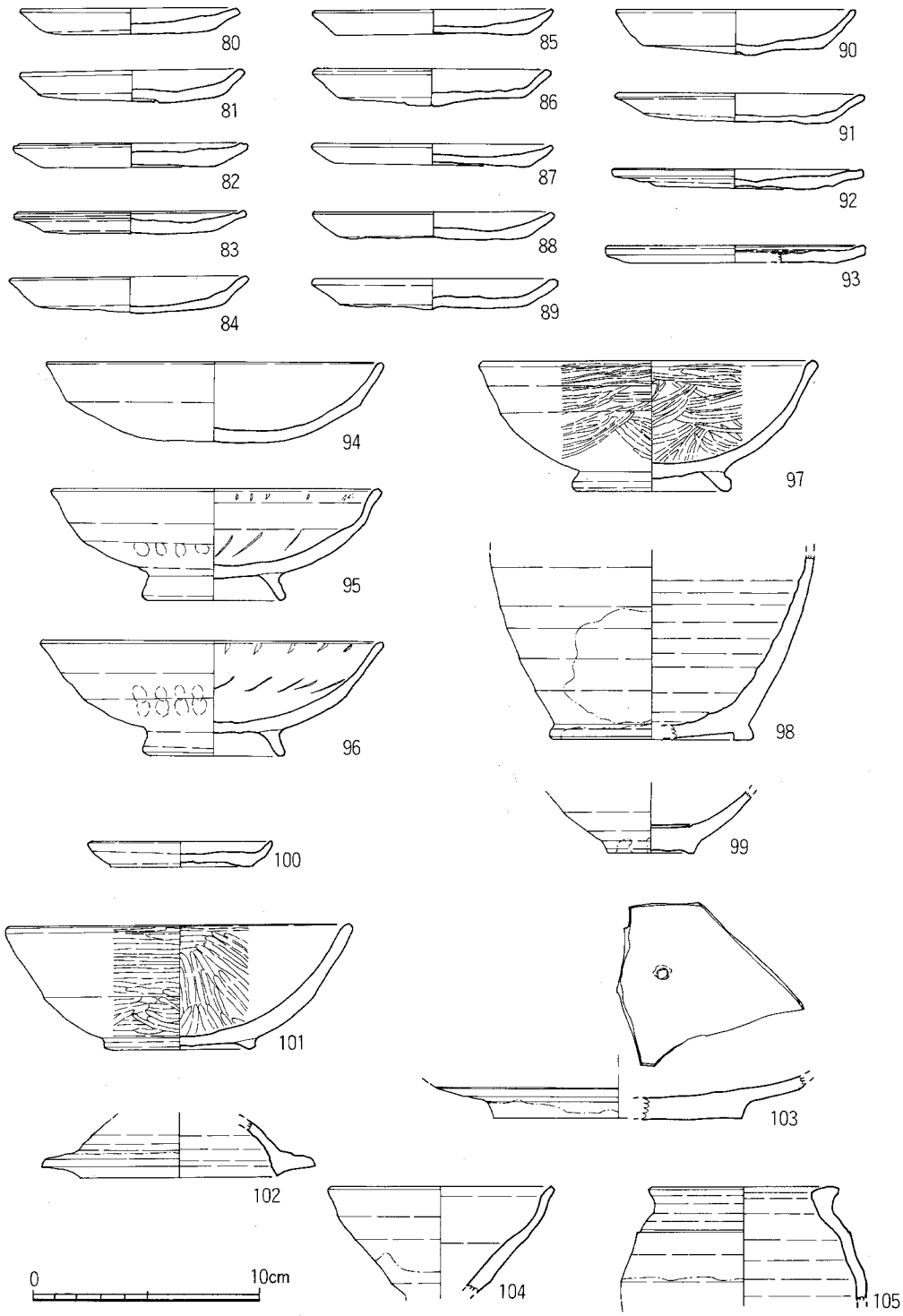
る。50・51は天井部のヘラ削りで体部との境が明瞭である。52はナデ調整で全体的に丸みをもつ。53～56は白磁。53は碗V類。見込みには浅い段がつく。釉は淡灰白色。54は浅碗。内面上位に沈線を巡らせ、その下見込みまで櫛描文を施す。釉は淡灰緑色。55は皿。わずかに上げ底で、釉は淡褐色。外底に墨書がある。56も皿。薄手の作りで、見込みから体部にかけ魚草文を型押しする。釉は白色で残存部の全面に施す。57・58は高麗青磁碗。ともに胎は灰色で、砂粒が多く入る。また釉はオリーブ色のガラス質で、内面から高台外面までかかる。畳付には複数の目跡がある。59は黒褐色釉陶器の水滴。体部上半には櫛状の文様、下半には唐草あるいは植物文を浮き彫りにする。胎は砂粒をほとんど含まない淡褐色。焼成は良好。釉は内面と外底には施さない。内面には体部上半と下半の接合痕が沈線状に残る。60は二彩の陶器椀。黄褐色の釉に

緑色の釉が点状に施される。胎土には砂粒が少量混じり、焼成は良好。61は白磁碗の底部を打ち欠き、形を円形状に整えたものである。釉は緑を帯びた白色。

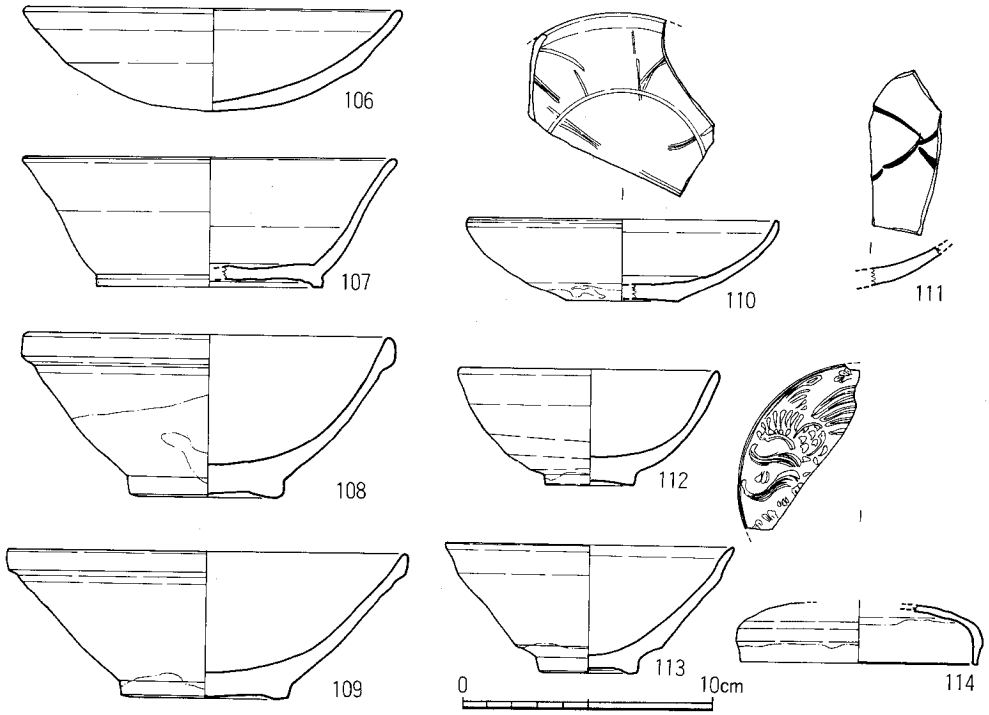
SE0166出土遺物（第27図62～79）　62～69は土師器。62～66は小皿で、うち62～65は口径8.5～8.8cm、器高1.2～1.4cm。66は口径9.9cm、器高1.3cm。62・63はヘラ切り、他は糸切りで、すべて板状圧痕を残す。63の内面には煤が付着する。67は丸底杯。復元口径17.3cm、器高は3.3cm程度であろう。残存部は口縁部内側がヘラ磨き、他は横ナデ調整である。内面にはコテ当て痕が見られる。68は黒色土器B類椀片。口縁はわずかに屈曲する。69は杯片。無高台で、体部は直線的に外傾する。調整は横ナデ。内面には口縁部から煤が付着する。70～75は白磁。70は碗で、内面上位に沈線を巡らせ、その下に櫛描文を入れる。釉は灰白色。71も碗。口縁端部は小さな玉縁状になり、高台は畳付が尖り気味になる。外面には片彫の縦線を入れる。釉は褐色のガラス質で、高台外面まで施す。外底には墨書がある。72は杯。内面には縦方向の隆線を入れる。やや緑味を帯びた透明釉で、体部下半まで施す。73は皿。小さな高台で、見込みには浅い段がつく。やや緑味を帯びた透明釉で、高台外面まで施す。外底に墨書がある。74は合子の蓋。上面を除き露胎。釉は透明。75は合子の身。内面と外面体部下半は露胎。釉は透明で緑味を帯びる。76・77は越州窯系青磁。76は外面に片彫の縦線を施す碗で、釉はオリーブ色を呈する。見込みと畳付に目跡がある。77は内面に片彫の花文を入れる杯。釉は灰色。78は高麗青磁碗。高台は尖り気味である。胎は灰色で褐色粒が多く入る。釉は緑色で全面に施す。外底に砂目跡がある。79は土師質の壺。上部は蓋の受け部となる。淡赤褐色。

SE0172出土遺物（第28図80～99）　80～96は土師器。80～93は小皿。口径9.4cm～11.4cm、器高0.8cm～1.8cm。底部はすべてヘラ切り、80を除き板状圧痕がある。92・93は口径が11cmを越えるが、器高は1cmに満たない。81・84・88・90の内面には煤の付着がみられる。94は丸底杯。口径14.7cm、器高3.6cm。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。95・96は高台付の杯。口径14.6～15.0cm、器高5.0～5.1cm。調整は横ナデとナデ。内面にはコテ当て痕が残る。97は黒色土器B類椀。口径14.8cm、器高5.8cm。体部は内外面ともヘラ磨き。外底には板状圧痕が残る。98は褐釉陶器の瓶底部片。扁平な高台がつく。胎は淡灰色で砂粒が少量混じる。釉は外面高台部分までかかる。99は黒褐釉陶器の碗。わずかに上げ底で、見込みには沈線が巡る。胎は灰白色で砂粒がごくわずか混じる。外底を除き釉を施す。

SE0195出土遺物（第28図100～105）　100は土師器小皿。口径7.9cm、器高1.1cm。底部は糸切り。101は瓦器椀。復元口径15.0cm、器高5.5cm。体部は内外面ともヘラ磨き。外底には板状圧痕が見られる。102は白磁蓋。胎は淡灰白色で黒色粒が多く混じる。釉は淡緑灰色で、外面だけにかかる。103は白磁碗底部片。胎は灰白色で黒色粒が多く入る。釉は白色で、高台部分を除き施される。外面体部下半には沈線が2条巡る。見込みには円形状の目跡がある。104は天目碗。胎は褐色で黒色粒、白色粒が少量入る。釉は黒色で外面体部下半まで施す。105は褐釉陶器壺。



第28図　SE0172・0195出土遺物実測図（1/3）

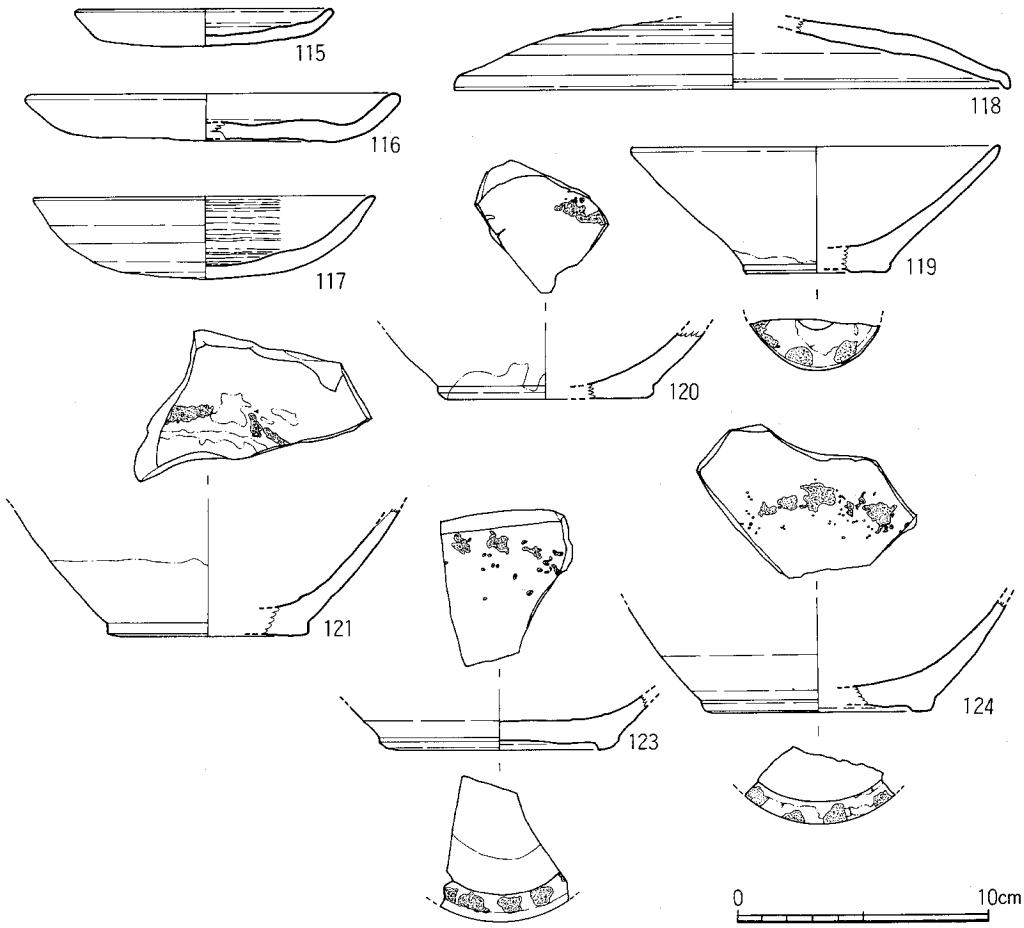


第29図　SE0208出土遺物実測図（1/3）

口縁は肥厚し、屈曲する。肩部には沈線が巡る。胎は灰褐色で黒色粒が多く入る。釉は緑褐色あるいは褐色で全面に施す。

SE0208出土遺物（第29図106～114）　106は土師器丸底杯。口径14.8cm、器高4.1cm。底部には刷毛目状の圧痕が残る。ナデ調整。107は須恵器椀。高台は低く、体部は内湾気味に外傾する。口径14.6cm、器高5.2cm。108・109は白磁碗Ⅳ類。釉は108が灰白色、109が淡灰緑色。109の外底には砂目跡らしきものが見られる。110は白磁皿。底部はやや上げ底、体部は内湾気味に立ち上がる。見込みには沈線を巡らせ、また内面に片彫の花文を配する。釉は淡灰白色。111は越州窯系青磁杯。内面に片切彫の花文を入れる。釉は褐色。112は口径10.2cm、器高4.6cmの全体に丸みを帯びた青磁小碗である。胎は淡褐色で砂粒が少量入る。釉はオリーブ色で高台まで施す。113は天目碗。胎は灰色、釉は黒色と茶色で体部下半までかかる。114は青白磁合子蓋。天井部に鳳凰文を型押しする。胎は白色、釉はガラス質の青白色で天井部だけに施す。

SE0233出土遺物（第30図115～124）　115～118は土師器。115は小皿。口径9.9cm、器高1.5cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。116は杯。口径14.3cm、器高1.9cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。117は丸底杯。口径13.5cm、器高3.3cm。底部は回転ヘラ削り、内面はヘラ磨き、外面は横ナデ。118は蓋。口縁は短く立つ。天井部は回転ヘラ削り、他はヘラ磨き調整。口径22.0cm。119～124は越州窯系青磁碗。119はⅠ類で蛇の目高台をもつ。釉はオリーブ色。畳付には



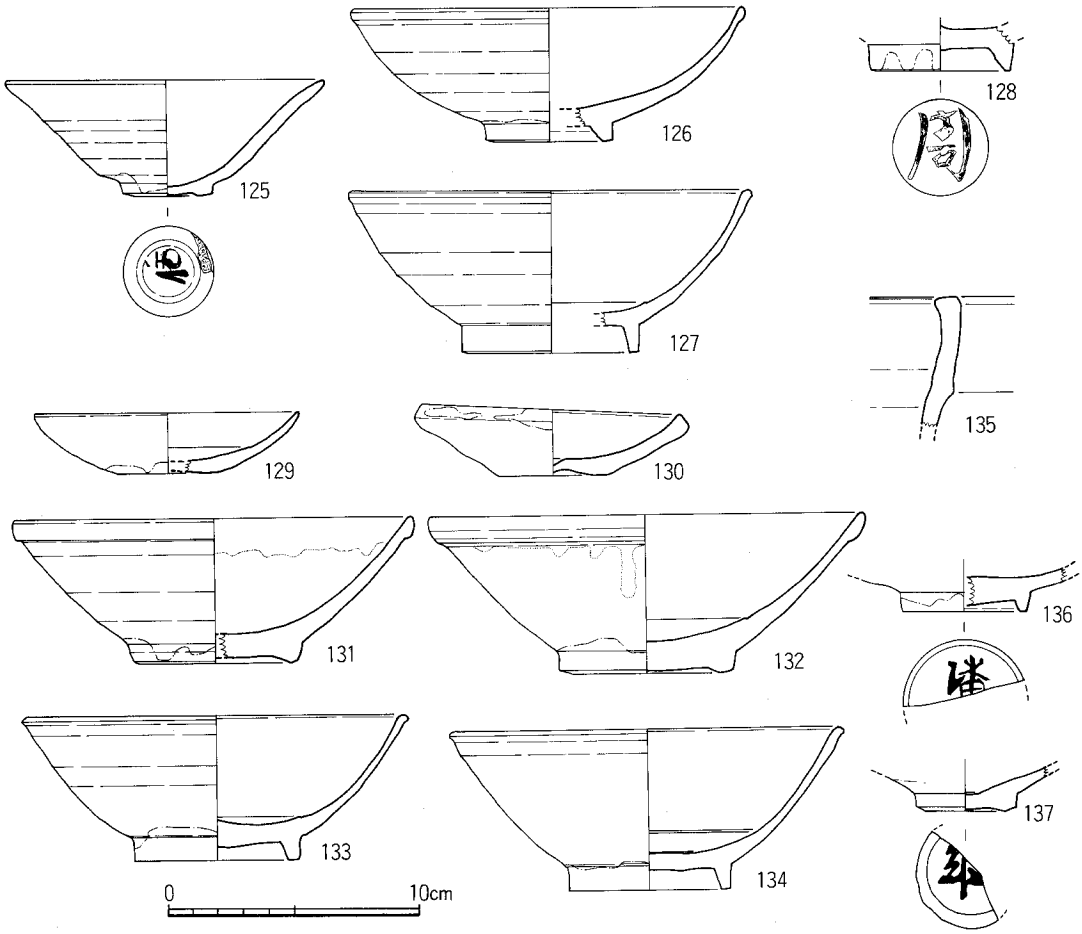
第30図　SE0233出土遺物実測図（1/3）

目跡がある。120～124はⅡ類。120・121は少し上げ底の円盤状の底部で外底は露胎。見込みに目跡がある。123・124は低い輪状高台をもつ。目跡は見込みと畳付にあり、釉は全面に施す。

SE0280出土遺物（第31図125）　口縁が大きく開く天目碗である。胎は灰色、釉は黒色で高台直上まで施す。ただ口縁端部は内外面とも掻き取り露胎となる。外底には墨書がある。

SE0302出土遺物（第31図126～130）　126～129は白磁。126は碗Ⅱ類。127・128は碗Ⅴ類。いずれも高台付近まで釉をかける。128の外底には墨書がある。129は平底の皿。見込みには浅い段がつく。釉は淡灰緑色で体部下半までかかる。130は黒褐釉陶器皿。上げ底で、口縁は外に肥厚する。胎は茶褐色で、砂粒が多い。口縁外面と上げ底部分だけ露胎。内面には重ね焼きの跡がある。口径10.2cm、器高2.7cmの完形品。

SE0347出土遺物（第31図131～135）　131～134は白磁。131・132は碗Ⅳ類。132は見込みに沈線を巡らす。釉はともに高台付近まで施す。133・134は碗Ⅴ類。ともに見込みに沈線を巡らす。

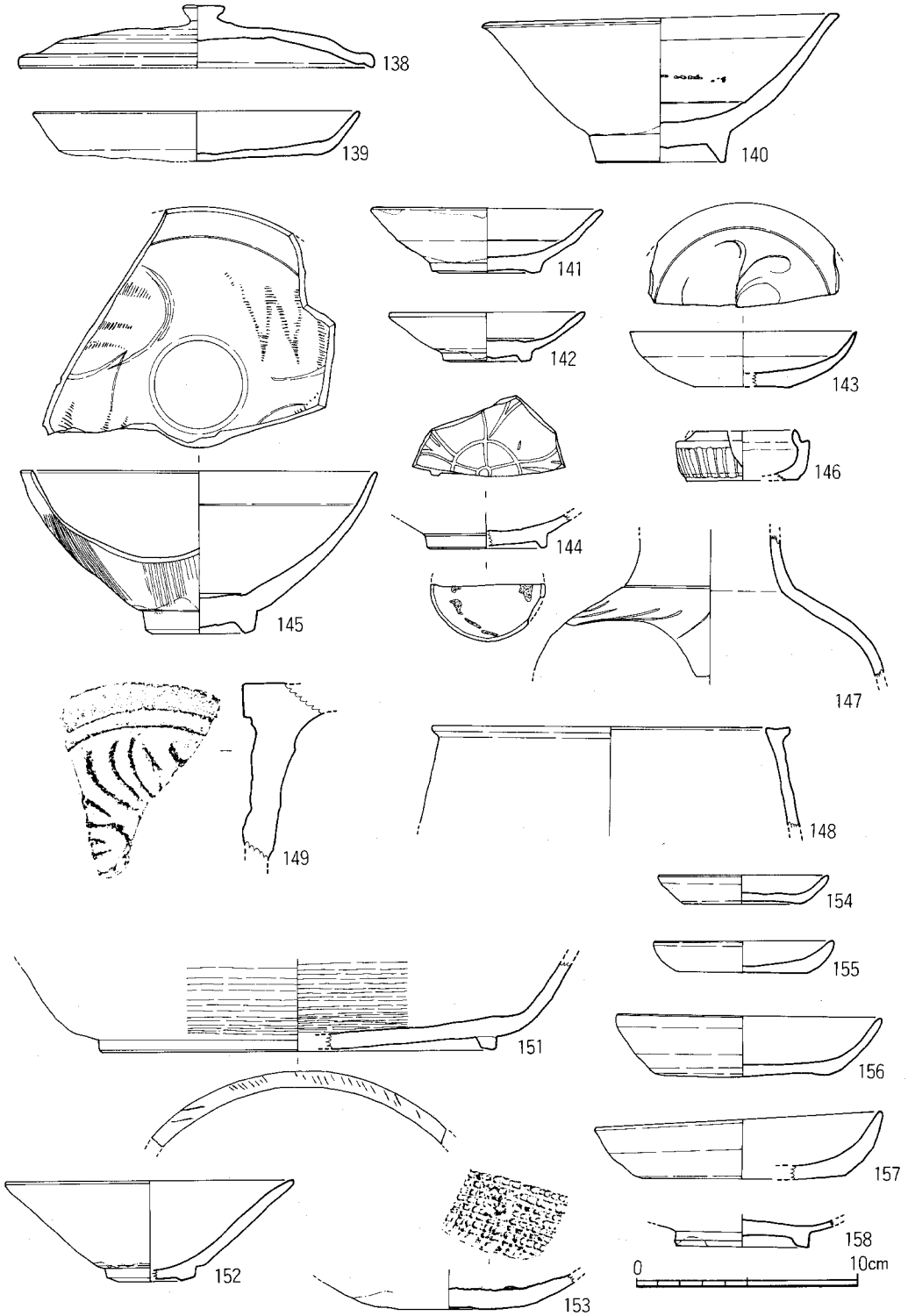


第31図　SE0280・0302・0347・0401出土遺物実測図（1/3）

135は直立する口縁をもつ陶器鉢。胎は砂粒が多くしまりがない。釉は黄緑を帯びた黒色で、口縁上面およびその直下の内外面を除き施す。口縁上面には目跡がある。

SE0401出土遺物（第31図136・137）　白磁。136は碗で、見込みには櫛描文を入れる。釉は淡黄褐色で、高台付近までかかる。137は小碗。小さな見込みには沈線が巡る。釉は青灰色のガラス質で、体部下半まで施す。ともに外底には墨書が見られる。

SE0402出土遺物（第32図138～149）　138・139は須恵器。138はつまみがある蓋で、口縁部は丸みをもつ。天井部はヘラ削り。139は皿。体部の外傾が大きい。底部はヘラ削り。140～143は白磁。140は碗Ⅴ類。内面上位と見込みに沈線を巡らす。釉は淡灰色で高台直上まで施す。内面に重ね焼きの跡が残る。141は高台付の皿。口縁端部は丸くおさめ、見込みには沈線を巡らす。142は高台付の皿。見込み部分の釉を輪状に掻き取る。143は平底の皿。内面中位には沈線が巡り、見込みには草花文様を彫る。144は越州窯系青磁碗。見込みには片切彫の花文を刻む。釉は



第32図　SE0402・0405・0408出土遺物実測図（1/3）

緑味を帯びた褐色で全面に施す。見込みと畳付に目跡がみられる。145は同安窯系青磁碗Ⅰ類。内面上位に沈線、見込みとの境に段を作る。内外面に施釉する。146は青白磁の合子。受部と外底は露胎となる。147は褐釉陶器の壺。頸部と体部の境には沈線を巡らせ、体部上位には片彫の線を放射状に配する。胎は褐色で砂粒が多い。施釉は残存部全面にわたる。148は黒褐色釉の陶器。体部は内傾し、口縁端は小さな逆L字状になる。胎には砂粒が多く、釉は口縁から内面部分のみ施す。行平か。149は軒丸瓦。内区と外区の間に界線を入れ、内区に草花文を施す。

SE0405出土遺物（第32図151～153）　151は土師器大鉢。底部は回転ヘラ削り、体部は内外面ともヘラ磨き。畳付にはヘラによる擦り跡がみられる。152は天目碗。体部は大きく外傾する。釉は黒色で高台直上までかかる。153は瀬戸焼きのおろし皿。底部は糸切り。胎は灰色、釉は淡緑褐色で外底を除き施す。内底には目跡が見られる。

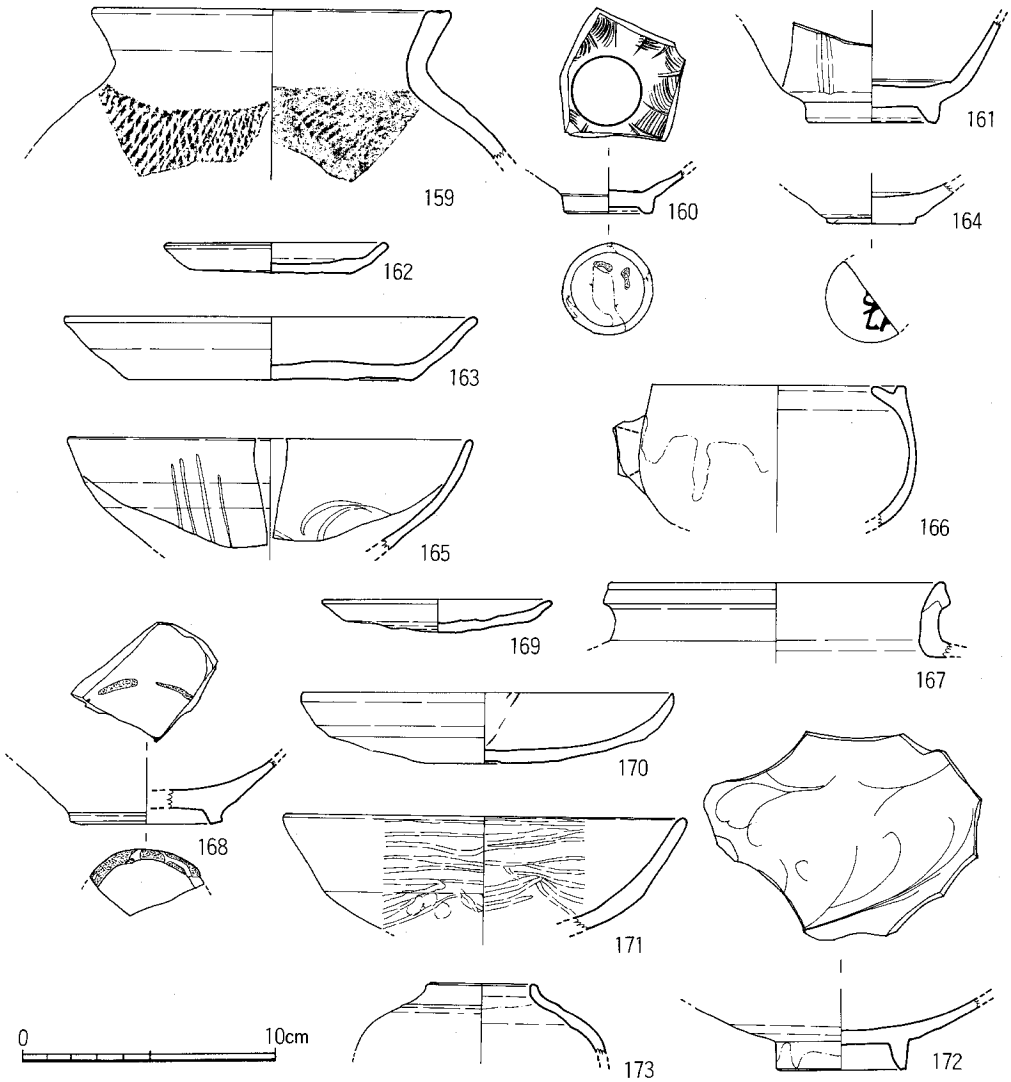
SE0408出土遺物（第32図154～158）　154～157は土師器。154・155は小皿で、口径7.6～7.9cm、器高1.3～1.5cm。底部は糸切りで、155には板状圧痕がある。156・157は杯。口径11.8～12.8cm、器高2.7cm。底部は糸切り。158は緑釉陶器椀片。胎は灰黒色で、細かい白色粒が混じる。釉は暗緑色で、内面及び外面高台部までかかる。焼成は良好。

SE0411出土遺物（第33図159～161）　159は須恵器甕。口縁は屈曲し上面がややくぼむ。外面は平行叩き、内面には当て具痕が残る。160は輪状高台をもつ青磁小碗。見込みには沈線を巡らせ、また体部内面にはヘラと櫛描の花文を施す。釉はオリーブ色でガラス質。畳付の一部だけが露胎である。外底には目跡がある。161は青白磁碗。見込みには沈線が巡り、外面には縦の刻文を入れる。釉は淡青白色で、高台畳付まで施す。

SE0420出土遺物（第33図162～167）　162は土師器小皿。口径8.6cm、器高1.2cm。底部は糸切りで板状圧痕がある。口縁内側には煤が付着する。163は土師器杯。口径16.2cm、器高2.5cm。底部は糸切りで板状圧痕がある。164は白磁皿Ⅵ類。見込みに段を作る。釉は淡灰色。外底には墨書がある。165は同安窯系青磁碗Ⅲ類。体部外面にはヘラ状の施文具で縦線を入れる。内面も片彫の花文を施す。釉は暗いオリーブ色。166は褐釉陶器の行平。把手の痕がわずかに残る。受け部上面から内面に黒褐色～暗褐色の釉がかかる。167は備前焼壺。暗褐色を呈する。

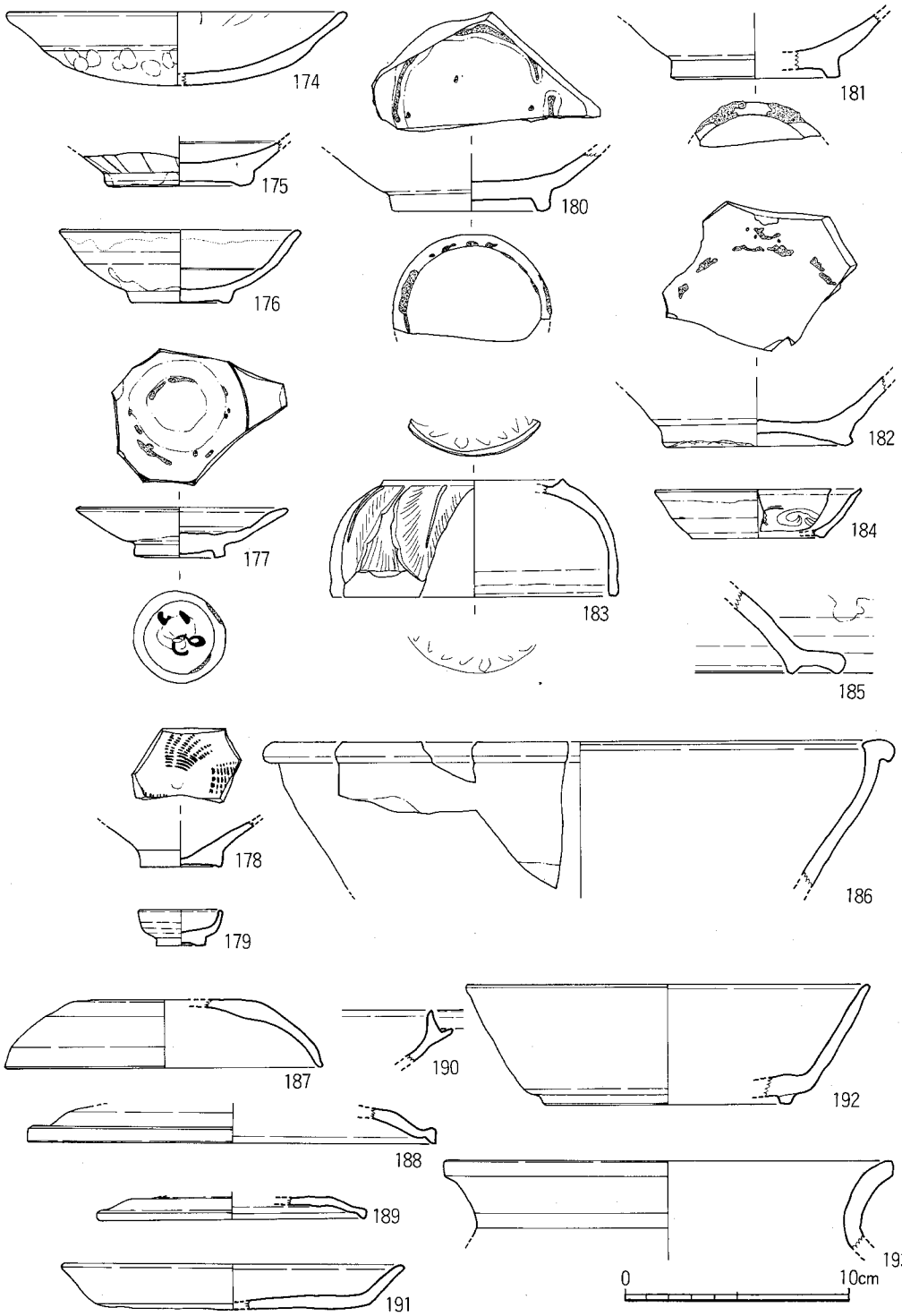
SE0421出土遺物（第33図168）　輪状高台をもつ越州窯系青磁碗。釉はオリーブ色で全面に施す。見込みと畳付に目跡が見られる。

SE0423出土遺物（第33図169～173）　169は土師器小皿。口径8.8cm、器高1.3cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。170は土師器丸底杯。口径14.7cm、器高2.8cm。底部はヘラ切り、板状圧痕。内面にはコテ当て痕が見られる。171は土師器椀。体部中位で屈曲する。内外面ともヘラ磨き調整。淡褐色。172は潮州窯系の白磁碗。内面には片切り彫りの花文を施す。胎は乳白色で黒色粒が少量入る。釉は白みを帯びた淡褐色。173は褐釉陶器の小壺。胎は精良で白みを帯びた淡褐色。釉は暗褐色で外面から口縁部内側までかかるが、口縁上端部だけは掻き取る。

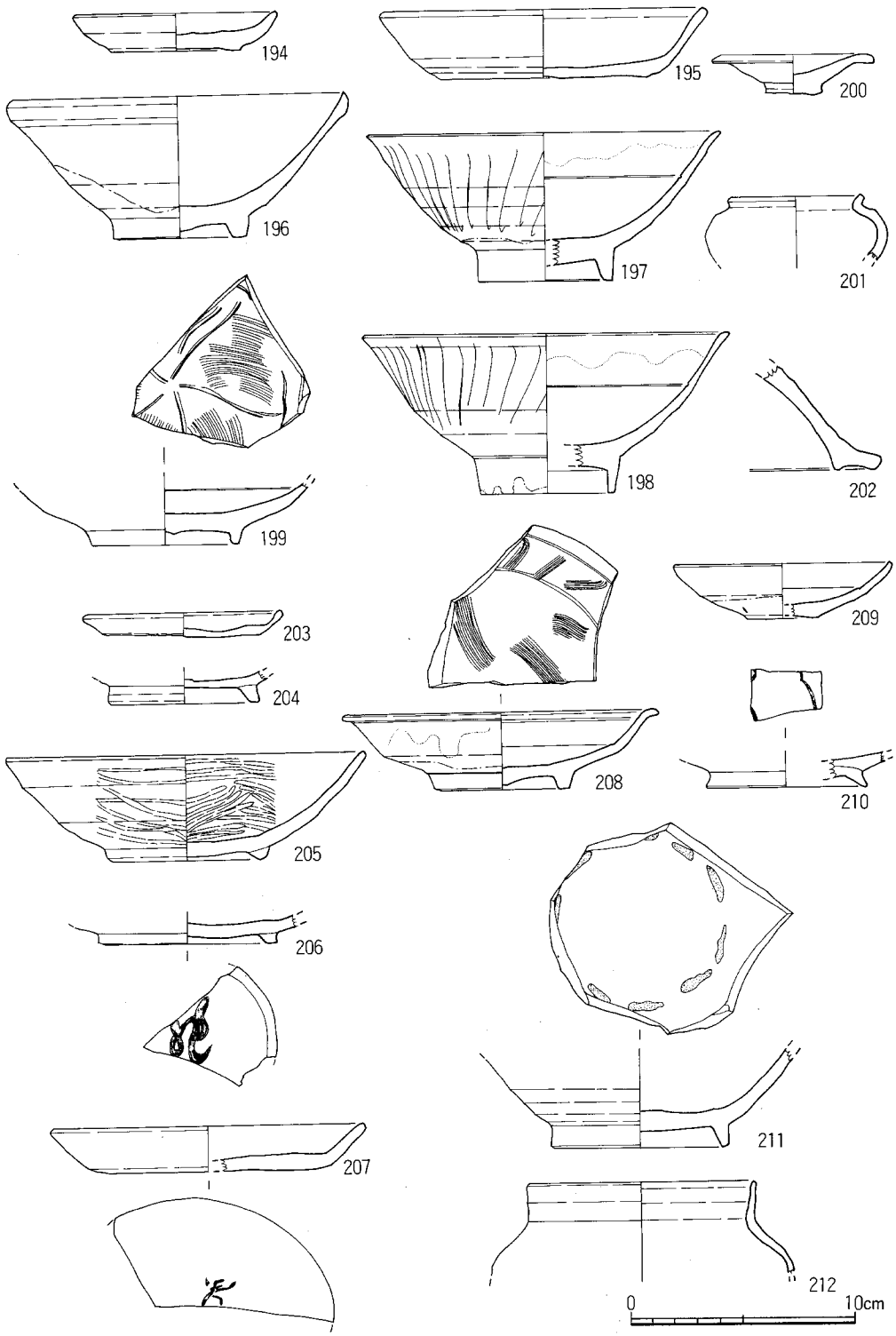


第33図　SE0411・0420・0421・0423出土遺物実測図（1/3）

SE0428出土遺物（第34図174～186）　174は土師器丸底杯。口径14.8cm、器高3.3cm。底部はヘラ切りで板状圧痕がある。内面にはコテ当て痕が残る。175～179は白磁。175は碗Ⅳ類で、見込みに沈線を巡らす。体部外面にはヘラ削り痕が明瞭である。176は皿。見込みに沈線を巡らす。釉は淡灰白色で、高台直上までかかる。口縁部には釉溜りが見られる。177は高台付皿。内面中位に沈線を入れ、見込みの釉を輪状に掻き取る。釉は灰白色。見込みと高台畳付には目跡がある。また外底に墨書が見られる。178は小碗。底部は小さな円盤状で、体部は大きく開きそ



第34図　SE0428・0464出土遺物実測図（1/3）



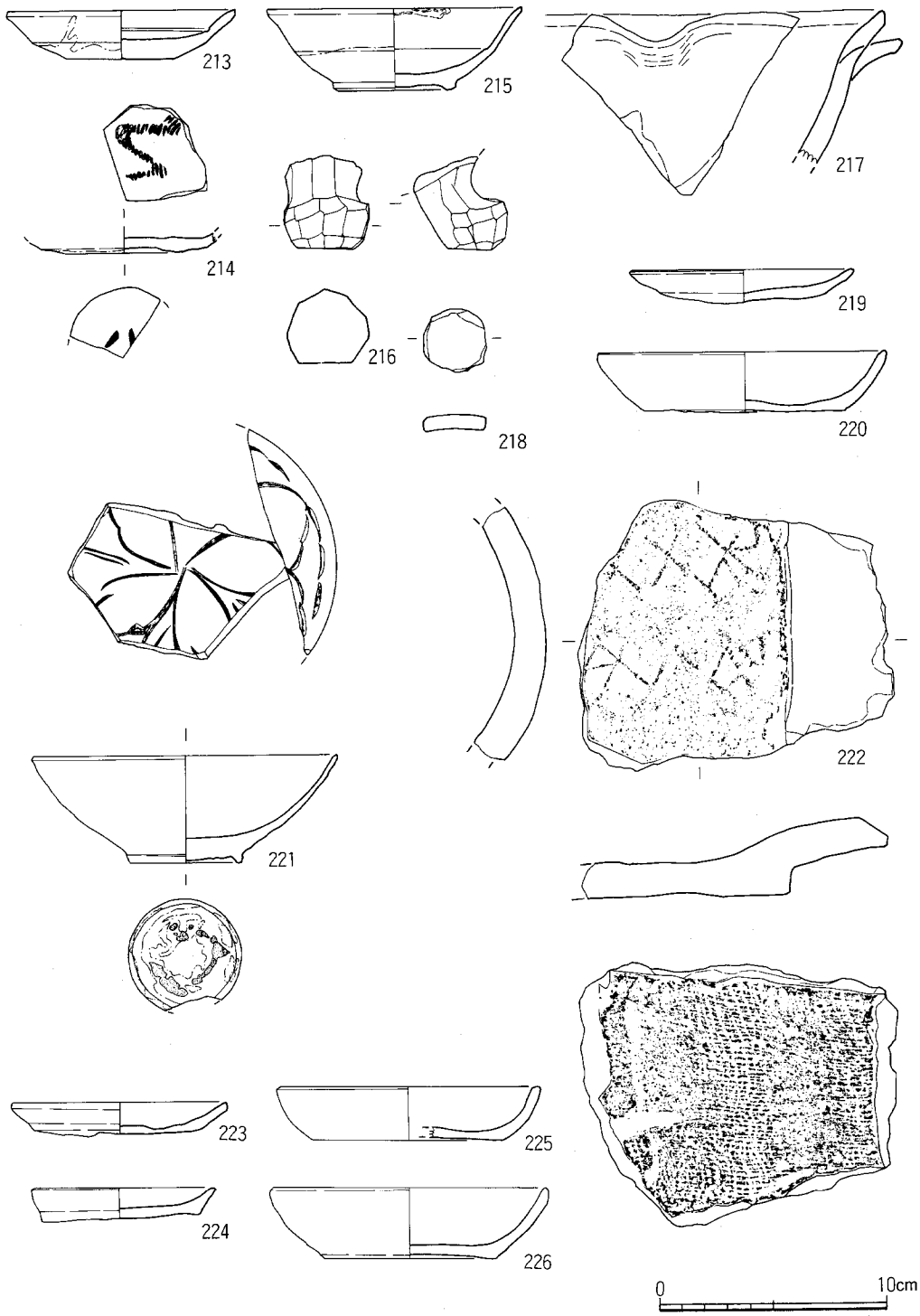
第35図　SE0468・0478出土遺物実測図（1/3）

うである。見込みには櫛描の文様を入れる。釉は淡灰色で、外底以外に施す。179はミニチュアの碗。釉は淡灰色で高台外面まで施す。180～182は越州窯系青磁碗。180・181は輪状高台をもつ。釉は褐～暗褐色で全面に施す。180は見込みと畳付に、また181は畳付に目跡がある。182は底部は円盤状で上げ底となる。釉は黄みを帯びた淡灰色で、残存部外面には施釉してない。見込みには目跡がある。183は青磁香炉。体部上位は丸みをもち、口縁は直立する。口縁内側には浅い段を作る。外面体部と天井部の間には小さな突帯が巡り、天井には透かし彫りを行う。体部外面には片彫と毛彫を組合せた花文を描く。胎は明灰白色で精良。釉は青みを帯びた淡緑色で、口縁端面とその内側の段までを除いて施す。184は口禿の青白磁皿。体部内面には花文を施す。胎は精良で白色を呈する。釉は淡青白色で、全面に施した後口縁内外面の釉を掻き取る。185は褐釉陶器の蓋。黒褐色の釉は天井部にだけかかり、他は露胎。胎は暗褐色で砂粒が多い。186は陶器鉢。胎は灰色で砂粒が少量入る。釉は黄褐色を主とし、内面から外面体部中位まで施す。

SE0464出土遺物（第34図187～193）　すべて須恵器である。187～189は蓋。187の天井部は回転ヘラ削り。口縁端部は外傾し丸くおさめる。188は口縁端部の断面が三角形となる。189は天井部のヘラ削りにより体部との境は明瞭な稜を作る。端部はわずかに三角形状となる。190は受部のある杯身細片。191は皿。体部の外傾は大きい。底部はヘラ削り、他は横ナデ調整。192は椀。高台は低い。残存部は横ナデ調整。193は甕片。残存部は横ナデ調整。

SE0468出土遺物（第35図194～202）　194・195は土師器。194は小皿で、口径9.1cm、器高1.7cmをはかる。底部は糸切り。195は杯。口径14.2cm、器高3.1cm。底部は糸切りで、板状圧痕がある。196～200は白磁。196は碗Ⅳ類。高台は比較的高く削り出す。釉は乳白色。197・198は碗Ⅴ類。内面中位に沈線を巡らせ、外面にはヘラによる縦線が入る。釉は灰白色。口縁内側には釉溜りができる。199は細く低い高台の碗。見込みには沈線が巡り、ヘラと櫛目の文様を入れる。釉は青みを帯びた灰白色で、畳付まで施す。200は蓋。釉は青みを帯びた灰白色で、天井部には施さない。201は陶器小壺。偏球形の体部から口縁部が外反し、丸くおさめる。胎土には砂粒が少なく、淡褐色を呈する。　202は褐釉陶器蓋。胎には砂粒が多い。釉は茶褐色で、天井部だけに施す。

SE0478出土遺物（第35図203～212）　203は土師器小皿。口径8.6cm、器高1.1cm。底部は糸切りで、板状圧痕がある。204は黒色土器B類椀。残存部内面はヘラ磨き。205・206は瓦器椀。高台断面は小さな三角形あるいは台形。体部は内外面ともヘラ磨き。206の外底には墨書が見られる。207は須恵器杯。底部はヘラ切りで、墨書がある。208は高台をもつ白磁皿。体部は屈曲し、口縁部は横に引き出す。内面上位と見込みに沈線があり、櫛描きの文様を施す。釉は灰色。209も白磁皿。底部はわずかに上げ底で、体部は内湾気味である。内面中位には沈線が巡る。釉は淡緑灰色。210は越州窯系青磁杯。高台は尖り気味で、外方に開く。見込みには片切り彫りの花文がある。釉は緑みを帯びた褐色で、全面に施す。211は輪状高台をもつ越州窯系青磁碗。胎は灰褐色で比較的精良。釉は褐色で、全面に施す。見込みと畳付に目跡が見られる。212は須恵器



第36図　SE0483・0490・0494・0507・0509・0521出土遺物実測図（1/3）

壺。球形の体部から口縁が直立する。体部上位には灰釉がかかる。

SE0483出土遺物（第36図213・214）　213は白磁皿。平底で、体部は屈曲する。その屈曲部の内面に沈線を巡らす。釉は緑みを帯びた灰色で、外面屈曲部付近までかかる。外底に墨書らしきものがある。214は同安窯系青磁皿。見込みには櫛描文を入れる。釉は淡いオリーブ色で、外底以外にかかる。外底には墨書が見られる。

SE0490出土遺物（第36図215～218）　215は高台付の白磁皿。高台は低く、内面中位には段を作る。釉は淡灰色で、外面中位までかかる。216は須恵質の獣脚である。ヘラ削りで成形する。灰黒色。217は須恵質の片口鉢。胎土には砂粒が多く、灰色を呈する。218は瓦器椀を円形状に成形したもの。径2.7cm、厚さ0.6cm。淡灰黒色。

SE0494出土遺物（第36図219・220）　土師器である。219は小皿。口径9.6cm、器高1.4cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕がある。220は杯。口径12.5cm、器高2.7cm。底部は糸切り。

SE0507出土遺物（第36図221・222）　221は越州窯系青磁碗。高台は細く低い。内面には片切り彫りで花文を描く。胎は灰色で砂粒が入る。釉は緑みを帯びた灰色で、全面に施す。外底に目跡が見られる。222は丸瓦。外面には叩き、内面には布目が見られる。焼きは良く灰黒色。

SE0509出土遺物（第36図223）　土師器小皿。口径9.3cm、器高1.3cm。底部はヘラ切りで板状圧痕がある。

SE0521出土遺物（第36図224～226）　土師器である。224は小皿で、口径7.7cm、器高1.4cm。底部は糸切りで板状圧痕がある。225・226は杯。口径11.2～11.9cm、器高2.4～3.1cm。底部は糸切りで板状圧痕がある。

4）土坑

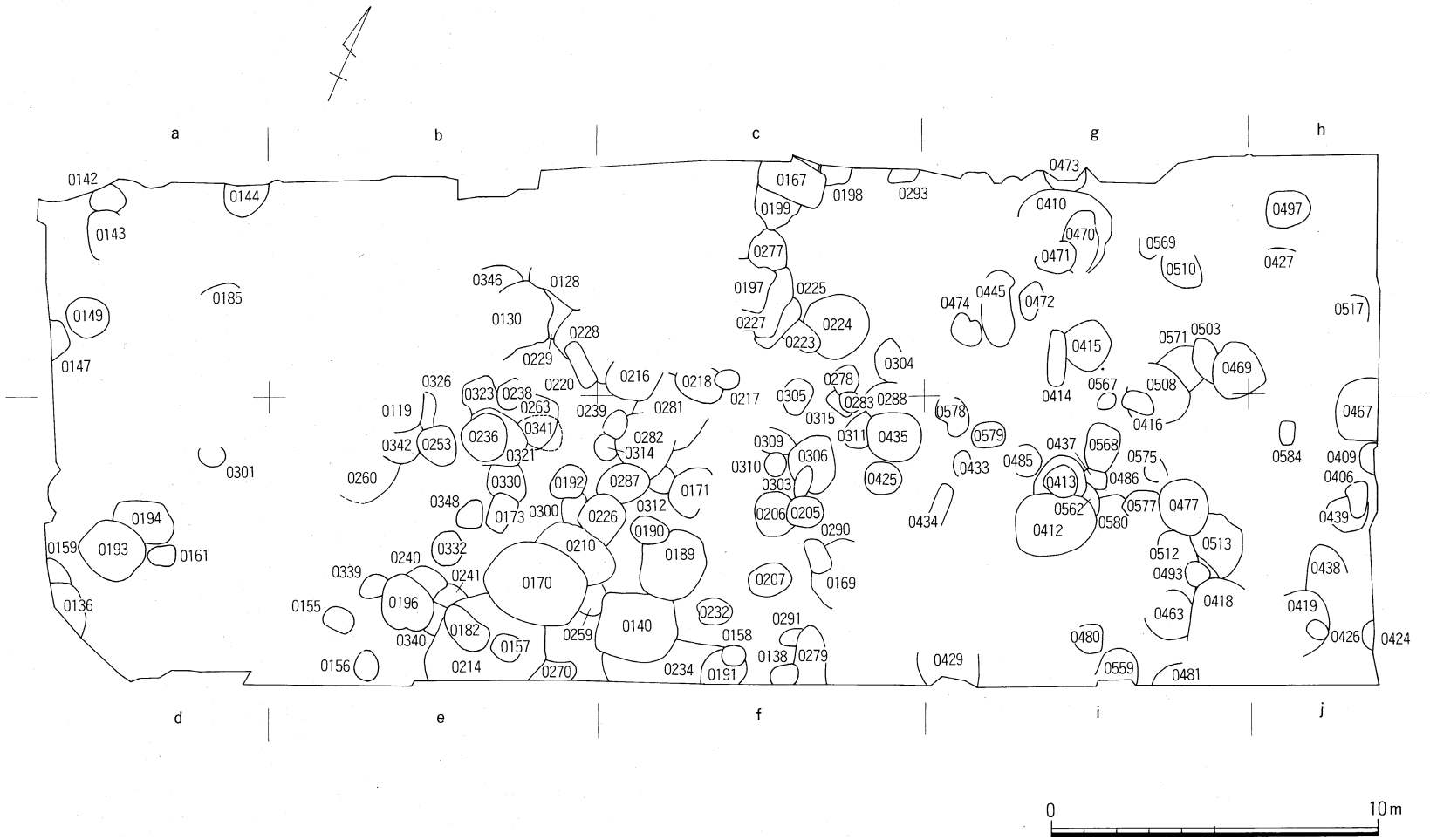
今回の調査では150基の土坑を検出した。多くは塵穴と考えられるが、形態、規模も多様で、覆土もSK0419などの様に焼土や炭化物を多量に含むものもあった。ほとんどの土坑から多種の遺物が出土したが、特にSK0281の大量の陶磁器類の出土は圧巻であった。

SK0119（第38図）　e区。円形状の土坑。大半をSE0103に切られ、東側がかろうじて残る。復元径は0.80m、深さは114cm。土師器皿・杯（糸切り）、白磁などが出土。

SK0128　b区。西北－東南に長軸をとる長方形土坑。東側は上面遺構に切られ、長さは不明。幅1.00m、深さ20cm。覆土は暗灰褐色粘質砂。SE0135、SK0130、SK0229などを切る。

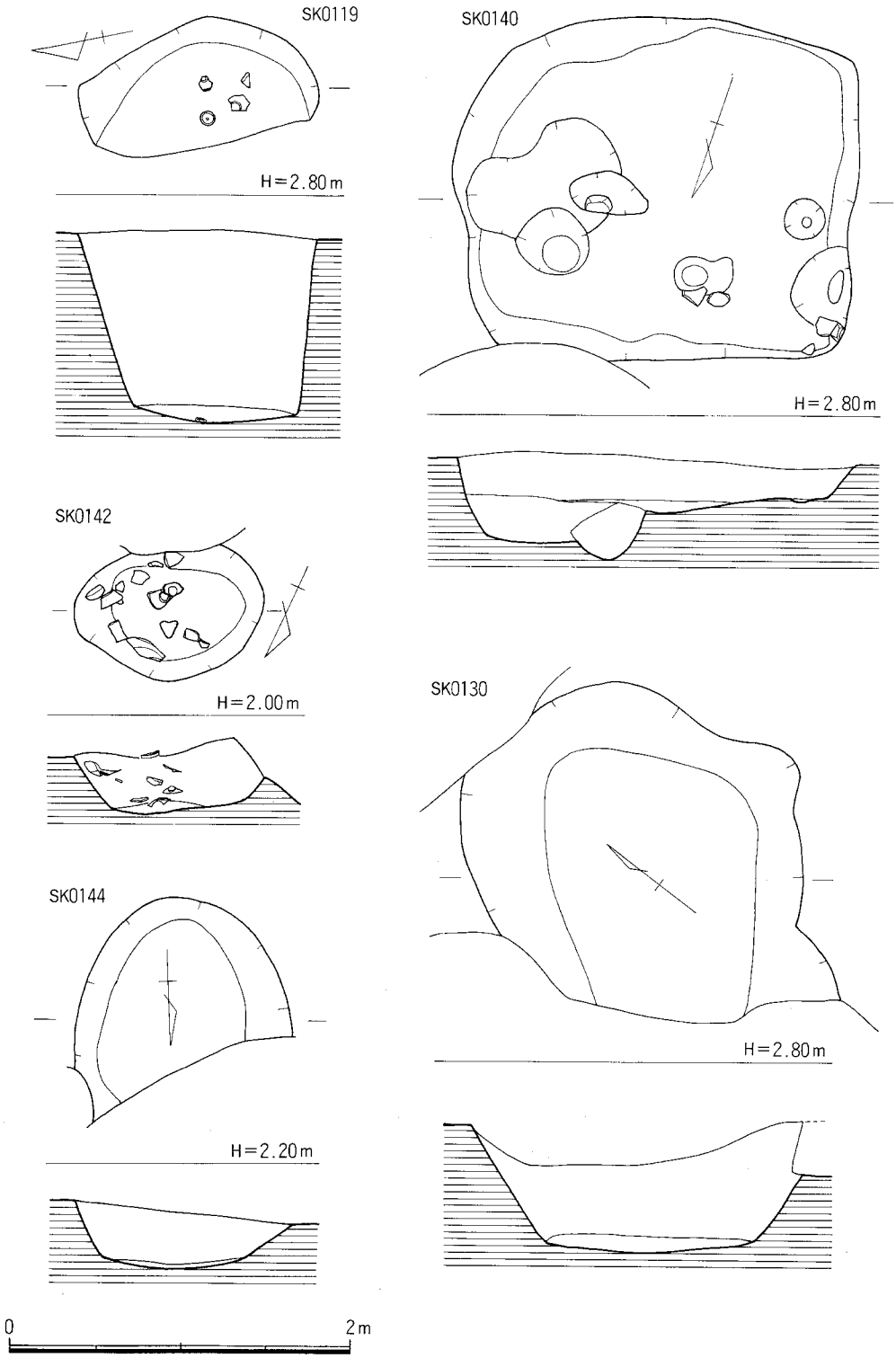
SK0130（第38図）　b区。ほぼ東西に長軸をとる長方形土坑。西側をSE0208に切られ長さは不明。幅1.90m、深さ75cm。底面は平坦である。SK0229、SK0346を切る。土師器皿・杯（糸切り）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0136　d区西南隅。西側大半が調査区外となるが、復元径1.00m程度の円形状の土坑である。深さは45cm、底面は西側に傾斜する。覆土は灰黒色粘質土。SK0159を切る。土師器杯（糸

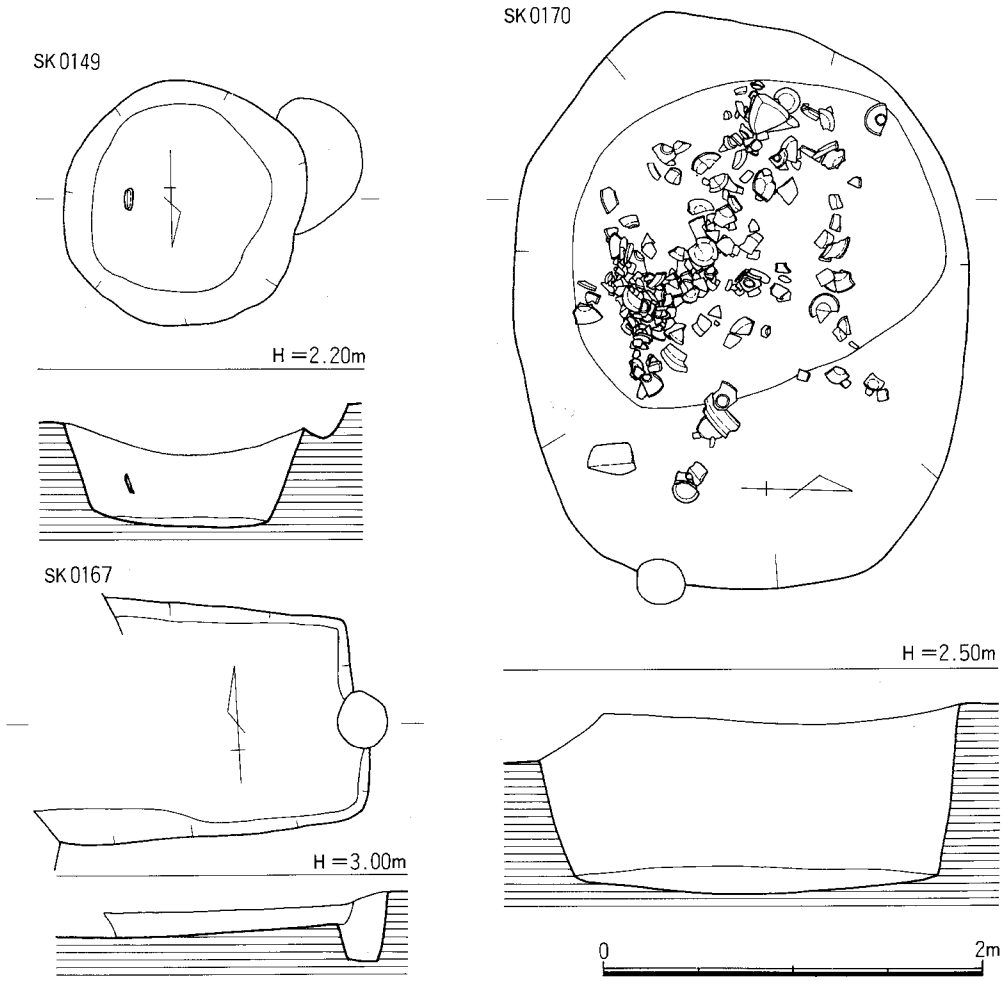


0　10m

第37図　第Ⅲ面土坑配置略図（1/200）



第38図　SK0119・0130・0140・0142・0144実測図（1/40）



第39図　SK0149・0167・0170実測図（1/40）

切り）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0138　f区南端。楕円形状の土坑で、南側の一部が調査区外となる。東西長0.90m、深さ19cm。土師器杯（糸切り）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0140（第38図、図版21）　f区。東西2.40m、南北2.04mの長方形状の土坑。東側の周壁は丸みをもつ。底面はほぼ平坦で、深さは30cm。底面東側に深さ25cmの不整形の掘り込みがある。覆土は灰黒色粘質土が主である。SK0259を切り、SK0189に切られる。

SK0142（第38図、図版21）　a区西北端。長軸を東西にとる楕円形土坑。長さ2.26m、幅は1.60m前後、深さは35cm。遺物は少量だが上面から底面まで出土した。SE0295を切り、SK0143に切られる。土師器杯、黒色土器、白磁、中国陶器などが出土。

SK0143　a区。南北に長軸をとる楕円形状の土坑。東側の大半を破壊されるが、南北1.40m、

東西1.10m程度の規模であろう。深さは34cm。SE0295、SK0142、SD0141を切る。土師器杯、黒色土器、白磁、中国陶器などが出土。

SK0144（第38図）　a区。南北に長軸をとる楕円形状の土坑。北側が調査区外にかかる。東西幅1.30m、深さは41cm。底面は中央が深い。覆土は黒褐色粘質土。東側でSE0145を切る。土師器杯、白磁、中国陶器などが少量出土。

SK0147　a区西端。径1.20m、深さ50cmの円形状の土坑。西側大半は調査区外となる。底面は径0.45mの円形で平坦。SD0141を切る。土師器杯（糸切り）、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0149（第39図）　a区。径1.20m、深さ53cmの土坑。底面はほぼ平坦で、覆土には炭化物が非常に多い。SD0141を切る。

SK0155　e区。径0.90m、深さ50cmの円形状の小土坑。底面は径0.35mの円形となる。南側を上面の遺構に切られる。覆土は黒褐色砂。土師器杯、白磁などが少量出土。

SK0156　e区。長軸を南北にとる楕円形の小土坑。長さ1.00m、幅0.74m、深さ105cm。底面は径0.40mの円形である。覆土は黒褐色砂。土師器杯（糸切り）、白磁などが少量出土。

SK0157　e区。長軸を東西にとる楕円形状の小土坑。長さ0.90m、幅0.80m、深さ102cm。底面は径0.60mの不整円形である。覆土は暗褐色粘質砂で、拳大の礫が混じる。SK0214を切る。土師器皿・杯（糸切り）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0158　f区。長軸を東西にとる楕円形状の小土坑。長さ0.70m、幅0.62m、深さ37cm。SE0233、SK0191を切る。土師器皿・杯（糸切り）、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0159　d区西南隅。円形状の土坑であるが、西側が調査区外、また南側がSK0136に切られるため平面規模は不明。底面までは21cmと浅い。土師器皿・杯（糸切り）、白磁、同安窯系青磁、中国陶器などが出土。

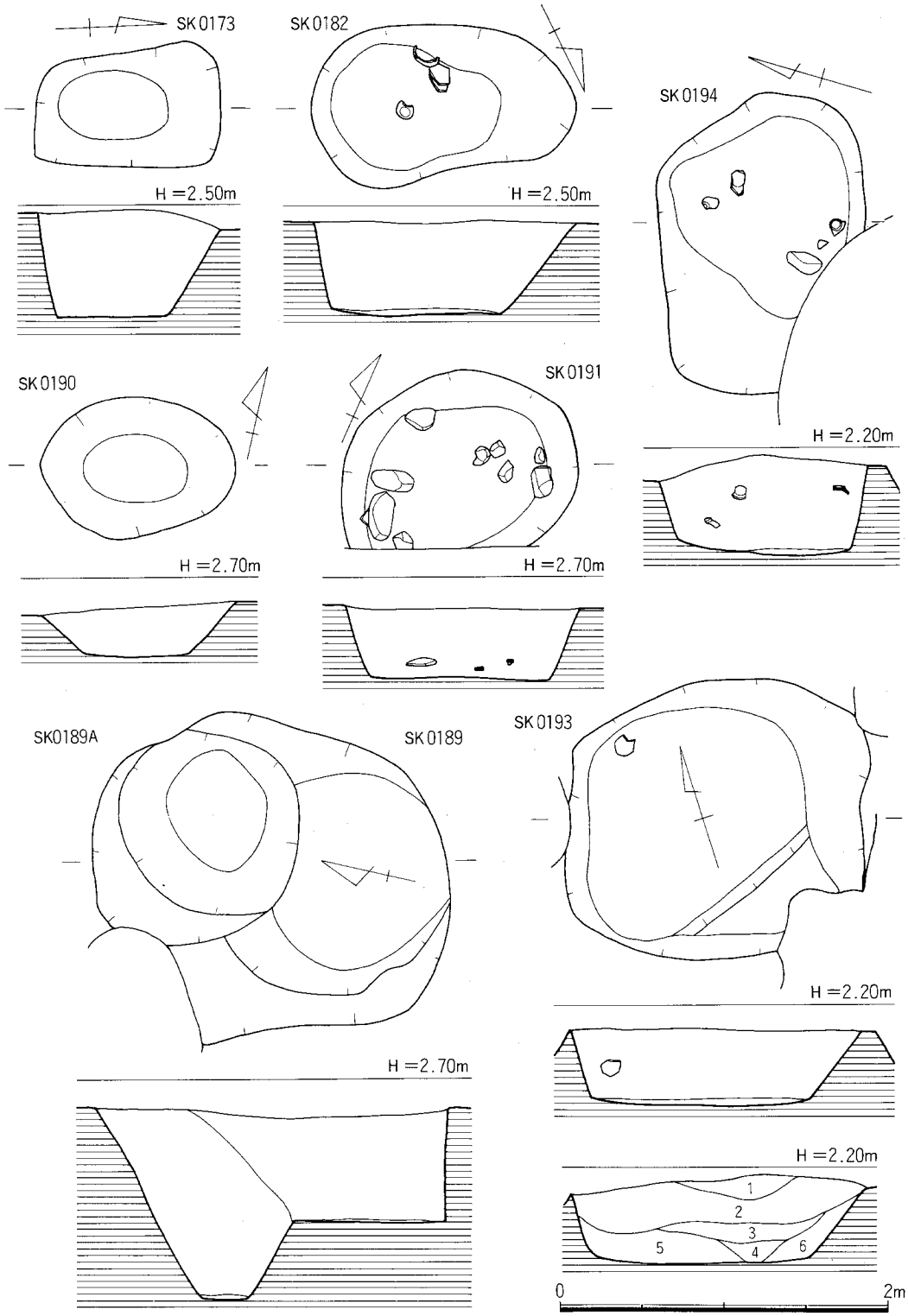
SK0161　d区。長軸を東西にとる楕円形状の小土坑。長さ0.92m、幅0.65m、深さ35cm。覆土は褐色粘質砂。SE0127を切る。土師器杯、同安窯系青磁などが少量出土。

SK0167　c区。長軸を東西にとる長方形土坑。幅1.23m、長さは現状で1.80m。深さは15cm前後と浅い。覆土は灰黒色粘質砂。SK0199、SK0198、SD0163を切る。

SK0169　f区。長軸を南北にとる楕円形の土坑。SD0139に西側大半を切られ規模は不明。南北長は2.20m前後か。深さ40～50cm。SK0290に切られる。SE0233を切る。

SK0170（第39図、図版20）　e区。長軸を東西にとる楕円形土坑。長さ3.03m、幅2.42m、深さ1.15m。壁面は東側が緩やかで、底面は掘形の西側に偏る。底面は平坦で南北に長い楕円形を呈する。陶磁器類が多量に出土したが、いずれも検出面から40cm程度の深さまでで、この土坑が廃棄された後の堆積である。SK0214、SK0259を切る。

SK0171　f区。南北に長軸をとる楕円形状の土坑。長さ1.60m、幅1.10m程度か。深さ15cm。



第40図　SK0173・0182・0189A・0189・0190・0191・0193・0194実測図（1/40）

底面南寄りに径0.45～0.50m、深さ15cmのピットがある。SE0172、SK0312などを切る。

SK0173（第40図）　e区。南北に長軸をとる隅丸長方形土坑。長さ1.13m、幅0.70m、深さ66cm。底面は平坦で楕円形を呈する。土師器皿・杯（ヘラ・糸切り混在）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0182（第40図）　e区。長軸を西北－東南にとる楕円形状の土坑。長さ1.63m、幅0.97m、深さ56cm。壁面の傾斜は西北が緩やかで、底面は掘形の東南側に偏る。底面は平坦である。覆土は上の暗灰褐色粘質砂と下の黒色粘質砂の２層。SK0214を切る。

SK0185　a区。大半を上面の遺構に切られ、北側周壁を残すだけである。平面は円形状か。深さは10cm、覆土は暗褐色砂である。須恵器、白磁、中国陶器が少量出土。

SK0189・0189A（第40図）　f区で検出した２基の土坑の切り合いである。楕円形の土坑か井戸と考え掘り下げたが、南側の底面が出た時点で２基の土坑と判明し、北側の土坑を0189Aとした。0189は東西幅1.70mの楕円形状の平面をもち、深さ70cm。壁面は比較的急で、底面は平坦である。0189Aは径1.40～1.50mの円形状。西側の壁面の傾斜が緩やかで、底面は東側に偏る。0189はSK0140を切り、0189AはSK0190に切られる。

SK0190（第40図）　f区。長軸を東西にとる楕円形土坑。長さ1.20m、幅0.88m、深さ35cm。底面は平坦である。SK0189A、SK0226を切る。

SK0191（第40図）　f区南端。長軸を東西にとる楕円形土坑である。長さ1.45m、南側は調査区外となる。深さ43cmで、底面は平坦。底から少し浮いた状態で礫がある。SK0158に切られる。土師器杯（糸切り）、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器、銅銭などが出土。

SK0192　e区。径1.00m前後の不整円形の土坑。深さ100cm。底面は東側に傾斜する。

SK0193（第40図）　d区。隅丸方形状の土坑。南北幅1.70m、深さ47cm。底面は西側に小さな段がある。覆土は１黒色粘質土、２暗灰褐色粘質土（焼土含む）、３暗灰色砂、４灰黒色粘質土に黄色砂混じり、５灰黒色粘質土。SE0127に切られ、SK0194を切る。

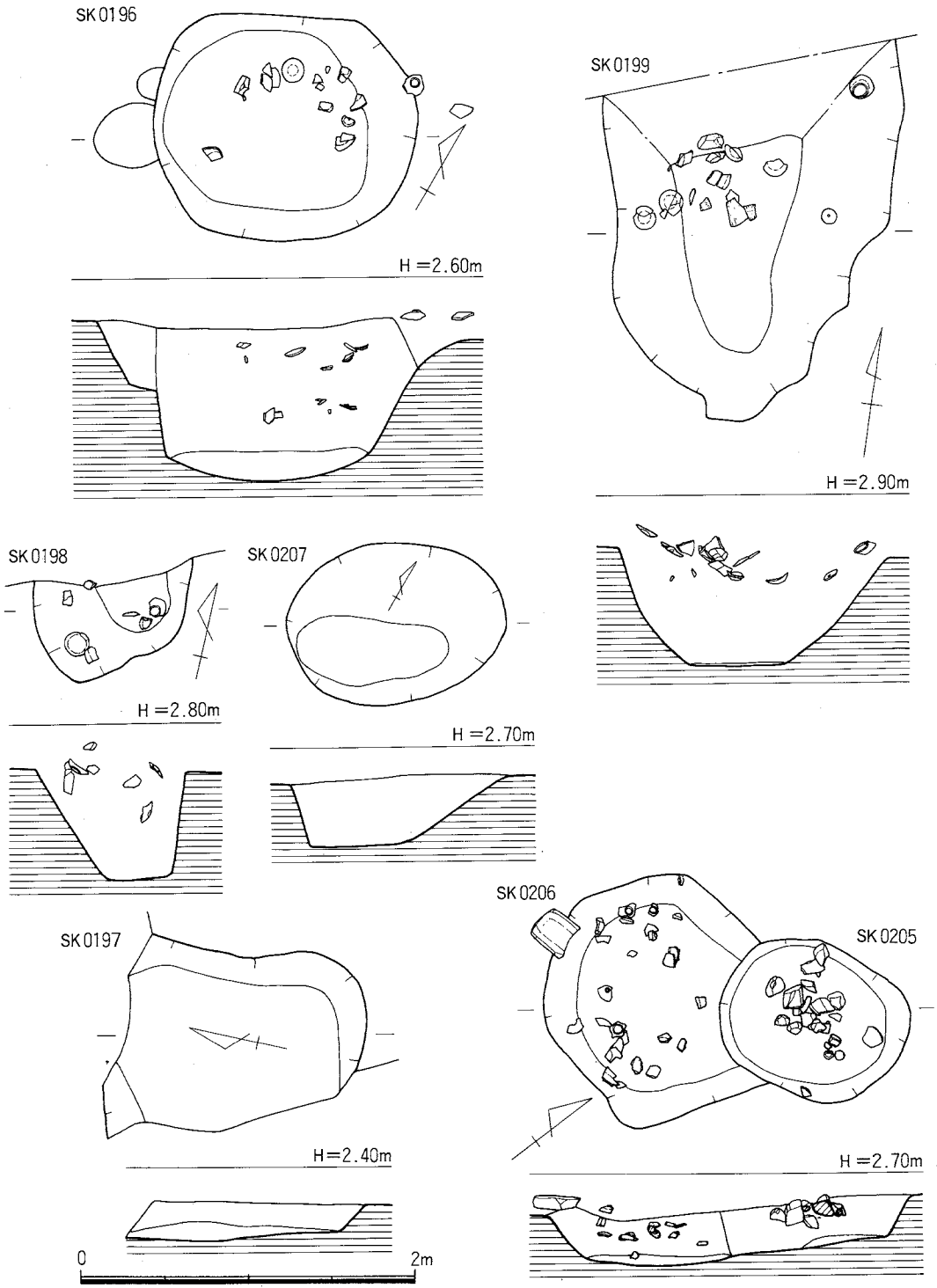
SK0194（第40図）　d区。長軸を東西にとる不整長方形の土坑。長さ1.85m、幅1.28m、深さ60cm。西側壁面の傾斜が緩やかで底面は東側に偏る。SK0193に切られ、SE0296を切る。

SK0196（第41図、図版21）　e区。長軸を西北－東南にとる楕円形土坑。長さ1.58m、幅1.36m、深さ97cm。底面は中央部が深い。SK0240を切る。

SK0197（第41図）　c区。南北に長軸を長方形状の土坑。長さ1.60m、幅は上面の遺構で破壊され不明。深さ24cm、底面はほぼ平坦である。SK0277に切られ、SE0227を切る。土師器杯（糸切り）、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0198（第41図）　c区。北側大半が調査区外にかかるが、東西幅0.95m、深さ75cmの円形状の土坑。底面は東に偏る。SK0167に切られる。SD0168を切る。

SK0199（第41図）　c区。南北に長軸とる楕円形状の土坑。幅1.63m、長さは調査区外にかか



第41図　SK0196・0197・0198・0199・0205・0206・0207実測図（1/40）

り不明。深さ70cm、東西断面はU字状を呈する。SK0277、SD0168に切られる。

SK0205（第41図、図版21）　f区。東西に長軸をとる楕円形土坑。長さ2.23m、幅1.80m、深さ30cm。底面は平坦である。上面では礫の集積が見られた。SK0206、SK0303を切る。

SK0206（第41図、図版22）　f区で検出した不整方形の土坑。東西2.85m、南北2.65m、深さ35cm。底面は平坦である。覆土は炭化物を多く含んだ暗灰褐色粘質土で、上面から底面まで遺物の出土がみられた。SK0205に切られる。

SK0207（第41図）　f区。長軸を東西にとる楕円形土坑。長さ2.32m、幅0.98m、深さ50cm。北側壁面の傾斜が緩やかで、底面は南側に偏る。SE0233を切る。土師器杯（ヘラ・糸切り混在）、黒色土器、瓦器、白磁、中国陶器などが出土。

SK0210（第42図）　e区。長軸を東西にとる隅丸長方形土坑。長さ2.30m、幅は南側をSK0170に切られ不明。深さ87cm。当初SK0170の一部として掘り下げたが、その途中で切り合いが判明した。出土遺物はSK0170北として取り上げたものである。土師器皿・杯（ヘラ・糸切り混在）、瓦器、白磁、中国陶器などが出土。

SK0214（第42図）　e区で検出した円形状の土坑。北側をSK0170が切り、また南側が調査区外にかかり全形は不明。東西幅は3.40m前後。深さ105cm。底面は径1.20m前後の不整円形で、わずかに中央が深い。

SK0216　c区で検出した方形状の土坑である。東西幅1.50m、深さ54cm。底面は平坦である。覆土は炭化物を含む暗灰色粘質砂。SK0228、SK0281を切る。土師器杯（ヘラ・糸切り混在）、瓦器、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0217　c区。長軸をほぼ東西にとる楕円形の小土坑。長さ0.80m、幅0.60m、深さ38cm。底面は西側にやや傾斜する。覆土は暗灰褐色粘質砂。SK0218を切る。土師器杯（糸切り）、白磁などが少量出土。

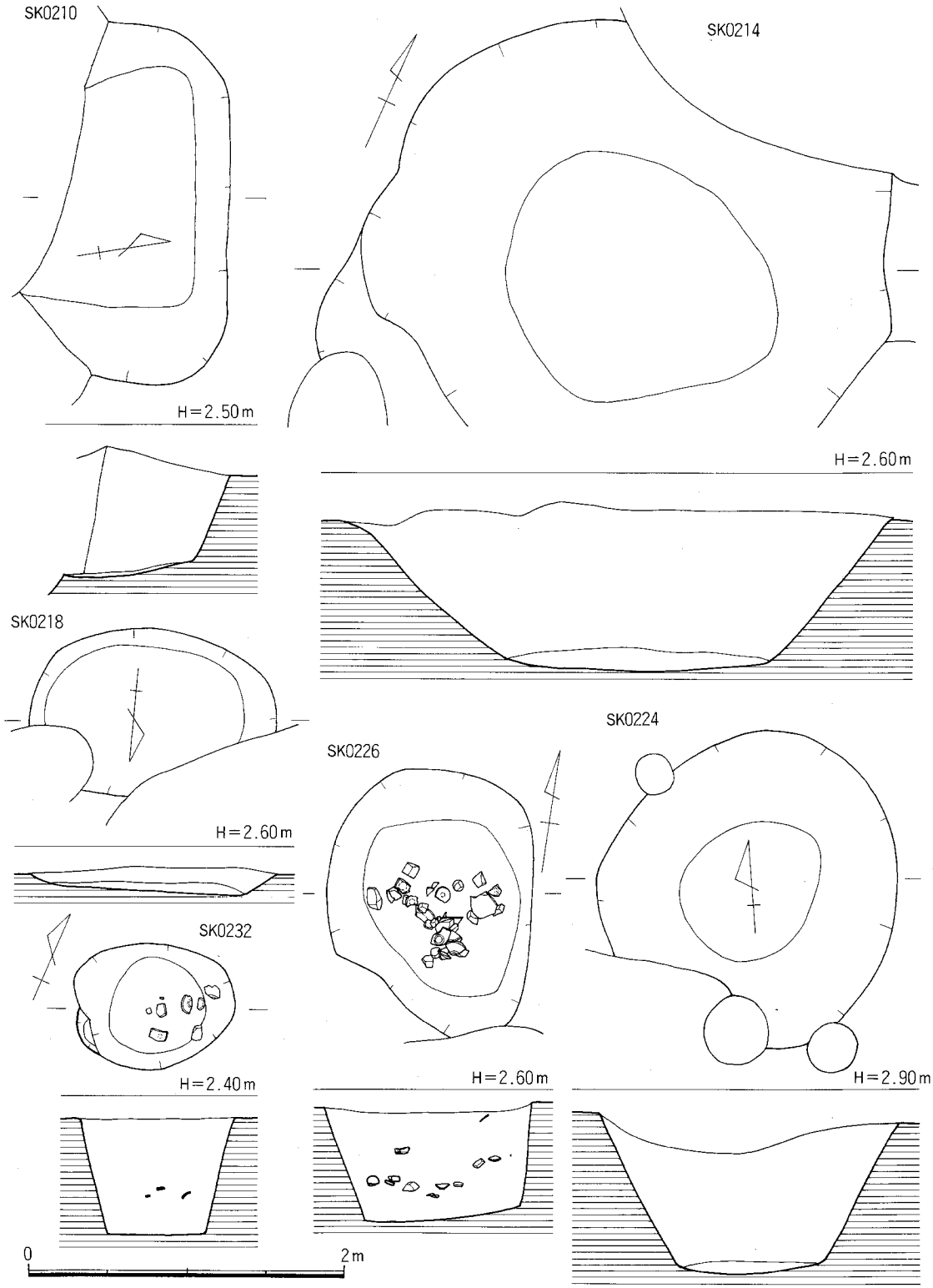
SK0218（第42図）　c区。東西に長軸をとる楕円形土坑。長さ1.55m、幅1.07m、深さ20cm。底面は西側にやや傾斜する。覆土は暗灰褐色粘質砂。SK0217に切られ、SK0281を切る。

SK0220　b区。西北－東南に長軸をとる長方形の小土坑。長さ0.90m、幅0.53m、深さ57cm。覆土は暗褐色粘質土。SK0228を切る。土師器杯（ヘラ・糸切り混在）、瓦器、白磁、中国陶器などが出土。

SK0223　c区で検出した土坑である。西をSK0225に切られ、また東をピットに切られるため全容は不明。楕円形の平面か。南北幅0.70m、深さ70cm。SK0224、SD0168を切る。

SK0224（第42図）　c区。径1.90m前後、深さ102cmの円形土坑。底面は長さ1.00m、幅0.80mの楕円形でほぼ平坦である。西側でSD0168を切る。

SK0225　c区。南北に長軸をとる長方形状の土坑。長さ1.80m、幅は西側をSK0227に切られ不明。深さは32cmで、底面は北側が一段深くなる。SK0223、SD0168を切る。土師器杯（糸切



第42図　SK0210・0214・0218・0224・0226・0232実測図（1/40）

り)、白磁、中国陶器などが出土。

SK0226（第42図、図版22）　e区。南北に長軸をとる楕円形土坑。長さ1.70m、幅1.31m、深さ76cm。壁面は垂直に近く、底面は西側に傾斜する。遺物は坑内上位から中位で検出した。SK0190に切られ、SK0210、SK0287を切る。

SK0227　c区で検出した南北に長い土坑であるが、西側を複数の遺構に切られ、また残りの部分も周壁の出入りが激しく形態は確定できない。確認できる南北長は2.30m。深さは45cmで、底面は平坦。SK0197、SK0277に切られ、SK0225、SD0168を切る。出土遺物はない。

SK0228　b区で検出した土坑で、北側を上面の遺構、また南側をSK0216やSK0220に切られ、西側隅が方形状に残存するだけである。深さ54cm。土師器杯、瓦器、白磁が出土。

SK0229　b区で検出した土坑で、SK0128、SK0130、SK0228に囲まれた間にわずかに確認できるだけで全形は窺えない。深さ46cm。土師器杯、白磁、中国陶器など少量が出土。

SK0232（第42図）　f区。東西に長軸をとる楕円形状の小土坑。長さ1.00m、幅0.80m、深さ75cm。壁面は急で、底面は南北に長い楕円形となる。覆土は炭化物混じりの灰褐色粘質砂。遺物は坑内中位で検出した。SE0233を切る。

SK0234　f区下面で検出した東西幅4.40mの土坑である。大半が調査区外にかかるため全形は不明だが、残存部からすると隅丸の方形あるいは長方形と考えられる。深さは20cm、底面はほぼ平坦。住居跡の可能性もある。土師器、須恵器などが出土。

SK0236　e区。径1.40mの円形土坑。深さは22cm。底面は西側に傾斜する。覆土は黒褐色粘土。

SK0238　b区。南北に長軸をとる楕円形の小土坑。長さ1.00m、幅0.85m、深さ48cm。底面は平坦である。SD0237に切られる。土師器杯（ヘラ・糸切り混在）、瓦器、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土。

SK0239　f区。南北に長軸をとる楕円形の小土坑。長さ0.83m、幅0.67m、深さ60cm。SK0282、SK0314を切る。

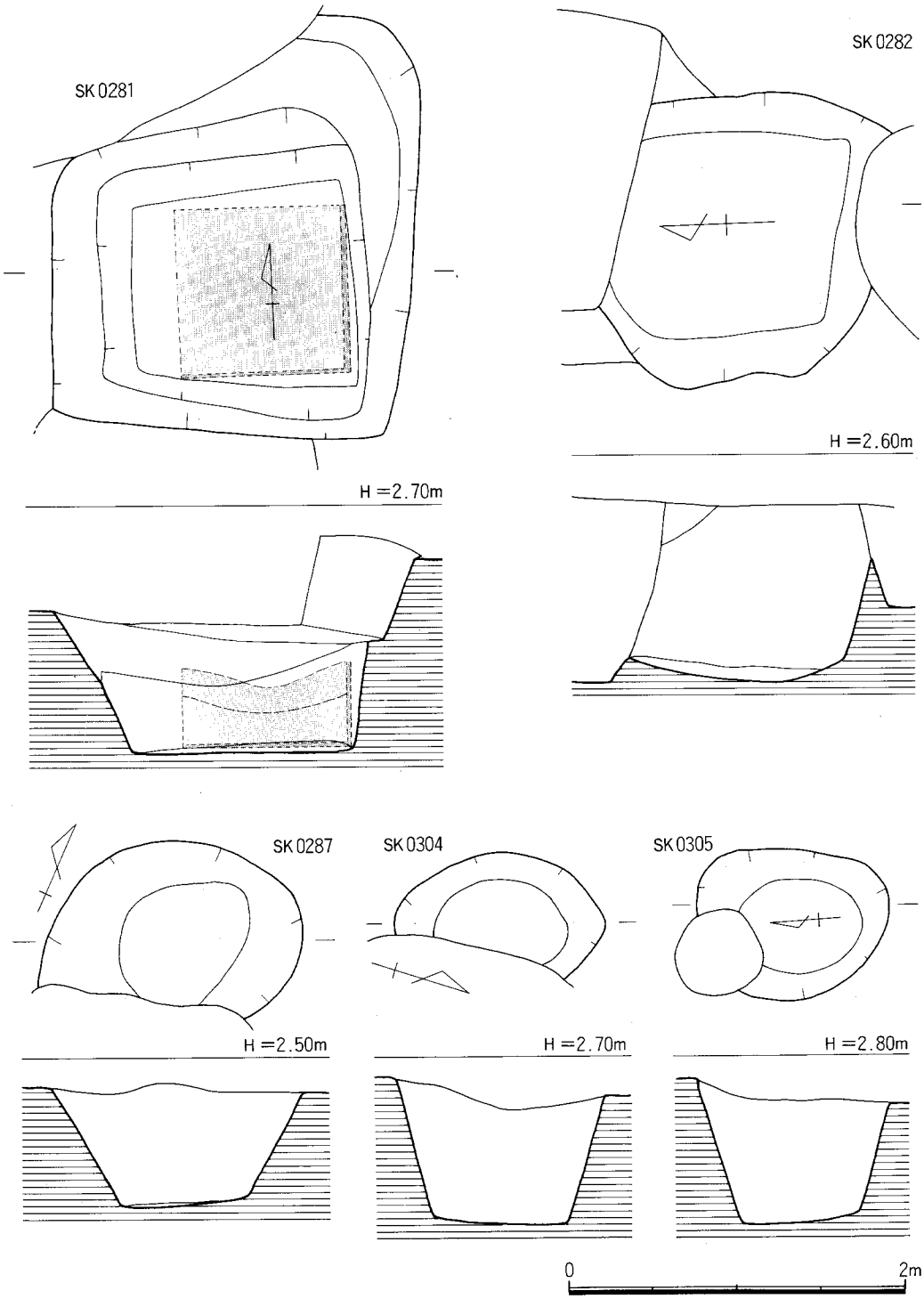
SK0240　e区で検出した方形状の土坑であるが、南側をSK0196に切られ全形は不明。東西幅1.00m、深さ30cm。底面は平坦である。東側でSK0241を切る。土師器皿・杯（ヘラ・糸切り混在）、白磁、中国陶器などが出土。

SK0241　e区で検出した土坑であるが、東側をSK0214、西側をSK0240に切られ形態は不明。南北幅0.75m、深さ15cmをはかる。土師器杯など少量出土。

SK0253　e区。南北幅1.20mの不整形土坑。深さは15cmで、底面南側は深さ23cmの溝状になる。SK0342に切られる。土師器、須恵器が少量出土。

SK0259　e区で検出した長方形状の土坑。SK0170、SK0140に切られ全形は不明。南北幅1.05m、深さ87cm。覆土は黒褐色砂質土。鉄鋤先が出土した。

SK0260　e区で検出した土坑であるが、東側周壁の一部を残すだけである。その形状からすれ



第43図　SK0281・0282・0287・0304・0305実測図（1/40）

ば円形か。深さは19cm。底面は西に傾斜気味である。上面から多くの陶磁器類が出土した。

SK0263　e区。南北に長軸をとる楕円形状の土坑であるが、西側をSD0237に切られ全形は不明。現状で南北長1.60m、深さ20cm。土師器杯（糸切り）、白磁などが出土。

SK0270　e区南端で検出した土坑であるが、南が調査区外にかかり、また西側をSK0214に切られ平面形は不明。現状で深さ65cm。

SK0277　c区で検出した円形状の土坑である。径1.15m、深さは100cm。底面は径0.65mの円形である。SK0197、SK0199、SK0227、SD0168を切る。

SK0278　c区。南北に長軸をとる楕円形の小土坑。長さ1.00m、幅0.78m、深さ38cm。底面は平坦である。南側でSK0283に切られる。土師器杯（糸切り）、白磁、中国陶器などが出土。

SK0279　f区南端で検出した楕円形状の土坑。東西幅1.45m、長さは南が調査区外にかかり不明。現状で深さ50cm程度である。SD0139に切られる。

SK0281（第43図、図版20）　f区で検出した東西2.16m、南北2.55mをはかる方形状の土坑である。深さ60cmでいったん平坦面をなし、その南側に一辺1.50～1.60mの方形竪穴を掘り込む。底面は長方形で東西長1.30m、南北幅1.15mをはかる。底面は平坦で、東側上面からの深さは125cmである。下部の方形竪穴の覆土は上部中央に黒色土が20～30cmほど堆積する他は暗褐色土となる。この暗褐色土を上面から20～30cm掘り下げたあたりから大量の陶磁器類が出土し始めた。遺物は一辺約１mの方形区画の中にあり、底面近くまでびっしりと詰まっていた。遺物は白磁碗が圧倒的に多く、それも数枚が重なって出土する例が多かった。図版は上面から深さ100cm付近の遺物出土状況を示したもので、この付近までは土師器や獣骨が見られたが、その下部ではほとんど土師器は目につかなかった。底面近くには大型の陶器壺が割れた状態であり、その周囲には白磁が隙間もないほど詰まっていた。その下には不明瞭ながら東西方向の木炭痕が方形の区画をなしていた。ただ西端では木炭痕は南北に向いていた。また東と南の側壁面にも炭化物の痕跡が窺われた。炭化物の下は地山で、そのわずかな間から獣骨を若干検出した。陶磁器類は完形に近いものも数多くあったが、しかしどこか一部を欠損していた。このような検出状況からすれば、図示したように坑底の東と南壁に接するように一辺１m前後の底付の木箱を入れ、そこに割れた陶磁器を投棄したものと想定される。また白磁類が重なって出土したのは縄で束ねた状況を窺わせる。北側でSK0216、SK0218に切られ、南側でSK0282を切る。

SK0282（第43図）　f区。東西幅1.70m、深さ1.10mの方形状の土坑。底面も方形状で東西幅1.20mをはかり、中央が深い。SK0281、SK0239、SK0287に切られる。またSK0312、SK0314を切る。

SK0283　f区。径0.57m、深さ58cmの円形状の小土坑である。底面は西に傾斜気味である。SK0278を切る。土師器、須恵器、越州窯系青磁などが出土。

SK0287（第43図）　f区で東西に長軸をとる楕円形状の土坑。幅1.50m、長さは南側をSK0226に切られ不明。深さ73cm、底面はほぼ平坦である。覆土は中位までが褐色砂、下位が黒色砂で

底面は粘質を帯びる。SK0226を切る。

SK0288　f区で検出した円形状の土坑。東側はSD0407に切られる。東西幅1.30m、深さ65cm。底面は方形状で東西幅0.80mをはかり、ほぼ平坦である。SK0311を切る。

SK0290　f区。径0.75m、深さ107cmの円形状の小土坑である。SE0233を切る。土師器、須恵器が少量出土。

SK0291　f区。東西に長軸をとる楕円形状の小土坑。長さ0.85m、幅0.55m、深さ79cm。底面は径0.25mの円形で、西壁の傾斜が緩いため東側に偏る。SE0233に切られる。覆土は淡褐色砂。土師器片が少量出土。

SK0293　c区北端で検出した方形状の小土坑。北半部は調査区外となる。東西幅0.85m、深さ21cm。底面は平坦な円形状である。土師器杯（ヘラ・糸切り混在）、白磁などが出土。

SK0300　e区下面で検出した土坑であるが、SK0192、SK0210、SK0226などに切られ原形をとどめない。南北に長軸をとる楕円形状の平面か。残存東西幅は1.10m、深さは34cm。

SK0301　d区。東西に長軸をとる楕円形状の小土坑。長さ0.95m、幅はおよそ0.50m、深さは29cm。土師器、中国陶器など少量が出土。

SK0303　f区。南北に長軸をとる楕円形状の小土坑。幅0.50m、長さは南側をSK0205に切られるが約1.10m。深さは17cm、底面は平坦である。SK0306を切る。土師器杯(糸切り)、白磁、中国陶器などが出土。

SK0304（第43図）　c区。南北に長軸をとる楕円形状の土坑。長さ1.30m、幅は東側をSD0407に切られ不明。深さは90cm、底面はほぼ平坦。土器は底面から20cmほど浮いて出土した。

SK0305（第43図）　f区で検出した南北に長軸をとる楕円形状の土坑。南北長1.15m、東西幅0.90m。深さは88cm、底面は平坦である。北側をピットに切られる。

SK0306（第44図）　f区。東西に長軸をとる円形状の土坑。長さ1.60m、幅1.50m。東側壁に段がつき、長さ1.20m、幅0.85mの底面は西に偏る。上面からの深さは98cm、底面は平坦である。SK0303に切られる。

SK0309　f区。東西に長軸をとる楕円形状の土坑。北側を除きSE0280、SK0306、SK0310に切られ、全形は不明。南北幅は0.70m、深さ33cm。土師器杯など少量が出土。

SK0310　f区。径0.70m、深さ49cmの円形状の小土坑。西側上面には礫が見られた。SK0309を切る。土師器皿・杯（ヘラ切りが多い）、白磁、中国陶器などが出土。

SK0311　f区。南北に長軸をとる土坑であるが、北側をSK0288、東側をSD0407に切られ全形は不明。現状で南北1.60m、深さ23cm。土師器皿・杯（糸切り）などが少量出土。

SK0312　f区。東西に長軸をとる楕円形状の土坑であるが、西側をSK0282、SK0287、東側をSK0171に切られ全形は不明。南北幅0.80m、深さ69cm。底面は平坦である。土師器杯（糸切り）、黒色土器、白磁、越州窯系青磁などが出土。

SK0314　f区。南北に長軸をとる楕円形状の小土坑。長さ0.90m、幅0.60m、深さ77cm。SK0239、SK0282に切られる。土師器杯（糸切り）など少量が出土。

SK0315　f区。西北－東南に長軸をとる長方形状の小土坑。長さ0.85m、幅は北から東側にかけSK0278、SK0283に切られ不明。深さは43cm。土師器、黒色土器、須恵器が少量出土。

SK0321（第44図）　e区下面。西北－東南に長軸をとる楕円形土坑。長さ2.02m、幅1.50m、深さ50cm。底面は西側に傾斜気味である。SK0323、SK0330を切る。土師器杯（糸切り）、白磁、中国陶器などが出土。

SK0323　b区下面。ほぼ西北－東南に長軸をとる土坑であるが、北側を第Ⅱ面の遺構、また南側をSK0321とピットに切られ全形は不明。幅1.10m、深さは58cm。出土遺物はない。

SK0326　e区下面。南北に長軸をとる長方形状の土坑。西側をSK0119などに大きく破壊され全形は不明。現存南北長1.25m、深さは34cm。底面には人頭大の礫がある。

SK0330　e下面区。南北に長軸をとる楕円形状の土坑。北側をSK0321、南側をSK0173、SD0345に切られる。東西幅1.20m、深さは28cm。土師器、須恵器が少量出土。

SK0332　e区下面。径1.00m、深さ28cmの円形状の土坑。底面は平坦である。土師器、須恵器が出土。

SK0339　e区下面で検出した土坑であるが、東側をSK0196に切られ、また上面にも他遺構があり全形をとどめない。現状で南北幅0.70m、深さ48cm。土師器、須恵器が出土。

SK0340（第44図）　e区下面。南北に長軸をとる長方形状の土坑。長さ2.05m、幅は0.80m程度。深さ27cmで北側に小さな平坦面を作り、さらに掘り下げた底面は長さ1.20m、幅0.40mの長方形となる。上面からの深さ60cm。形態から土壙墓の可能性も求められる。SK0196に切られる。土師器、須恵器が出土。

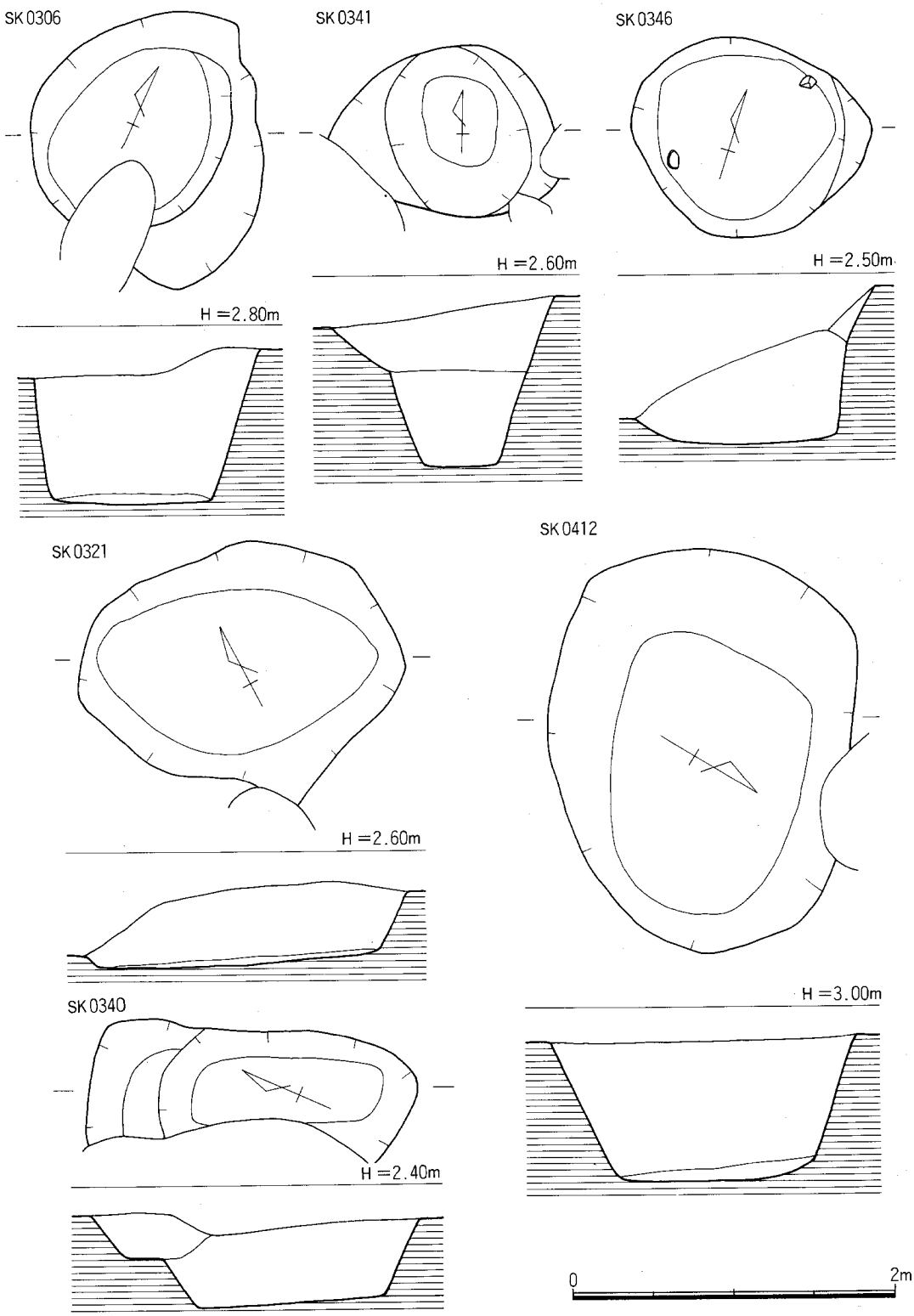
SK0341（第44図）　e区下面。東西に長い楕円形状の土坑。長さ1.40m前後、幅1.07m。深さ45cmでいったん段がつき、壁がやや急になって一辺0.50mほどの方形状の平坦な底面となる。SK0321に切られる。土師器杯、瓦器、須恵器、白磁などが出土。

SK0342　e区下面。円形状の土坑であるが、上面遺構により西側の大半を失う。径は1.50m前後か。深さは63cm。深さ20～30cmから礫や土器類が出土した。SK0119に切られる。土師器、須恵器だけが出土した。

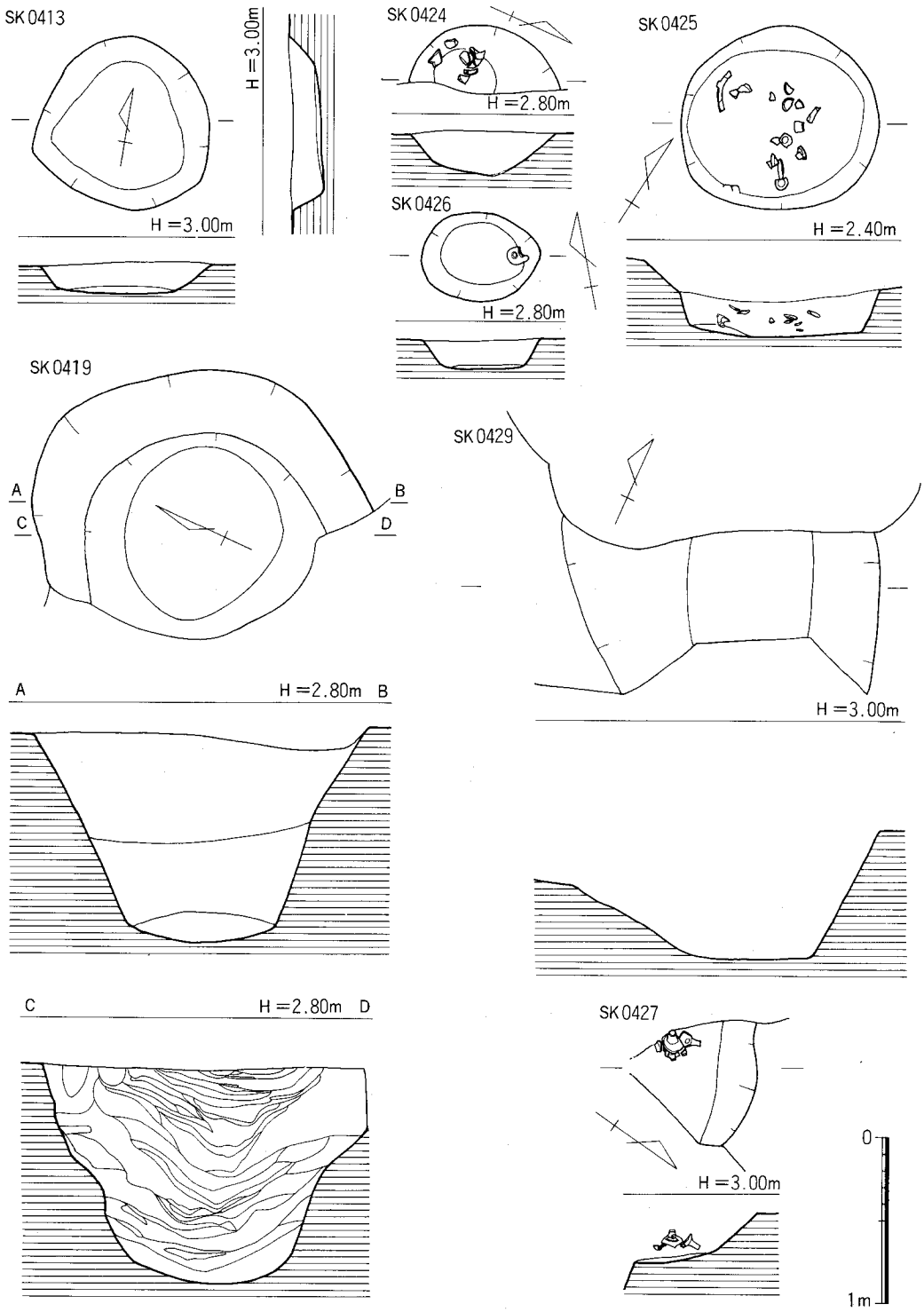
SK0346（第44図、図版22）　b区下面。円形状の土坑であるが、SE0208、SK0130に上面を削られかろうじて全形を窺えるに過ぎない。径は1.60m前後か。深さは100cm。

SK0348　e区下面で検出した不整形の小土坑である。東西0.80m、南北0.87m。南側部分が西側に広がる。深さ57cmで、長さ0.58m、幅0.48mの長方形底面となる。西側上面に小礫が集まる。土師器と須恵器だけが少量出土。

SK0406　j区。南北に長い楕円形状の小土坑。長さ1.10m、幅0.55m、深さ19cm。SK0439を切る。土師器杯（糸切り）、白磁、中国陶器などが出土。



第44図　SK0306・0321・0340・0341・0346・0412実測図（1/40）



第45図　SK0413・0419・0424・0425・0426・0427・0429実測図（1/40）

SK0409　j区。円形の土坑であるが東側の大半が調査区外にかかる。径は１m前後、深さ40㎝。SE0490、SD0479を切る。土師器皿・杯（糸切り）、白磁などが出土。

SK0410　g区。径2.90m、深さ95㎝の円形土坑。SK0470、SK0471などに切られ、南側大半を失う。底面は平坦。SE0430、SE0420、SK0473を切る。土師器皿・杯（糸切り多い）、黒色土器、白磁、中国陶器などが出土。

SK0412（第44図）　i区。東西に長軸をとる楕円形状の土坑。長さ2.54m、幅1.93m、深さ93㎝。底面は南側に傾斜する。SE0401、SK0413に切られ、SE0483、SE0560、SE0561を切る。

SK0413（第45図）　i区で検出した不整円形の土坑。径１m前後、西側が尖り気味になる。深さ20㎝。SK0412、SK0437を切る。

SK0414　g区。SE0428上面で検出した南北に長軸をとる長方形土坑。長さ1.75m、幅0.50m、深さ17㎝。覆土は炭化物、焼土を含んだ黄灰色粘質土。土師器、白磁などが出土。

SK0415　g区。これもSE0428の上面、しかも井戸側部分で検出した不整形の土坑である。平面形は東西1.45m、南北1.35mの隅丸長方形に近い。深さ14㎝、底面はほぼ平坦。覆土はSK0414と同じ。井戸側の落込み部分とも考えられる。

SK0416　i区。東西に長軸をとる楕円形小土坑。長さ1.00m、幅0.56m、深さ８㎝。覆土はSK0414と同じ。SE0494を切る。土師器杯（糸切り）など少量が出土。

SK0418　i区。南北に長軸をとる楕円形状の土坑。東から南側をSE0403に切られ、全形は不明。長さ1.70m、幅1.20m前後の平面規模をもつものか。深さ78㎝。底面は平坦である。

SK0419（第45図）　j区。径2.00mの円形土坑。深さ68㎝前後で段を作り、そこからさらに掘り込む。底面は径１m前後の不整円形で、中央が深くなる。上面からの深さ126㎝。覆土の一層一層の厚さは１、２㎝～10㎝で、中くぼみ状に幾重にも堆積する。大局的にみると砂質土と粘質土とが15～20㎝ごとに入れ替わって堆積しているようである。炭化物はほとんどの層で多寡はあれ確認した。遺構上面では変わり玉の断面のように、いくつもの土層が同心円状にまわる。SE0403、SK0426に切られ、SK0438を切る。

SK0424（第45図）　j区。径0.90m前後、深さ26㎝の円形小土坑。東側の大半が調査区外にかかる。底面は南側に偏り、また北へ少し傾斜する。遺物は底から約10㎝浮いて出土した。

SK0425（第45図、図版22）　f区。長軸を東西にとる楕円形土坑。長さ1.20m、幅1.10m。上面はSD0407で削られ、深さ29㎝。底面はほぼ平坦である。覆土は下に炭化物層があり、その上は黄褐色砂となる。炭化物層に遺物が多い。

SK0426（第45図）　j区。SK0419の上面で検出した東西に長軸をとる楕円形の小土坑。長さ0.72m、幅0.55m、深さ19㎝。覆土は上から灰褐色土、黒色粘質土、褐色砂の３層の水平堆積。上面から白磁碗が出土した。

SK0427（第45図、図版23）　h区で検出した土坑であるが、北側の一部を除き攪乱やSE0411

に破壊され原形をとどめない。北壁は深さ20cmで底面に達し、そこからやや南側に向かい傾斜する。覆土は上層の黒褐色土と下層の暗黄褐色砂に分かれ、下層から土師器高杯などを検出した。竪穴住居の可能性もある。

SK0429（第45図）　i区南端で検出した土坑であるが、北側をSE0408に切られ、南側は調査区外にかかり全形は摑めない。東西幅1.85m、深さ80cm、断面は逆台形に近い。土師器、須恵器などが出土。

SK0433　i区。南北に長い楕円形の小土坑。長さ0.70m、幅0.55m、深さ16cm。SX0432を切る。土師器杯（糸切り）などが少量出土。

SK0434　i区。南北に長軸をとる長方形の土坑。南側は上面遺構に切られ長さは不明。東西幅0.50m。南側は丸く膨らむ。深さ49cm、底面は平坦。遺物は上から底まで出土した。

SK0435（第46図）　f区。西南－東北に長軸をとる楕円形土坑。長さ1.78m、幅1.51m、深さ42cm。底面はやや東に傾斜する。覆土は締まりのない黒色土。SD0436を切る。土師器杯（糸切り）、白磁、中国陶器などが出土。

SK0437（第46図、図版23）　i区。東西に長軸をとる楕円形土坑。長さ1.40m、幅は南側をSK0562に切られ不明。深さ78cm。底面は中央が深くなる。覆土には炭化物を含む。平面図に示した遺物はすべて上面から深さ30cmまでの間に出土した。SE0560を切る。

SK0438（第46図）　j区。南北に長軸をとる楕円形土坑。幅1.20m前後、長さは南側をSK0419、SE0423に切られ不明だが、2.50mを越えることはない。深さ90cm。底面はほぼ平坦である。覆土は黒色土と黄白色砂の互層。

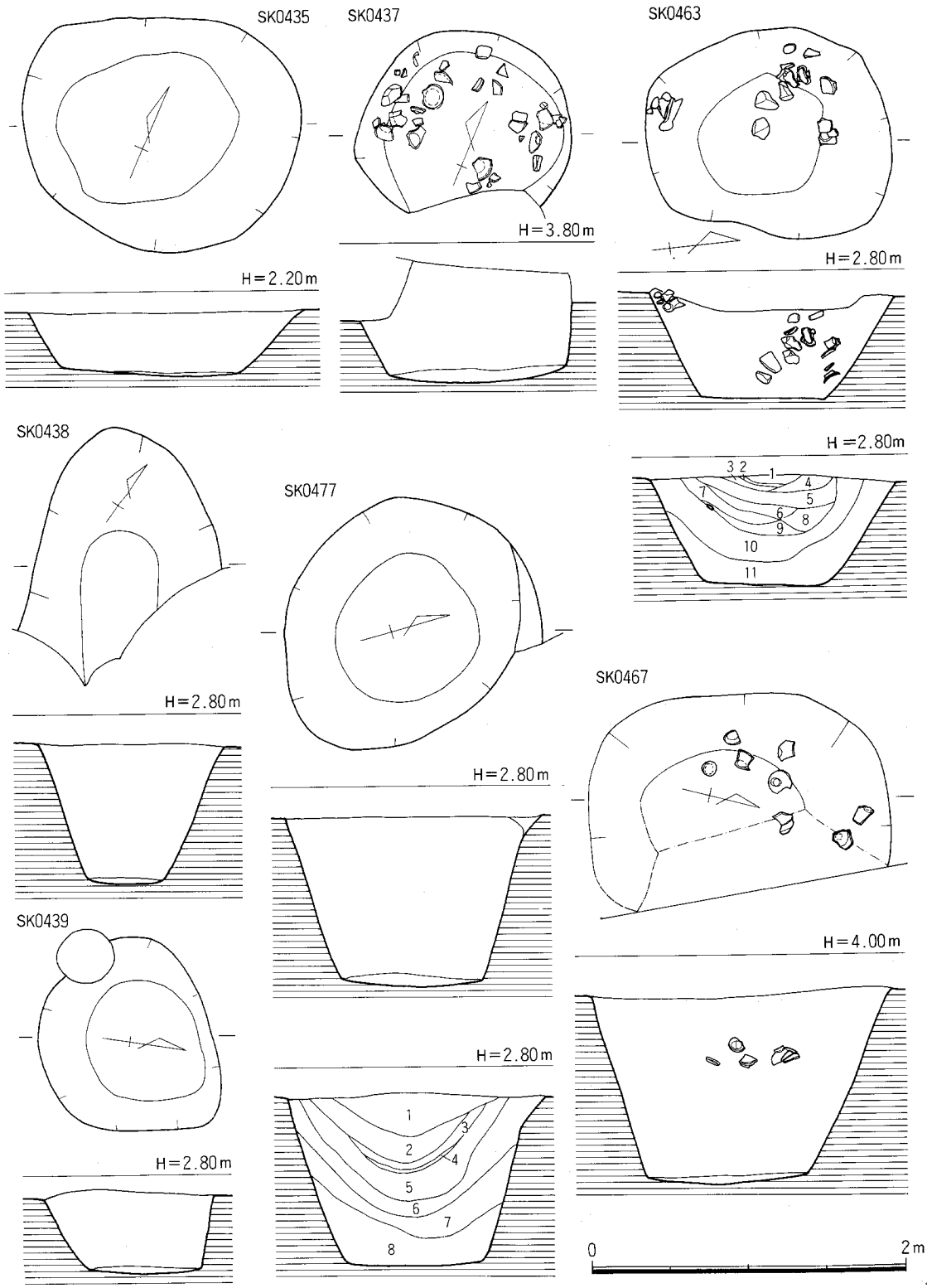
SK0439（第46図）　j区。径1.10～1.30mの不整円形土坑。深さ53cm。底面はほぼ平坦である。覆土は褐色粘質土が主で、中に薄い炭化物層が縞状に入る。SK0406に切られる。

SK0445　g区。南北に長軸をとる楕円形土坑。長さ2.40m、幅0.95m。底面は南北二段で、浅い北側が深さ22cmで平坦、南側が45cmで中央が深くなる。鉄滓や瓦が南側の深さ30cmまでの間から出土した。SE0421を切る。土師器皿・杯（糸切り）、白磁、中国陶器などが出土。

SK0463（第46図、図版23）　i区。径1.60m前後の円形土坑。東西をSE0403、SE0401に切られる。深さは74cm。底面はわずかに北に傾く。覆土は1暗褐色土、2灰白色砂、3灰黒色砂、4灰褐色砂質土、5暗黄色砂と灰色粘土の互層、6黒色粘質土、7灰褐色砂質土、8灰色粘質土、9灰褐色粘質土、10黒色粘質土（炭化物）と灰褐色粘質土の互層、11灰褐色砂質土である。2、3、5、7、8層以外には焼土、炭化物が認められる。検出時の遺構上面状態はSK0419と同じである。獣骨を含む遺物は主に8～11層で検出した。SK0512を切る。

SK0467（第46図、図版23）　j区。径1.93mの円形土坑。東側は調査区外にかかり大半が未調査である。深さ127cm、底面はやや南寄りになる。遺物は上部の深さ50cm前後から出土した。

SK0469（第47図、図版24）　g区で検出した土坑で、破壊がひどいが、平面は径1.60m前後の



第46図　SK0435・0437・0438・0439・0463・0467・0477実測図（1/40）

円形であろう。深さは90cm。底面は若干凹凸がみられる。覆土は上層の砂質土と下層の黒色粘土に分かれ、遺物は下層から出土した。SX0422が上面にあり、またSK0503を切る。

SK0470　g区。南北に長軸をとる楕円形土坑。南側が基礎杭で破壊されるが長さ2m前後、幅は1.09m。深さ57cmで底面中央がやや深くなる。SK0410、SK0471を切る。土師器杯、白磁、中国陶器などが出土。

SK0471　g区。西南－東北に長軸をとる楕円形土坑。ただ西側を攪乱に、また東側をSK0470に切られ全形は不明。長さ1.28m、幅1.00m、深さ48cm。底面は北側に傾斜する。

SK0472　g区。南北に長軸をとる楕円形状の小土坑。長さ1.20m、幅0.65m、深さ25cm。底面中央がくぼむ。SE0428を切る。土師器杯（ヘラ切り）と白磁片が1点づつ出土した。

SK0473　g区。円形状の土坑だが、大半が調査区外にかかり規模などは不明。確認した深さは55cm。SE0420、SK0410に切られ、SE0430を切る。

SK0474　g区。東西に長軸をとる楕円形状の小土坑。長さ1.10m、幅0.85m。土師器杯(糸切り)、白磁などが出土。

SK0477（第46図、図版24）　i区。南北に長軸をとる楕円形土坑。長さ1.75m、幅1.43m、深さ109cm。底面はほぼ平坦。覆土は1暗褐色砂、2灰黒色砂質土、3暗黄灰色砂、4黒色土(炭化物)、5黒褐色粘質土、6灰黒色砂質土、7黒褐色土、8灰黒色粘土となる。1、2、4、6、7層には炭化物、焼土が混じる。SK0419、SK0463と同様の堆積状態を示す。SE0404に切られる。

SK0480　i区。東西に長軸をとる楕円形の小土坑である。長さは西側をSE0402に切られ不明。幅0.85m、深さ53cm。底面はほぼ平坦である。

SK0481　i区。楕円形状の土坑だが、東側をSE0403に切られ、また南側が調査区外にかかり規模などは不明。確認した深さは60cm。土師器杯（ヘラ・糸切り混在)、白磁などが出土。

SK0485　i区。径0.95mの円形小土坑。深さは49cm。底面は南側に傾斜する。SD0407に切られる。土師器杯（糸切り)、白磁、中国陶器などが出土。

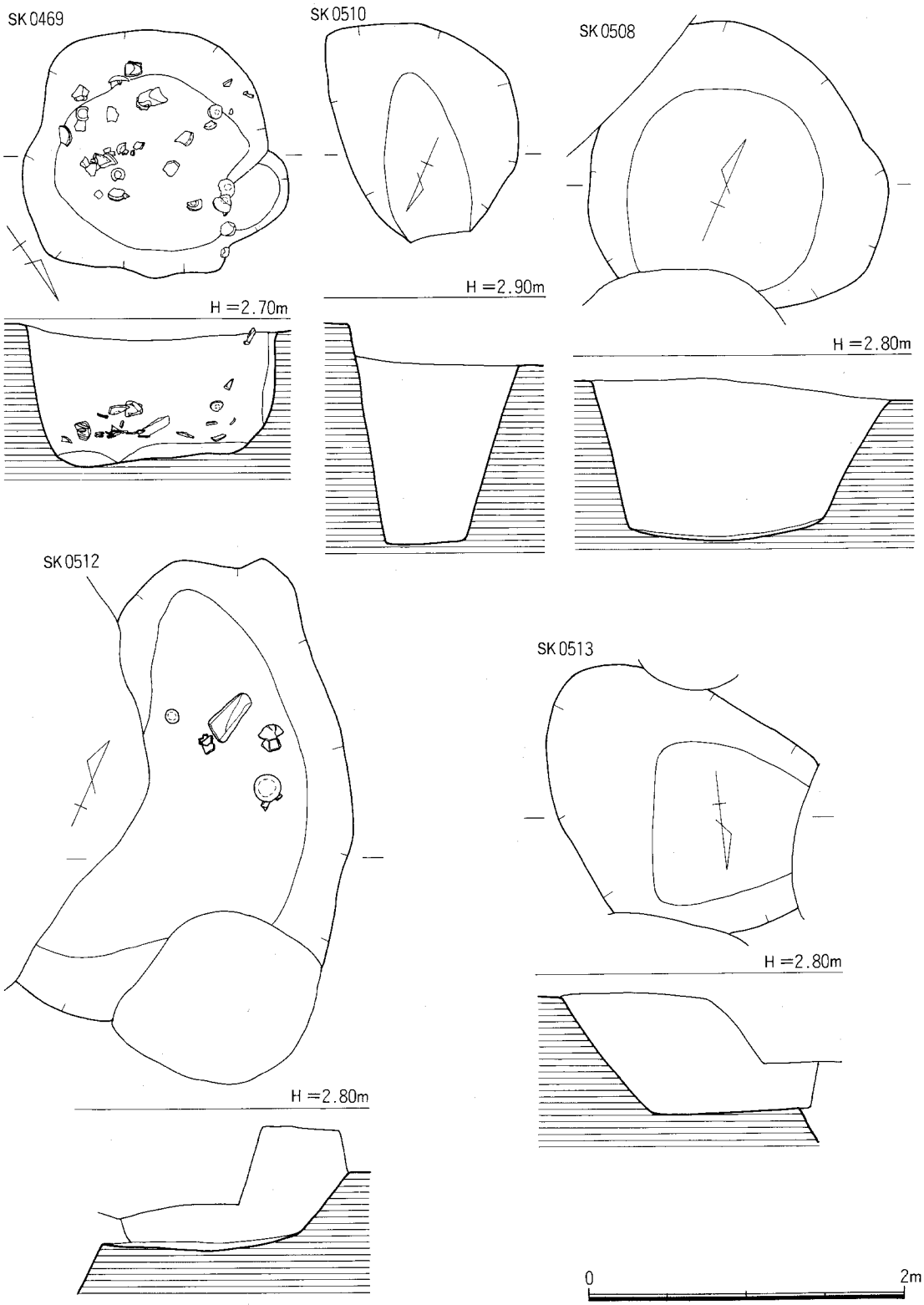
SK0493　i区。径0.80～0.85mの円形小土坑。深さは63cm。覆土は炭化物、焼土混じりの灰黒色粘質土。SK0512とSK0513を切り、SE0403に切られる。出土遺物はない。

SK0497　h区。一辺1.10～1.20mをはかる隅丸方形状の小土坑。深さは23cm。覆土は暗褐色砂。SE0464を切る。土師器杯（ヘラ・糸切り混在)、白磁、中国陶器などが出土。

SK0503　g区。西北－東南に長軸をとる楕円形状の土坑。長さは東側をSK0469に切られ不明。幅0.77m、深さ41cm。底面は中央が深くなる。SK0571を切る。土師器杯(ヘラ切り)、須恵器などが出土。

SK0508（第47図）　g区下面。径1.80m前後、深さ104cmの円形状の土坑。底面は南側に偏り、西側に傾斜する。SE0428、SE0494に切られ、SK0571を切る。

SK0510(第47図)　g区下面。西北－東南に長軸をとる楕円形状の土坑。長さは北側をSE0478



第47図　SK0469・0508・0510・0512・0513実測図（1/40）

に切られ不明。幅1.15m、深さ142cm。底面は平坦である。覆土は上層が黒色土、下層が褐色土。

SK0512（第47図）　i区下面。南北に長軸をとる楕円形状の土坑。長さは3.00m前後、幅は西側をSE0509に切られ不明。深さ80cm。底面は中央が深い。覆土は黄褐色砂に炭化物が縞状に入る。遺物は底面から10～20cm浮いた状態で出土した。SK0513、SK0577を切る。

SK0513（第47図）　i区下面で検出した土坑であるが、周囲を多くの遺構に切られ全形は不明。深さ78cm。底面は平坦である。覆土は暗褐色砂が主体で、炭化物が若干混じる。土師器杯（ヘラ・糸切り混在）、白磁、中国陶器などが出土。

SK0517　h区下面で検出した土坑であるが、西を現代攪乱、南をSE0468に切られ北側隅部分が残存するだけである。深さ15cm。方形状の平面か。土師器と須恵器だけが少量出土。

SK0559　i区。径1.25mの円形土坑。南側が調査区外にかかる。深さ85cm。底面は平坦である。上面をSX0484土器群が覆っていた。

SK0562　i区のSK0412とSK0437の東側間で検出した円形状の土坑だが、先の遺構に破壊され東壁の傾斜面を残すだけであった。土師器杯（糸切り）、白磁などが出土。

SK0567　i区。楕円形の小土坑。長さ0.60m、幅0.50m、深さ32cm。SE0428に切られる。中国陶器など少量が出土。

SK0568　i区。長軸を南北にとる隅丸長方形土坑。長さ1.45m、幅1.02m、深さ50cm。SE0496に切られる。

SK0569　g区下面。西北－東南に長軸をとる楕円形の小土坑。長さ0.97m、幅0.60m、深さ12cm。底面は平坦である。SE0478に切られる。須恵器片１点だけが出土。

SK0571　g区下面。西南－東北に長軸をとる楕円形状の土坑。長さはSK0503、SK0508に切られ不明。幅1.30m、深さ16cm。底面は南側に傾斜。須恵器、白磁の破片が１点づつ出土。

SK0575　i区で検出した不整形の小土坑。東西幅は0.65m、深さ20cm。底面は南に傾斜する。SE0494に切られる。土師器と白磁が少量出土。

SK0577　i区。東西に長軸をもつ楕円形状の土坑。SE0401、SK0477、SK0512に切られ全形は不明。深さ44cm。覆土は淡褐色土。土師器杯（ヘラ切り）、白磁などが出土。

SK0578　i区下面。東西に長軸をもつ楕円形状の小土坑。長さ1.30m、幅0.83m、深さ27cm。上面には礫が見られる。土師器杯（ヘラ切り）、白磁などが出土。

SK0579　i区下面。ほぼ東西に長軸をとる楕円形の小土坑。長さ1.07m、幅0.76m、深さ28cm。SX0432に切られる。須恵器片が１点出土。

SK0580　i区のSE0401とSK0412の北側間で検出した楕円形状の土坑だが、先の遺構に破壊された北壁の傾斜面を残すだけであった。

SK0584　j区下面。長軸をほぼ南北にとる長方形の小土坑。長さ0.80m、幅0.45m、深さ58cm。土師器杯、黒色土器などが少量出土。

5） 土坑出土遺物

SK0128出土遺物（第48図227）

227は土師器椀である。体部は内湾気味に立ち上がる。底部にはハの字形に開く高台が付く。内外面とも丁寧にヘラミガキが施されるが、体部外面下半には指頭痕が見られる。器高5.2cm、口径15.0cmを測る。

SK0140出土遺物（第48図228～232）

228、229は高台付の白磁皿で、口縁は外反する。228は底部を欠いている。釉色は淡灰褐色を呈する。229は畳付のみ露胎となる。釉色は淡灰白色を呈する。器高3.1cm、口径11.0cmを測る。230は施釉陶器壺である。底部のみ残存する。内外面に緑褐色を呈する釉がかかる。底面は露胎である。231は白磁皿である。内外面に淡褐色を呈する釉がかかる。見込みには片彫りの文様が見られる。232は白磁碗の底部で、高台内側に墨書が見られる。花押か。

SK0149出土遺物（第48図233、234）

233は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。板状圧痕が残る。器高1.3cm、口径9.6cmを測る。234は高台付の白磁皿である。低い高台で、見込みに沈線が巡る。釉は高台外側までかけられる。釉色は灰白色を呈する。器高3.2cm、口径11.0cmを測る。

SK0167出土遺物（第48図235、236）

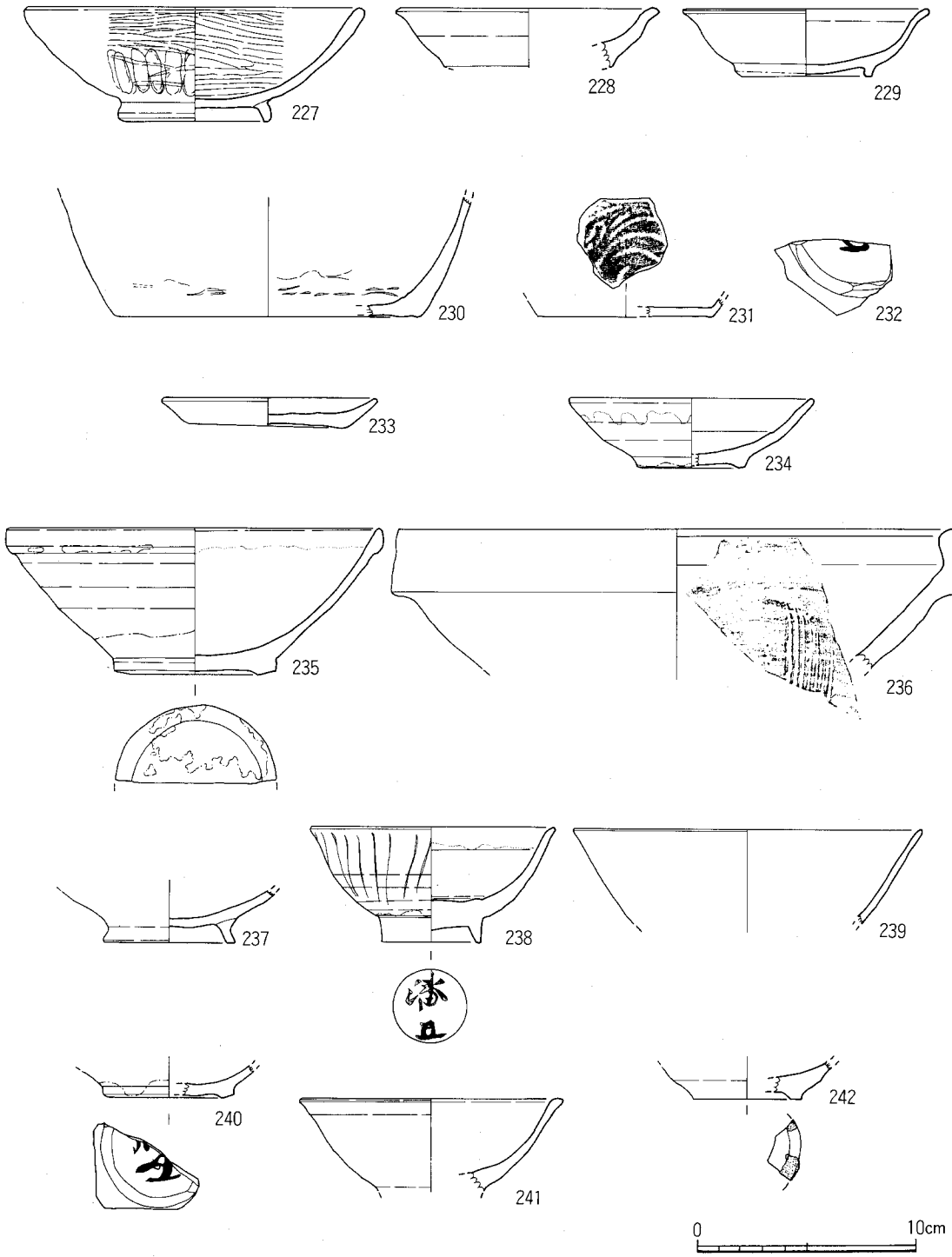
235は白磁碗Ⅳ類である。体部下半は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。器高6.6cm、口径16.0cmを測る。236は備前焼Ⅴ期のすり鉢である。底部を欠いている。混入品。

SK0169出土遺物（第48図237～242）

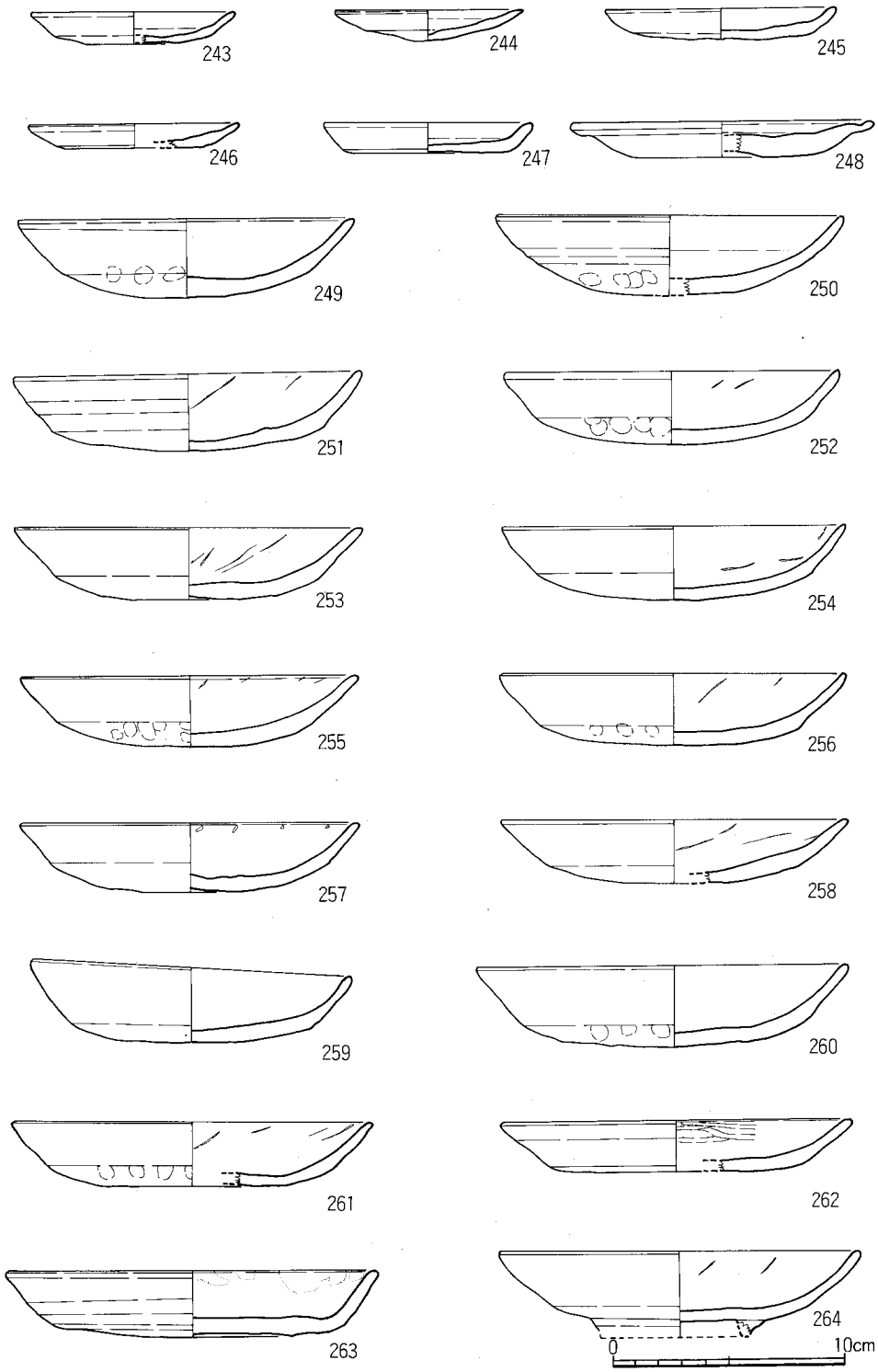
237は土師器椀である。底部にはハの字形に開く高台が付く。内外面とも丁寧にヘラミガキが施される。外底面には指頭痕が見られる。238、239は白磁碗Ⅴ類である。238は外面に櫛目文が施される。畳付より内側が露胎となる。釉色は淡灰褐色を呈する。器高5.3cm、口径11.0cmを測る。高台内側には墨書が見られる。「潘　花押」か。239は底部を欠いている。釉色は灰褐色を呈する。240は白磁碗の底部で、高台内側に墨書が見られる。花押か。241、242は高麗青磁碗である。241は体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。胎土は砂粒を少し含み、灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。242は断面台形に低い高台である。畳付に目跡が残る。釉は全面にかけられ、釉色はオリーブ色を呈する。胎土は砂粒を少し含む。

SK0170出土遺物（第49図～第54図243～316）

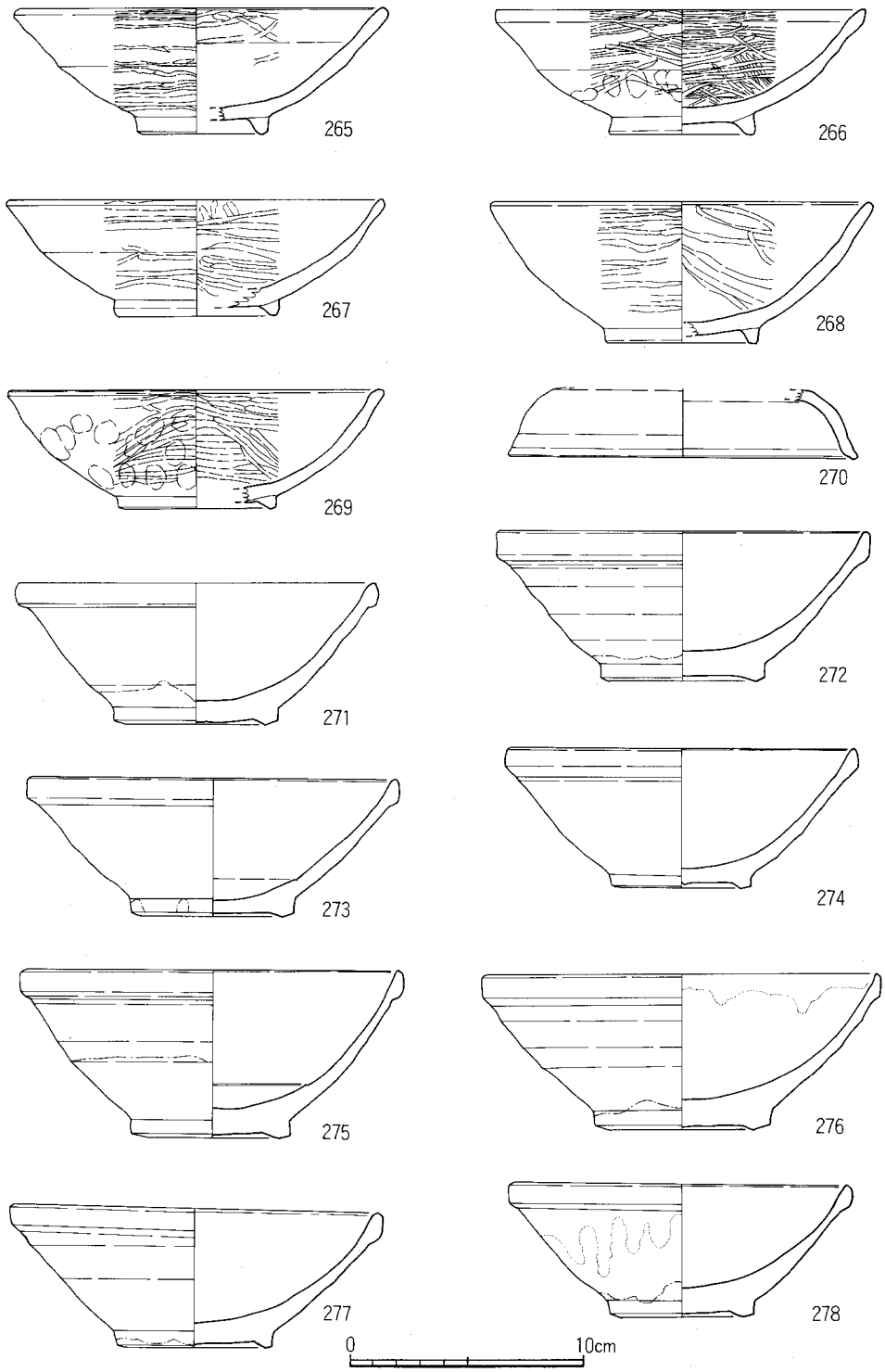
243～247は土師器小皿である。底部の切離しは243～246はヘラ切り、247は糸切りである。前者は器高1.0～1.3cm、口径8.6～9.9cmを測る。247は器高1.3cm、口径8.9cmを測る。248はての字形口縁の土師器皿である。器高1.5cm、口径12.6cmを測る。249～262は丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。外底面には指頭痕が残る。内面にはコテ当てが見られる。器高2.5～3.5cm、13.6～15.9cmを測る。263は杯で、底部の切離しは糸切りである。底面に板状圧痕が残る。



第48図　SK0128・0140・0149・0167・0169出土遺物実測図（1/3）

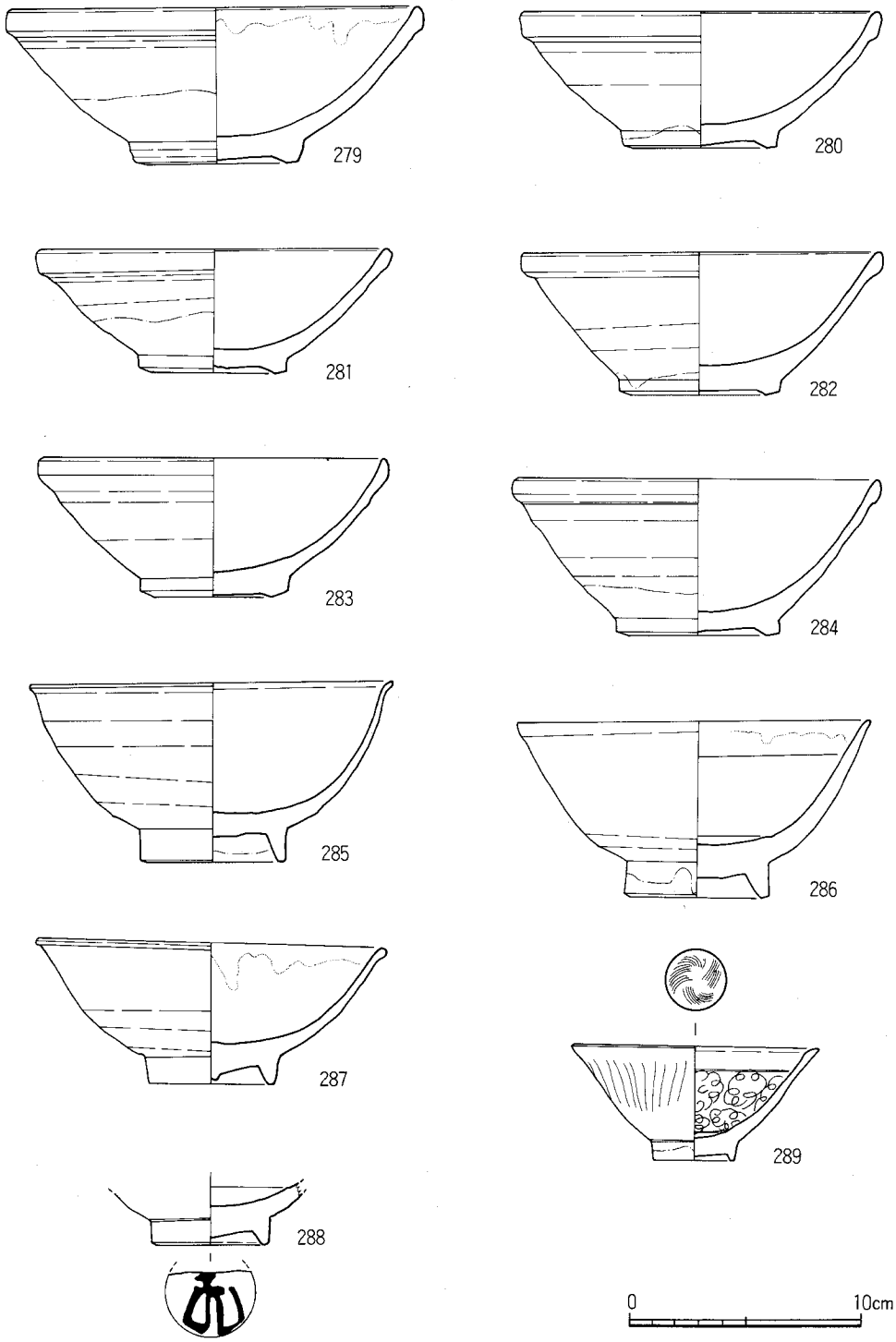


第49図　SK0170出土遺物(1)（1/3）

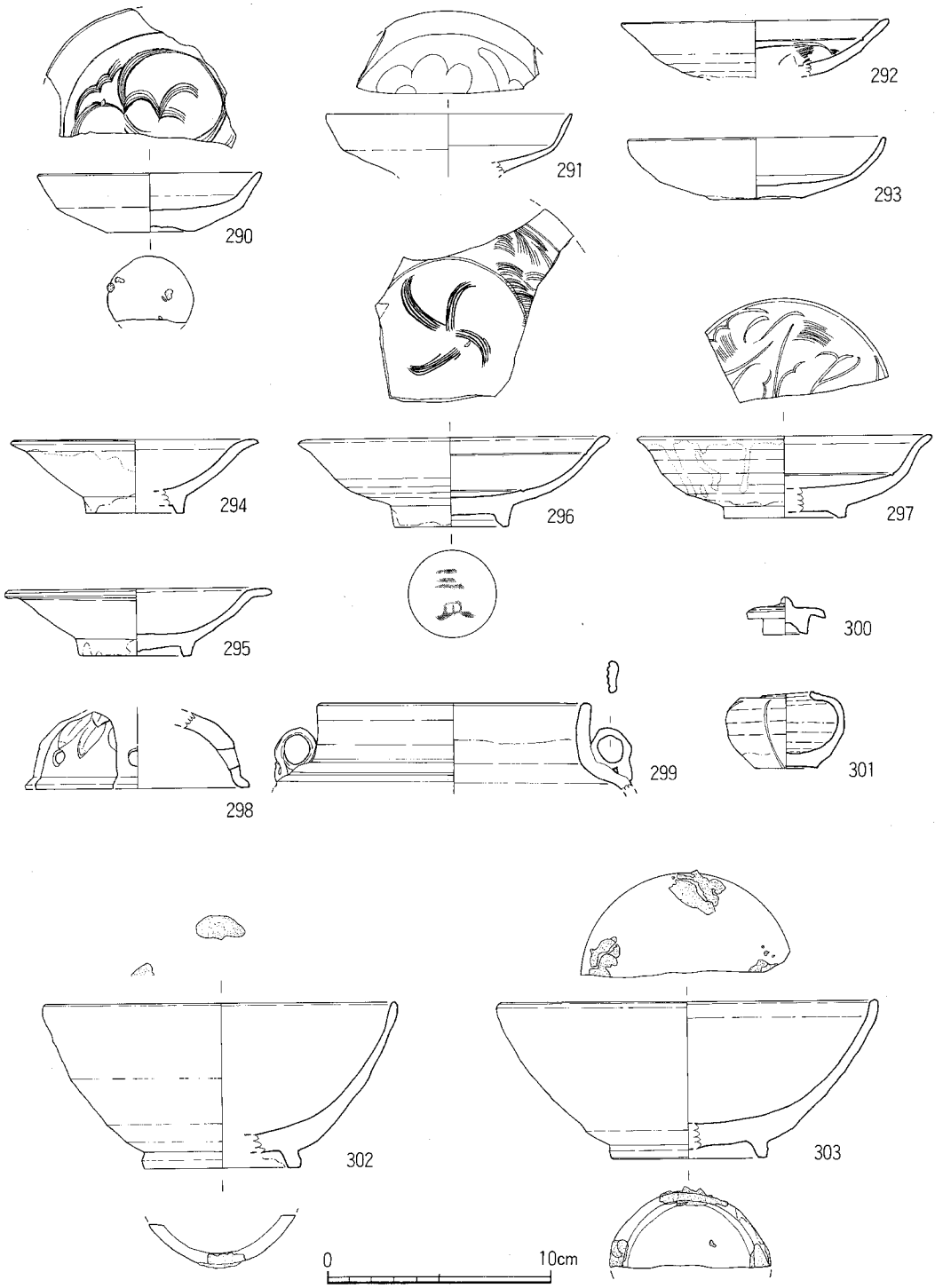


第50図　SK0170出土遺物(2)（1/3）

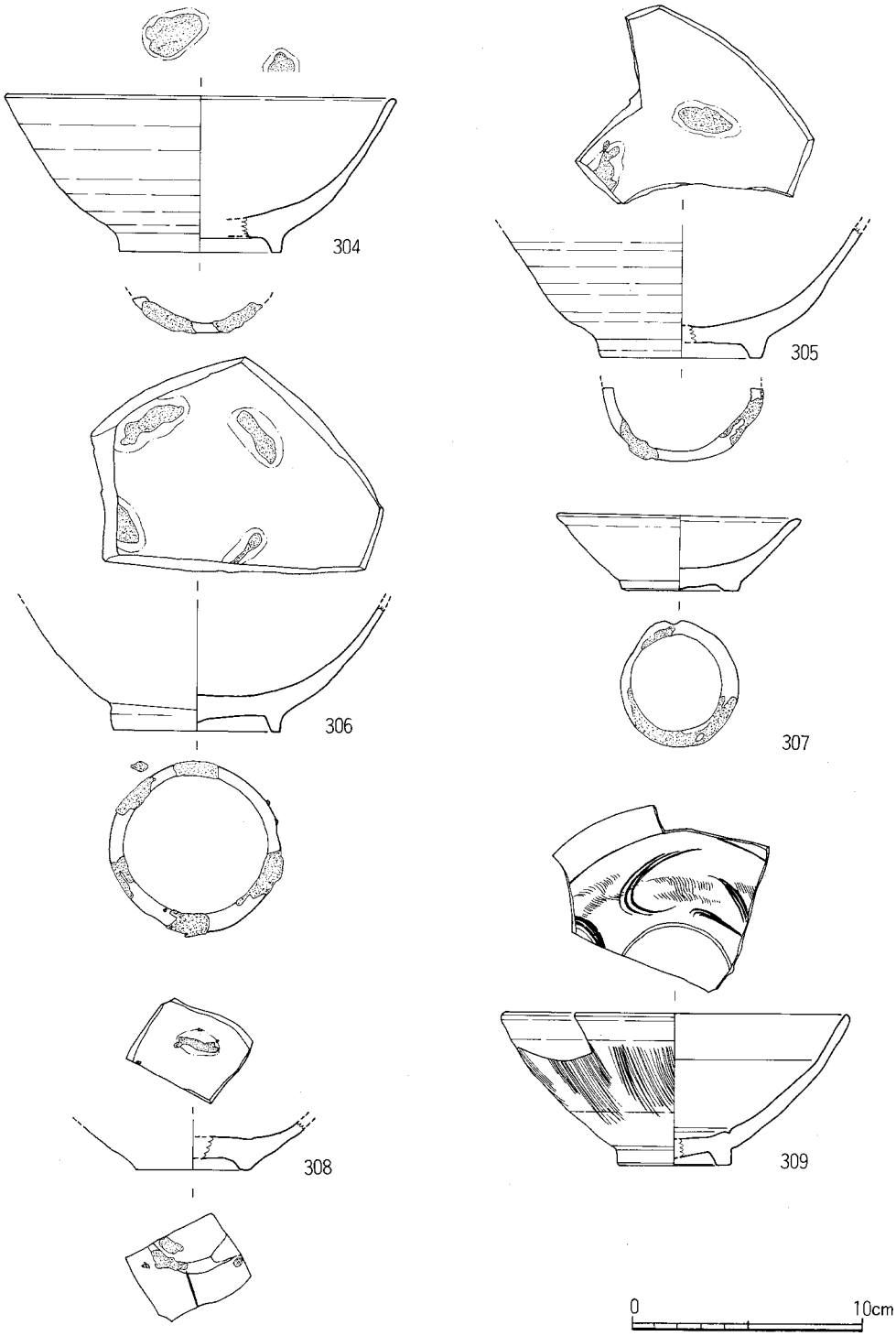
264は高台付の杯である。内面にはコテ当てが見られる。口径15.4cmを測る。265、266は土師器椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部には断面台形の高台が付く。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。266は外底面に指頭痕が見られる。口縁はやや肥厚する。色調は褐色を呈する。器高5.4cm、5.4cm、口径14.7cm、15.7cmを測る。267～269は瓦器椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部には断面台形の高台が付く。内外面にヘラミガキが施される。外底面には指頭痕が残る。器高5.1cm、6.1cm、6.0cm、口径15.8cm、16.2cm、15.8cmを測る。271～284は白磁碗Ⅳ類である。釉色は灰白色を呈する。275は見込みに沈線が巡る。285～287は白磁碗Ⅴ類である。285は内湾気味に立ち上がり、深さがある。口縁は外反する。286はわずかに口縁が外反する。287は口縁は嘴状を呈する。289は白磁碗の底部で、高台内側には墨書が見られる。花押か。288は白磁小碗で、内面には螺施状の片彫りの文様と見込みには櫛目文が施される。外面には櫛描文が施される。290～293は白磁皿である。体部は中位で折れる。釉は全面にかけられ、底面のみ露胎となる。見込みにはヘラ、櫛目文が施される。294～297は高台付の白磁皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反して平坦になる。底部には断面台形の高台が付く。釉は高台外側までかけられる。296は高台内側に墨書が見られる。「三　花押」か。297は見込みに櫛目文が施される。298は施釉陶器の蓋である。外面には蓮弁が浮き彫りされる。中位には穿孔が１カ所施される。香炉の蓋か。外面は緑色の釉がかかる。内面は露胎となる。胎土は淡褐色を呈する。299は青白磁の壺である。口縁は直立し、頸部に把手が付く。釉は青白色を呈する。300は白磁小壺の蓋である。内面は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。301は白磁小壺で、外底面は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。302～306は高麗青磁碗である。302、303は体部は内湾して立ち上がる。304は体部は内湾して立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は断面台形を呈する。釉は全面にかけられ、見込みと畳付に目跡が付く。畳付は釉を掻き取る。釉色はオリーブ色～緑褐色を呈する。胎土は砂粒を少し含み、灰色～褐色を呈する。307、308は高麗青磁の小碗である。307は口縁は内湾して立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は低く、断面台形を呈する。釉は全面にかけられ、見込みと畳付に目跡が付く。畳付きは釉を掻き取る。釉色は灰緑色を呈する。胎土は砂粒を少し含み、灰色～褐色を呈する。309は同安窯系青磁碗である。外面には櫛目文、内面には櫛状工具による花文を施す。310は天目碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁は一旦折れて外反する。体部下半は露胎となる。釉色は茶黒色を呈する。311は施釉陶器の急須である。中空の把手が１カ所付く。外面は露胎、内面は暗褐色の釉がかかる。胎土は砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。312は無釉陶器壺である。口頸部は緩やかに外反し、口縁端部は上方に少しつまみ上げる。肩部は張る。内外面ともヨコナデが施される。色調は灰黒色を呈する。胎土は砂粒を少し含む。313は施釉陶器壺である。口縁は玉縁を呈する。口縁上面には目跡が付く。釉は全面にかかり、底面のみ露胎となる。底部は上底である。釉色はオリーブ色を呈する。314は褐釉陶器壺の胴部である。外面には花文が施され



第51図　SK0170出土遺物(3)（1/3）



第52図　SK0170出土遺物(4)（1/3）



第53図　SK0170出土遺物(5)（1/3）

る。内面は露胎である。315は緑釉陶器椀である。底部に断面台形の高台が付く。胎土は灰色を呈し、硬質である。釉色はオリーブ色を呈する。底面は露胎である。316は黄釉鉄絵の陶器盤である。内面には花文が施される。外面は露胎となる。口縁内面には目跡が付く。釉色は淡灰褐色を呈する。

SK0171出土遺物（第55図317、318）

317、318は白磁碗Ⅳ類である。釉色は灰白色を呈する。

SK0182出土遺物（第55図319、320）

319は須恵質陶器の壺である。砲弾形の体部で、底部は平底である。肩部に突帯が巡る。内外面ともヨコナデである。色調は灰黒色を呈する。320は施釉陶器壺で、胴部の上半を欠いている。釉は外面のみで、底部は露胎である。胎土は砂粒を多く含み、釉色はオリーブ色を呈する。

SK0189出土遺物（第55図～第56図321～325）

321は土師器杯である。口縁を欠いている。底部の切離しはヘラ切りである。底面には墨書が見られる。同心円文。322は高麗施釉陶器である。断面台形の高台が付く。釉は全面にかかり、畳付のみ釉を掻き取る。見込みには目跡が残る。釉色は灰色がかった緑色を呈する。323は高麗青磁碗で、断面台形の高台が付く。釉は全面にかかり、釉色はオリーブ色を呈する。見込みと畳付には目跡が残る。324、325は磚である。

SK0190出土遺物（第56図326）

326は須恵器杯身である。底部に断面台形の低い高台が付く。器高4.2cm、口径12.4cmを測る。

SK0192出土遺物（第56図327～329）

327は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。内面にはコテ当てが見られる。器高3.2cm、口径15.0cmを測る。328、329は白磁碗Ⅴ類である。328は見込みに沈線が巡る。329は外面に櫛描文が施される。

SK0193出土遺物（第57図333）

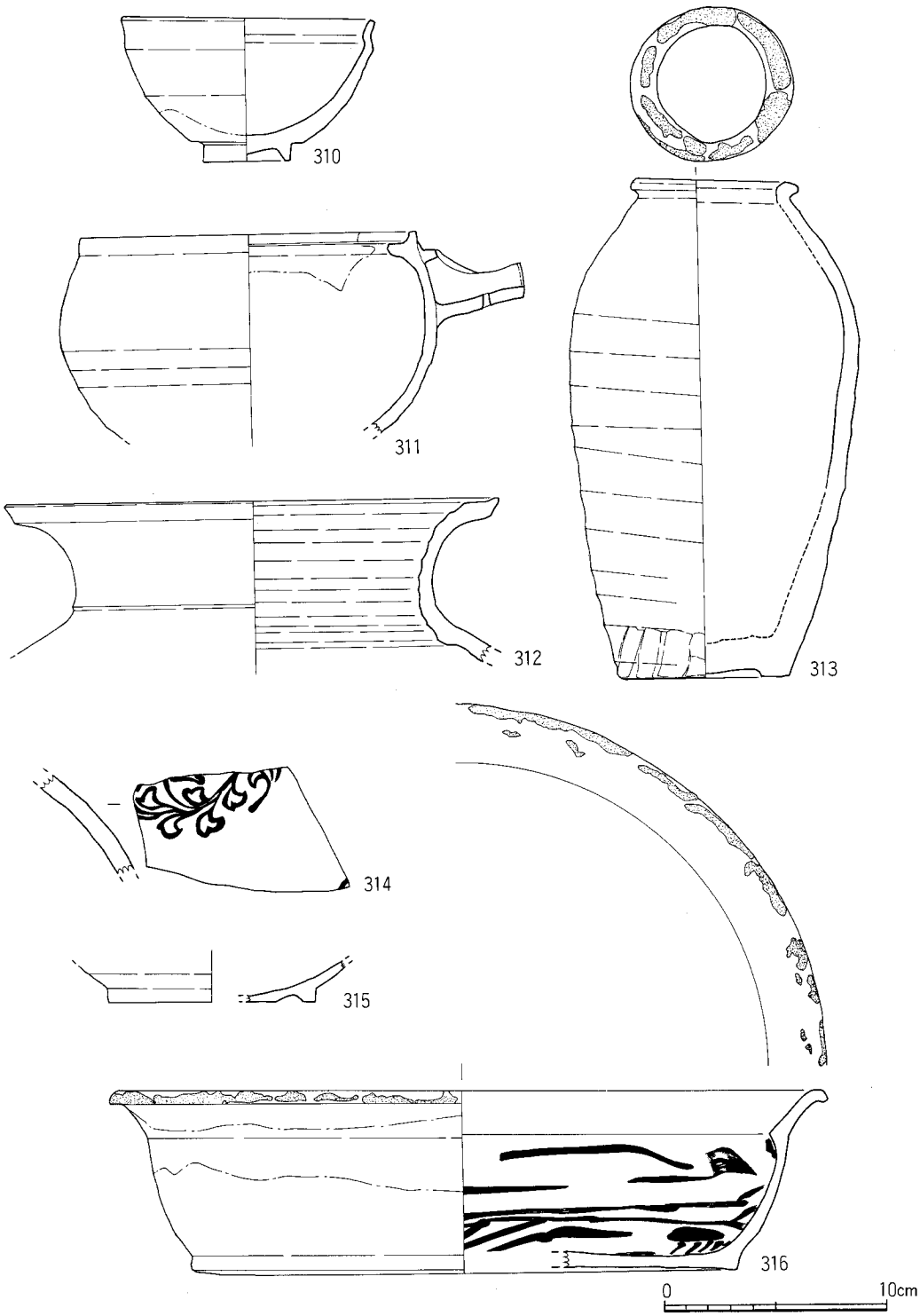
333は同安窯系青磁碗である。外面は無文である。内面には櫛目文が施される。釉色は淡いオリーブ色を呈する。

SK0194出土遺物（第57図330～332）

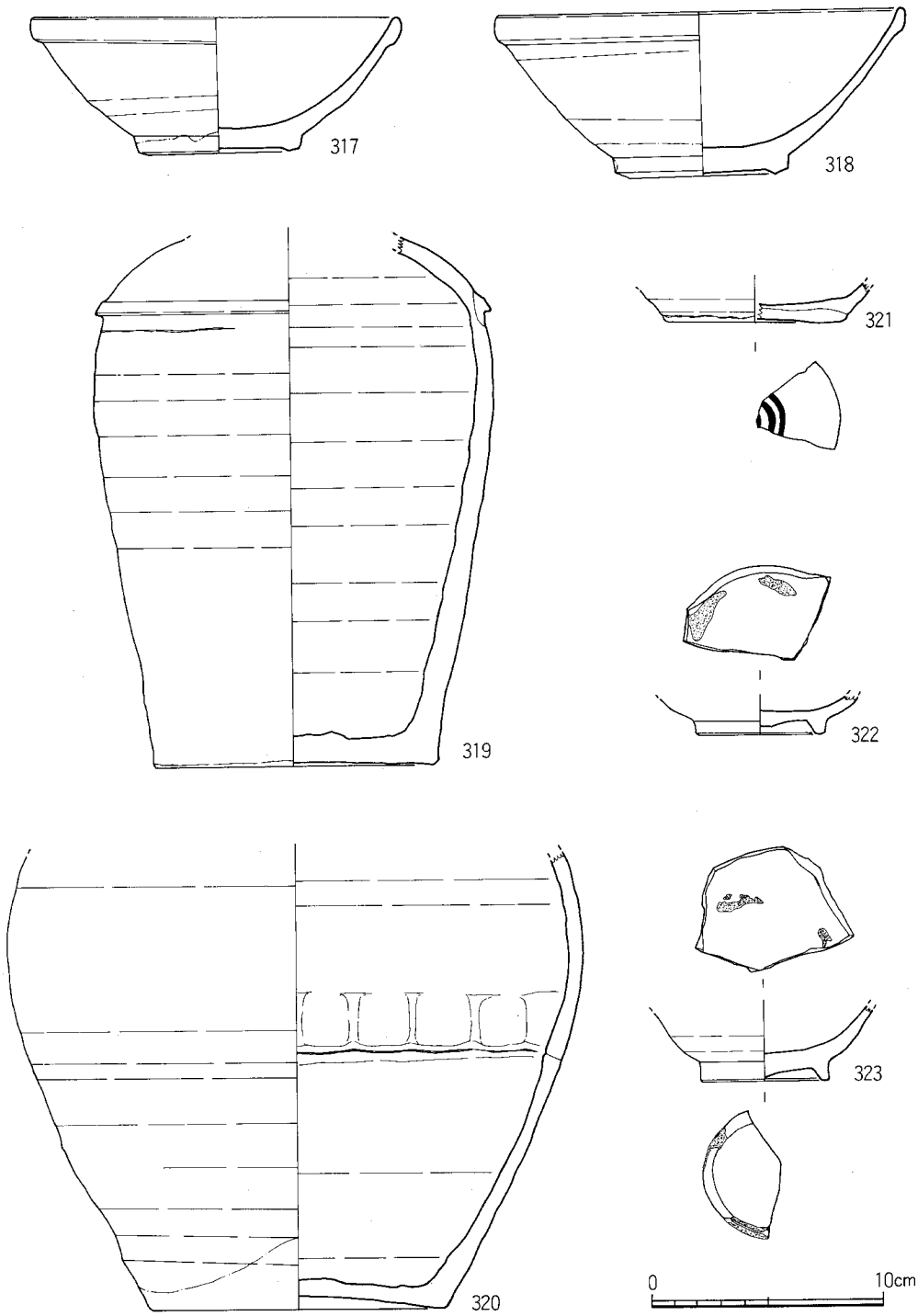
330は黒色土器椀A類である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。底部にはハの字形に開く高台が付く。内面には丁寧にヘラミガキが施される。外面下半には指頭痕が残る。331は白磁碗Ⅴ類である。口縁は嘴状を呈する。内外面に櫛目文が施される。332は龍泉窯系青磁碗である。断面台形の低い高台が付く。高台内側には目跡が残る。内面には劃花文が施される。釉色はオリーブ色を呈し、表面には氷裂が見られる。

SK0196出土遺物（第57図～第58図334～349）

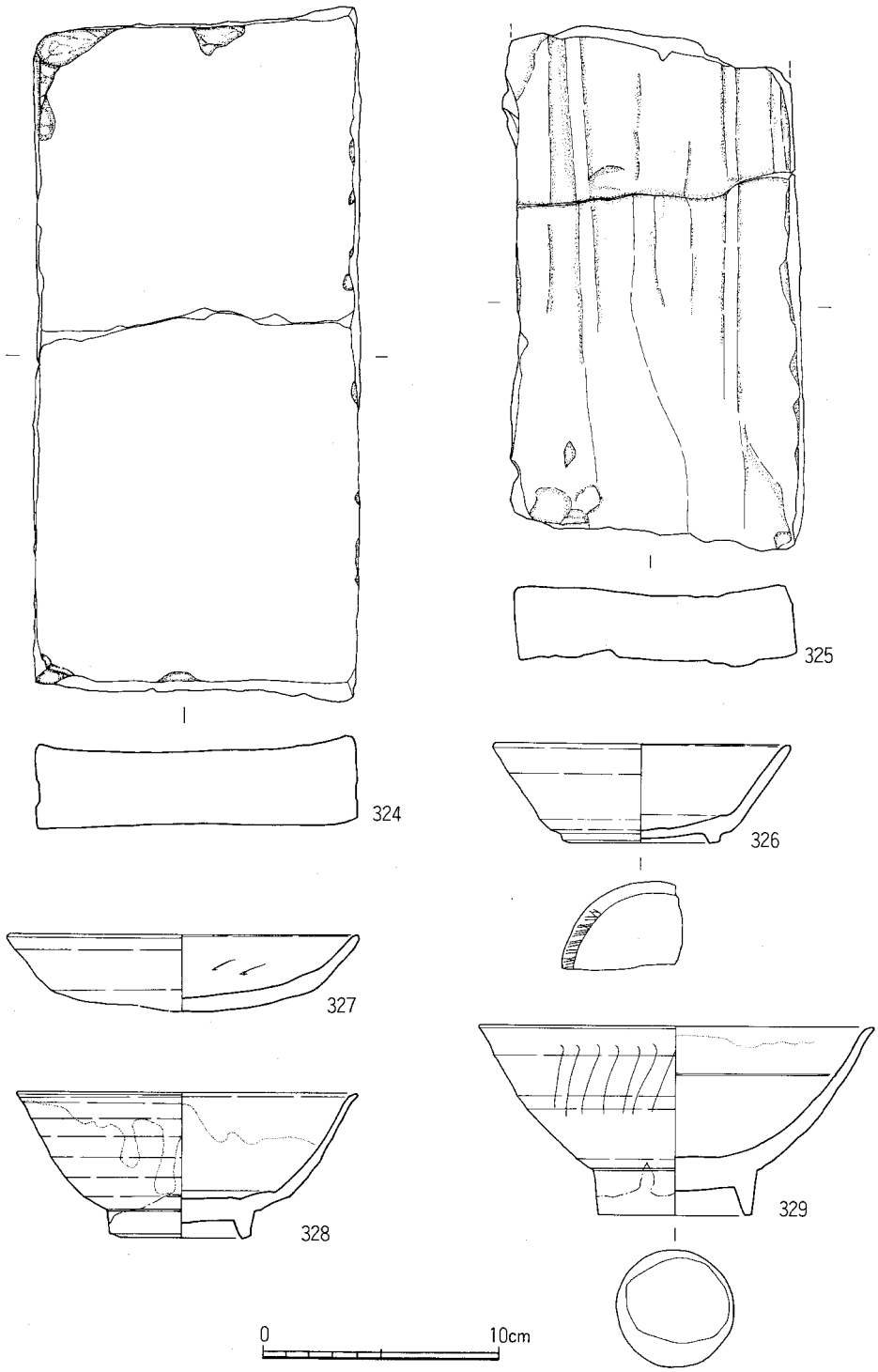
334、335は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。器高1.3cm、1.1cm、口径8.



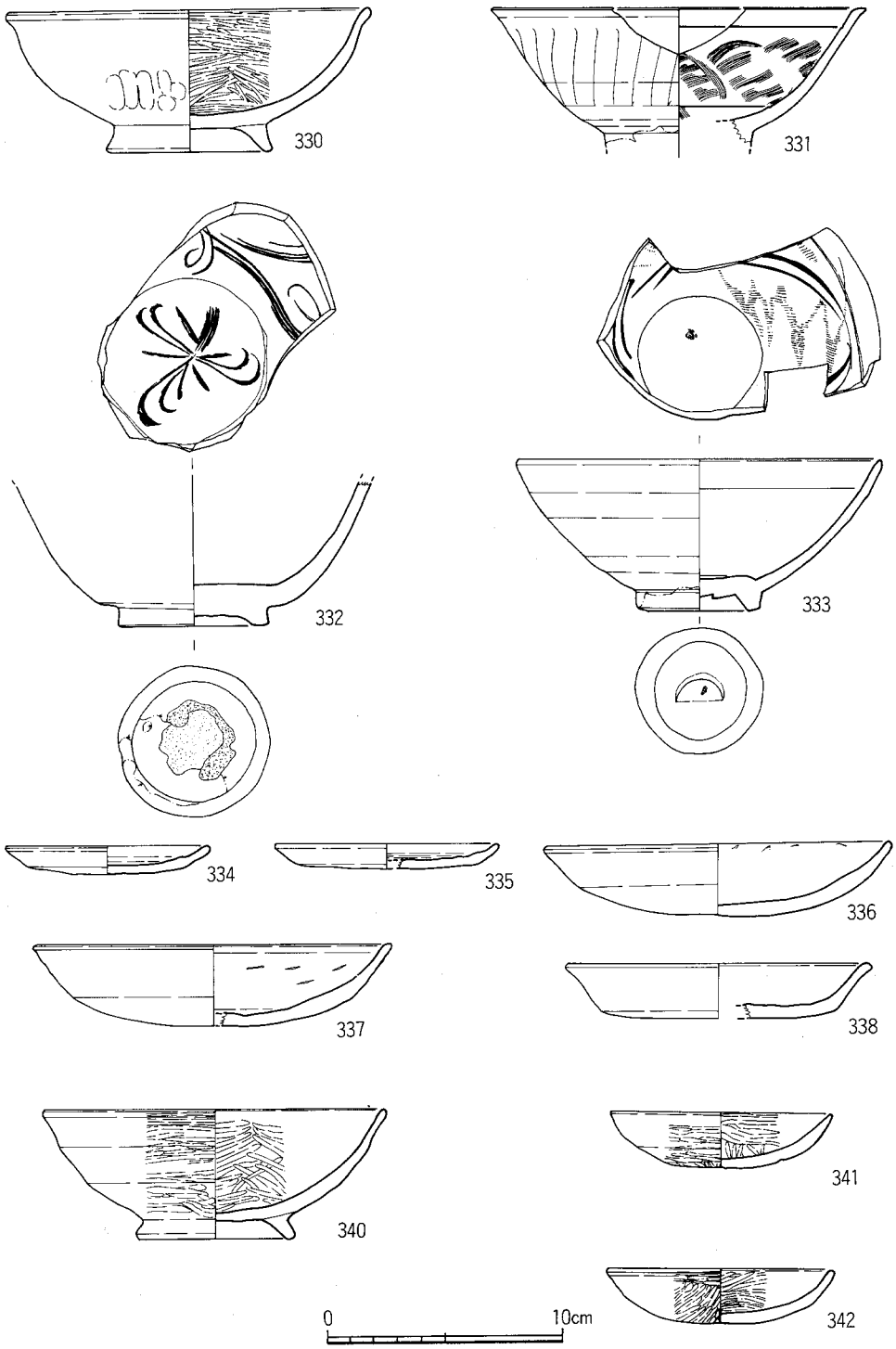
第54図　SK0170出土遺物(6)（1/3）



第55図　SK0171・0182・0189(1)出土遺物実測図（1/3）



第56図　SK0189(2)・0190・0192出土遺物実測図（1/3）



第57図　SK0193・0194・0196(1)出土遺物実測図（1/3）

4cm、9.5cmを測る。336、337は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が付く。内面にはコテ当てが見られる。器高3.1cm、3.5cm、口径14.4cm、14.9cmを測る。338は土師器杯である。底部の切離しはヘラ切りである。器高1.4cm、口径12.6cmを測る。340は土師器椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部にはハの字形に開く高台が付く。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。341は黒色土器B類杯である。丸底で、内外面に丁寧にヘラミガキが施される。器高2.4cm、口径9.3cmを測る。342は瓦器の杯である。丸底で、底部の切離しはヘラ切りである。底面に板状圧痕が残る。内外面に丁寧なヘラミガキが施される。器高2.4cm、口径9.8cmを測る。343は瓦器椀で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部に断面三角形の低い高台が付く。高台に板状圧痕が付く。内外面にヘラミガキが施される。器高5.5cm、口径16.2cmを測る。344は白磁碗Ⅳ類である。見込みに沈線が巡る。345は白磁皿である。体部は内湾気味に立ち上がる。見込みに沈線が巡る。釉色は緑がかった灰白色を呈する。底部は露胎となる。346は天目碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は低く、断面台形を呈する。釉は高台外側までかかる。釉色は茶黒色を呈する。347は越州窯系青磁碗である。体部は内湾気味に立ち上がる。底部には断面方形の高台が付く。釉は全面にかかり、畳付のみ釉を掻き取る。胎土はやや粗く、灰色～淡褐色を呈する。釉色は白褐色を呈する。見込みに目跡が残る。2次焼成を受けている。348は無釉陶器鉢である。口縁内側には2条の突帯が巡る。胎土は砂粒を多く含み、褐色を呈する。349は施釉陶器鉢である。口縁は玉縁である。外面下半のみ露胎となる。釉色は緑褐色を呈する。口縁上面に目跡が残る。

SK0198出土遺物（第58図350～353）

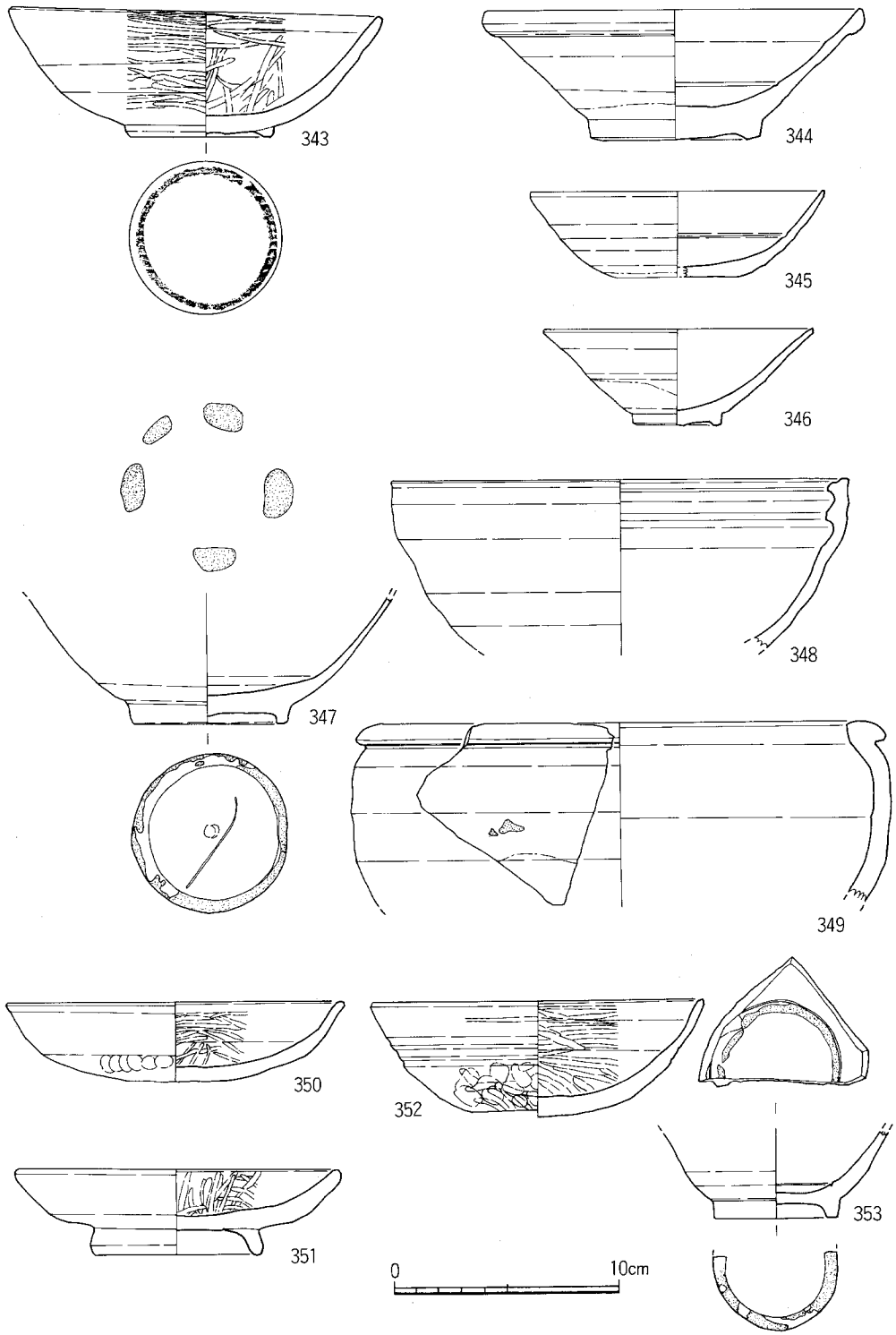
350は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が付く。内面にはコテ当てが見られる。外底面には指頭痕が見られる。器高3.6cm、口径14.7cmを測る。351土師器高台付の杯である。底部にハの字形の高台が付く。内面は丁寧にヘラミガキが施される。器高3.8cm、口径14.1cmを測る。352は黒色土器B類椀である。高台は欠損している。内面は丁寧にヘラミガキが施される。外底面には指頭痕が見られる。353は越州窯系青磁碗である。体部は内湾気味に立ち上がる。底部には断面方形の高台が付く。釉は全面にかかり、畳付のみ釉を掻き取る。胎土は密で、淡灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。見込みに目跡が残る。

SK0199出土遺物（第59図354～362）

354～359は土師器丸底杯である。内側は丁寧にヘラミガキが施される。外底面には指頭痕が見られる。器高3.1～3.9cm、口径14.2～15.1cmを測る。360は白磁碗Ⅳ類である。361は須恵器杯である。体部は直線的に立ち上がる。底部内寄りに断面台形の低い高台が付く。混入品である。

SK0205出土遺物（第59図363）

363は連江窯系青磁碗である。底部には低い高台が付く。底径は小さい。見込みにはヘラ描き



第58図　SK0196(2)・0198出土遺物実測図（1/3）

の文様が施される。釉色は緑灰色を呈する。外面下半が露胎となる。

SK0206出土遺物（第59図364～368）

364は土師器杯である。底部の切離しはヘラ切りである。内外面に丁寧にヘラミガキが施される。器高3.0cm、口径10.9cmを測る。混入品か。365は白磁碗Ⅱ類である。高台内側が露胎となる。釉色は灰白色を呈する。366は白磁高台付の皿である。見込みには沈線が巡る。釉は高台外側までかかる。釉色は灰白色を呈する。367は連江窯系青磁碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。見込みにはヘラ描きの文様が施される。底部には低い高台が付く。底径は小さい。釉色は緑灰色を呈する。外面下半が露胎となる。368は施釉陶器壺である。釉は内面のみ見られる。胎土は砂粒をわずかに含み、釉色は灰緑色を呈する。

SK0210出土遺物（第59図369）

369は陶器壺の底部である。内面と外面下半は露胎となる。胎土は砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈する。釉色は黒褐色を呈する。

SK0214出土遺物（第59図370～373）

370～372は土師器杯である。底部の切離しは糸切りである。370は体部が直線的に立ち上がる。器高2.7～2.9cm、口径11.9～13.9cmを測る。373は施釉陶器壺である。口縁は玉縁を呈する。内外面とも釉がかかる。胎土は砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。釉色は緑褐色を呈する。把手が取れた痕跡がある。

SK0218出土遺物（第60図374～376）

374は白磁碗Ⅴ類である。内面には櫛目文が施される。375は白磁碗の底部で、高台内側に墨書が見られる。花押か。376は白磁小壺の蓋である。外面は蓮弁状の文様を施す。外面のみ釉がかかる。釉色は灰白色を呈する。

SK0220出土遺物（第60図377）

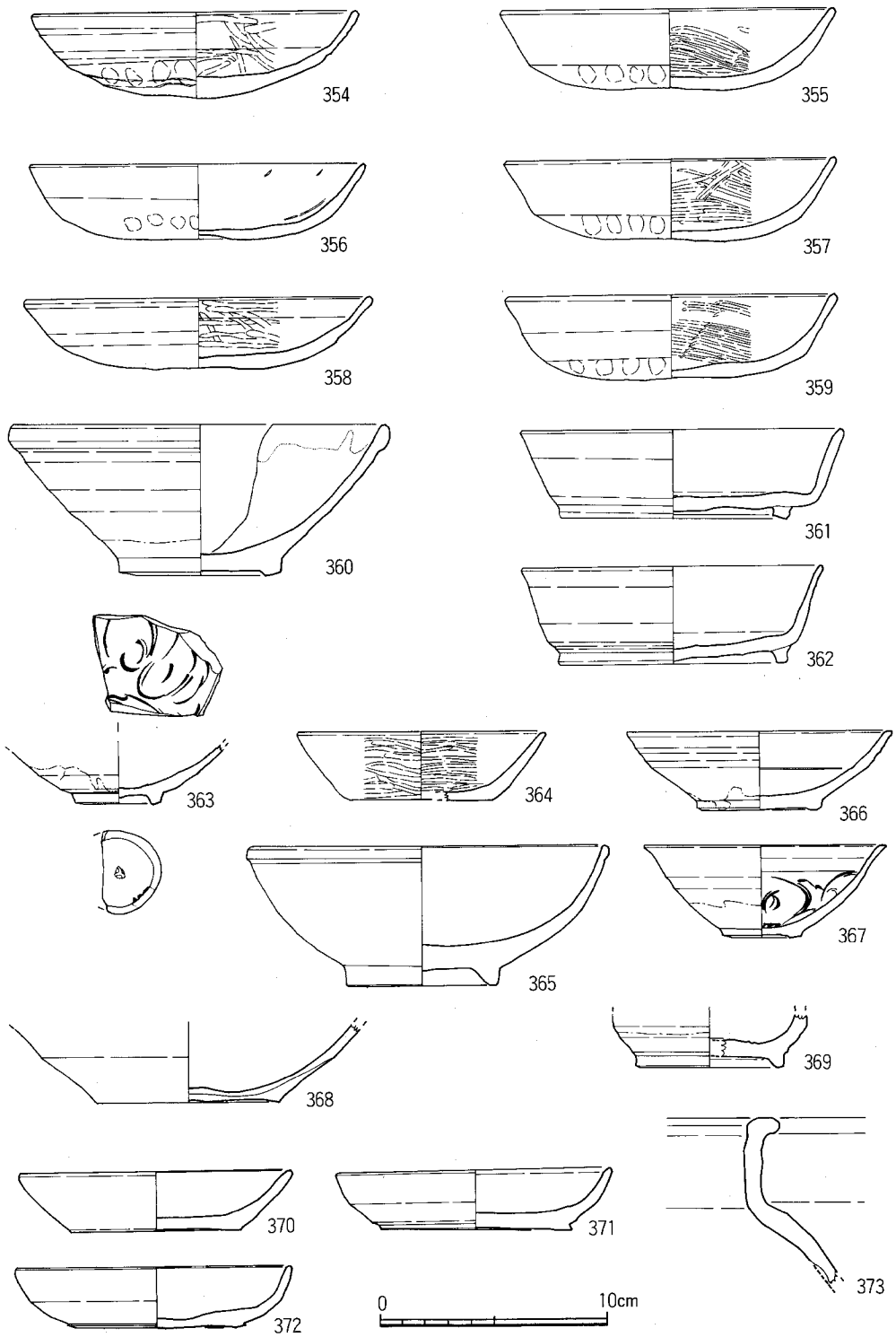
377は白磁高台付の皿である。内面には沈線が巡る。外面下半は露胎となる。

SK0223出土遺物（第60図378～382）

378は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。器高1.3cm、口径8.9cmを呈する。379は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。内外面ともヨコナデが施される。器高3.7cm、口径14.8cmを測る。380は黒色土器A類である。口縁は一旦折れて外反する。内外面とも丁寧にヘラミガキが施される。381は連江窯系青磁碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。見込みにはヘラ描きの文様が施される。底部には低い高台が付く。底径は小さい。釉色は緑灰色を呈する。外面下半が露胎となる。382は越州窯系青磁碗である。高台内側は露胎となり、目跡が残る。見込みには花文が施される。釉色は茶褐色を呈する。

SK0224出土遺物（第60図383～386）

383は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。内外面ともヨコナデが施され



第59図　SK0199・0205・0206・0210・0214出土遺物実測図（1/3）

る。器高3.5cm、口径13.6cmを測る。384は土師器杯である。底部の切離しは糸切りである。底面には板状圧痕が残る。器高3.5cm、口径13.6cmを測る。385は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。底面には板状圧痕が残る。器高1.0cm、口径8.3cmを測る。386は白磁小皿である。底部のみ露胎となる。見込みには沈線が巡る。

SK0226出土遺物（第60図387～393）

387は土師器蓋である。口縁端部に沈線が巡る。胎土は砂粒を少し含み、赤褐色を呈する。前時代の混入品か。388は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。器高1.7cm、口径9.0cmを測る。389、390は瓦器椀で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部には断面台形の低い高台が付く。内外面に粗いヘラミガキが施される。器高5.5cm、5.8cm、口径17.3、16.6cmを測る。391は白磁碗Ⅳ類である。見込みには沈線が巡る。392は白磁高台付の皿である。口縁は玉縁を呈する。393青白磁の小碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は断面三角形の細いもので、底径は小さい。高台内側は露胎となる。釉色は淡い青白色を呈する。

SK0232出土遺物（第61図394～399）

394は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが見られる。器高4.0cm、口径14.8cmを測る。395は白磁碗Ⅱ類で、体部は内湾気味に立ち上がる。外面下半は露胎となる。396は白磁水注である。397は青磁香炉である。内外面に釉がかかり、釉色はオリーブ色を呈する。398は越州窯系青磁の杯である。底部にはハの字形に開く高台が付く。見込みには花文が片彫りされる。胎土は砂粒を少し含み、明褐色を呈する。釉は全面にかかり、釉色は褐色を呈する。399は越州窯系青磁の碗である。底部には断面台形の高台が付く。胎土は砂粒を少し含み、灰色を呈する。釉は全面にかかり、釉色はオリーブ色を呈する。見込みと畳付には目跡が残る。

SK0236出土遺物（第61図400）

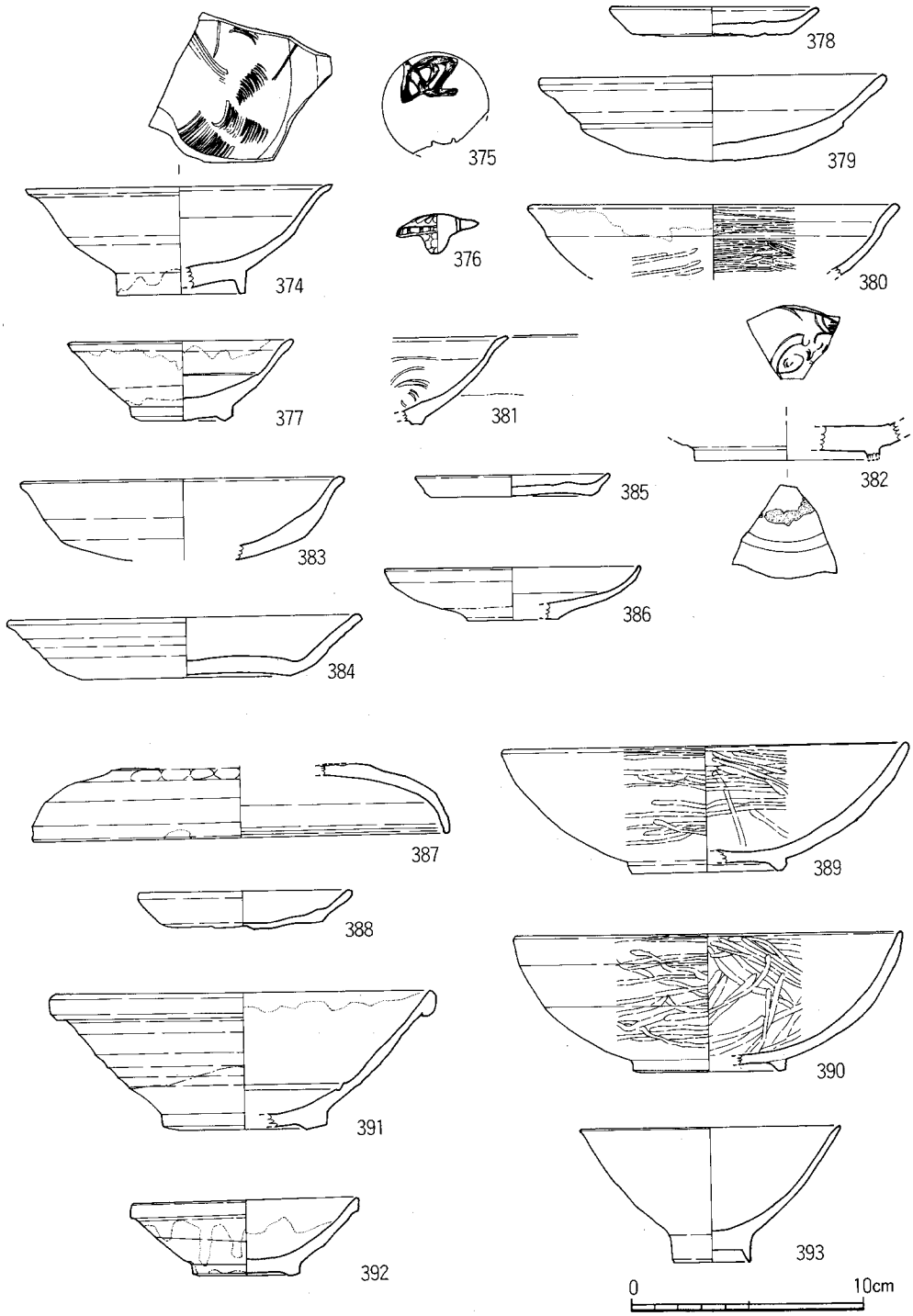
400は土師器小皿で、体部は直立する。底部の切離しは糸切りである。口縁には煤が付着する。器高1.4cm、口径5.3cmを測る。

SK0239出土遺物（第61図401～402）

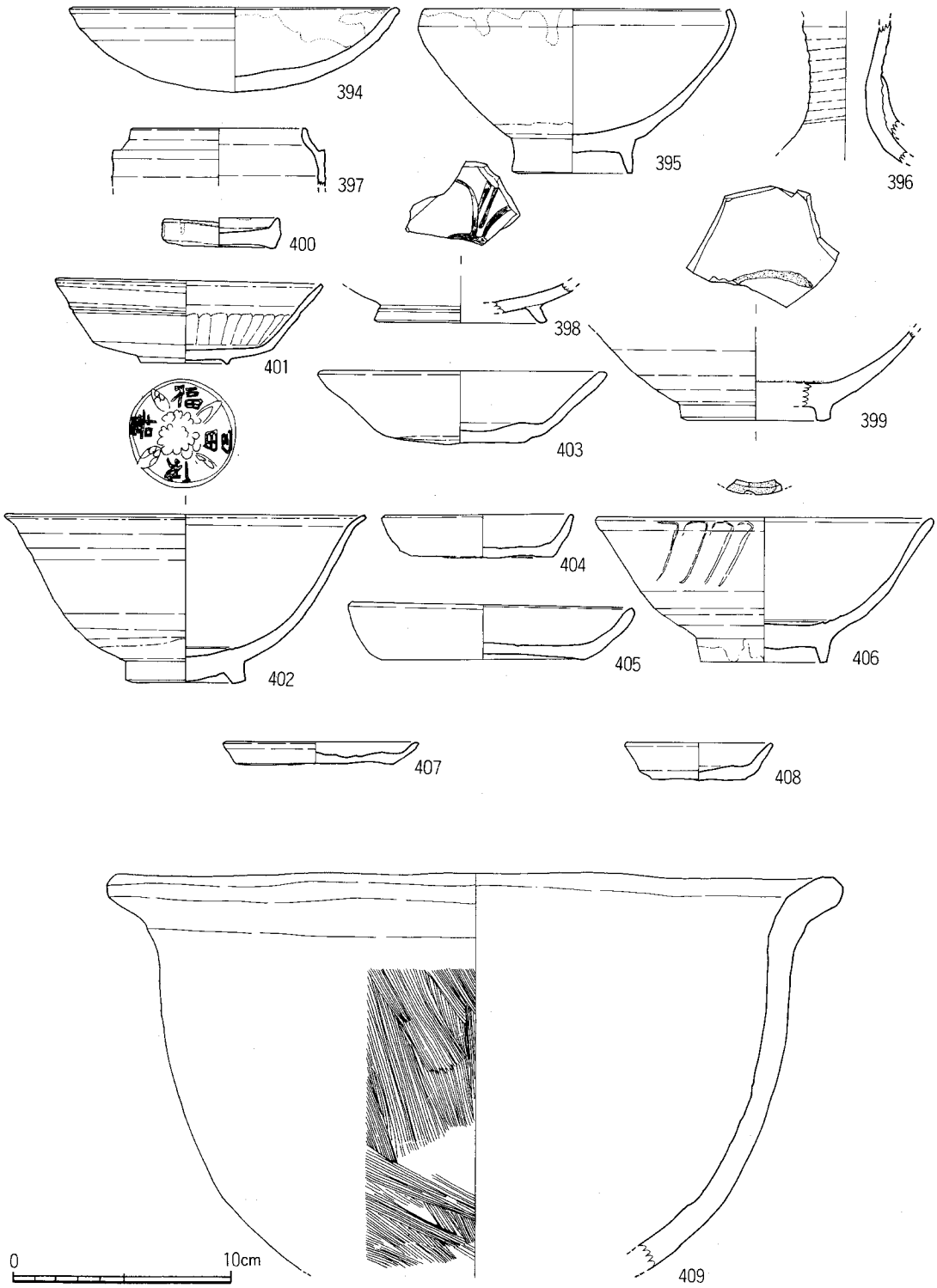
401は白磁高台付の皿である。腰折れの体部に、底部中央に低い高台が付く。口縁は口禿で、見込みは蓮弁風にケズリを施す。高台内側のみ露胎となる。釉色は淡褐色を呈する。器高3.8cm、口径12.1cmを測る。402は白磁碗で、口縁は口禿である。見込みには沈線が巡る。釉は体部下半までかかる。釉色は灰白色を呈する。見込みには花文と「福　禄　富　寿」の文字が施される。器高7.8cm、口径16.5cmを測る。

SK0259出土遺物（第61図403）

403は土師器杯である。底部の切離しはヘラ切りである。底部内外面に煤の付着が見られる。



第60図　SK0218・0220・0223・0224・0226出土遺物実測図（1/3）



第61図　SK0232・0236・0239・0259・0260・0270・0277出土遺物実測図（1/3）

器高3.4cm、口径12.9cmを測る。

SK0260出土遺物（第61図404～406）

404は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りある。口縁に煤の付着が見られる。器高2.0cm、口径10.1cmを測る。405は土師器杯である。底部の切離しは糸切りである。器高2.6cm、口径13.0cmを測る。406は白磁碗Ⅴ類である。外面には片彫りの縦線を施す。見込みには沈線が巡る。釉色は淡緑灰色を呈する。

SK0270出土遺物（第61図407）

407は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。器高1.1cm、口径8.8cmを測る。

SK0277出土遺物（第61図408～409）

408は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。底面には板状圧痕が残る。口縁には煤が付着する。器高1.8cm、口径6.7cmを測る。409は土師器鍋である。口縁は外反し、底部は丸底である。外面は縦方向のハケメ、内面はナデである。外面には煤が付着する。色調は暗褐色を呈する。口径33.0cmを測る。

SK0279出土遺物（第62図410～417）

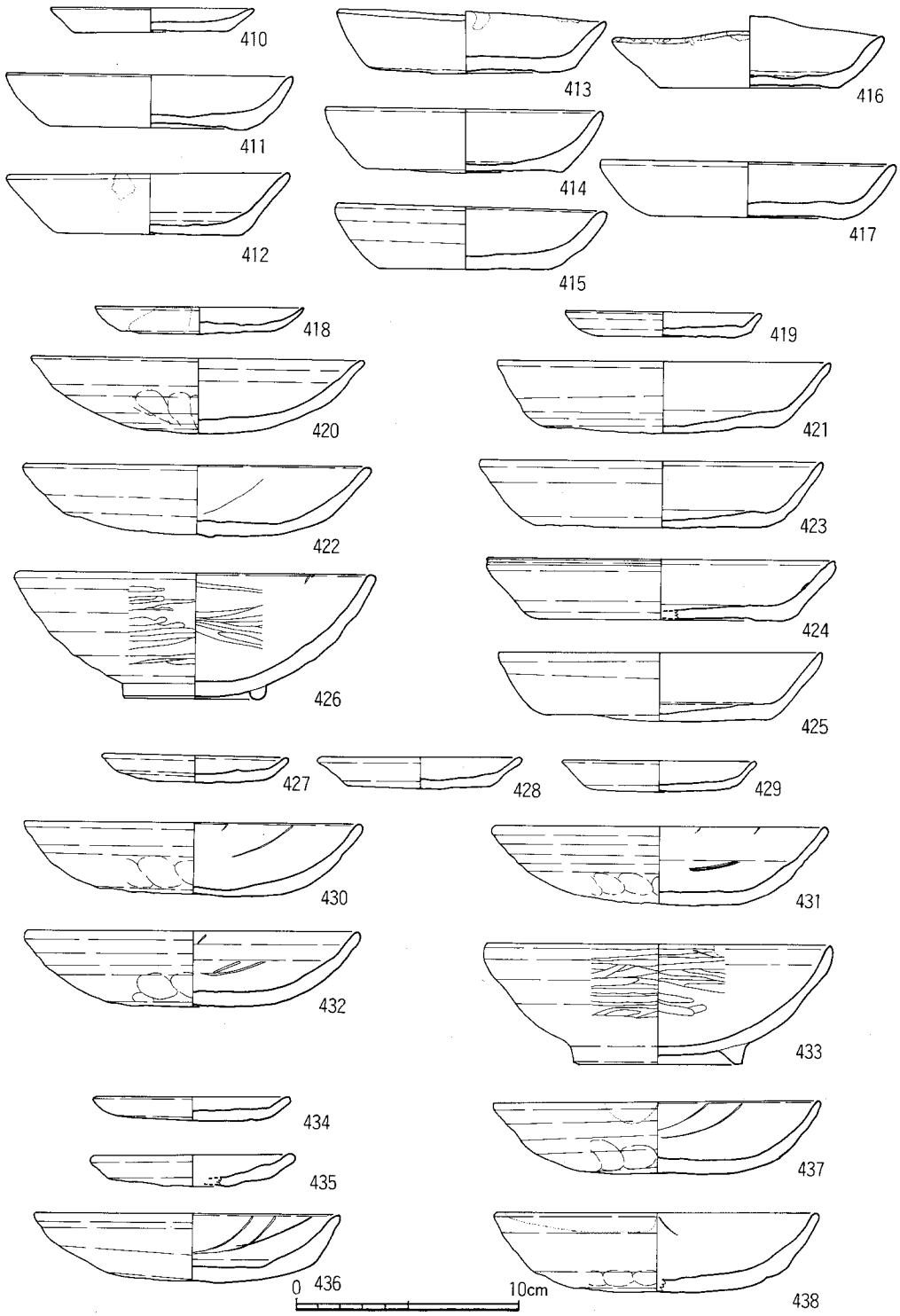
410は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。底面には板状圧痕が残る。器高1.1cm、口径8.9cmを測る。411～417は土師器杯である。底部の切離しは糸切りである。411、413、416は底面には板状圧痕が残る。器高2.4～3.2cm、口径11.9～13.1cmを測る。

SK0281出土遺物（第62図～第85図418～724）

SK0281は輸入陶磁器の廃棄土坑である。遺物は上層、中層、下層の3層に分けて取り上げた。その内、上層の遺物は陶磁器類の廃棄後に流れこんだもので、廃棄行為に伴うものではない。したがって、SK0281は廃棄された遺物は基本的には中層、下層のものに限られる。下層、中層の出土遺物は表4の通りである。

418～426は土師器で、上層から出土した。418、419は小皿である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。器高1.1～1.2cm、口径9.5～9.9cmを測る。420、421は丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。外底面には指頭痕が残る。器高3.2～3.5cm、口径15.0～15.8cmを測る。422～425は杯で、底部の切離しは糸切りである。底面には板状圧痕が残る。器高2.8～3.3cm、口径14.8～15.8cmを測る。

427～433は中層から出土した。中層以下の土師器は底部の切離しはヘラ切りのみである。時期的な差は無いと考えられる。427～432は土師器、433は瓦器である。427～429は小皿である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。器高1.2～1.4cm、口径8.2～8.8cmを測る。430～432は丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが、外底面には指頭痕が残る。器高3.3～3.5cm、口径14.8～15.0cmを測る。433は瓦器椀である。体部は内



第62図　SK0279・0281(1)出土遺物実測図（1/3）

湾気味に立ち上がり、底部には断面台形の高台が付く。内面はコテ当て後、横方向のヘラミガキが施される。外面には横方向のヘラミガキが施される。器高5.4cm、口径15.4cmを測る。

434～438は土師器で、下層から出土した。434、435は小皿である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。器高1.0～1.4cm、口径8.5～8.8cmを測る。436～438は丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが、外底面には指頭痕が残る。器高3.0～3.5cm、口径13.4～14.6cmを測る。

掲載した輸入陶磁器類は中、下層出土のものである。それぞれの層で取り上げたもので接合するものがあり、一括遺物と見なすことができる。

439～494は白磁碗Ⅱ類である。白磁の出土量の約22%を占める。Ⅱ類には口縁が細かい玉縁を呈するものと口縁をやや内湾させるものがある。Ⅱ類では前者が大半を占める。後者のものには内面に白堆線を施すものがある。釉は高台外側までかかる。器面に化粧土をかけるものが多い。釉色は乳白色～青白色を呈する。

495～584は白磁碗Ⅳ類である。白磁の出土量の約24%を占める。Ⅳ類には見込みに沈線が巡るものと無いものがある。Ⅳ類では前者が半数以上を占める。また、少数だが、見込みに目跡が残るものもある。釉は体部下半までかかる。釉色は灰白色～緑灰色を呈する。521は見込みに

第４表　SK0281出土陶磁器一覧

輸入陶磁器	白磁	碗Ⅱ－１、Ⅳ－１、Ⅳ－２、Ⅳ－４、Ⅴ－１－a、Ⅴ－２－a、Ⅵ（鉄絵） 高台付皿Ⅰ、Ⅱ、平皿
	青磁	連江窯系碗；７(4)、越州窯系碗；１(1)、壷；１ 同安窯系碗；１、青白磁碗；２
	中国陶器	A群Ⅰ－盤－１；10、Ⅰ－黄褐釉四耳壷；29、Ⅰ－茶緑釉四耳壷；９ Ⅰ－褐釉四耳壷；21、Ⅲ－小口瓶；１、準A群茶釉四耳壷：52 B群長瓶；５、袋物；５　D群；大型容器
	朝鮮系陶器	無釉陶器壷
国産土器	土師器	丸底杯（ヘラ）、杯（ヘラ）、小皿（ヘラ）、黒色土器
	瓦器	椀

層位＼白磁碗	Ⅱ　類	Ⅳ　類	Ⅴ　類
中　層	16(8)	40(2)	88(19)
下　層	376(90)	387(103)	1369(224)
合　計	392(98)	427(105)	1457(243)

※数値は破片数：（　）内の数は破片中の底部の数、陶磁器の分類は博多分類

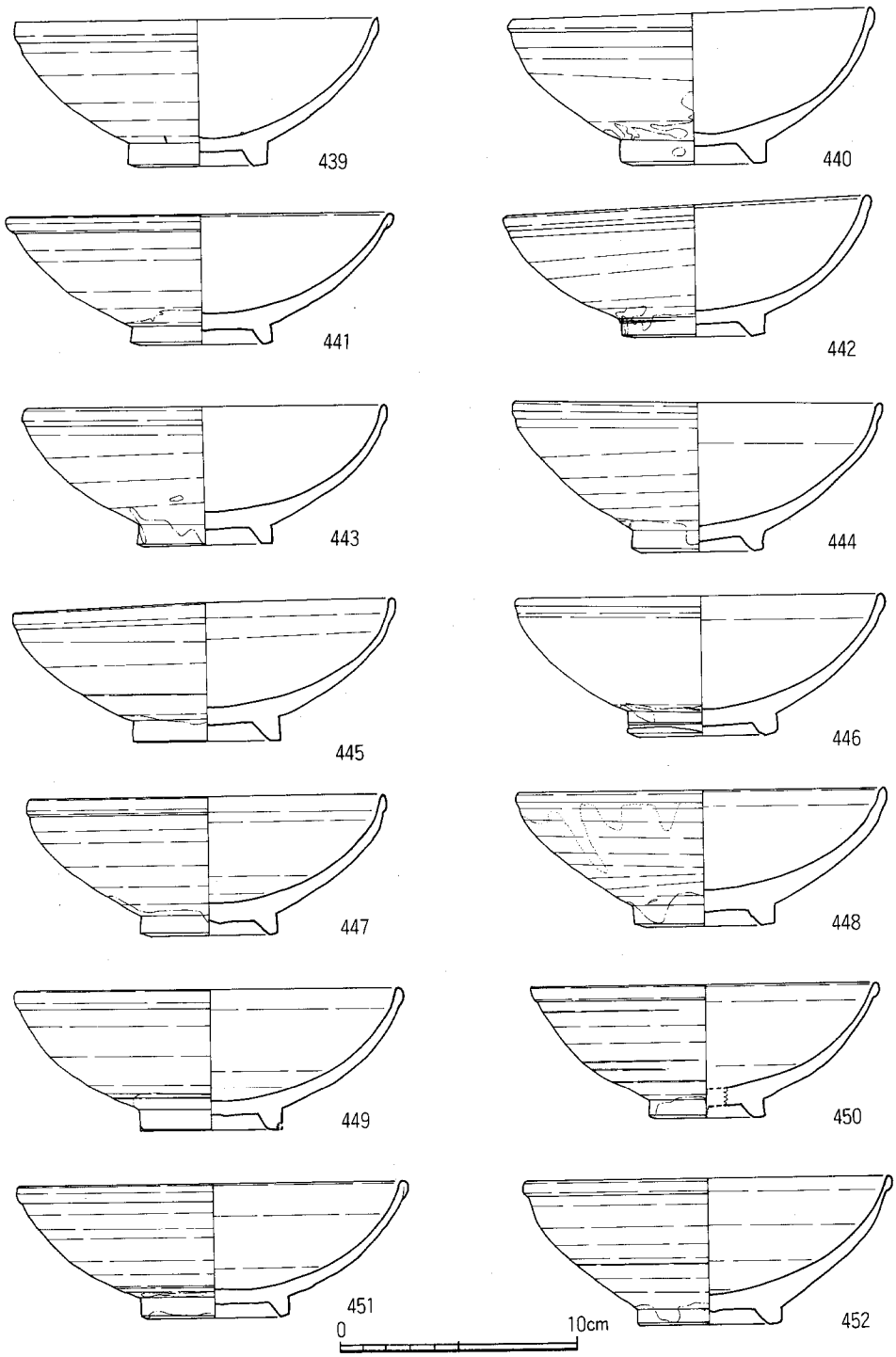
文字が彫り込まれる。

585～702は白磁碗Ⅴ類である。白磁の出土量の約54%を占める。Ⅴ類には外面が無文のものと片彫りの縦線を施すものがある。Ⅴ類では前者がほとんどを占める。見込みには沈線が巡る。口縁は外反するが、端部の作りには尖り気味に仕上げるもの、丸く仕上げるもの等幾つかのバリエーションが見られる。釉は高台外側までかかる。釉色は淡黄色～灰白色を呈する。

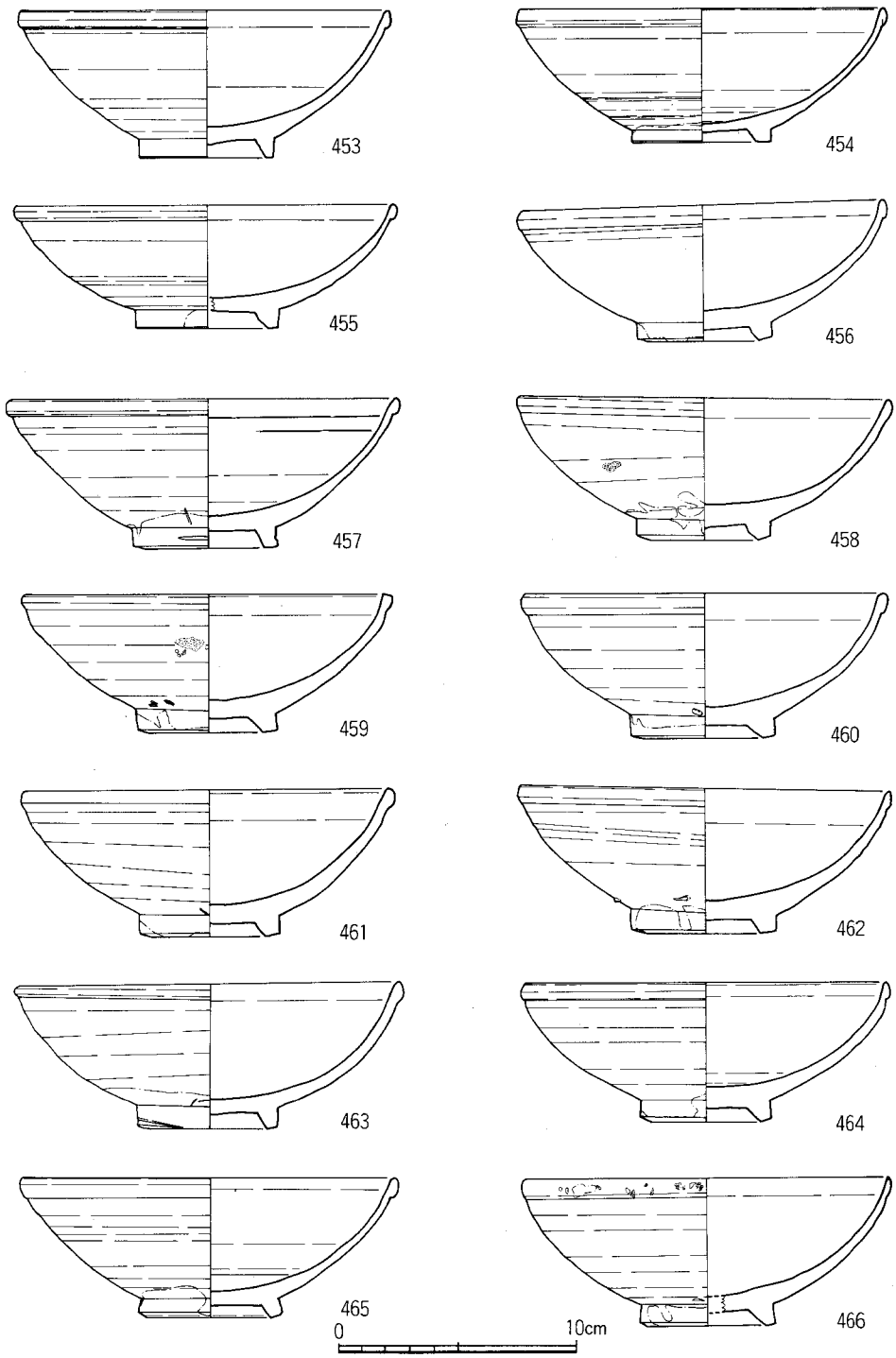
703は白磁碗である。上層の遺物である。体部は直線的に立ち上がる。見込みの釉は掻き取る。外面中位以下は露胎である。二次焼成を受けている。704は白磁小碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁は外反する。外面には片彫りの縦線が施される。釉は高台外側までかかる。釉色は灰白色を呈する。705～710は白磁平底皿である。体部は内湾気味に立ち上がる。見込みには沈線が巡る。底部は露胎となる。釉色は灰白色～黄灰色を呈する。712は白磁平底皿で、見込みに蕉葉文を施す。711は連江窯系青磁碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。見込みにはヘラ描きの文様が施される。底部には低い高台が付く。底径は小さい。釉色は緑灰色を呈する。外面下半が露胎となる。713は大型の白磁碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁は大きく外反する。見込みの釉は輪状に掻き取り、釉は高台外側までかかる。釉色は灰緑色を呈する。内面には鉄絵が施される。器高9.2cm、口径24.4cmを測る。

714～722は施釉陶器である。714～718は四耳壺である。四耳壺には中型（714、715）と大型（716～718）のものがある。714は胎土は、少し砂粒を含み、灰褐色を呈する。釉色は黄褐色を呈する。715は胎土は少し砂粒を含み、暗灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。716、717は胎土は多く砂粒を含み、暗灰色を呈する。釉色は茶色を呈する。718は胎土は、少し砂粒を含み、灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。肩部には4条の櫛描波状文が施される。719、720は壺である。内外面に釉がかかる。口縁には目跡が残る。胎土は暗灰色を呈し、釉は灰オリーブ色を呈する。721は壺で、胎土は多く砂粒を含み、暗灰色を呈する。釉色は茶色を呈する。722は盤である。内面と口縁外面に釉がかかる。胎土は砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。見込みには鉄絵が施される。口縁上面には目跡が残る。

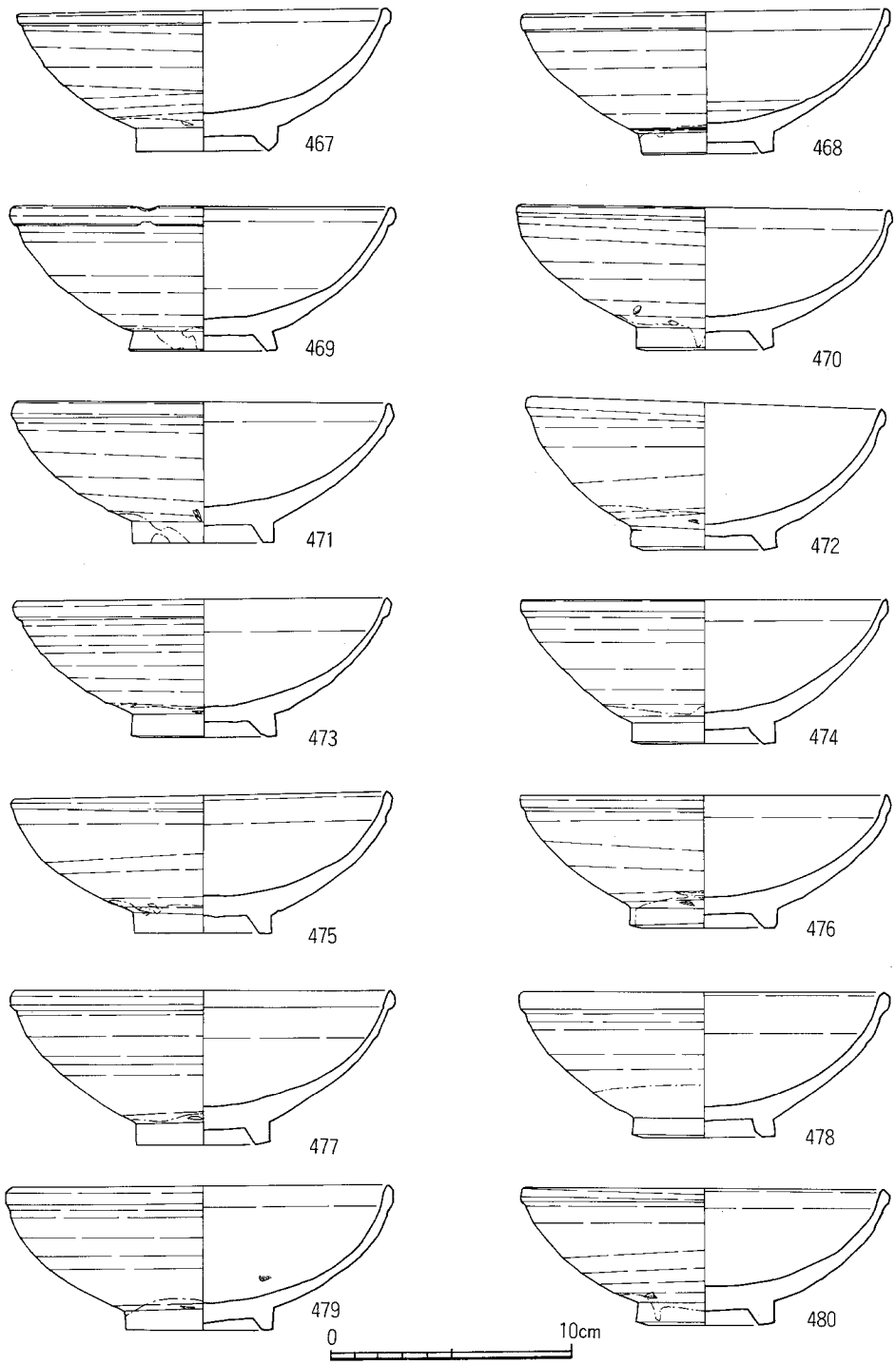
723、724は無釉陶器の壺である。723は口頸部は大きく外反し、口縁外面には断面三角形の突帯が付く。頸部には2条の波状文が施される。胎土は砂粒をほとんど含まない。硬質で、色調は表面は暗青灰色を呈するが、内部は赤褐色を呈する。724は口頸部は緩やかに外反し、口縁は二重口縁になる。胴部は張らず、胴部最大径は中位以下にある。底部は平底である。整形は輪積みで、叩きを施したと考えられるが、器面には痕跡は残っていない。器壁は5㎜前後である。調整は内外面ともヨコナデである。焼成は良好で、硬質である。色調は暗灰色を呈する。器高30.9cm、口径12.8cm、底径18.8cmを測る。やや焼け歪んでいる。



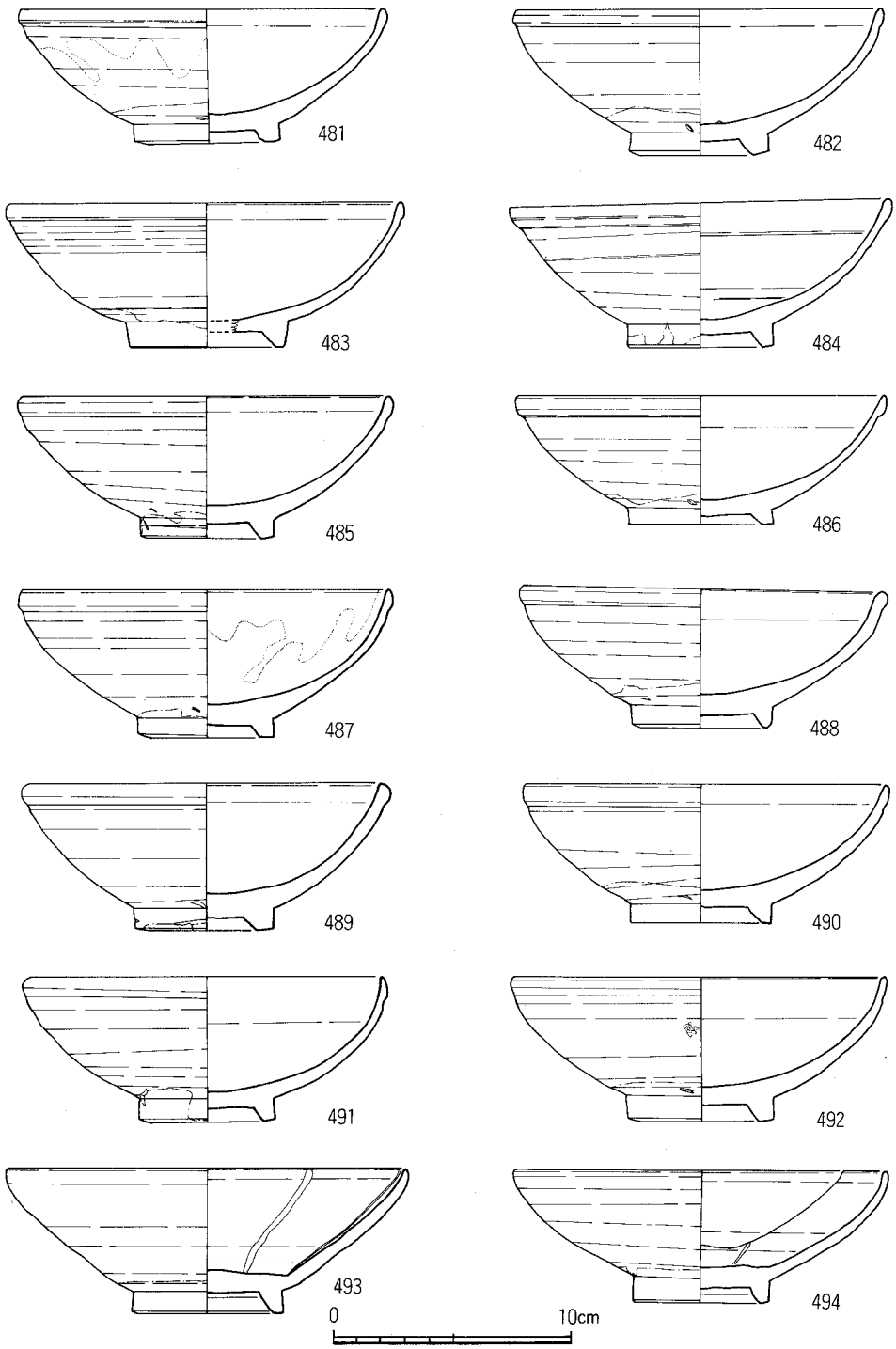
第63図　SK0281出土遺物実測図(2)（1/3）



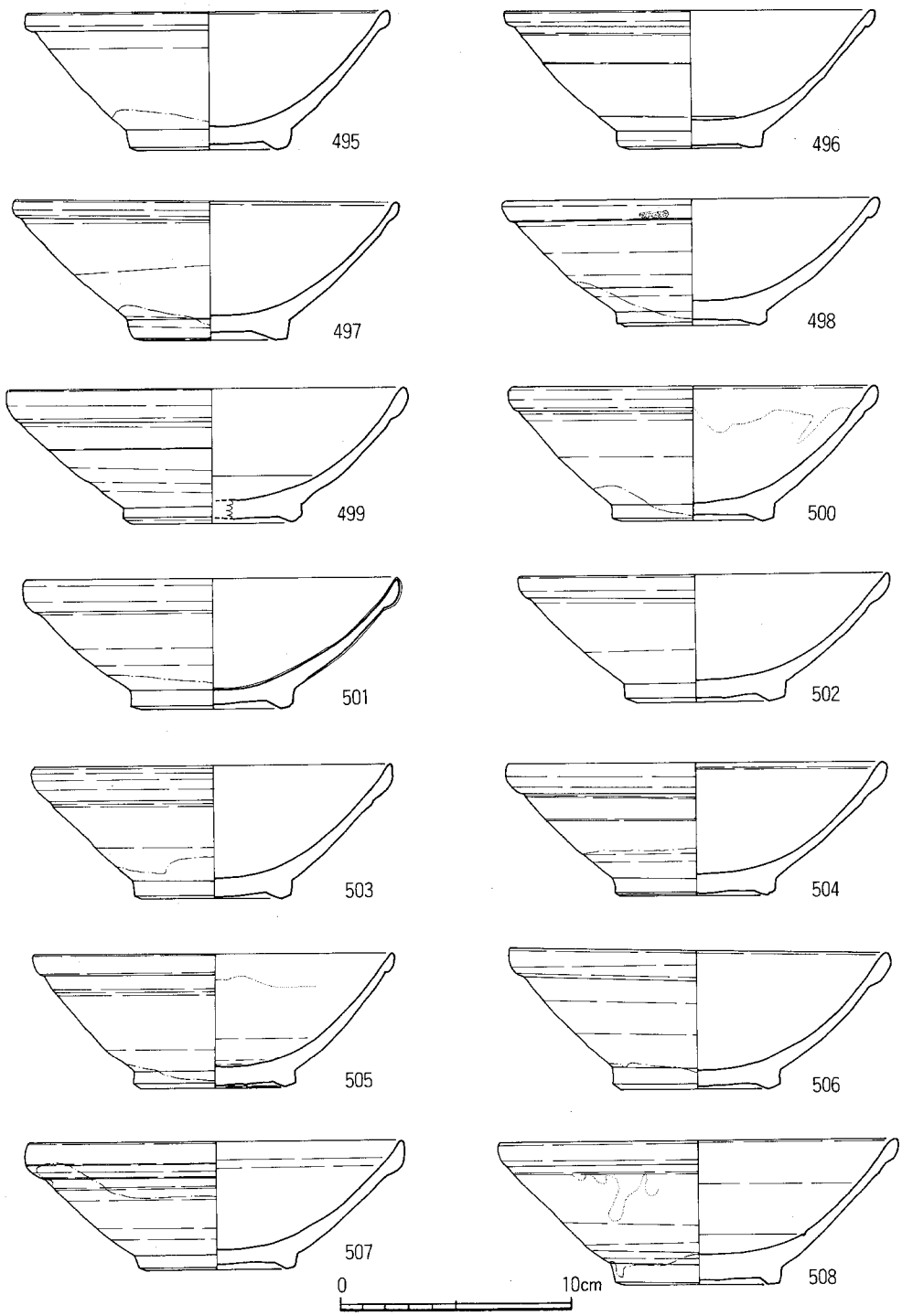
第64図　SK0281出土遺物実測図(3)（1/3）



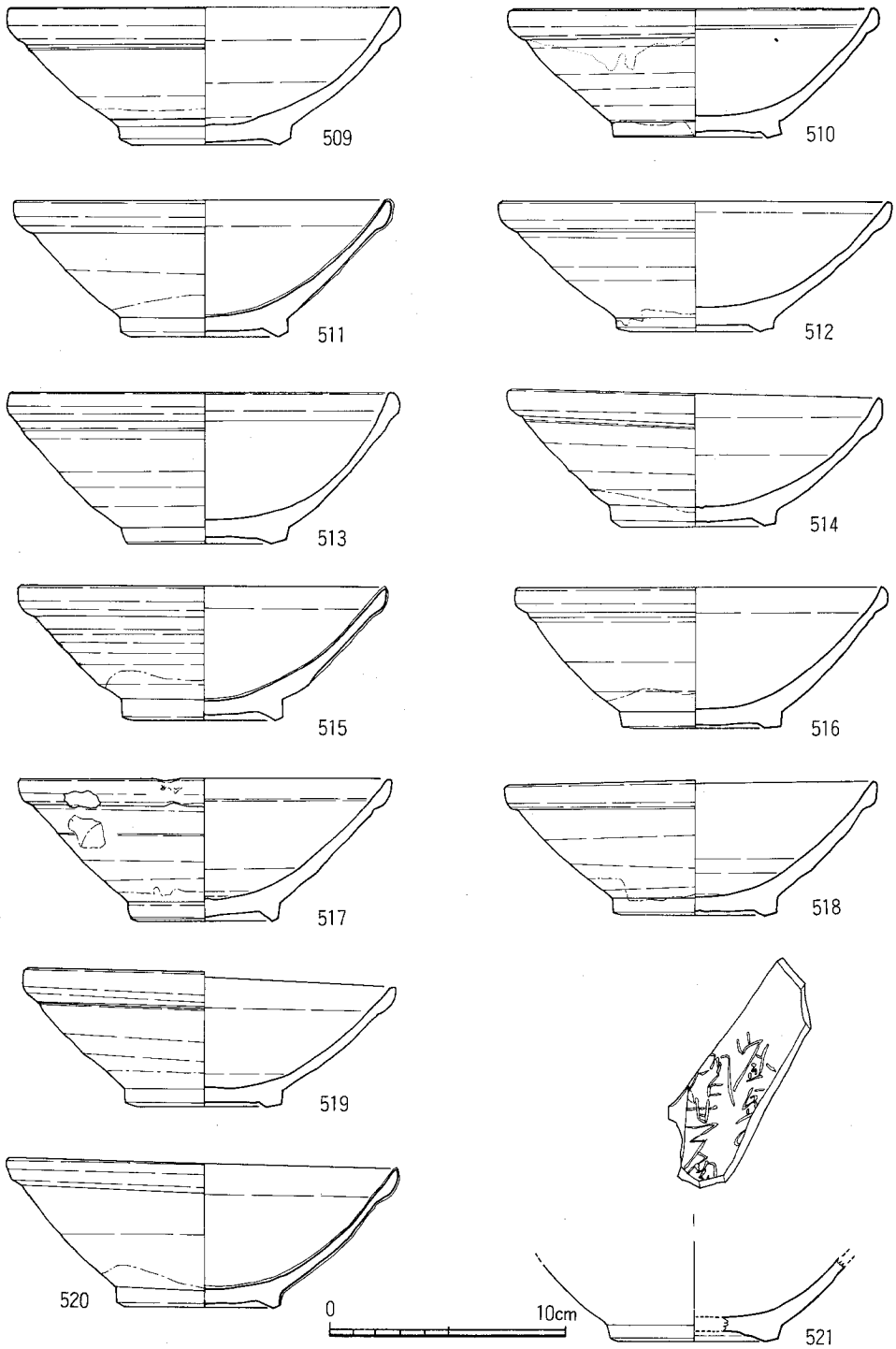
第65図　SK0281出土遺物実測図(4)（1/3）



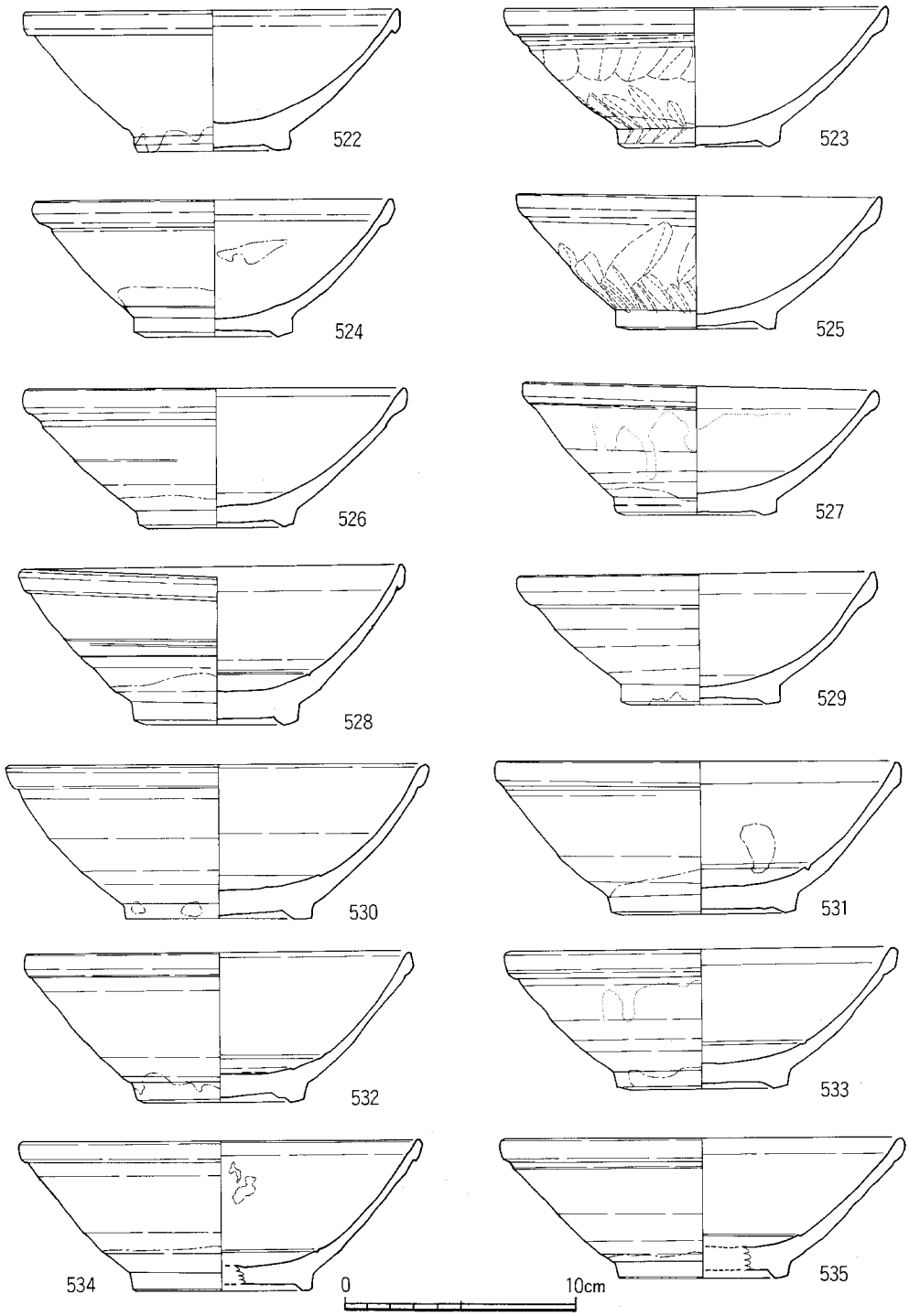
第66図　SK0281出土遺物実測図(5)（1/3）



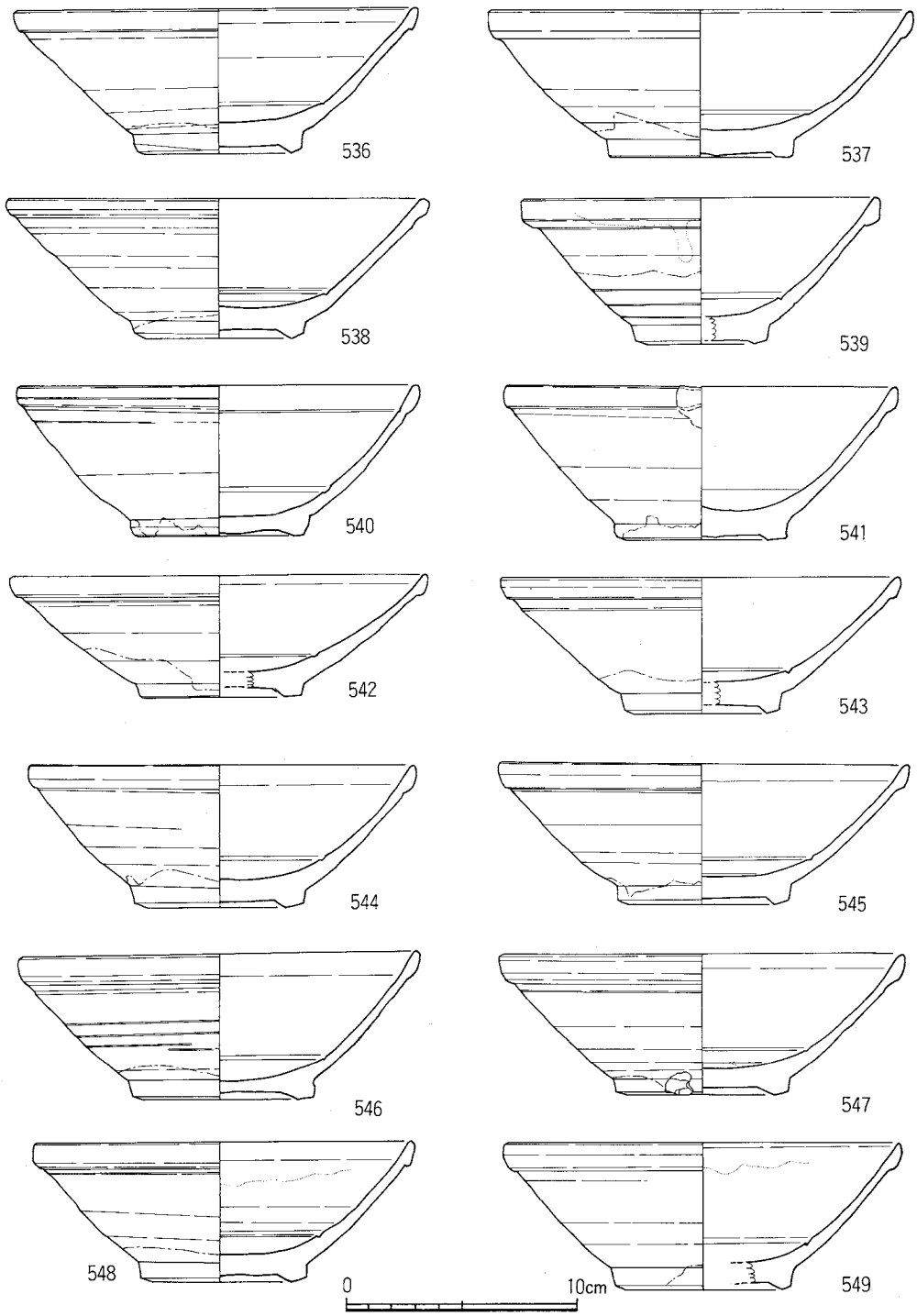
第67図　SK0281出土遺物実測図(6)（1/3）



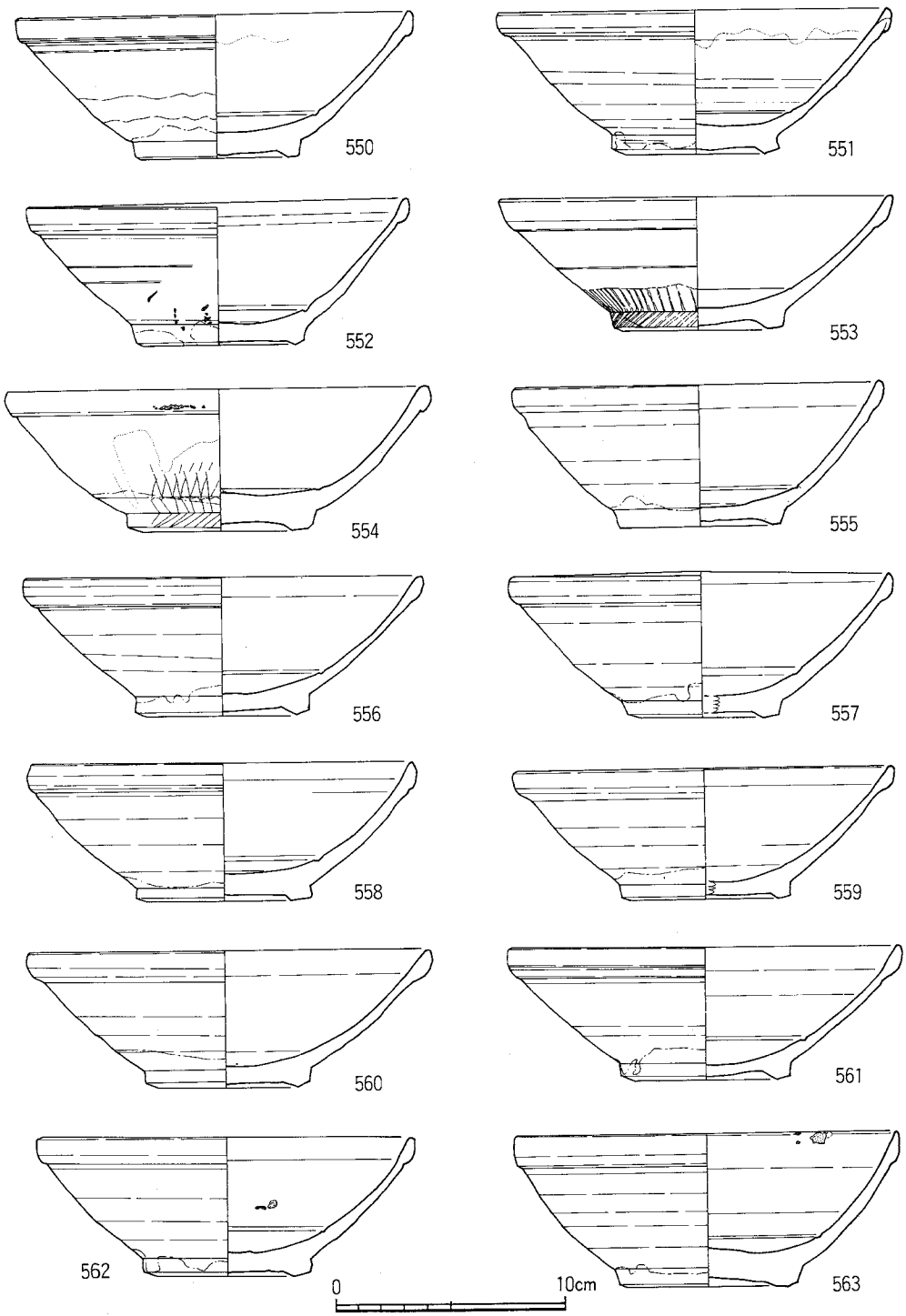
第68図　SK0281出土遺物実測図(7)（1/3）



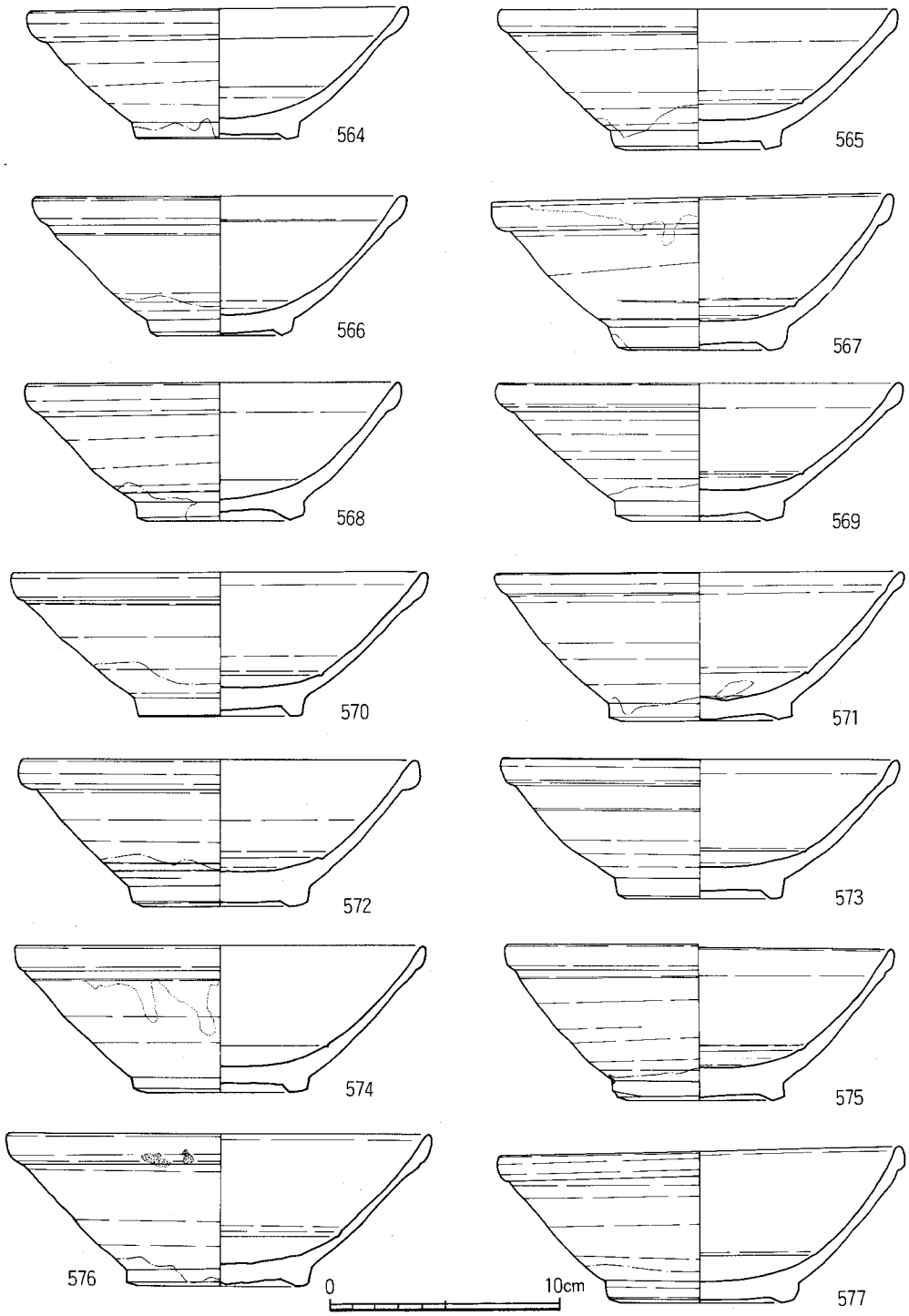
第69図　SK0281出土遺物実測図(8)（1/3）



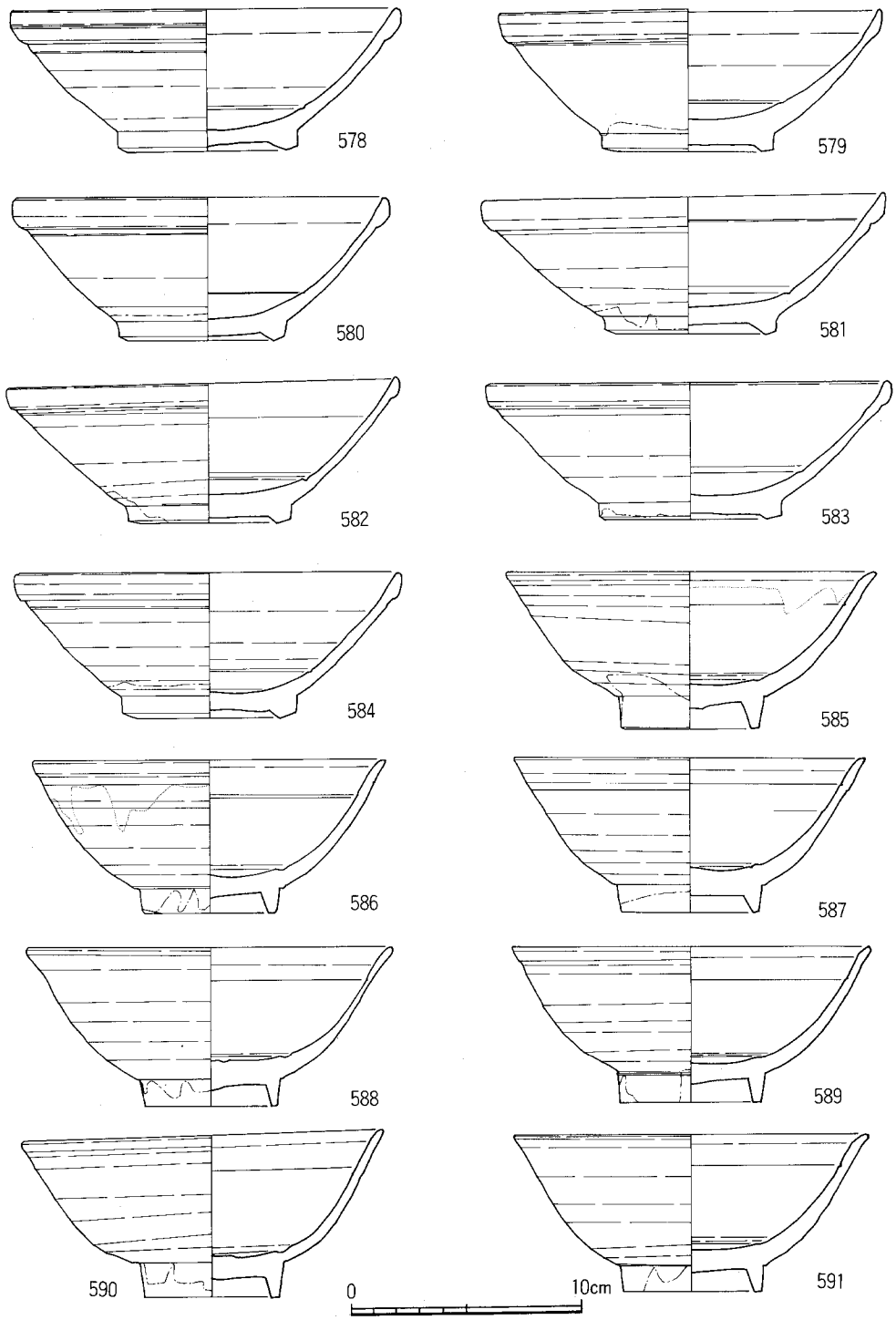
第70図　SK0281出土遺物実測図(9)（1/3）



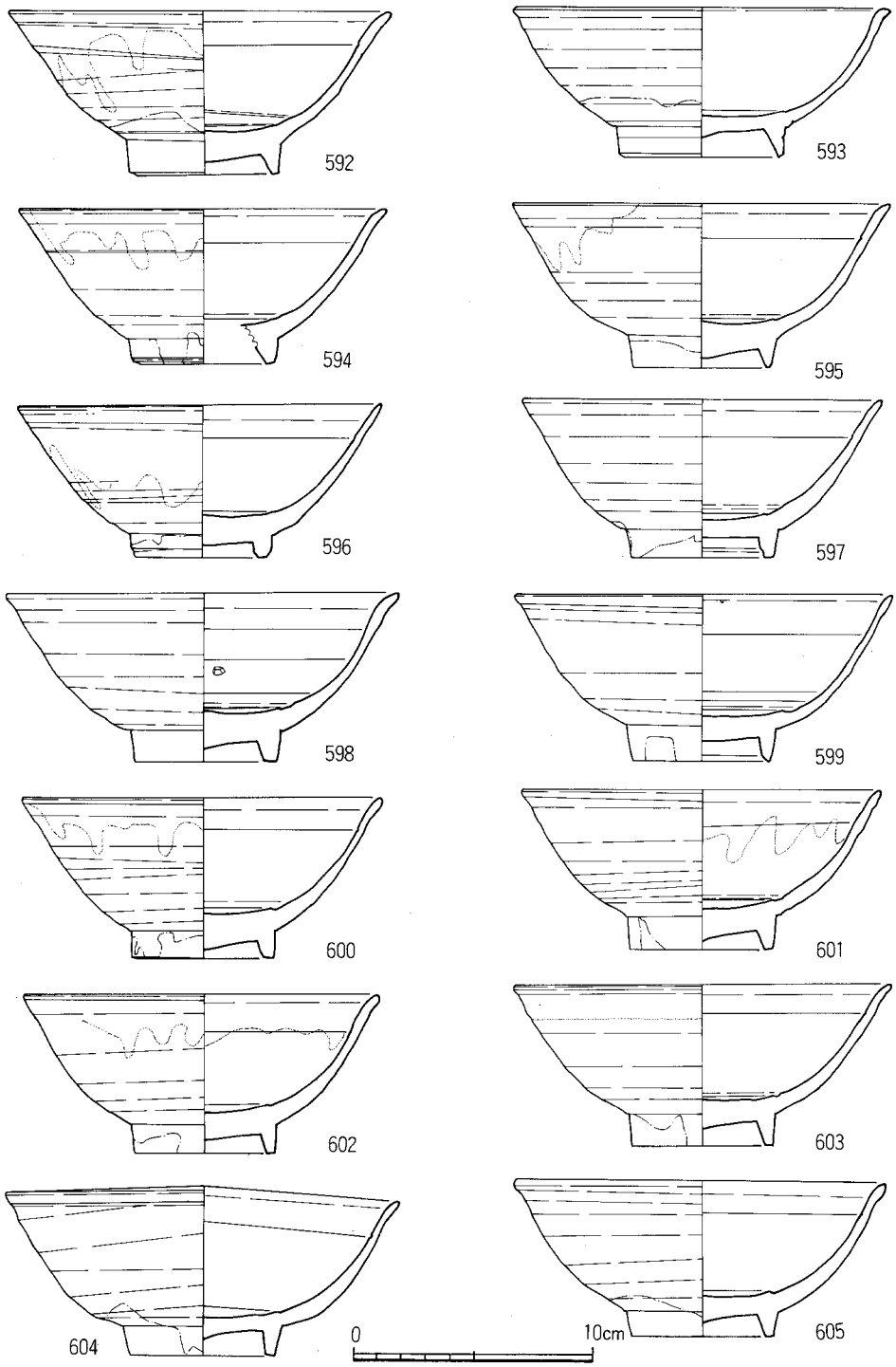
第71図　SK0281出土遺物実測図(10)（1/3）



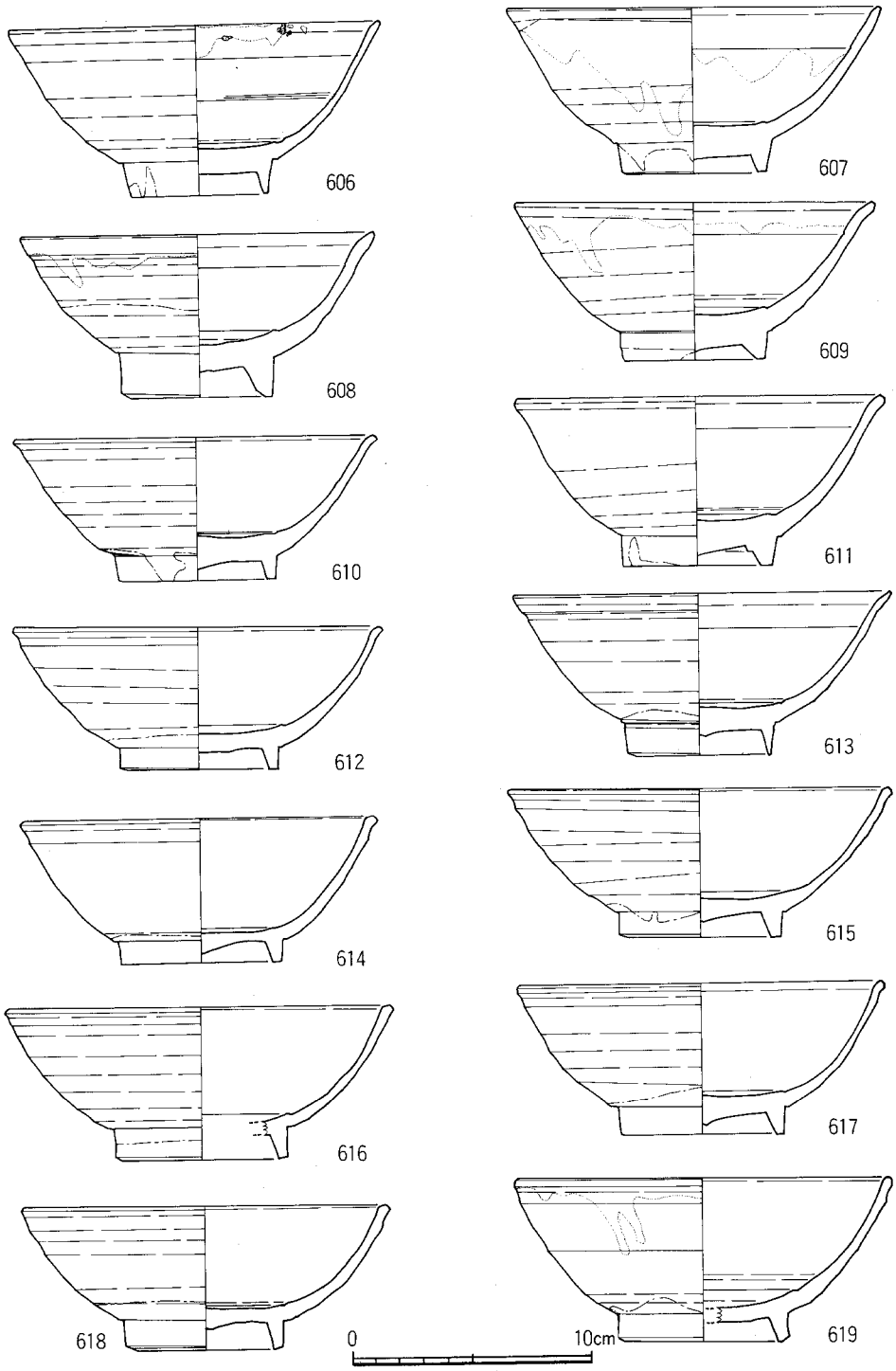
第72図　SK0281出土遺物実測図(11)（1/3）



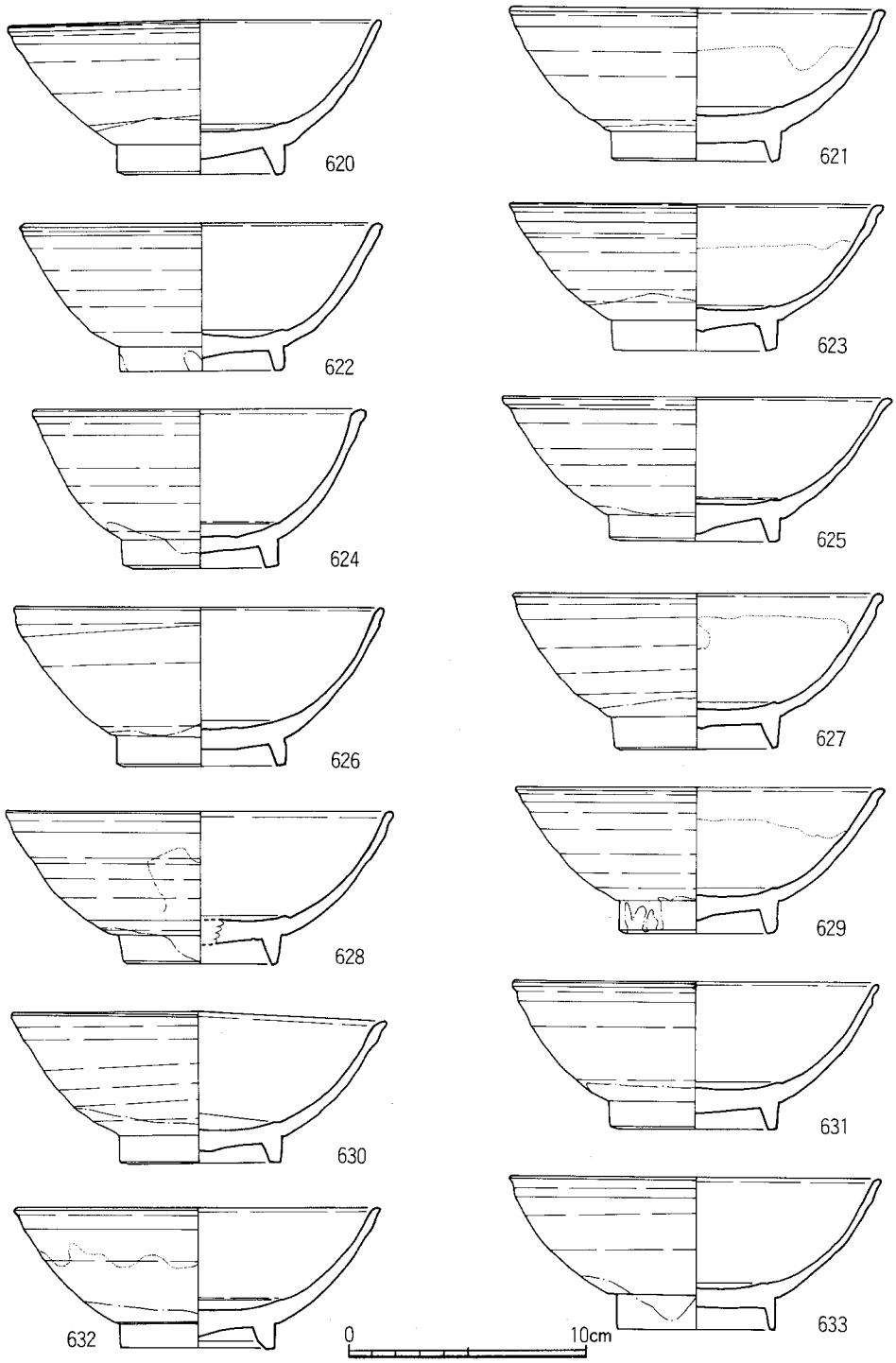
第73図　SK0281出土遺物実測図⑫（1/3）



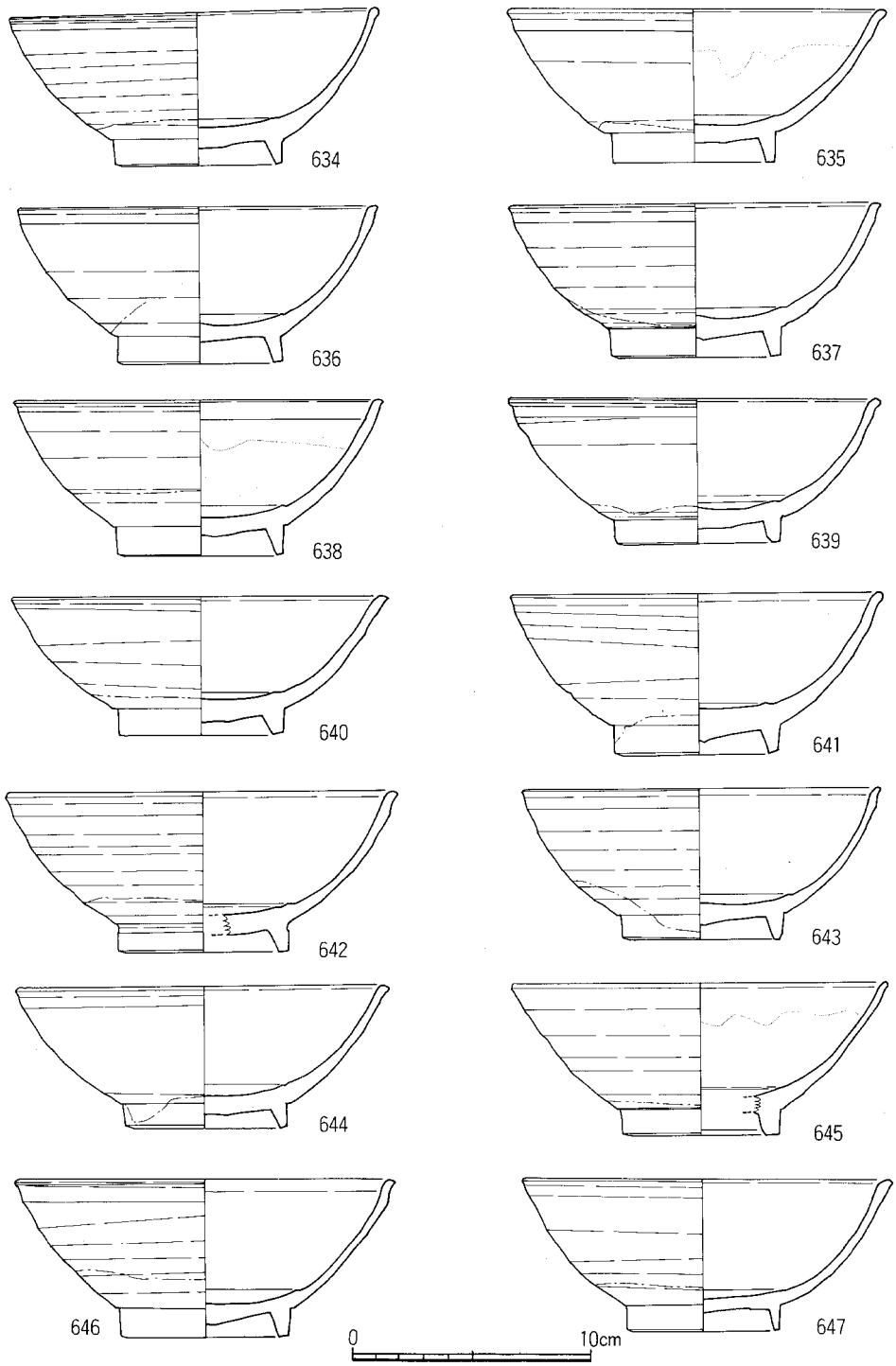
第74図　SK0281出土遺物実測図(13)（1/3）



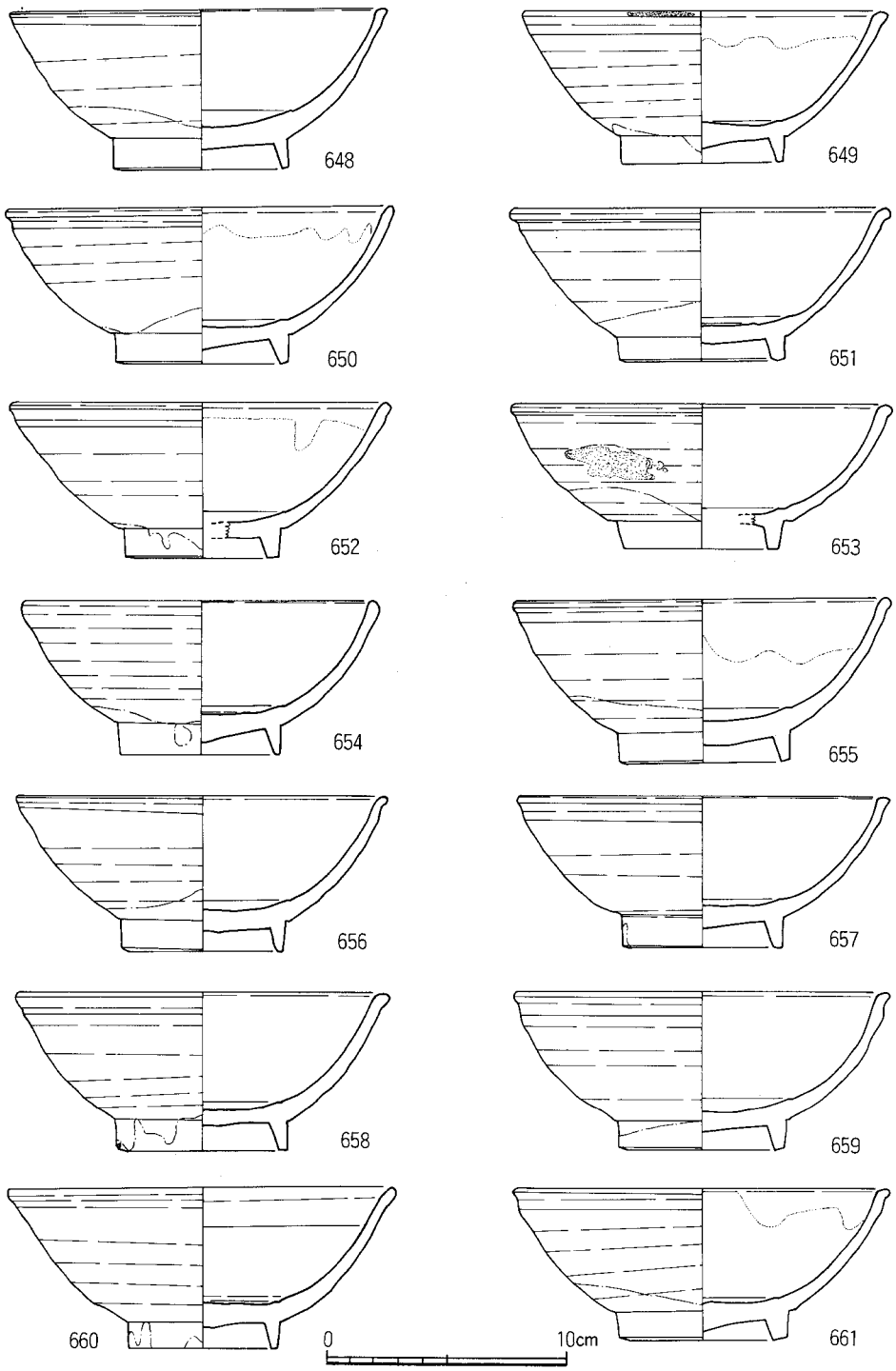
第75図　SK0281出土遺物実測図⒁（1/3）



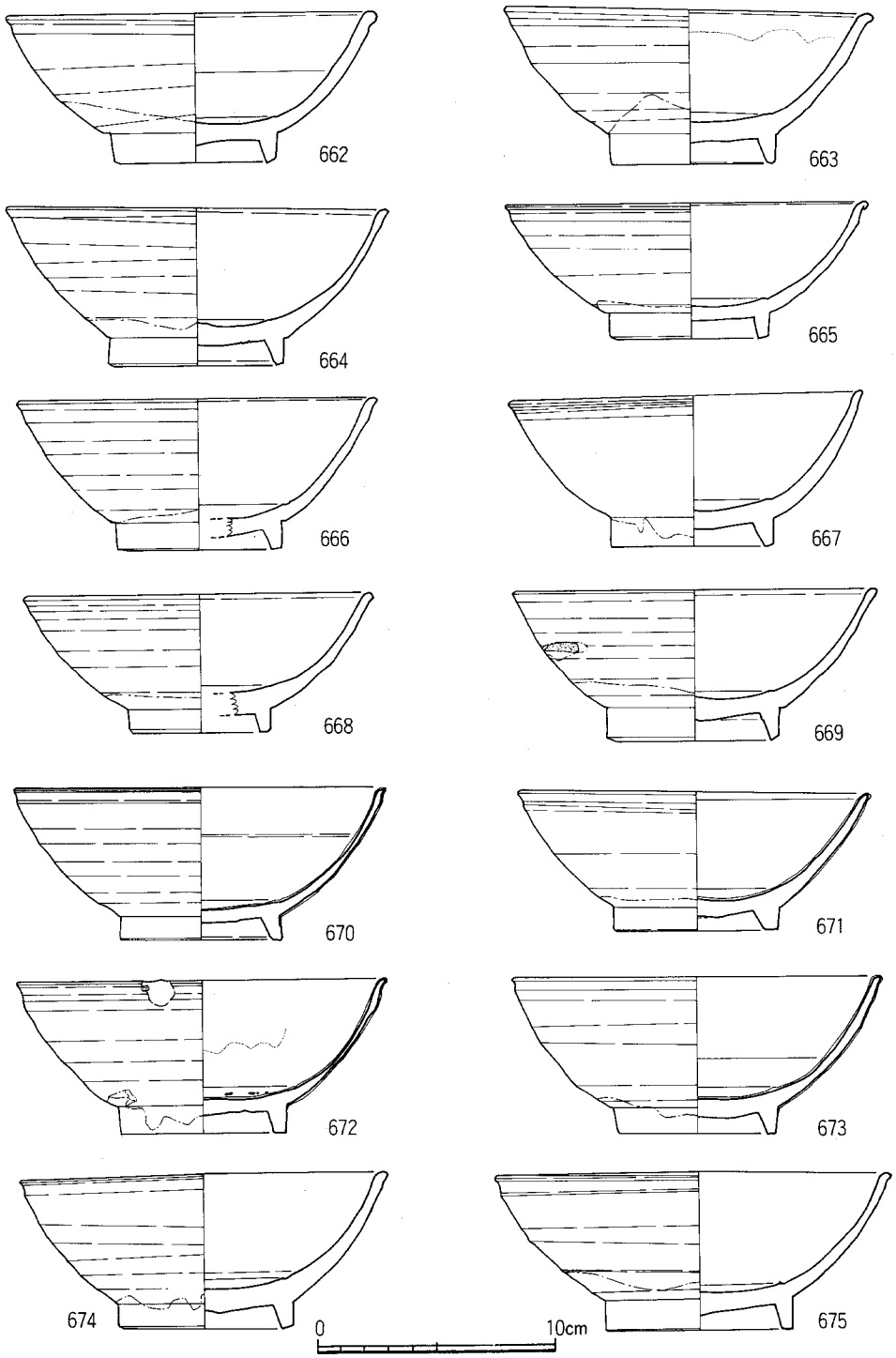
第76図　SK0281出土遺物実測図(15)（1/3）



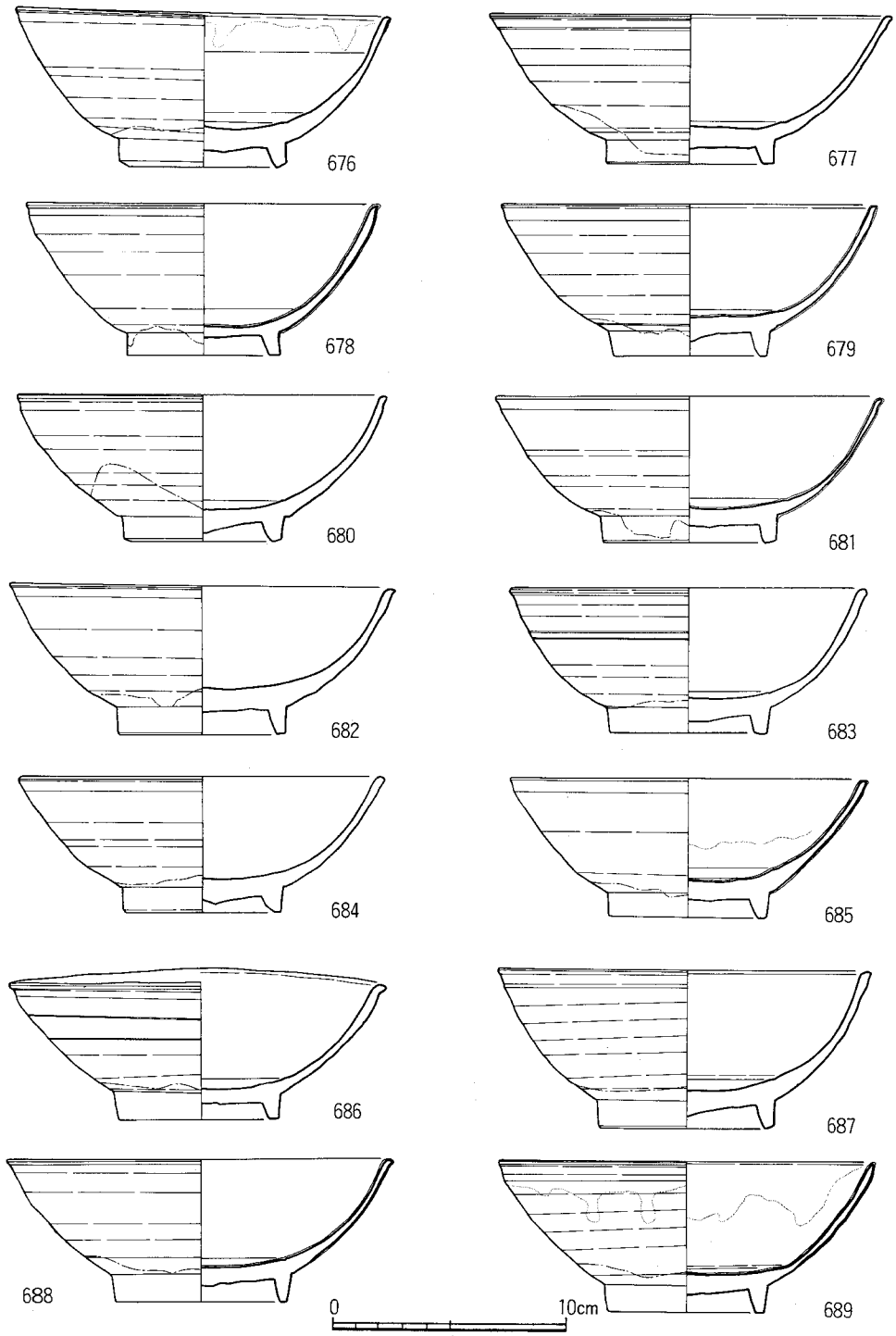
第77図　SK0281出土遺物実測図⑯（1/3）



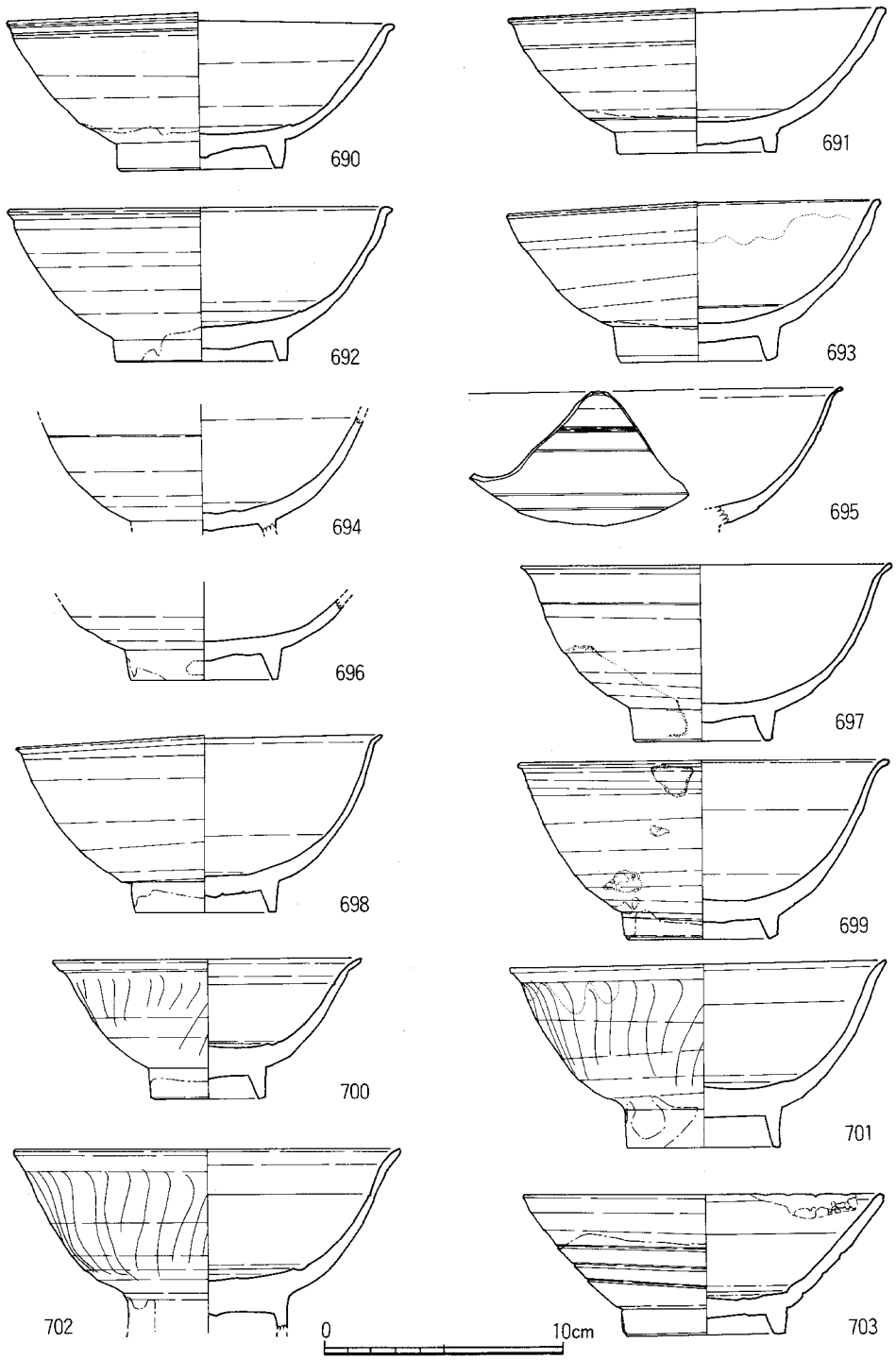
第78図　SK0281出土遺物実測図(17)（1/3）



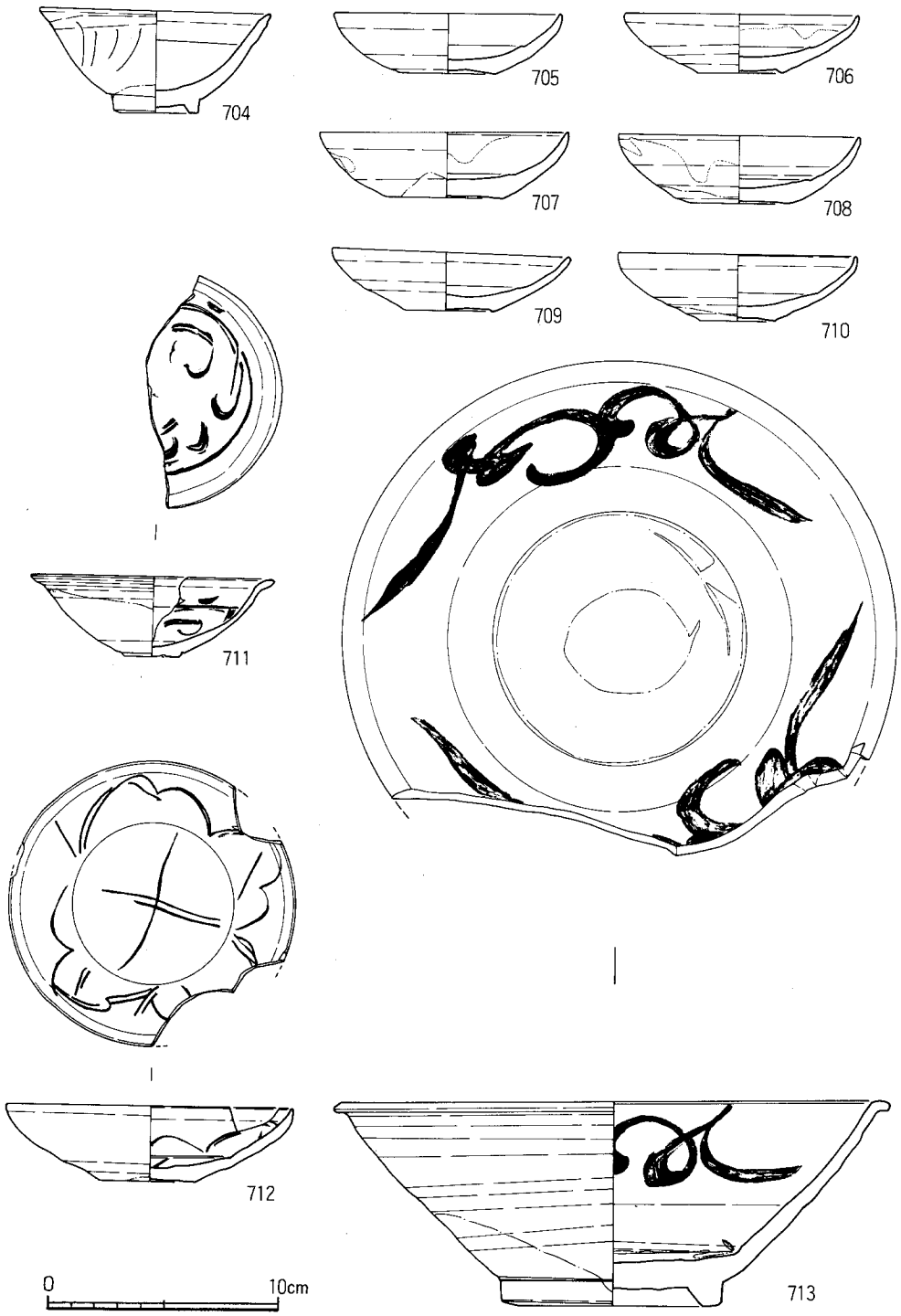
第79図　SK0281出土遺物実測図⒅（1/3）



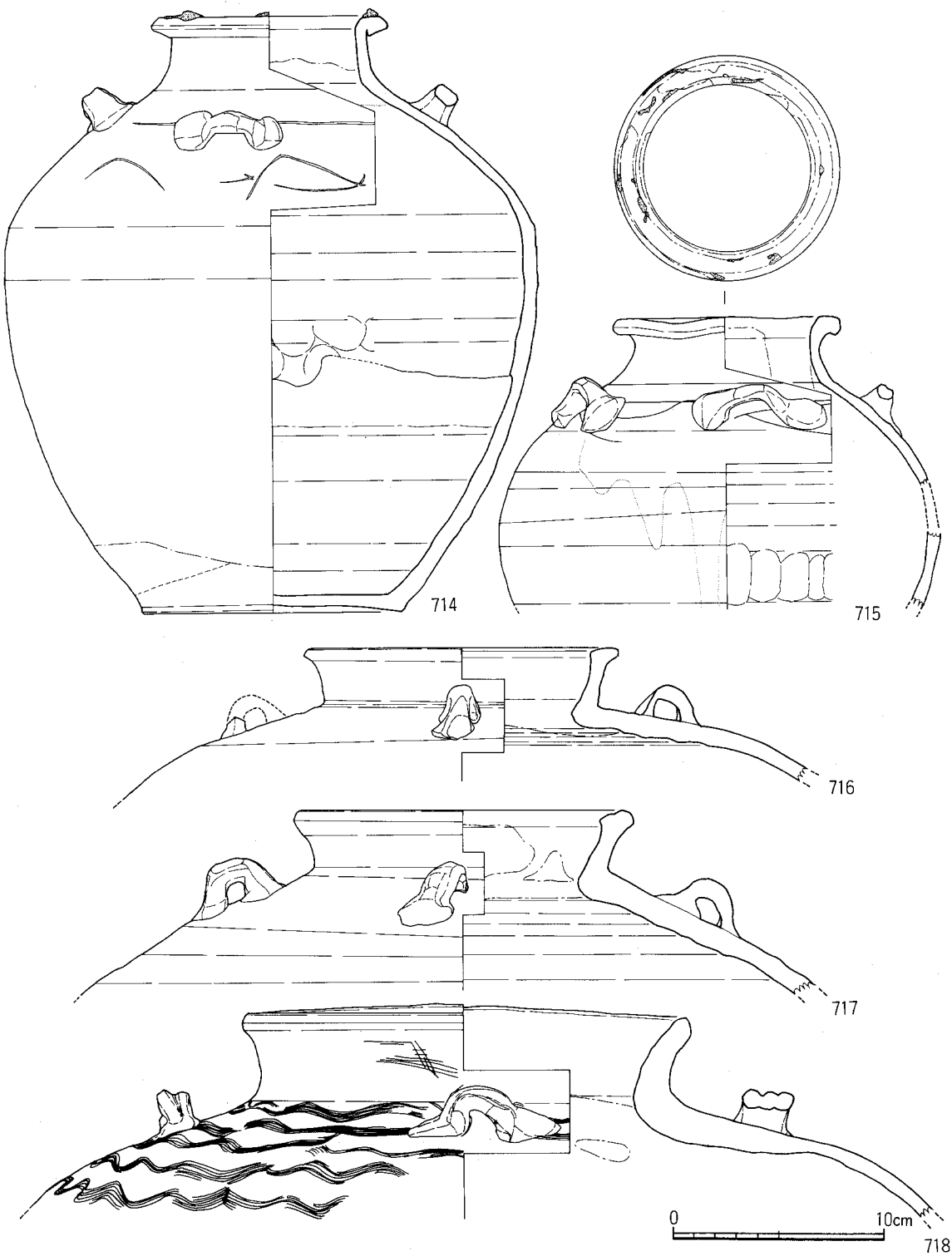
第80図　SK0281出土遺物実測図(19)（1/3）



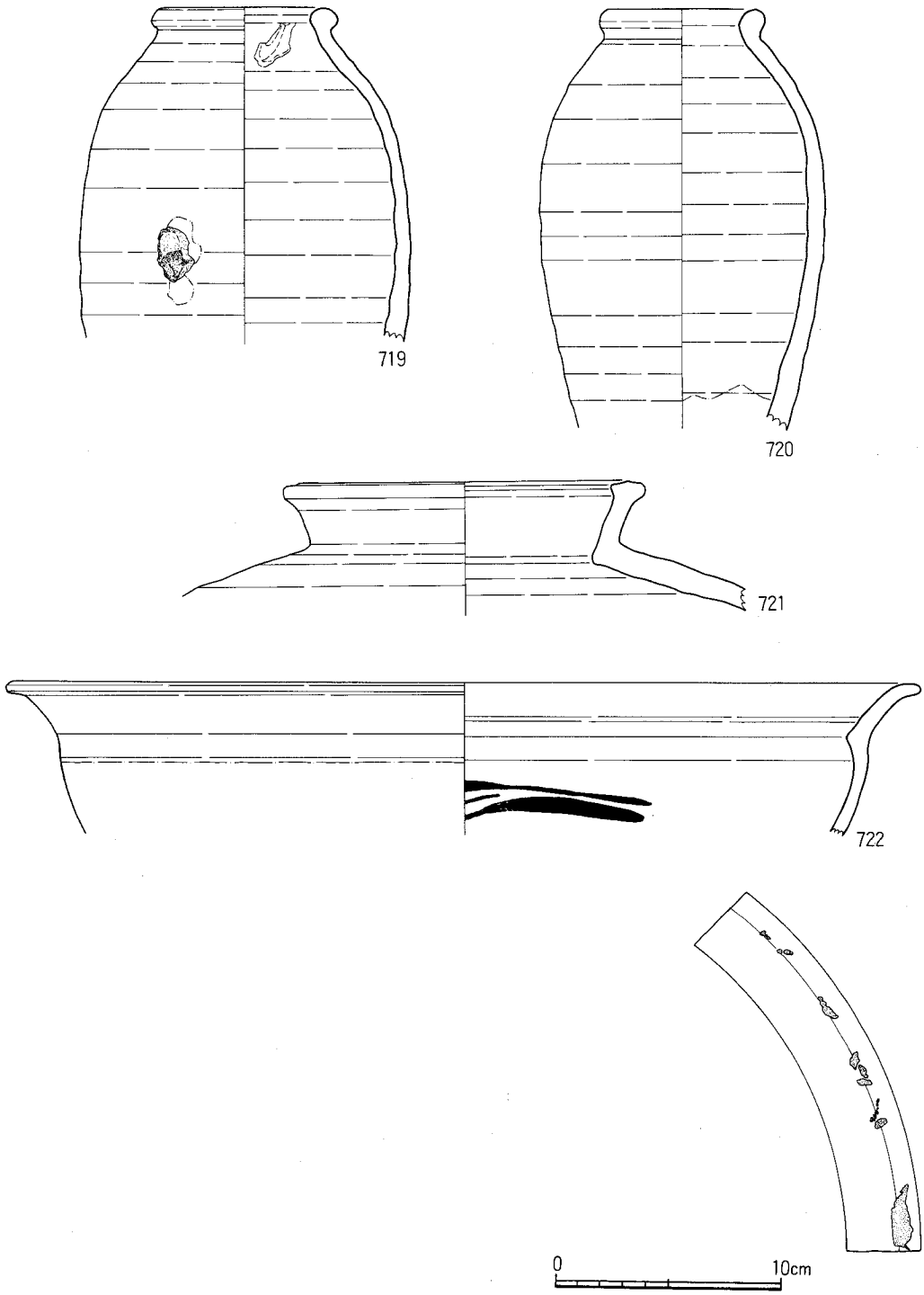
第81図　SK0281出土遺物実測図⑳（1/3）



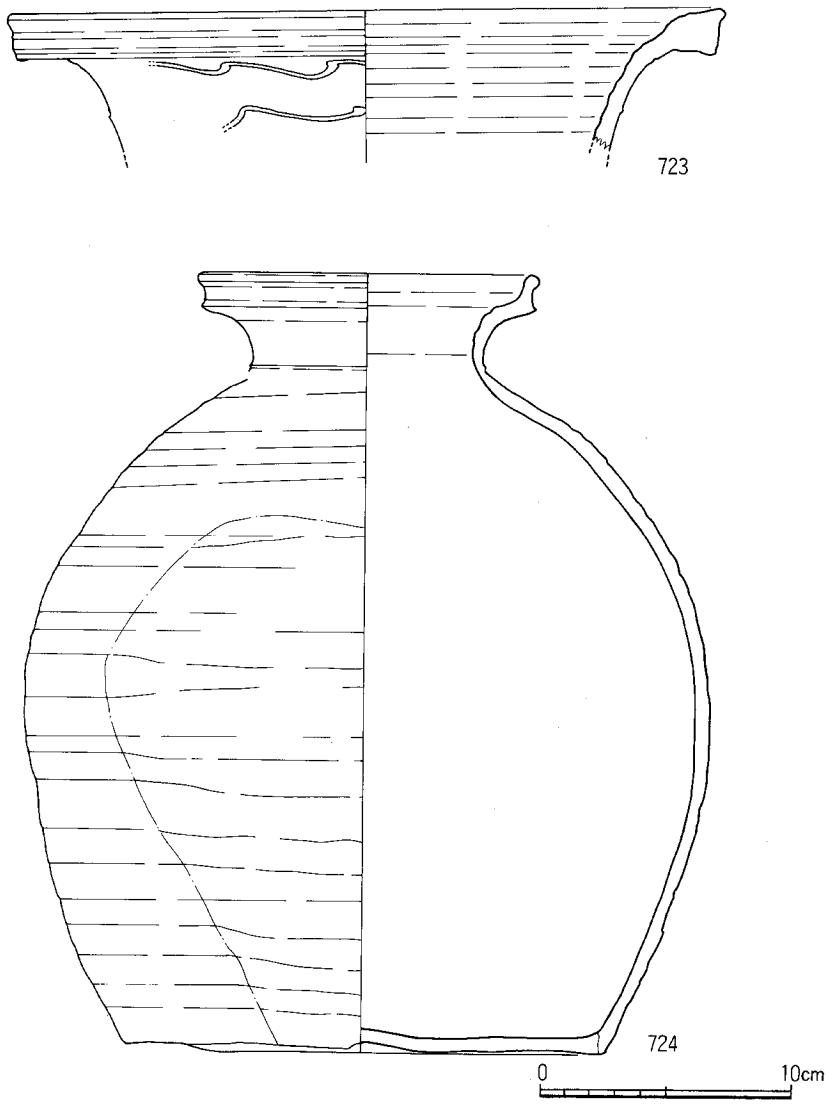
第82図　SK0281出土遺物実測図(21)（1/3）



第83図　SK0281出土遺物実測図(22)（1/3）



第84図　SK0281出土遺物実測図㉓（1/3）



第85図　SK0281出土遺物実測図(24)（1/3）

SK0282出土遺物（第86図725～735）

725～727は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。725は口縁に煤が付着する。器高1.3～1.5cm、口径8.4～8.7cmを測る。728は土師器蓋である。口縁はわずかに下垂する。内外面ともナデを施す。天井部に墨書が見られる。判読できない。中央の文字は「王」か。729は瓦器椀である。体部内湾気味に立ち上がり、底部には断面三角形の低い高台が付く。内外面に粗いヘラミガキが施される。器高5.4cm、口径15.5cmを測る。730は白磁碗Ⅳ類である。やや浅い。見込みには沈線が巡る。釉色は淡灰緑色を呈する。731は白磁高台付の皿である。底部には低い高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がる。見込みには沈線が巡る。外面下半は露胎になる。釉色は灰褐色を呈する。高台内側には墨書が見られる。「百」か。732～735は白磁平底の皿である。見込みには沈線が巡る。底面のみ露胎となる。735は見込みにヘラ描きの蕉葉文が施される。底面には墨書が見られる。「荘　湟」か。

SK0287出土遺物（第86図736～738）

736は土師器杯である。底部の切離しは糸切りである。底面には板状圧痕が残る。器高3.1cm、口径14.7cmを測る。737は白磁小壺の蓋である。上面に釉がかかる。穿孔が1カ所見られる。釉色は淡灰色を呈する。738は龍泉窯系青磁碗である。外面には片彫りの縦線を施す。内面には櫛目文と片彫りの花文を施す。胎土はやや粗く、淡灰色を呈する。釉は高台外側までかかり、高台内側は露胎となる。釉色はオリーブ色を呈する。

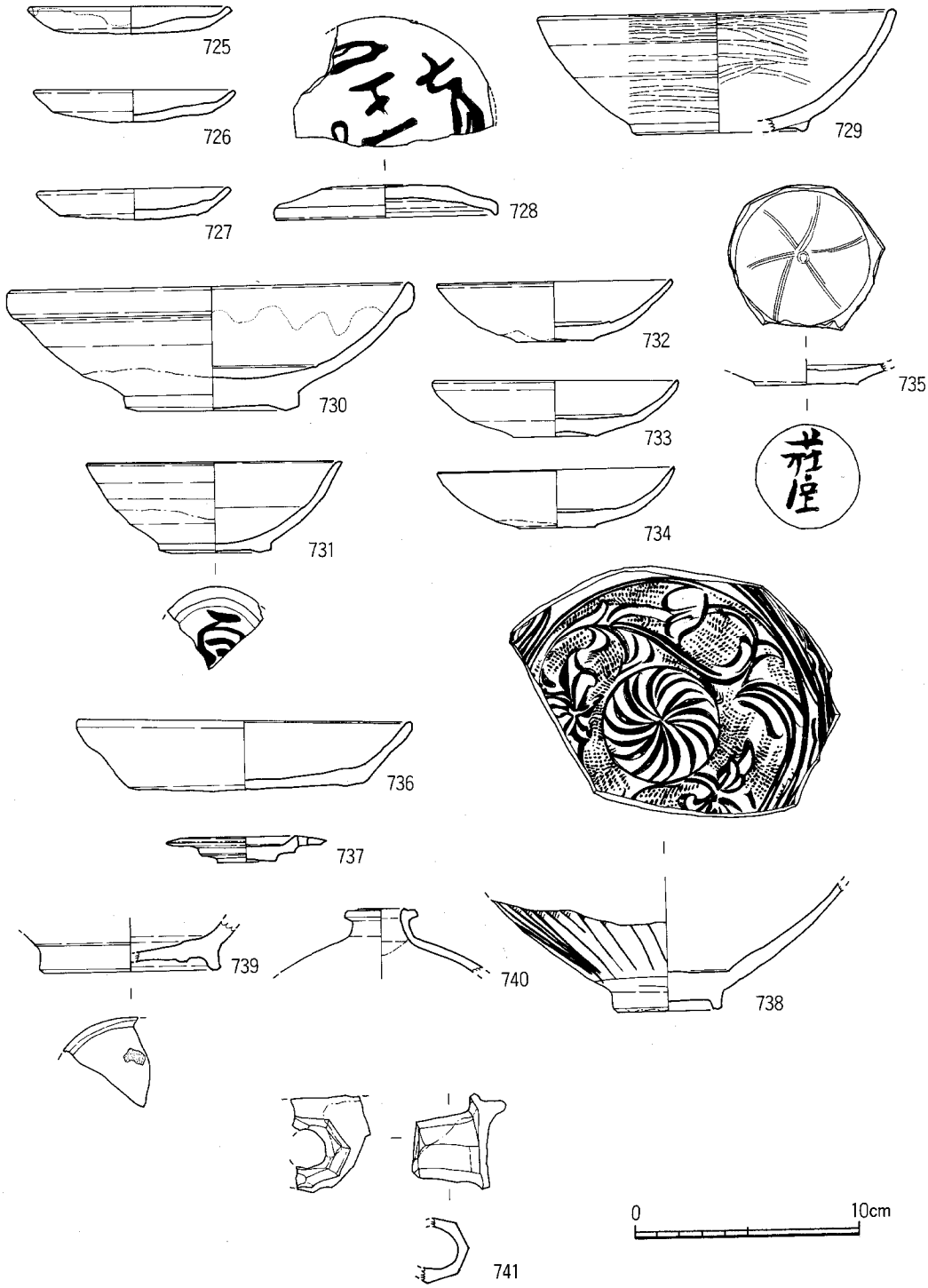
SK0288出土遺物（第86図739～741）

739は緑釉陶器椀である。底部に断面台形の高台が付く。釉は全面にかかる。硬質で、胎土は灰色を呈する。釉色は淡緑灰色を呈する。740は施釉陶器瓶である。外面と口縁内側に釉がかかる。胎土はやや粗く、淡灰色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。741は施釉陶器の急須の注ぎ口である。断面は六～七角形を呈する。内面と注ぎ口の上面に釉がかかる。釉色は黒色を呈する。

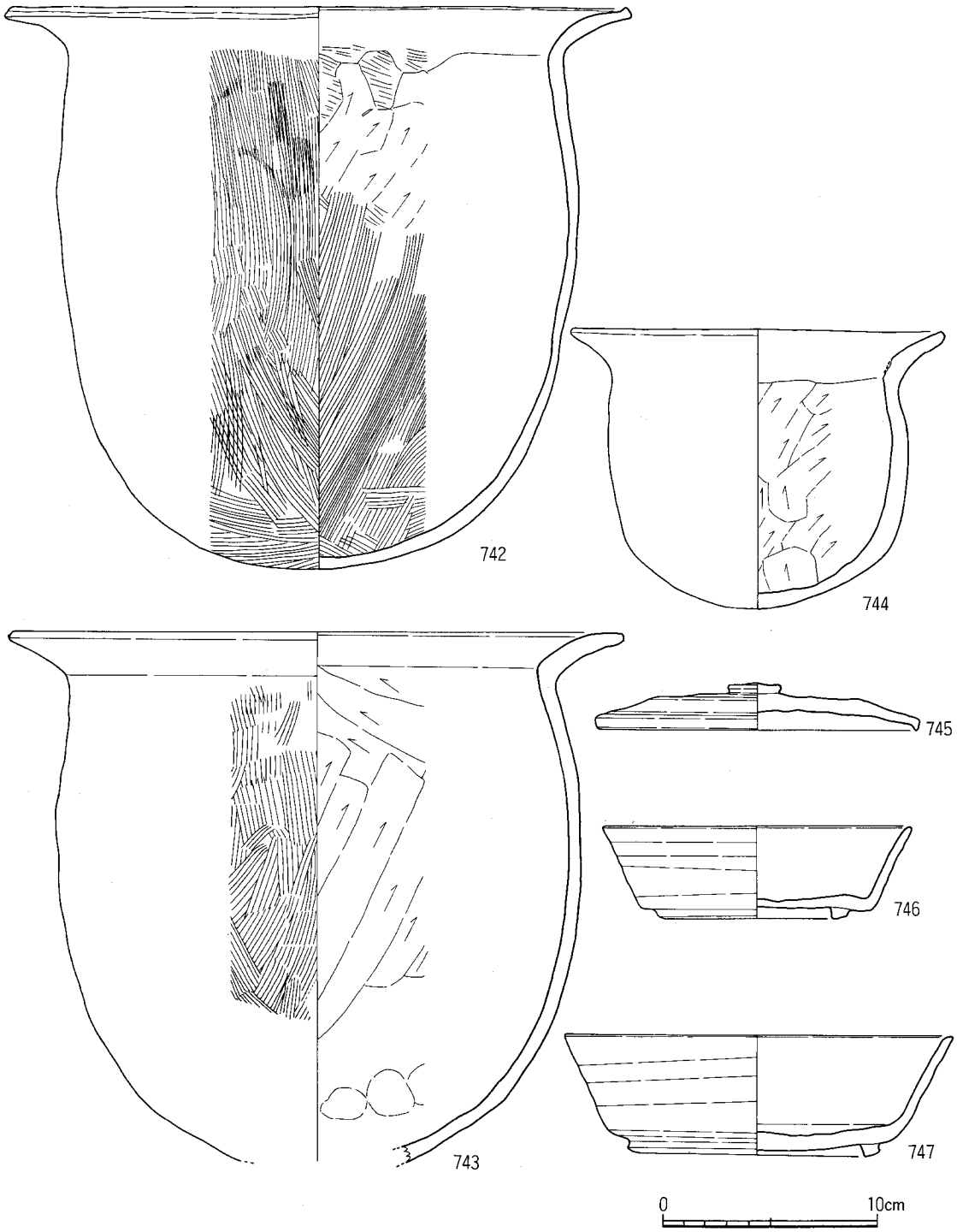
SK0300出土遺物（第87図742～747）

742、743は土師器甕である。口縁は緩やかに外反し、口縁内側にはヘラケズリによる稜がつく。体部は長胴で、丸底である。外面はハケメを施す。内面はヘラケズリを施す。742は内面下半はハケメである。743は内底面に指頭痕が残る。胎土は細砂を少し含む。器高26.0cm、口径28.3cm、28.2cmを測る。744は小型の土師器甕である。口縁は緩やかに外反し、長胴で丸底である。外面はナデ、内面はヘラケズリを施す。胎土は細砂を少し含む。器高13.0cm、口径17.1cmを測る。745は須恵器杯蓋である。天井部には扁平の摘みが付く。口縁は下垂する。器高2.2cm、口径14.7cmを測る。746、747は須恵器杯である。体部は直線的に立ち上がり、底部内寄りに断面台形の低い高台が付く。器高4.3cm、5.5cm、口径14.2cm、17.9cmを測る。

SK0304出土遺物（第88図748）



第86図　SK0282・0287・0288出土遺物実測図（1/3）



第87図　SK0300出土遺物実測図（1/3）

748は土師器小型丸底壺である。外面はナデ、底面には指頭痕が残る。内面はナデである。器高7.7cm、口径9.2cmを測る。

SK0305出土遺物（第88図749）

749は須恵器杯蓋である。扁平な体部で口縁は下垂する。天井部には小さな撮みが付く。器高2.3cm、口径18.6cmを測る。

SK0306出土遺物（第88図750）

750は白磁小壺である。外面には三本一組の隆起線文と間にわらび文が施される。底面のみ露胎となる。釉色は緑灰色を呈する。

SK0326出土遺物（第88図751）

751は須恵器杯蓋である。口縁は下垂する。天井部には扁平の撮みが付く。器高2.2cm、口径15.1cmを測る。

SK0346出土遺物（第88図752～754）

752、753は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。753は板状圧痕が残る。752はての字形口縁を呈する。器高1.5、1.3cm、口径9.7、8.3cmを呈する。754は白磁碗０－Ⅲ類である。外面には片彫りの縦線を施す。見込みには沈線が巡る。外面下半まで釉がかかる。釉色は青みがかった白色を呈する。高台内側には墨書が見られる。花押か。

SK0412出土遺物（第88図755～758）

755、756は緑釉陶器椀である。755は平高台である。底面は露胎となる。やや軟質で、胎土は微砂をわずかに含み、灰褐色を呈する。釉色は黄緑色を呈する。756は上げ底気味の平高台である。釉は前面にかかる。やや軟質で、胎土は微砂をわずかに含み、灰褐色を呈する。釉色は黄緑色を呈する。757は施釉陶器鉢の口縁である。口縁外面には指頭圧痕を施した突帯がつく。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。釉色は褐色を呈する。758は平瓦である。凹面は布目が残る。凸面は格子目叩きと草花文が施される。

SK0413出土遺物（第89図759）

759は青磁小皿である。口縁は輪花を呈する。胎土はやや粗く、灰色を呈する。釉色は暗灰褐色を呈する。

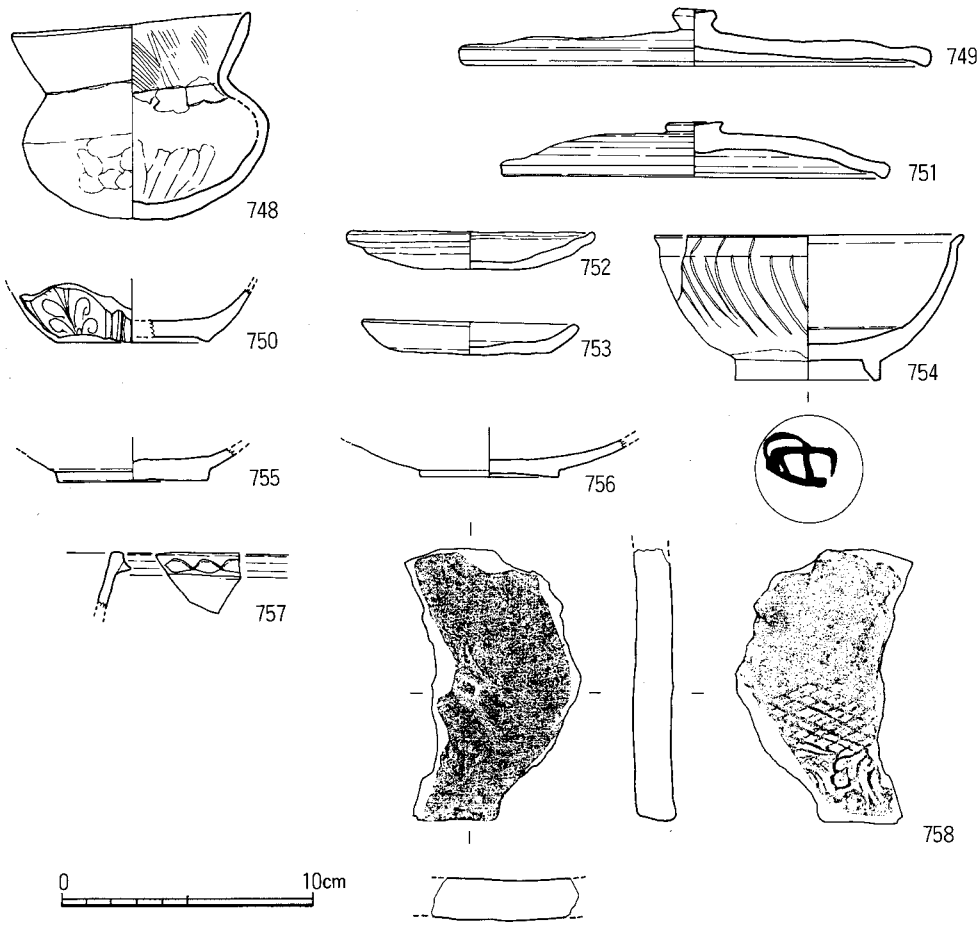
SK0415出土遺物（第89図760）

760は須恵器杯身である。体部は直線的に立ち上がり、底部内寄りに低い高台が付く。器高4.0cm、口径13.9cmを測る。

SK0418出土遺物（第89図761）

761は連江窯系青磁碗である。口縁は欠いている。底部には低い高台が付く。底径は小さい。見込みにはヘラ描きの文様が施される。釉色は緑灰色を呈する。外面下半は露胎となる。

SK0419出土遺物（第89図762）



第88図　SK0304・0305・0306・0326・0346・0412出土遺物実測図（1/3）

762は白磁皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。見込みには沈線が巡る。底面は露胎となる。釉色は淡黄白色を呈する。

SK0424出土遺物（第89図763～764）

763は白磁碗Ⅳ類である。見込みには沈線が巡る。764は施釉陶器四耳壺の底部である。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。釉色は黄褐色を呈する。

SK0425出土遺物（第89図765～768）

765～767は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。器高は1.3～1.4cm、口径9.0～9.9cmを測る。768は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが見られる。器高3.7cm、口径14.6cmを測る。

SK0426出土遺物（第89図769）

769は白磁平底皿である。底部のみ露胎となる。見込みには沈線が巡る。釉色は灰白色を呈する。

SK0427出土遺物（第89図770～772）

770は土師器壺である。口縁は直立し、口縁端部は丸く仕上げる。肩部は張る。調整は口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリを施す。771、772は土師器高杯の胴部である。ラッパ形を呈し、裾は折れて端部が接地する。調整は外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。

SK0434出土遺物（第89図773）

773は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。器高1.4cm、口径9.5cmを測る。

SK0439出土遺物（第89図774～775）

774は白磁碗V類である。外面に片彫りの縦線を施す。底部を欠いている。釉色は白色を呈する。775は越州窯系青磁壺の口縁である。口縁は緩やかに外反する。口縁内側に沈線が巡る。胎土は灰褐色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。

SK0437出土遺物（第90図776～785）

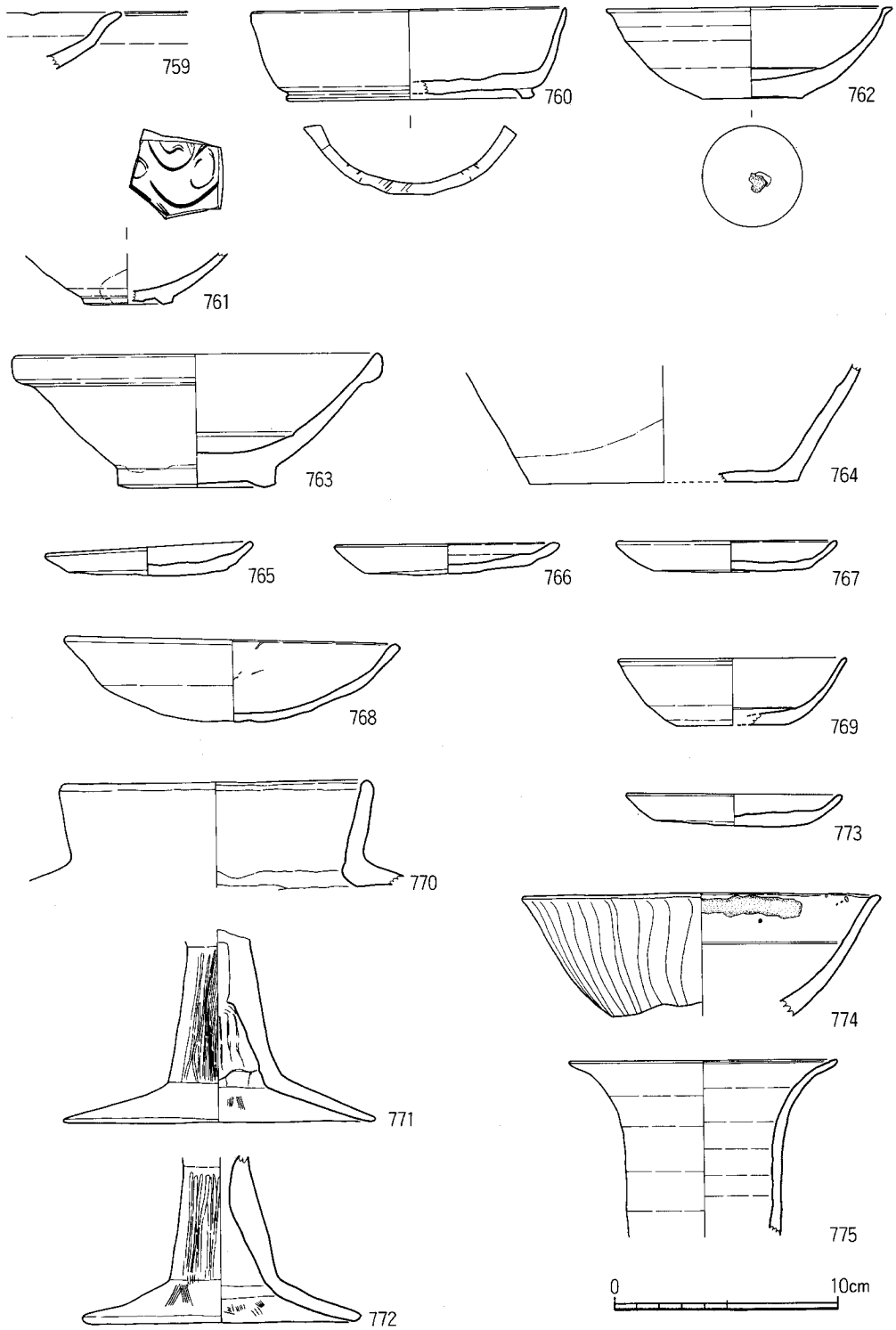
776は須恵器杯身である。体部は直線的に立ち上がり、底部内寄りに断面台形の低い高台が付く。器高5.6cm、口径17.1cmを測る。778は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。底面には板状圧痕が残る。器高1.5cm、口径10.7cmを測る。779～781は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。外底面には指頭痕がつく。内面にはコテ当てが見られる。器高3.2～3.4cm、口径14.4～15.8cmを測る。782は白磁碗Ⅱ類である。外面下半は露胎となる。釉色は淡灰白色を呈する。783は白磁椀V類である。釉は高台外側までかかる。釉色は淡黄褐色を呈する。784は白磁碗Ⅳ類である。見込みには沈線が巡る。釉は高台外側までかかる。釉色は淡灰色を呈する。785は白磁碗である。体部は直線的に立ち上がる。見込みには段がつく。内面には櫛目文が施される。高台内側と畳付が露胎となる。胎土は白色を呈する。釉色は乳白色を呈する。

SK0438出土遺物（第91図786～790）

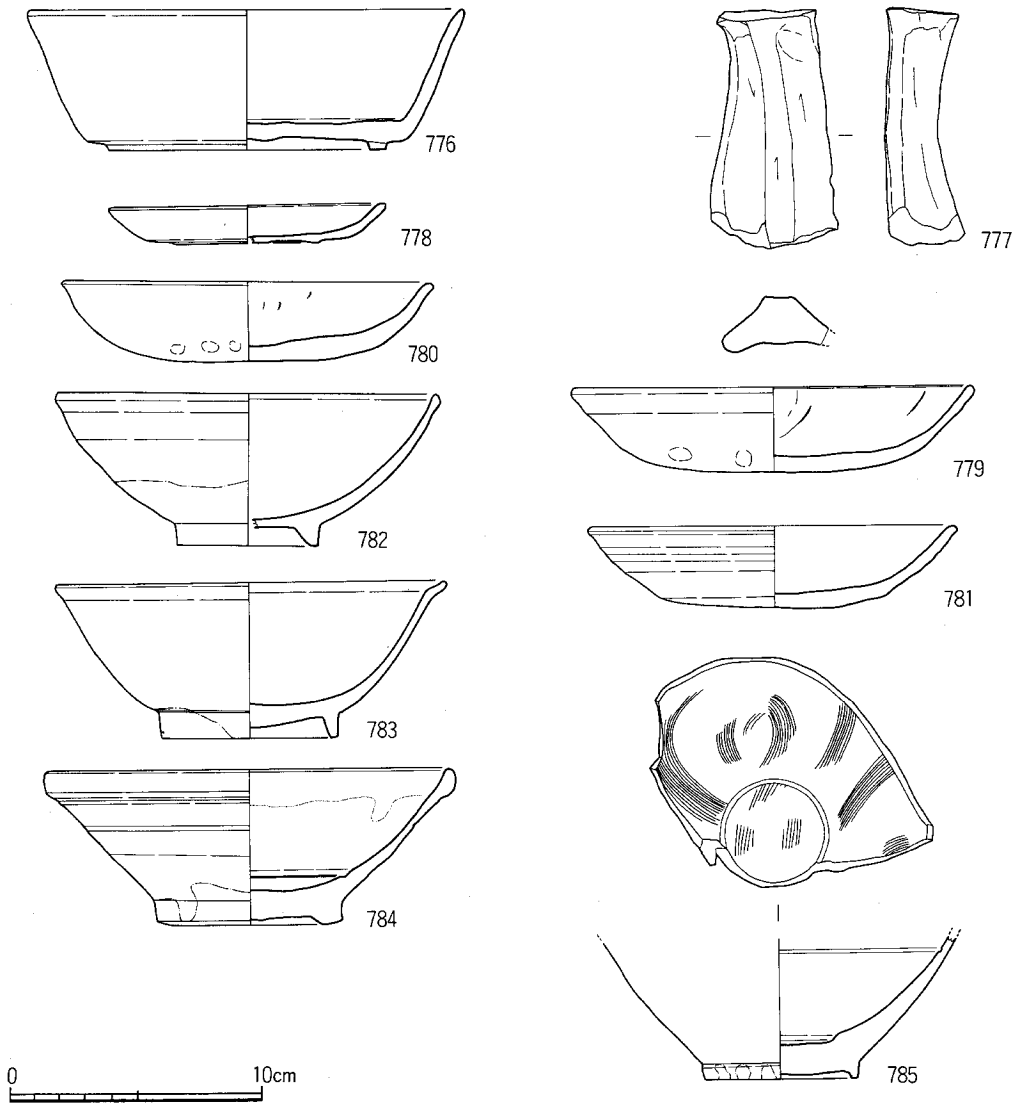
786は土師器小皿である。底部の切離しは糸切りである。体部は直線的に立ち上がる。器高1.3cm、口径8.4cmを測る。787は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。内面にはコテ当てが、外底面には指頭痕が見られる。器高3.7cm、口径13.8cmを測る。788～790は白磁碗V類である。見込みには沈線が巡る。789は高台内側に墨書が見られる。「荘」か。790は高台内側に墨書が見られる。「五郎」。

SK0463出土遺物（第91図～第92図791～802）

791は須恵器杯である。底部はヘラ切りである。混入品である。792は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。器高1.4cm、口径10.0cmを測る。793は黒色土器B類椀である。底



第89図　SK0413・0415・0418・0419・0424・0425・0426・0427・0434・0439出土遺物実測図(1/3)



第90図　SK0437出土遺物実測図（1/3）

部にはハの字形に開く高台が付く。内外面とも丁寧にヘラミガキが施される。794、795は白磁碗Ⅴ類である。794は見込みに沈線が巡る。795は外面に片彫りの縦線が、内面には沈線が施される。796は白磁碗Ⅳ類である。釉色は灰白色を呈する。797は白磁平底皿０類である。底部には低い高台がつく。見込みには蕉葉文が施される。高台内側が露胎となる。釉色は淡灰褐色を呈する。798は白磁高台付の皿で、見込みには櫛目文が施される。高台外側まで釉がかかる。釉色

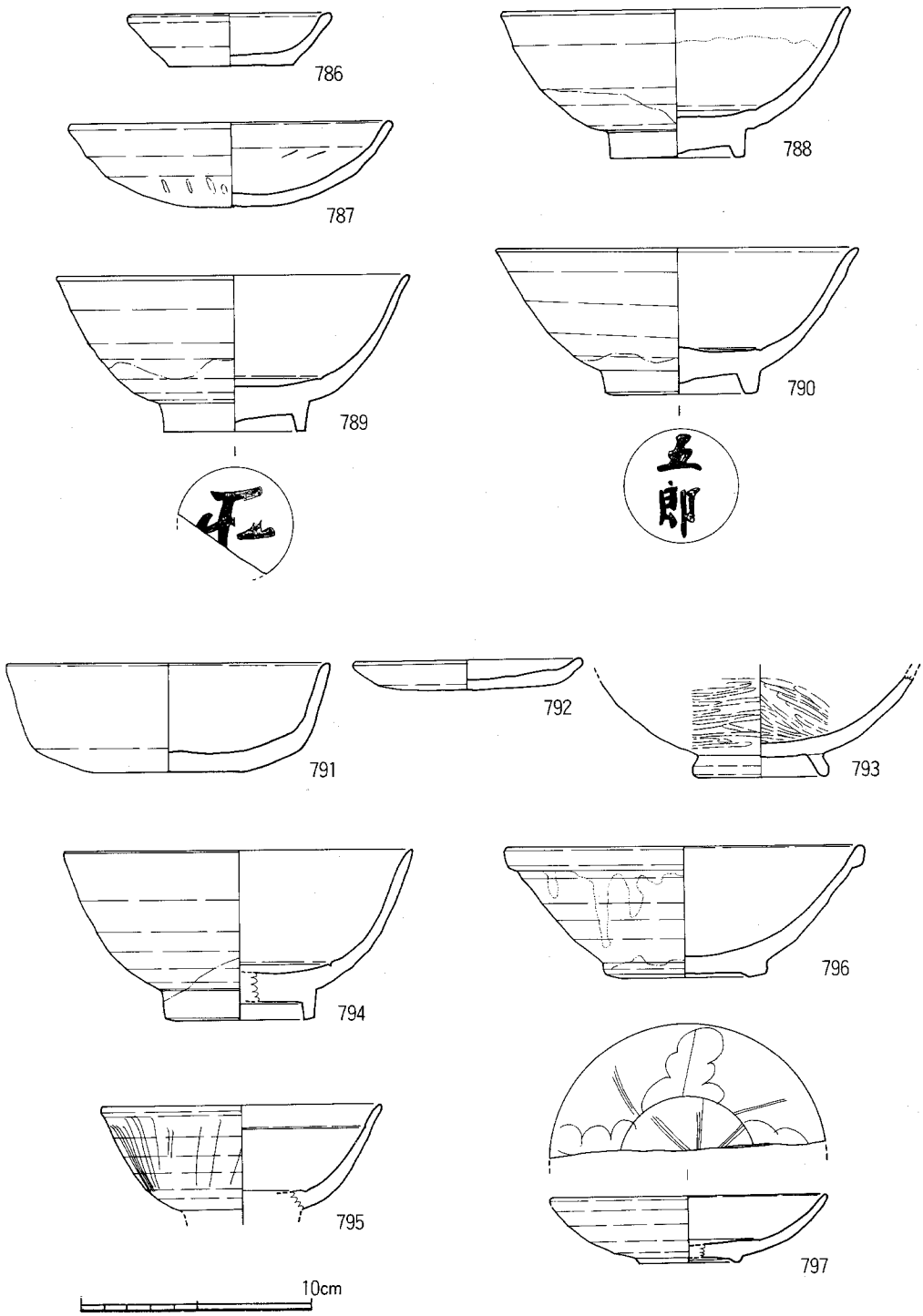
は淡灰褐色を呈する。799は白磁高台付の皿である。見込みには蕉葉文が施される。高台外側まで釉がかかる。釉色は淡灰白色を呈する。800は無釉陶器鉢である。口縁内側に2条の突帯が巡る。胎土は砂粒を多く含み、褐色を呈する。801は施釉陶器の急須である。把手、注口は欠損している。胎土はやや粗く、褐色を呈する。外面は露胎、内面は暗茶褐色を呈した釉がかかる。802は玉縁の丸瓦である。 凸面はナデ、凹面は布目が残る。

SK0467出土遺物（第92図～第93図803～818）

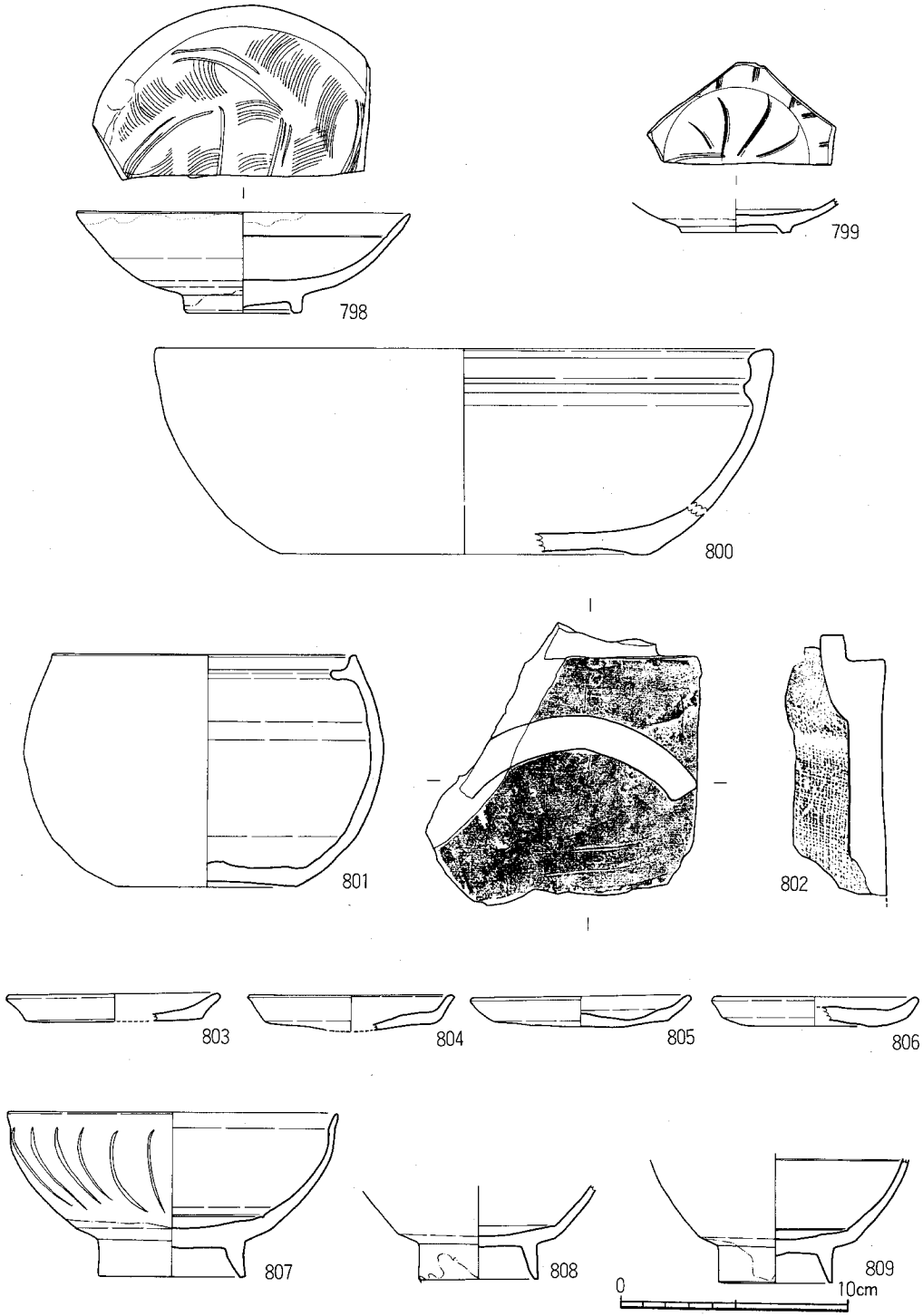
803～806は土師器小皿である。803～805は底部の切離しはヘラ切りである。806は糸切りである。器高1.2～1.6cm、1.3cm、口径8.8～9.5cm、8.9cmを測る。807～809は白磁碗0－Ⅲ類である。高台は細く、高い。体部は内湾気味に立ち上がり、一旦折れて口縁で外反する。外面には片彫りの縦線が施される。釉は高台外側までかかる。釉色は緑がかった灰白色を呈する。810は白磁碗Ⅳ類である。釉色は灰白色を呈する。811～813は白磁碗Ⅴ類である。811は外面に片彫りの縦線が施される。高台内側には墨書が見られる。「蓮　身」か。812、813は見込みに沈線が巡る。釉色は淡灰色を呈する。814は白磁碗で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。外面には蓮弁文、内面は櫛描の草花文が施される。釉色は青みがかった淡灰白色を呈する。815は白磁高台付の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。底部には高い高台が付く。見込みには渦巻き文が施される。釉は高台外側までかかる。釉色は緑がかった淡灰色を呈する。816は白磁平底皿0類である。見込みには蕉葉文が施される。高台外側まで釉がかかる。釉色は淡灰褐色を呈する。817は施釉陶器の四耳壺の胴部である。把手が欠損している。外面には草花文が片彫りされる。釉は外面のみかかる。胎土は粗く、灰褐色を呈する。釉色は淡緑褐色を呈する。818は白磁壺である。口頸部は直立し、肩部は張る。体部は瓜割形を呈する。肩部には片彫りの縦線が施される。釉は口縁内側と外面にかかり、釉色は淡灰色を呈する。

SK0469出土遺物（第94図819～842）

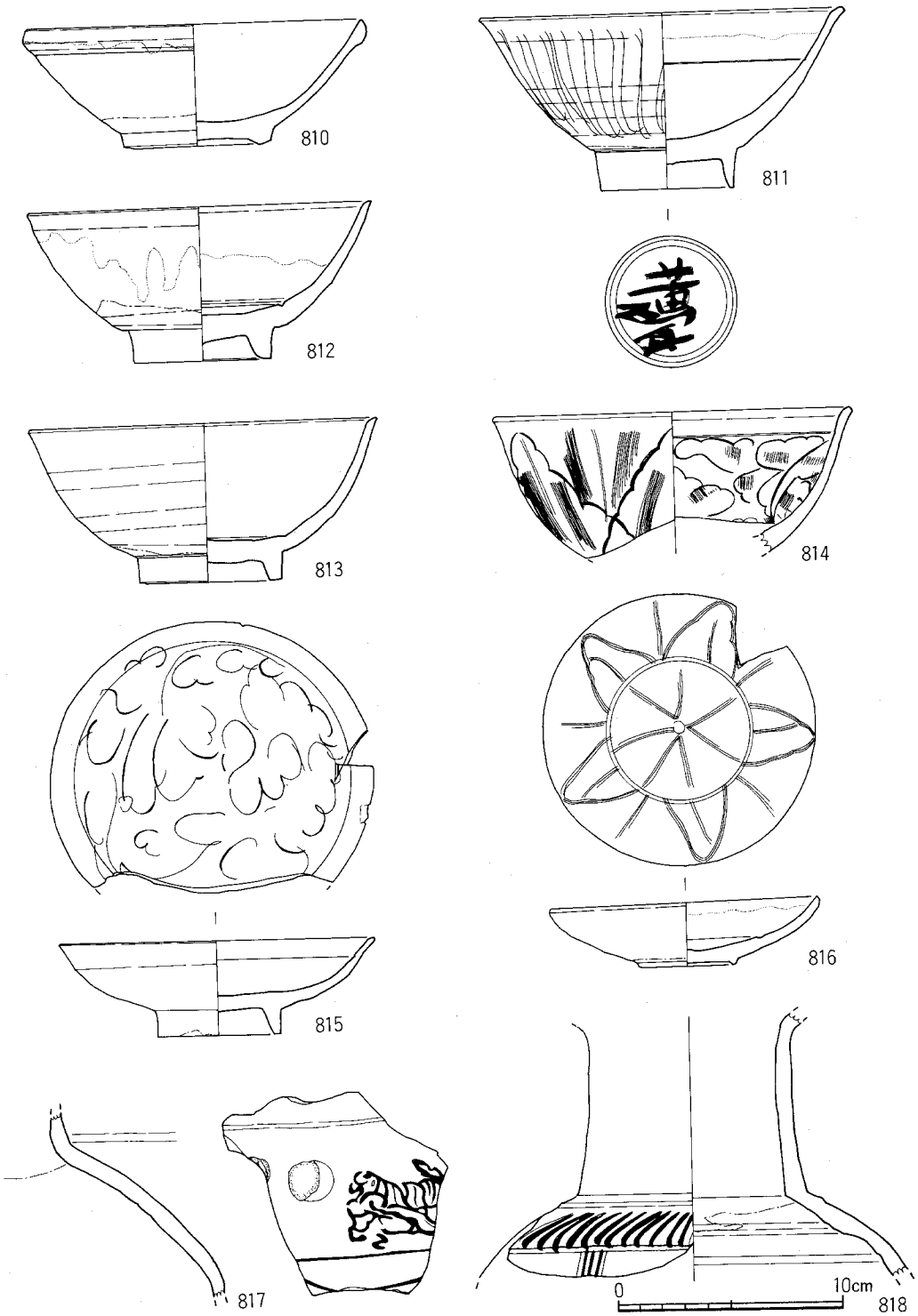
819～827は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りである。底面に板状圧痕が残る。器高1.0～1.6cm、口径8.8～9.7cmを測る。828～837は土師器丸底杯である。内面にはコテ当てが見られる。外底面には指頭痕が残る。器高3.4～4.0cm、口径14.4～15.6cmを測る。838は黒色土器B類椀である。胴部片のみである。内面にはヘラミガキ、外面にはナデを施す。指頭痕が残る。839は白磁高台付の皿である。見込みには沈線が巡る。外面下半は露胎となる。釉色は灰白色を呈する。840は青磁鉢である。口縁は折れて平坦になる。口縁は輪花を呈する。釉色は淡青白色を呈する。841は高麗青磁碗である。断面台形の高い高台が付く。釉は全面にかけられ、高台内側の目跡が残る。胎土は砂粒を少し含む。釉色はオリーブ色を呈する。842は越州窯青磁の壺である。底部は上げ底である。外面には釉がかかる。内面は露胎である。底部には目跡が残る。胎土は砂粒を少し含み、暗褐色を呈する。釉色はオリーブ色を呈する。



第91図　SK0438・0463(1)出土遺物実測図（1/3）



第92図　SK0463(2)・0467(1)出土遺物実測図（1/3）



第93図　SK0467出土遺物実測図(2)（1/3）

SK0471出土遺物（第95図843）

843は土師器丸底杯である。底面には板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが見られる。外底面は指頭痕が残る。器高3.4cm、口径15.5cmを測る。

SK0473出土遺物（第95図844）

844は白磁碗Ⅳ類の底部を転用した円盤である。

SK0477出土遺物（第95図845～852）

845～847は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが見られる。外面はヨコナデである。器高2.7～3.4cm、口径14.2～15.1cmを測る。848は土師器杯である。底部に断面台形の高台が付く。内外面には横方向のヘラミガキが施される。色調は褐色を呈する。底面には墨書が見られる。判読不能。混入品である。849は白磁平底皿である。体部は内湾気味に立ち上がる。外面下半は露胎となる。釉色は淡い褐色を呈する。850は白磁碗Ⅳ類である。見込みには沈線が巡る。851、852は施釉陶器の脚付の盤である。獣脚風の脚が付く。全体の器形は不明である。胎土は砂粒をほとんど含まず、赤褐色を呈する。釉は脚全面と盤の外側にかかる。釉色は深緑色を呈する。

SK0480出土遺物（第95図853）

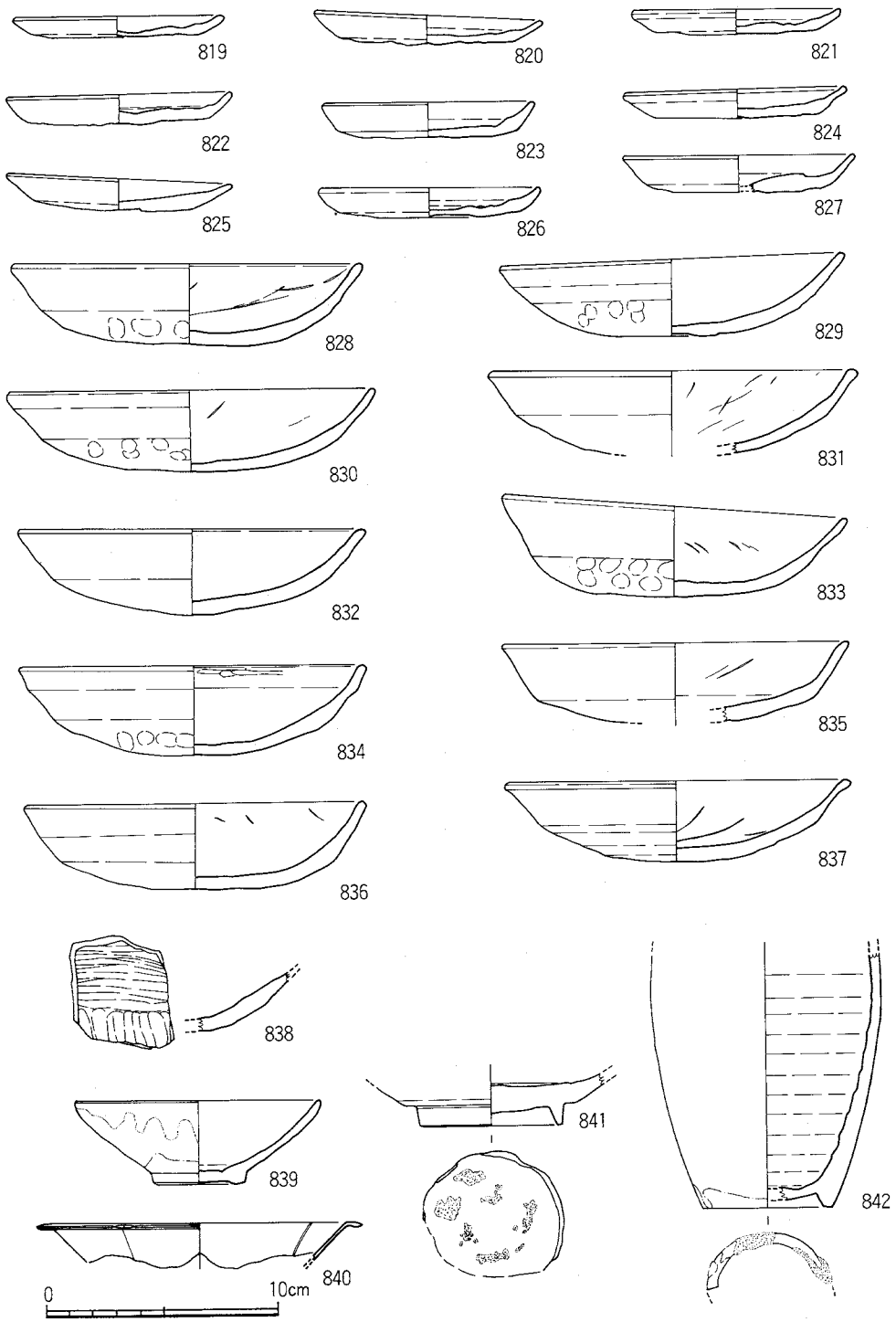
853は施釉陶器の盤である。内面には鉄絵の花文が施される。胎土は砂粒を少し含み、淡灰色を呈する。釉は内面にかかる。釉色は褐色を呈する。

SK0508出土遺物（第96図854～862）

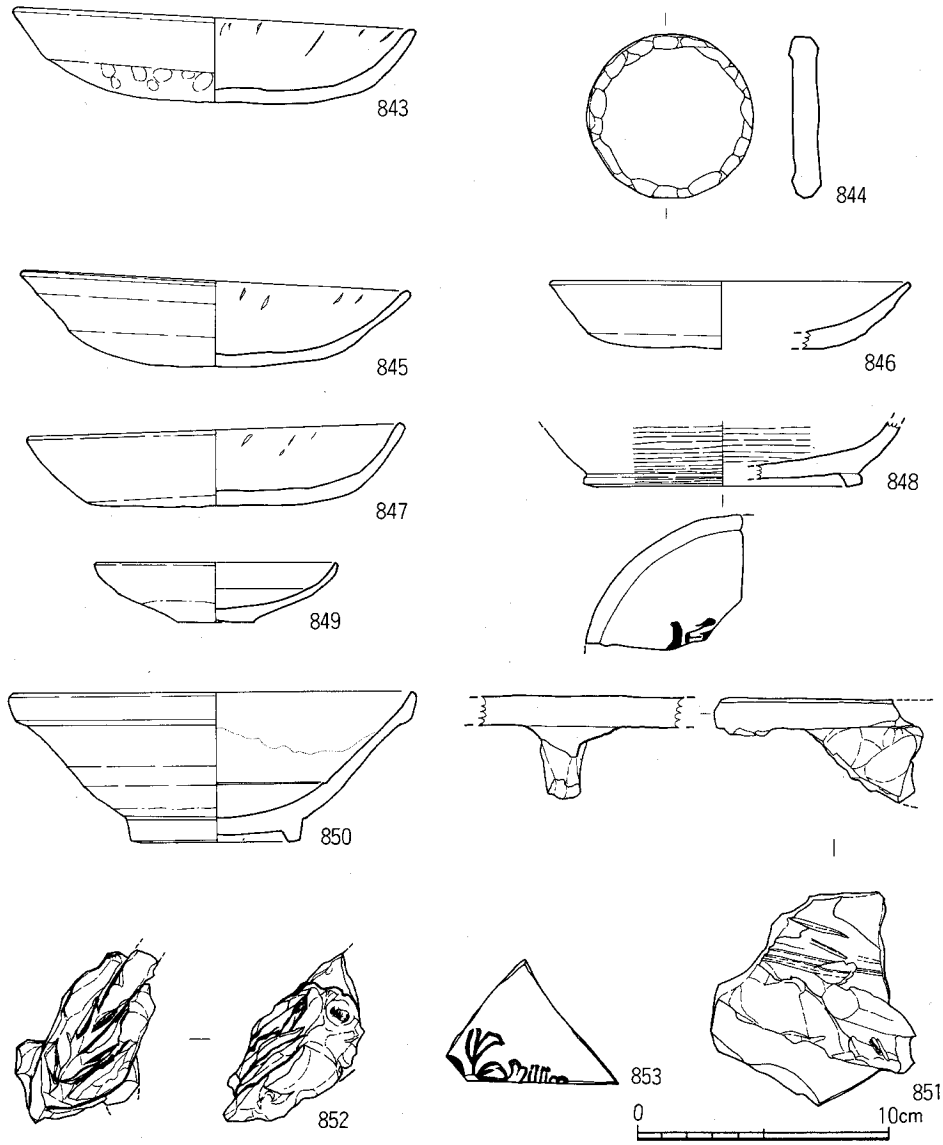
854は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。器高1.3cm、口径9.8cmを測る。855は土師器高台付の杯である。底部にはハの字形を呈する高台が付く。内面にはコテ当てが見られる。外面はヨコナデである。器高3.2cm、口径10.6cmを測る。856、857は土師器丸底杯である。底部には板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが見られる。器高3.5cm、3.2cm、口径14.6cm、15.6cmを測る。858は黒色土器B類である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。底部にはハの字形に開く高台が付く。内外面に丁寧にヘラミガキが施される。器高5.7cm、口径15.2cmを測る。859は瓦質土器の鉢である。体部は直線的に立ち上がる。口縁は上方につまみ上げる。内外面ともナデが施される。860は白磁碗である。体部は直線的に立ち上がる。外面下半は露胎となる。見込みの釉を輪状に掻き取る。釉色は灰褐色を呈する。861は白磁0－Ⅲ類の碗である。口縁は欠いている。釉は外面下半までかかる。外面には片彫りの花弁状の文様を施す。釉色は灰白色を呈する。862は白磁高台付の皿である。釉は高台外側までかかる。見込みには沈線が巡る。釉色は淡色を呈する。

SK0510出土遺物（第96図863～868）

863は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。器高1.2cm、口径9.8cmを測る。864～866は土師器丸底杯である。底部には板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが見



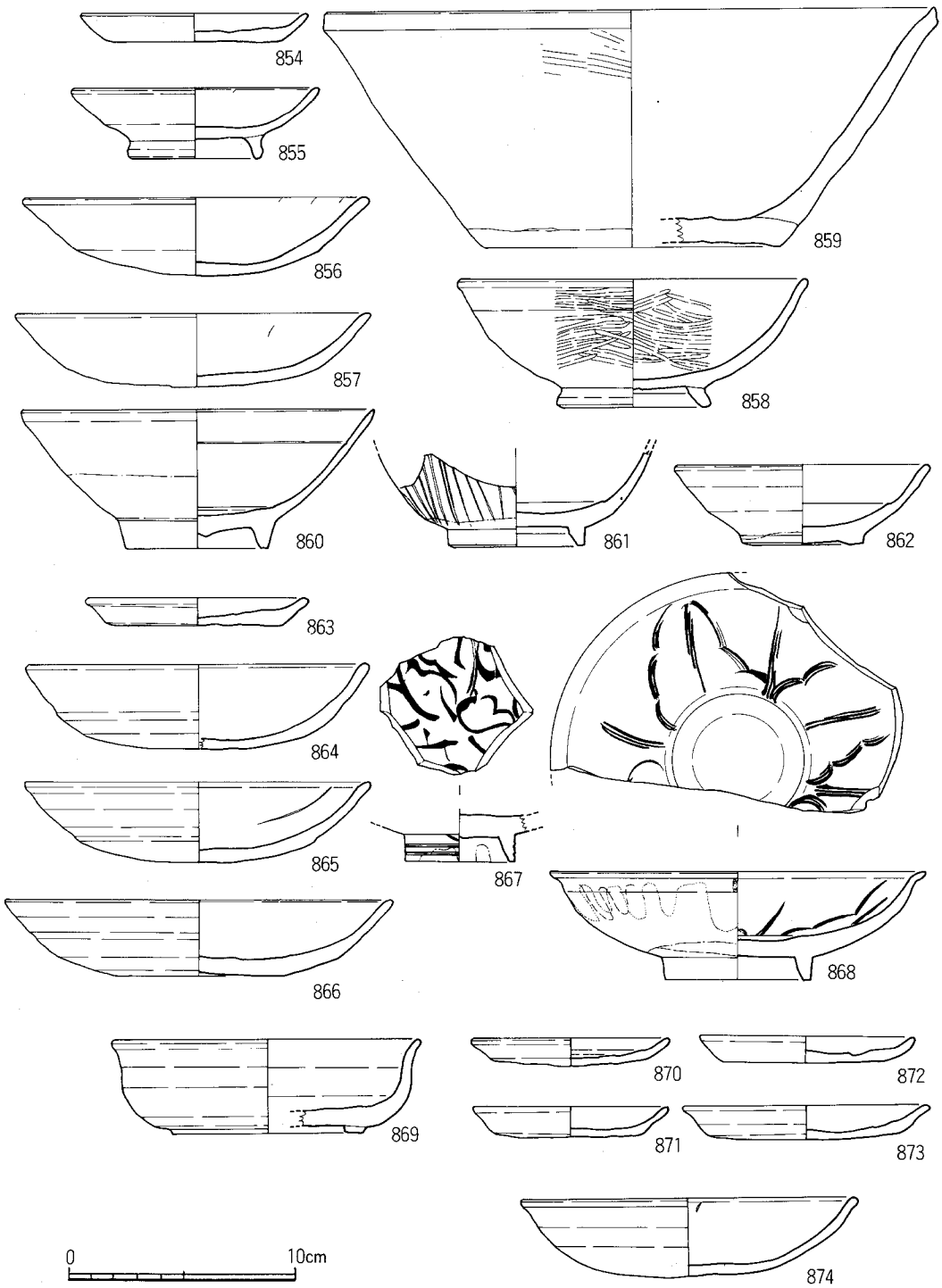
第94図　SK0469出土遺物実測図（1/3）



第95図　SK0471・0473・0477・0480出土遺物実測図（1/3）

られる。器高3.4cm～3.9cm、口径15.2cm～17.4cmを測る。867は白磁碗である。高台は高く、高台外側まで釉がかかる。見込みには片彫りの文様を施す。釉色は灰オリーブ色を呈する。868は白磁高台付の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は外反する。断面台形の高い高台が付く。見込みには蕉葉文が施される。器面には化粧土がかかる。釉は外面下半までかかる。釉色は灰白色を呈する。器高4.8cm、口径16.4cmを測る。

SK0512出土遺物（第96図869～874）



第96図　SK0508・0510・0512出土遺物実測図（1/3）

869は須恵器杯である。体部は外反気味に立ち上がる。底部には断面台形の低い高台が付く。混入品か。870～873は土師器小皿である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。器高1.2～1.5cm、口径8.5～10.5cmを測る。874は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りである。内面にはコテ当てが見られる。器高3.5cm、口径14.5cmを測る。

SK0559出土遺物（第97図875～877）

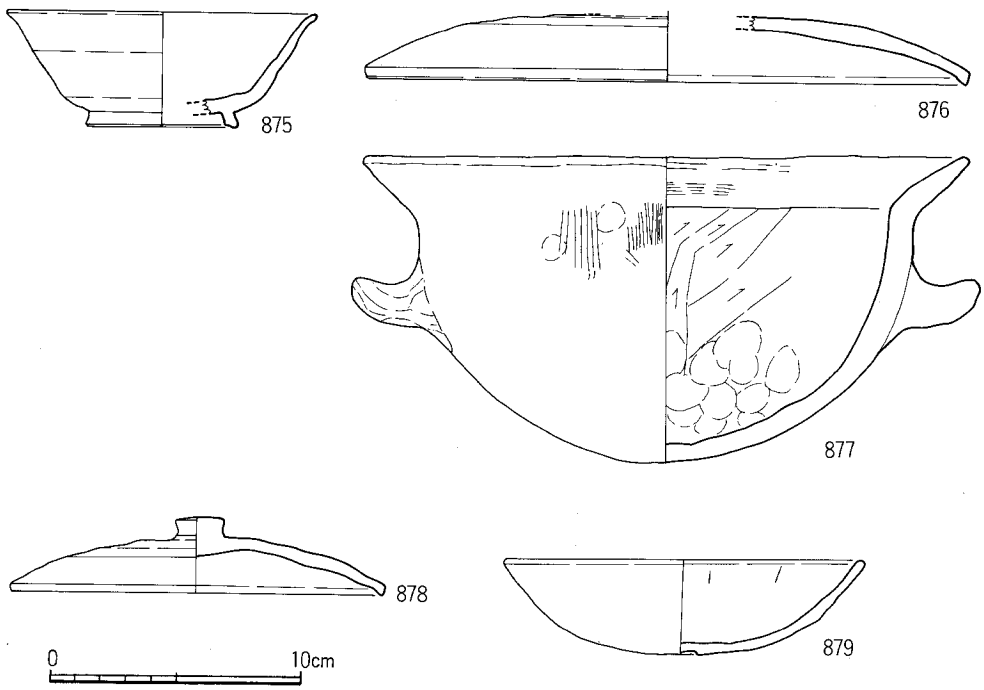
875は須恵器杯である。体部は直線的に立ち上がり、口縁は外反する。底部にはハの字形に開く高台が付く。876は土師器蓋である。天井部には回転ヘラケズリが施される。口縁はわずかに下垂する。877は土師器甕である。丸底で、口縁はくの字形を呈する。胴部中位に扁平の把手が付く。外面はハケメの後、ナデ、内面はヘラケズリを施す。

SK0568出土遺物（第97図878）

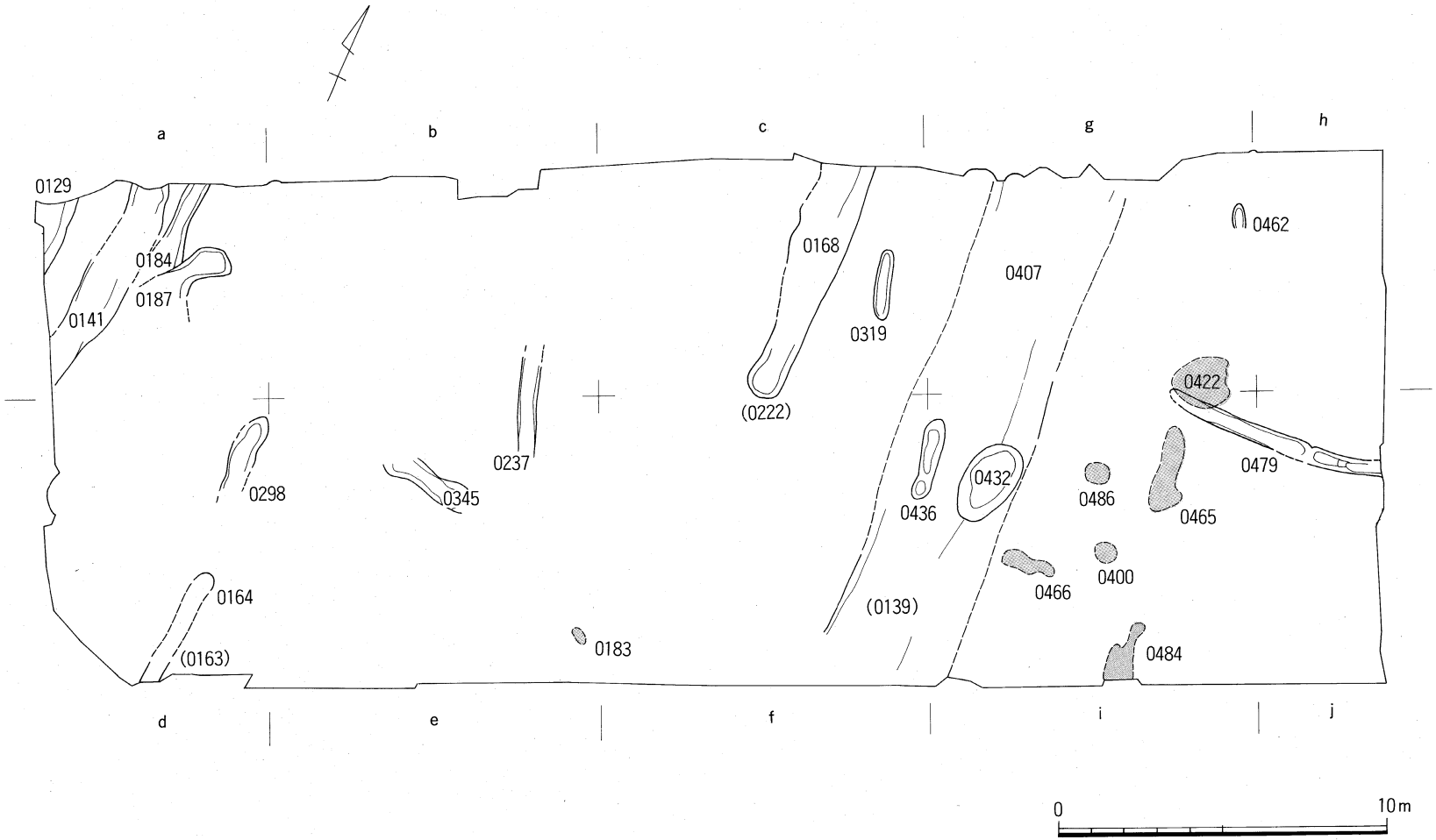
878は須恵器杯蓋である。天井部には扁平の摘みが付く。天井部には回転ヘラケズリが施される。口縁はわずかに下垂する。器高3.1cm、口径14.6cmを測る。

SK0580出土遺物（第97図879）

879は土師器丸底杯である。底部の切離しはヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面にはコテ当てが見られる。外面はヨコナデが施される。器高3.8cm、口径14.1cmを測る。



第97図　SK0559・0568・0580出土遺物実測図（1/3）

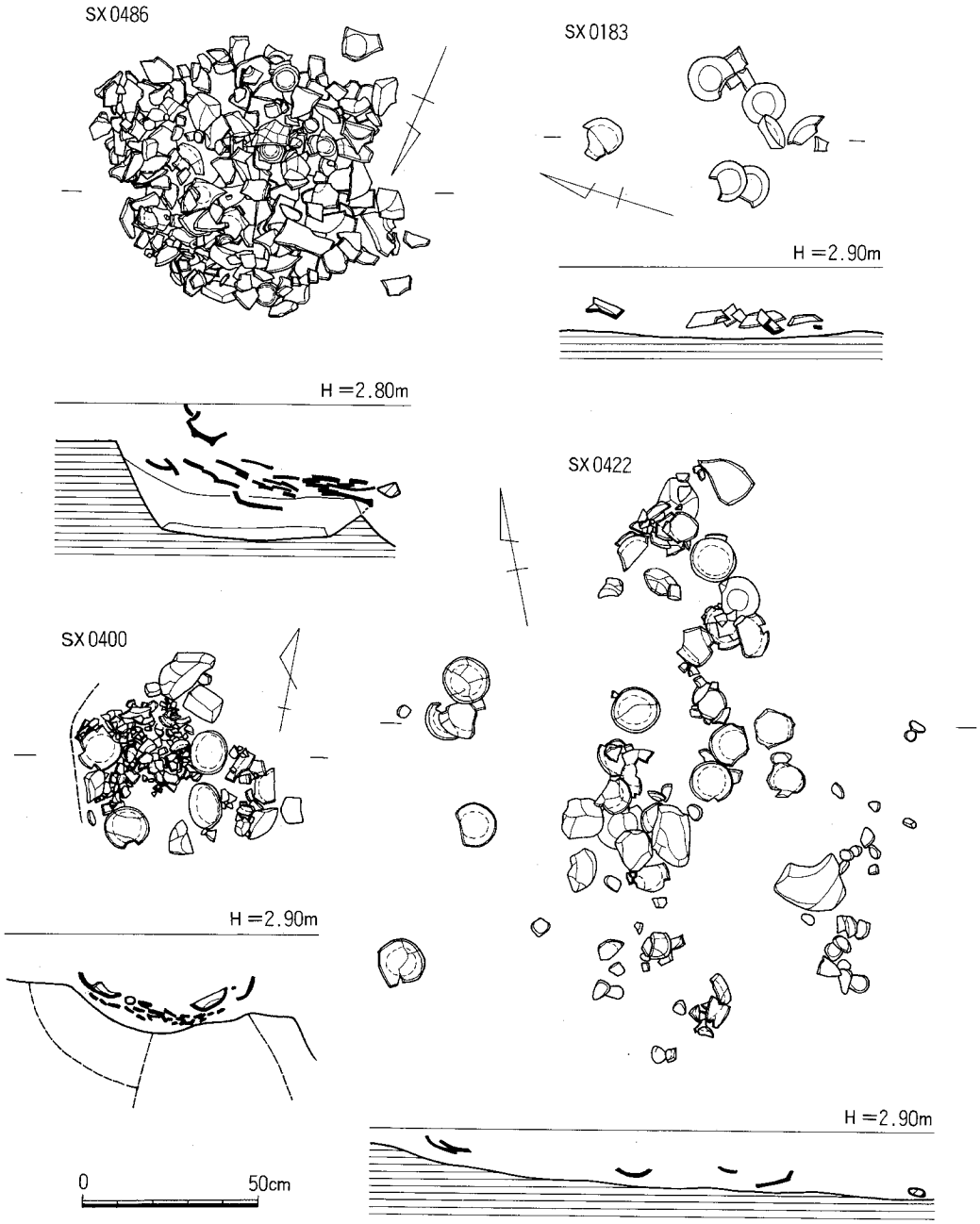


第98図　第Ⅲ面土器溜・溝・土壙墓配置略図（1/200）

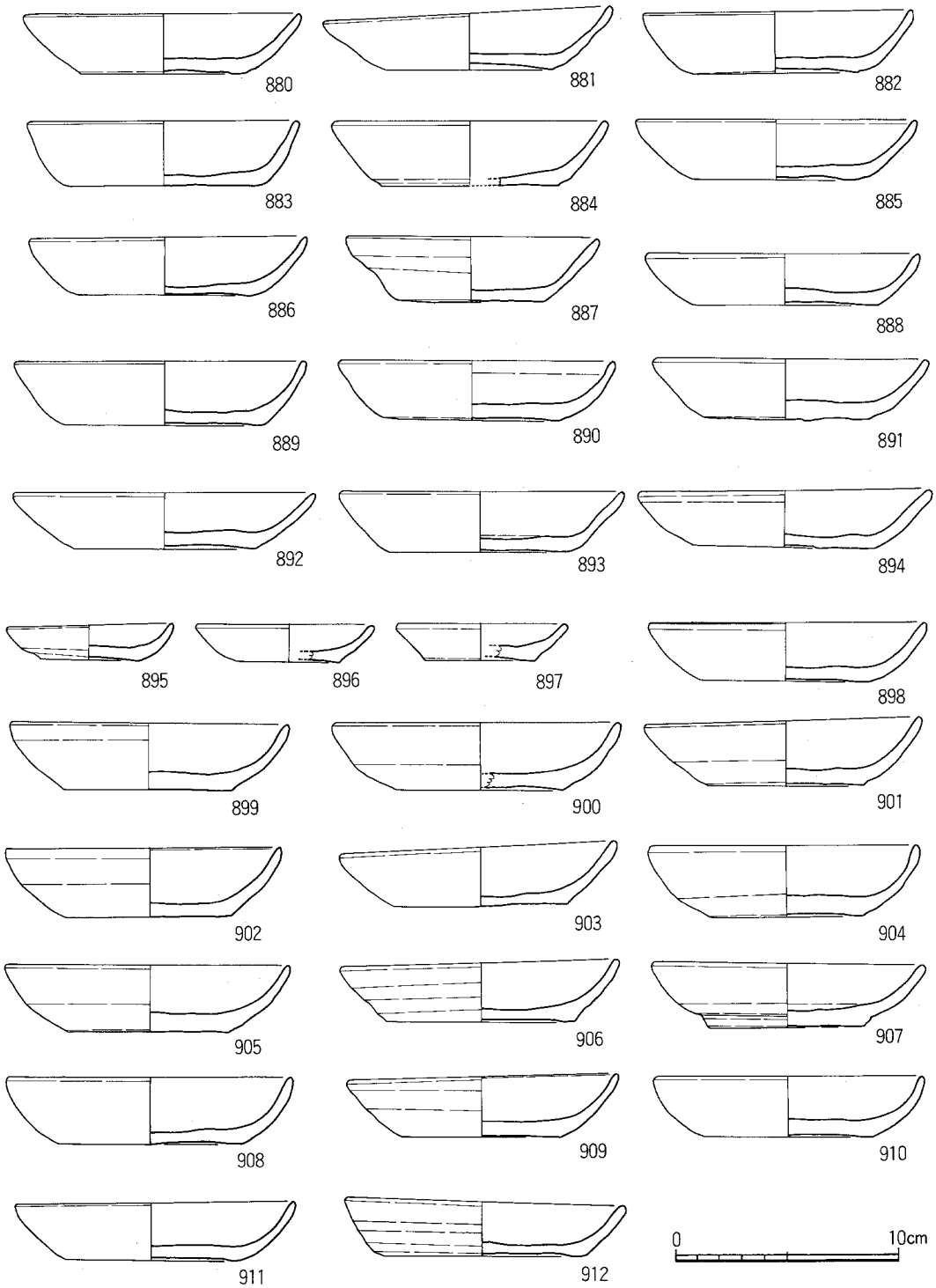
6）土器溜

特に掘形を持たず土器などが集積するものを土器溜と本書では称しておく。

SX0183（第99図）　e区。0.80mの範囲に土師器杯８個体以上がほぼ水平に集積していた。杯



第99図　SX0183・0400・0422・0486実測図（1/20）



第100図　SX0183・0400・0422(1)出土遺物実測図（1/3）

は完形に近く、裏返しになるものが多い。

SX0400（第99図、図版25）　i区。SE0401の井戸側上面に集積した土師器杯。完形と細かく破砕されたものがある。井戸廃棄の祭祀に関係したものか。

SX0422（第99図、図版25）　g区。南北1.70m、東西1.60mの範囲に土師器小皿と杯、それに礫が広がる。土師器は完形が多く、そのほとんどが表向きである。

SX0465（図版26）　i区。南北2.50m、東西1.00mの範囲に土師器杯を主体とした遺物がほぼ水平に集まる。土師器は完形もあるが、破片も多い。完形の杯は上向きである。

SX0466　i区。SE0483の上面、南北0.75m、東西1.65mの範囲に拳大の礫と土師器、白磁などの小片が集積する。土師器はヘラ・糸切り混在で、ヘラが少ない。

SX0484　i区。SK0559の上面、南北2.00m、幅0.90mの範囲に土師器、瓦、磁器などの小片が集積する。南側は調査区外となる。

SX0486（第99図、図版26）　i区。径0.80mほどの範囲に土師器、須恵器、瓦器、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器などの破片が隙間なく集積する。完形の遺物は全く見られない。下部には浅い掘り込みがあり、あるいは土坑底近くの遺物堆積を示すものであろうか。

7）土器溜出土遺物

SX0183出土遺物（第100図880～887）

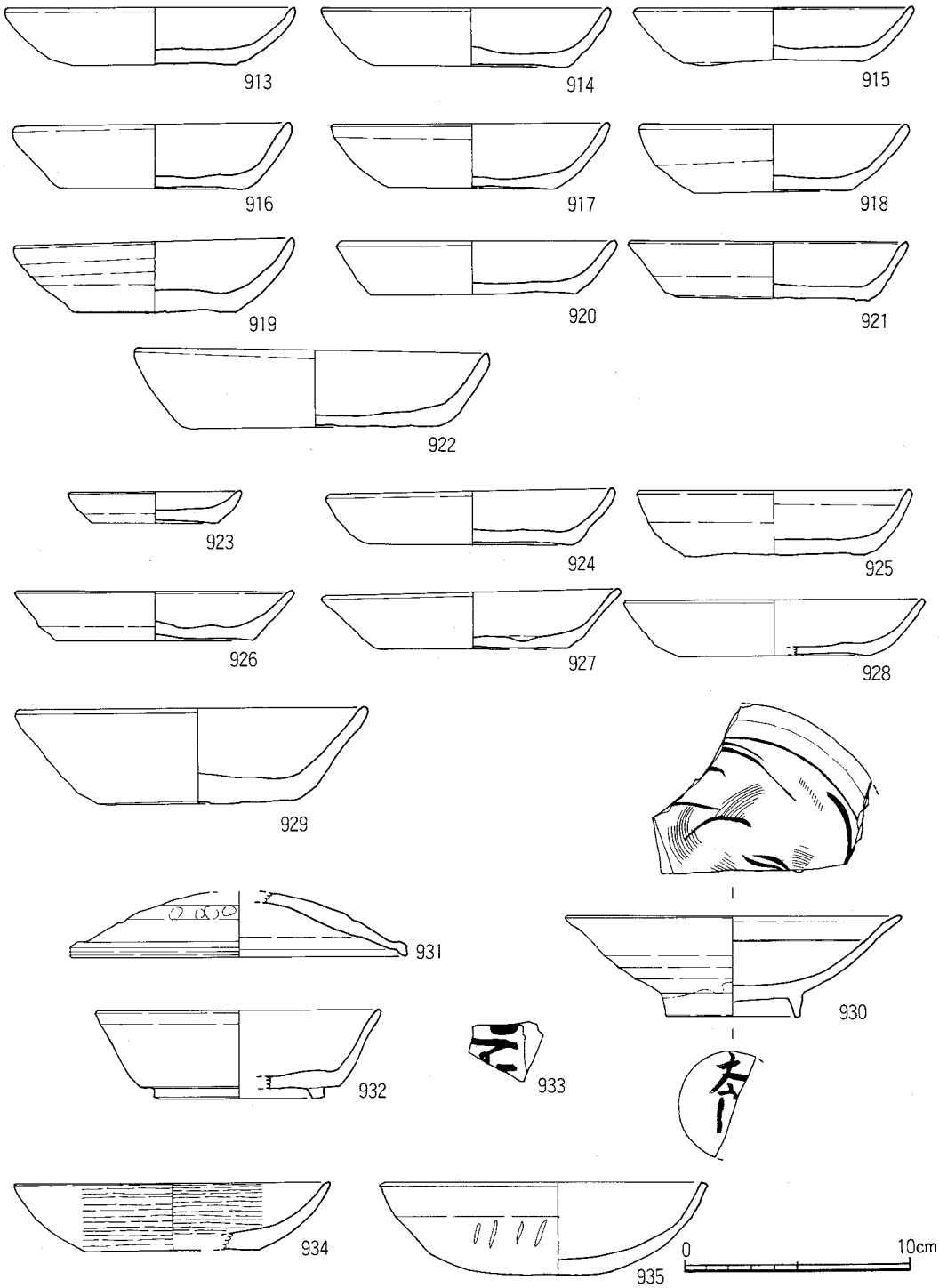
880～887は土師器の杯である。外底部はすべて回転糸切り、883を除きその他は外底部に板状圧痕をもつ、880～882は上げ底をもつ。881、886・887の内底部にはナデ調整が施されているが、それ以外は横ナデである。881・882と886は口縁部の歪みが著しい。884には整形時に施された荒い横ナデの痕跡がある。887の口縁部内面には僅かであるが煤の付着が認められる。口径は11.2～12.8cm、器高は2.6～2.9cmを計る。

SX0400出土遺物（第100図888～894）

888～894は土師器の杯である。外底部はすべて回転糸切りを施す。888～890、892・893は上げ底をもつ。891と894は外底部に板状圧痕をもつ。調整はすべて横ナデである。口径は12.0～13.4cm、器高は2.3～2.9cmを計る。893には煤の付着が口縁部内外面に認められる。

SX0422出土遺物（第100・101図895～922）

895～922は土師器の小皿と杯である。895～897は小皿で、すべて底部は回転糸切りを施し、上げ底を呈する。更に横ナデ調整を行なう。口径は895が7.4cm、896と897はそれぞれ7.9cm、7.5cmを計る。器高は1.6～1.7cmにおさまる。898～922は杯で、底部はすべて回転糸切りを施す。898、901、913・914は底部に板状圧痕がつき、さらに上げ底を呈する。899、907、915、919、922は底部に板状圧痕を持つものである。口径は910、918、922をのぞいて全て12.0～12.7cmにおさまる。910と918は11.7cmと11.8cm、922は15.6cmを計る。器高は899・900、902、904・905、



第101図　SX0422(2)・0465・0466・0484(1)出土遺物実測図（1/3）

908、918以外は2.4～2.9cmで、その他は3.0～3.5cmを計る。

SX0465出土遺物（第101図923～929）

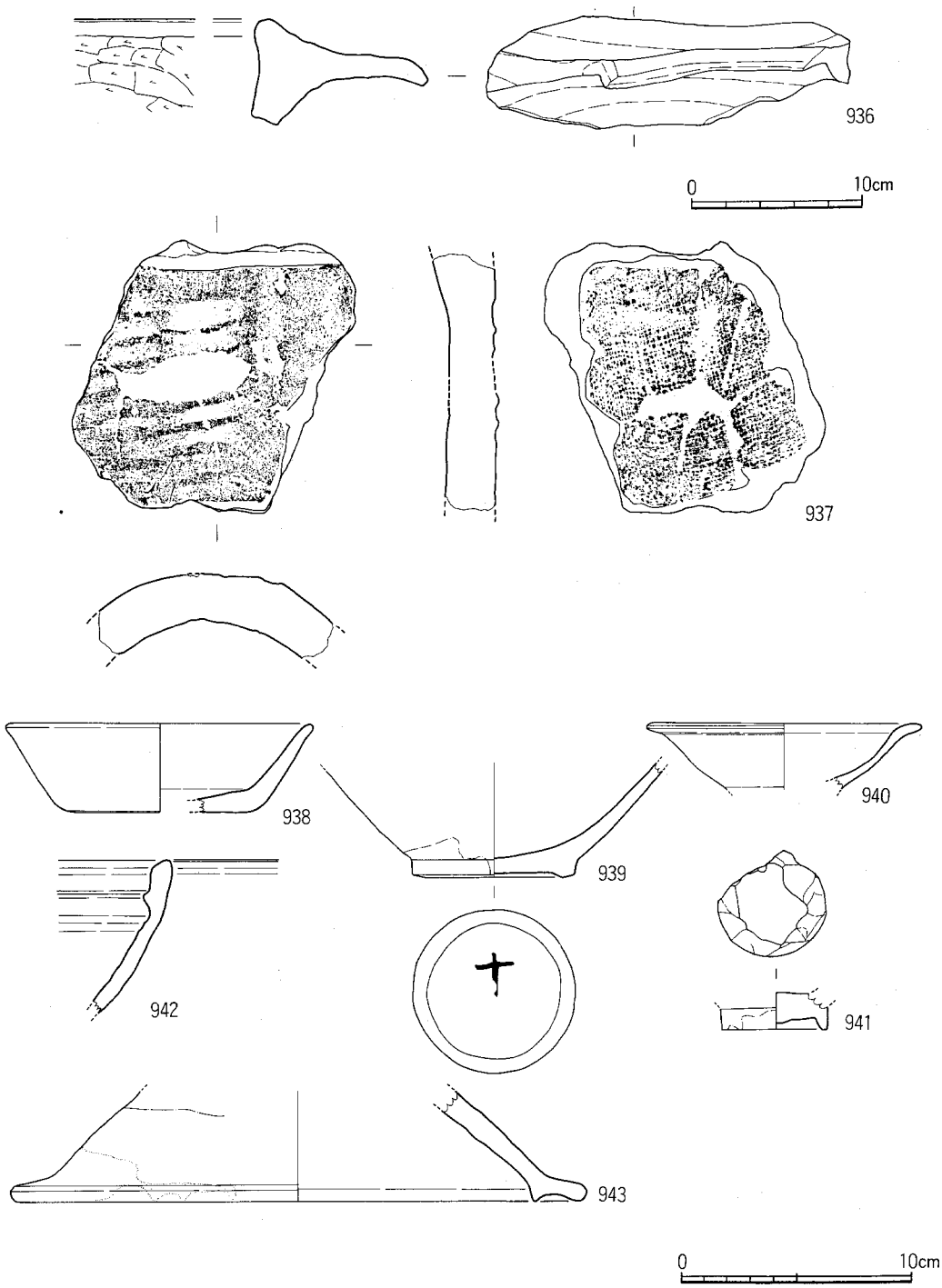
923～929は土師器の小皿と杯である。923は小皿で、外底部は回転糸切り、上げ底となる。調整は横ナデを施す。口径7.5cm、器高1.5cmを計る。924～929は杯で、外底部は回転糸切りを施し、924は内底部にナデ調整を行なう。929を除いて上げ底となる。その他はすべて横ナデである。925には口縁部付近に接合痕がある。926の外面体部中位～下位にかけてヘラ状工具による回転整形痕がみられる。929の外面体部では口縁部直下から板状の木口を用いての回転横ナデ痕をもつ。口径15.3cm、器高4.3cmを計る。その他の杯は口径11.8～13.1cm、器高は2.5～3.0cmを計る。

SX0466出土遺物（第101図930）

930は白磁の高台付皿である。体部中位から外反し広がりながら口縁部にいたる器形を呈する。内面には１条の沈線が巡り、内底にはへらの片切り彫と櫛目文を施す。高台の内外面は斜に削り取る。釉は外底部と高台を除いて全面に施され、淡褐色を呈し、非常に細かい氷裂がみられる。外面には更に細かい気泡がみられる。胎土は淡褐色である。外底には「大朗？」と読める墨書がある。口径14.8cm、器高4.5cmを計る。

SX0484出土遺物（第101・102図931～937）

931～933は須恵器である。931は杯蓋で、宝珠は欠損する。外面天井部は逆時計回りのケズリ、内面はナデで仕上げる。外面中位には指圧痕を残す以外は横ナデを施す。器面は灰黒色を呈し、口径は14.7cmを計る。932は高台付の杯である。外底には底部の端から少し内側によって高台を貼りつける。底部から鋭く折れて立ち上がる胴部は外反しながら口縁部へと延びる。外底にナデ調整を施す以外は全て横ナデである。器面は灰色を呈する。口径12.4cm、器高4.0cmを計る。933は杯の底部破片と思われる。約３cmほどの細片のため全容をうかがい知ることはできない。胎土は少量の砂粒が混じる。焼成も良好、灰色を呈する。外底と思われる表面には墨書がみられるが、判読は不可能。934～936は土師器である。934は杯で、外底にヘラ削りを施す以外は全面にわたって丁寧な横方向ヘラ磨きを行なう。胎土には砂粒が比較的多く混じり、赤褐色～淡赤褐色を呈する。口径13.0cm、器高3.0cmを計る。935は丸底杯で、外底にはヘラ切りを施し、板状圧痕をつける。さらにヘラ状工具による横方向の当て痕がみられる。内面口縁部には右下がりのコテ当てがあり、内面には全体にわたり磨きが施される。口径13.9cm、器高4.2cmを計る。936は竈の焚き口の破片である。内面にはヘラ削りを施し、焚口のうえのひさしになる箇所では、その上面で著しいくぼみをつくり、更に刷毛目痕がのこる。下面にはヘラ状工具によるナデ調整が行なわれ、更に著しく煤が付着する。焚き口の縁にあたる箇所には比較的丁寧なヘラ磨きが行なわれている。胎土には多量の砂粒が混じる。復元口径は52.4cmを計る。937は丸瓦の破片である。外面には粗いタタキが施され、内面には布目が残る。胎土には粒子の大き



第102図　SX0484(2)・0486出土遺物実測図（1/3）

い砂粒が多量に混じり、灰色を呈する。

SX0486出土遺物（第102図938～943）

938は須恵器の杯である。外底部は回転（逆時計回り）のヘラ削りを行なう。それ以外は横ナデ調整を施す。胎土には少量の砂粒が混じる。焼成は良好で、色調は明褐色を呈する。所謂赤焼きと呼ばれるものである。口径13.1cm、器高4.9cmを計る。939～941は白磁である。939は碗で、外底部は露胎。更に「十」と読める墨書がある。外底部以外はガラス質の淡灰色の釉を施す。940は高台付皿である。淡灰褐色の釉を施し、内面には氷裂がみられる。口径は12.0cmを計る。941は碗の底部の転用品である。周囲は打ち欠きを行なって円盤状につくる。外底部は露胎で、墨書もかすかに認められるが判読は不可能。淡灰色を呈する釉が内底部にも施される。径は4.6cmを計る。942・943は中国陶器である。942は鉢で横ナデ調整を施す。胎土には多量の砂粒が混じり、暗灰褐色を呈する。外面は茶褐色。内面は暗褐色である。943は蓋で、外面の天井部付近では茶色の釉が施されているが、それ以外は露胎である。胎土には小量の砂粒が混じり、茶褐色を呈する。口縁部外面には煤の付着がみられる。口径24.3cmを計る。

8）溝

溝として番号を付けたのは16条であるが、明らかに接続するものが３条（SD0164とSD0163、SD0168とSD0222、SD0407とSD0139。先に示した番号で記述。遺物は番号ごとに図示し説明を加えている）あり結局13条となる。磁北方向に走るものが多い。

SD0129　a区西北端で検出した南北溝。残存する東側縁は磁北を示す。深さ35cm。

SD0141　a区。SD0129の東側を平行して走る。幅1.20m前後、深さ20cm。断面は逆台形。確認できる溝底の標高は1.75mと一定である。南側は土坑などに切られ形を失う。

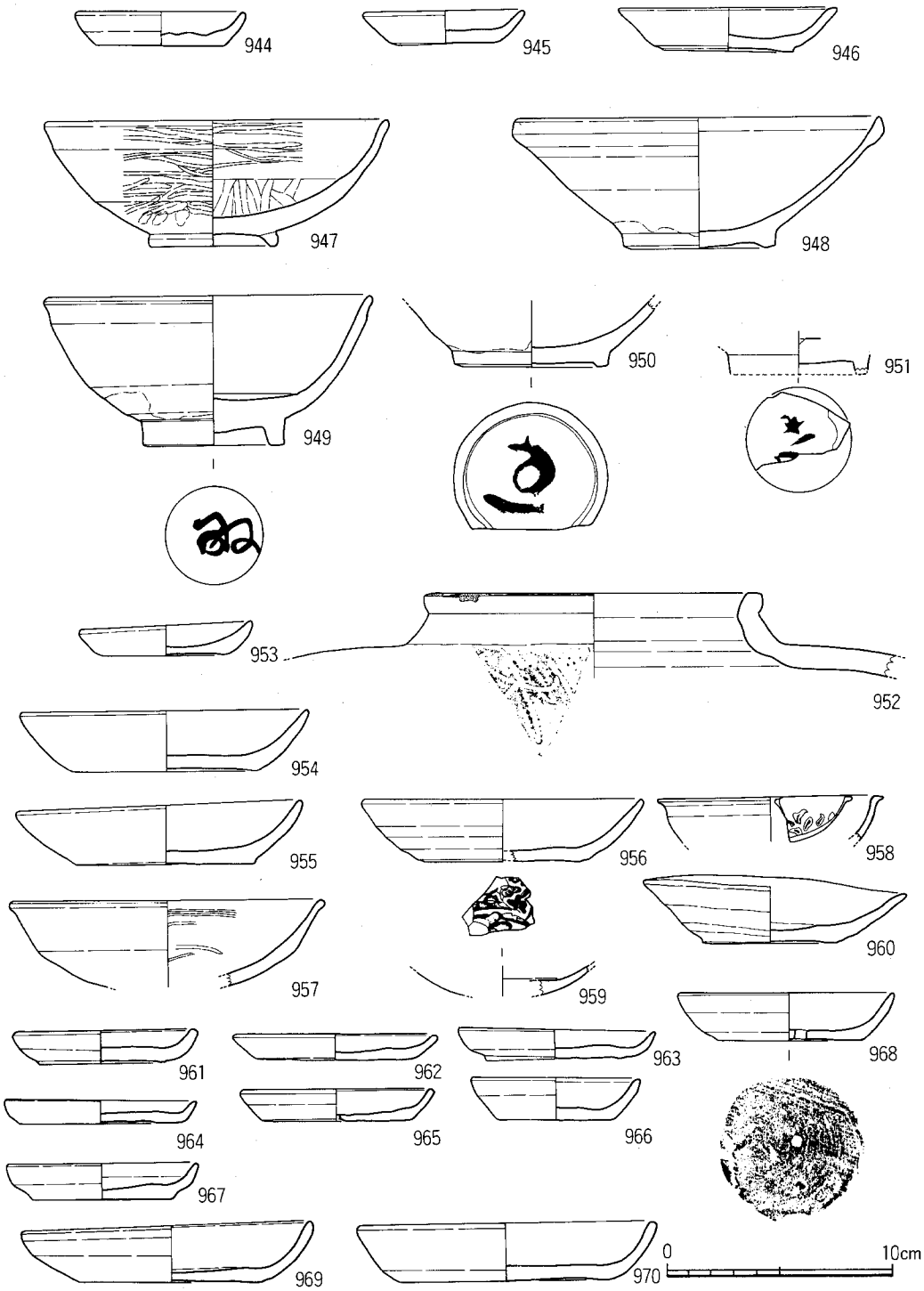
SD0164　d区。南北溝。上面を破壊されほとんどその形をとどめない。南側から約3.5mで立ち上がる。深さは20cm。南側の0163と北側の0164に分けて検出したが、同一遺構である。北側面の削平状況からするとさらにSD0298に接続する可能性がある。

SD0168　c区。方位を磁北に取る南北溝。北側の境から南へ7.5m走って立ち上がる。残りの良い南側（0222）で幅1.00m、深さ24cm。南端部分は42cmと一段深くなる。土師器皿・杯（ヘラ・糸切り混在、糸切りが多い）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土した。

SD0184　a区。SD0141の東側を走る南北溝で、南側はSD0187に切られ不明。幅0.60m、深さ21cm。断面は逆台形。土師器杯、白磁、中国陶器などの細片が出土。

SD0187　a区。SE0145西側上面に端を発し西へ２m走り、南に折れる。南側はSE0195に切られ不明。幅0.70m、深さ15cm。土師器杯（ヘラ・糸切り混在）、白磁、龍泉・同安窯系青磁、中国陶器などが出土した。

SD0237　b・e区をN－20°－W方向に約３m走る。南端は不明瞭となる。幅0.50m、深さ16cm。



第103図　SD0129・0139・0141・0164・0237・0298(1)出土遺物実測図（1/3）

SD0298　d区。南北溝で約2.50m続く。北側は立ち上がる。幅0.80m、深さ15cm。周囲が削平され明確さを欠くが、SD0164と接続するような位置にある。

SD0319　c区。N－17°－W方向に2.20m走る幅0.38m、深さ10cmの短い溝。土師器杯、黒色土器などの破片とともに銅椀が出土した。

SD0345　e区下層。ほぼ東西方向に3.50m走る溝。両端は上面遺構に切られる。幅0.60～1.00m、深さ18cm。土師器、須恵器片が出土。

SD0407　g区からf区を南北に横断する幅4.60mの溝で、残りの良いところは深さ65cmをはかる。しかし大半が上面遺構などに削られ、溝の姿をほとんどとどめない。南側はSD0139となる。

SD0436　f区。SD0407底で検出したN－10°－W方向に2.45m走る幅0.55m、深さ30cmの短い溝である。

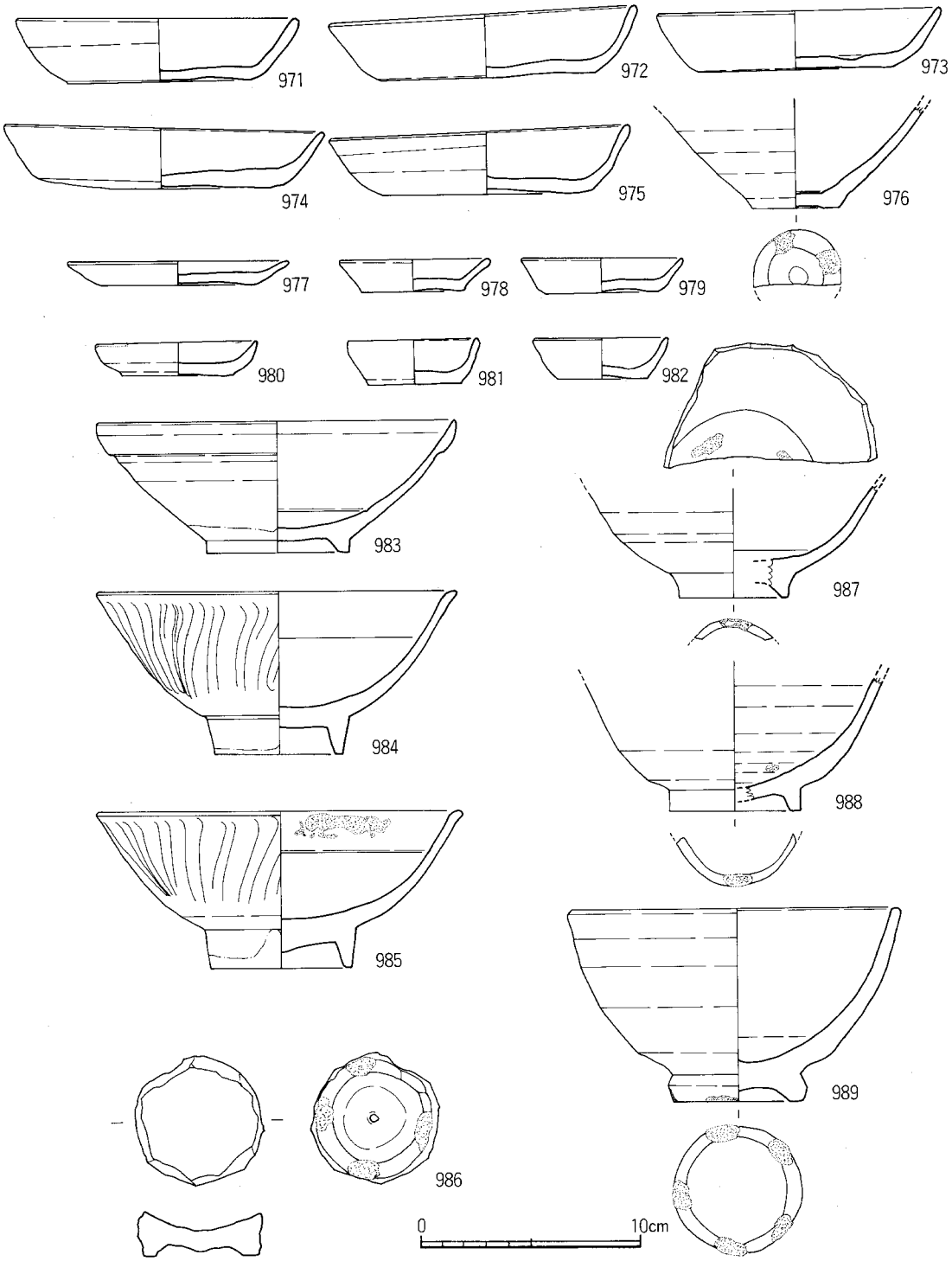
SD0462　g区。N－24°－W方向に0.75m走る幅0.35m、深さ10cmの短い溝。南側は現代攪乱に破壊される。土師器杯（糸切り）などが少量出土。

SD0479　i･j区。調査区東壁からほぼ東西方向に6.00m走る溝。東端から2.30mでいったん立ち上がる。西端は次第に消える。幅0.50m、深さ20cm。土師器杯(ヘラ･糸切り混在)、白磁碗･皿、龍泉窯系青磁碗、中国陶器などが出土。

9）溝出土遺物

SD0129出土遺物（第103図944～952）

944～947は土師器である。944～946は小皿で、外底部は回転糸切りをおこない、その他の部位は横ナデ調整をおこなう。945の外面には煤の付着が著しい。口径は7.3cmと7.0cm、器高は共に1.5cmを計る。946の外底部は回転糸切りをおこない、上げ底を呈する。その他の部位は横ナデ調整を行なう。口縁部内外面には煤の付着が認められる。口径9.5cm、器高2.0cmを計る。947は椀で、貼り付け高台は内湾する。体部は緩やかに内湾し、外へ開きながら口縁端部にいたる。ヘラ磨きは外底部を除いて全面に施す。体部中位付近には指圧痕がのこる。948～951は白磁の碗である。948は玉縁口縁をもち、ガラス質の淡灰緑色の釉が外底部と体部下位を除き施されている。口径16.0cm、器高5.8cmを計る。949は口縁直下でくぼみをつくり段をもうける。外底部と体部下位を除いて釉が施され、淡灰色を呈する。内底部には１条の沈線が巡り、外底部には「双？」の墨書がある。口径15.8cm、器高6.7cmを計る。950は底部の破片である。釉は外底部を除き施され、淡灰色を呈する。花押と思われる墨書が外底部にみられる。底部径は6.1cmを計る。951は底部の破片で、高台の先端部が僅かに欠損する。釉は露胎の外底部を除き施され、淡灰色を呈する。内底の見込みには櫛目文が描かれ、外底部には墨書がみられる。しかし判読は不可能である。952は中国陶器で、短頸壺の口縁部～肩部の破片である。肩部には施釉後に彫られた文字「天」が読み取れる。全面に暗褐色の釉が施され、口縁端部には重ね焼きの目跡が残



第104図　SD0298(2)・0407(1)出土遺物実測図（1/3）

る。胎土は灰褐色を呈し、黒色や白色の砂粒が比較的多く混じる。口径は15.0cmを計る。

SD0139出土遺物（第103図953・954）

953・954は土師器である。953は小皿で、外底部は回転糸切りをおこない、さらに僅かであるが、上げ底となる。口径7.6cm、器高1.4cmを計る。954は完形の杯で、外底部は回転糸切りを施す。上げ底で、板状圧痕をのこす。外底部以外は横ナデ調整である。口径12.6cm、器高2.7cmを計る。

SD0141出土遺物（第103図955～958）

955～957は土師器の杯である。955・956は外底部を回転糸切りを行い、上げ底とする以外は横ナデ調整をする。955はさらに板状圧痕を外底部にのこす。956の内外面には煤の付着が著しいことから灯明用として使用されたものと思われる。口径12.4～12.6cm、器高は2.6～2.8cmを計る。957は口縁～体部の破片として残存しているが、丸底の杯と思われる。外面は横ナデ、内面はヘラ磨きが施された痕跡が僅かにのこる。外面の体部下位には直線的にはしる１条の沈線としてのヘラ記号の一部が認められる。胎土には比較的多くの砂粒が混じり、淡褐色を呈する。口径13.6cmを計る。958は高麗青磁の皿である。口縁端部は外側にほぼ水平に引き出す。青緑色の釉を全面に施し、内面には型押しによる陽刻した花文をあしらう。胎土は灰色を呈し、砂粒が比較的多く混じる。口径10.0cmを計る。

SD0164出土遺物（第103図959）

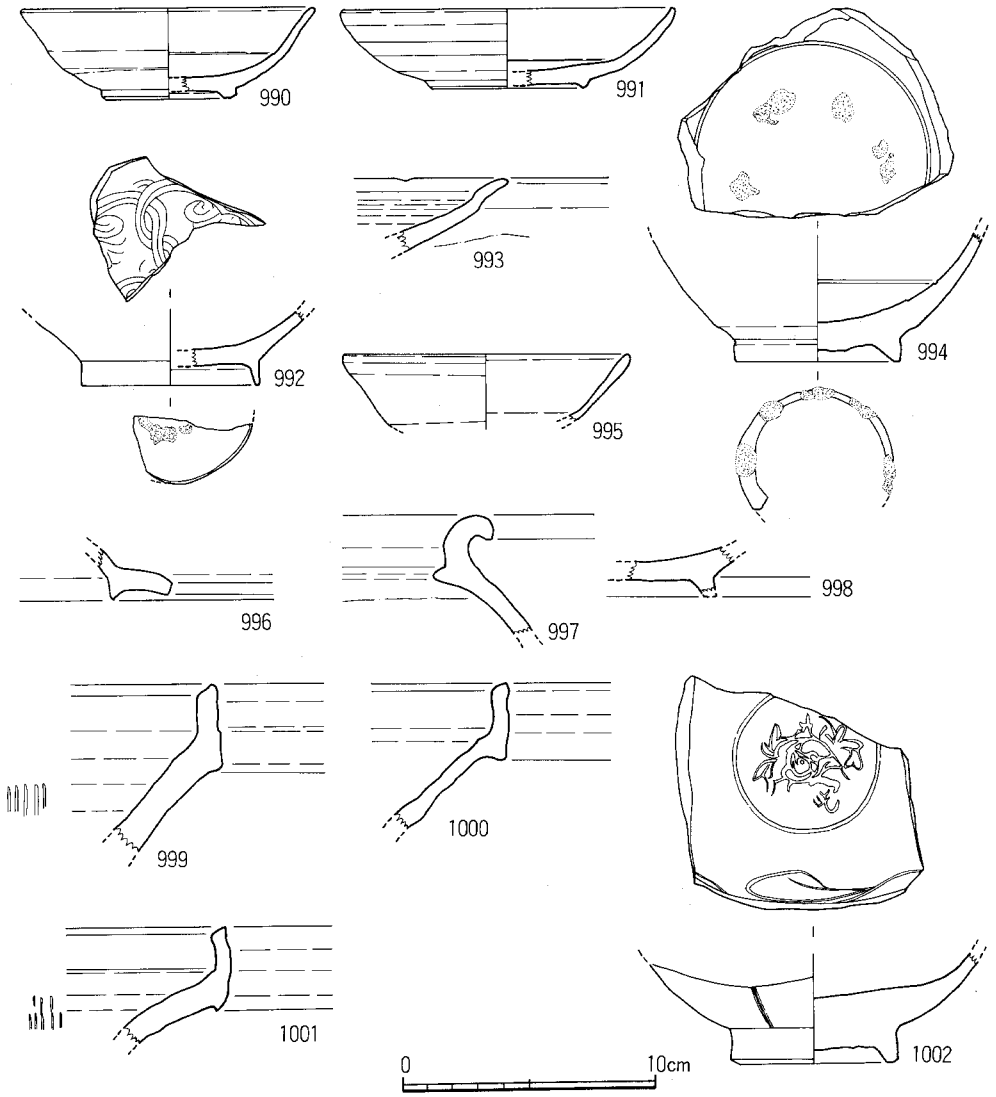
959は高麗青磁の皿で、底部の破片である。灰色を呈する胎土には砂粒が少量混じる。釉は暗灰緑色を呈し、半透明のガラス質で全面に施されている。内面には型押しによる陽刻した花文をあしらう。

SD0237出土遺物（第103図960）

960は土師器の杯である。外底部は回転糸切りを施し中央部でややくぼむ。それ以外の箇所は横ナデ調整を行なう。体部は底部よりほぼまっ直ぐに外反して、大きく開き、口縁端部へいたる。口縁部の歪みは著しく、その一部には若干の煤の付着がみられることから灯明用として使用した可能性がある。口径11.7cm、器高3.0cmを計る。

SD0298出土遺物（第103・104図961～976）

961～975は土師器である。962～968は小皿で、外底部は回転糸切りを施し、内底部はナデを行い、それ以外は横ナデ調整である。961～963、965、968は板状圧痕をつける。961は上げ底をもつ。964は外底部の中央部がくぼみ、内面は煤らしきものが付着する。965は口縁部内面に煤の付着がみられ、灯明皿として用いたと思われる。968は外底部に上げ底をもち、中央付近に、焼成前につくられた径５mmの穿孔が一ケ所ある。おそらく液体を別の容器に入れるための漏斗として使用した道具と思われる。外底部以外は横ナデ調整を施す。口径は961が7.8cm、962～965、967が8.3～8.6cm、また966は7.4cm、968は9.4cmにおさまる。器高は966、968はそれ



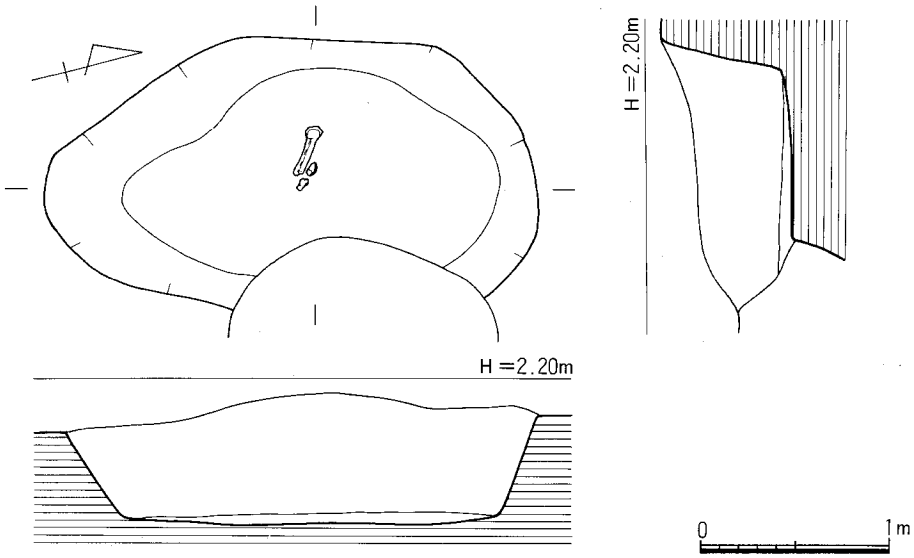
第105図　SD0407(2)・0436出土遺物（1/3）

ぞれ1.9～2.2cmである。それ以外は1.0～1.6cmにおさまる。969～975は杯で、外底部は回転糸切りである。969・970以外はすべて板状圧痕をのこす。969～971、973・975は上げ底をもつ。974の内底部にはナデ調整が行なわれ、さらに煤の付着がみられる。975は外底部を除き横ナデ調整を行う。口縁部内外面の１／３程にかなりの煤が付着しているため灯明用として使用したものと思われる。口径は963～965、973が12.6～12.9cm、また972、974・975は13.5～14.4cmにおさまる。器高は2.5～3.0cmとなる。976は高麗青磁碗の体部～底部の破片である。体部は底部

から外反しまっ直ぐに開く、蛇目高台の内側は浅くくぼむ。内底部は段をもうけ、小さい見込みをつくる。釉は全面に施され、ガラス質の深いオリーブ色を呈する。更に粗い氷裂が全体にわたってみられる。畳付には二ケ所に目跡が残存する。

SD0407出土遺物（第104・105図977～1001）

977～982は土師器の小皿である。外底部は977のヘラ切りを除いて、回転糸切りを行なう。977、979は板状圧痕をもつ。上げ底は981を除いて全てにある。977は口径9.9cm、器高1.1cmを計る。それ以外の口径は5.9～7.3cm、器高は1.5～2.1cmにおさまる。980の口縁端部には煤の付着がみられる。983～991は白磁である。983～989は碗で、その内986～989は李朝の碗である。990・991は高台付皿・平底皿である。983は内底部に１条の沈線を巡らし、外底部～体部下位は露胎で、それ以外は灰白色で、細かい氷裂のある釉が施される。胎土には黒色粒が少なく混じり、更に体部付近は灰白色であるが、高台では淡褐色を呈する。口径16.2cm、器高6.0cmを計る。984は内面体部に浅い沈線を１条巡らす。外底部は露胎で、それ以外は灰白色のガラス質の釉が施され、外面体部には縦方向にヘラによる片切り彫がみられる。胎土には多くの黒色粒が混じり、白色を呈する。口径は16.2cm、器高は7.5cmを計る。985はSE0420より出土した破片と接合したものである。内面体部に１条の太い沈線を巡らす。外底部は露胎で、それ以外は灰白色の釉を施す。口縁部内面には釉が著しく剥離し、その周囲では別個体の胎土の付着がある。口径は16.5cm、器高は7.2cmを計る。986は碗の底部破片を転用した円盤状の製品である。内外面には灰白色～青灰白色の釉が施され、胎土には砂粒が多く混じり、淡褐色～淡灰褐色を呈する。高台の畳付には四ケ所に目跡がのこる。径5.3cmを計る。987は内底見込みに乳白色の１条の細い沈線を巡らす。灰白色で非常に細かい氷裂のある釉が全面に施され、高台の畳付には目跡がのこる。胎土には黒色粒が多く混じり、乳白色を呈する。底部径は5.0cmを計る。989の高台畳付には五ケ所に砂の目跡がみられる以外、全面にわたり半透明の淡灰白色の釉が施される。胎土には多量の黒色粒が混じり、淡灰色を呈する。口径14.9cm、器高8.9cmを計る。990は体部内面に一条の太い沈線を巡らす。灰白色の釉は外面体部下位～底部にかけて露胎である以外、全面に施される。胎土には黒色粒が少なく混じり、淡灰白色を呈する。口径11.5cm、器高3.6cmを計る。991は内底部に１条の比較的太い沈線を巡らす。体部外面の二ケ所にも少し隔てて平行に沈線が巡る。外底部は高台を除いて露胎である。淡灰褐色の釉に非常に細かい氷裂が密にみられる。胎土には黒色粒が少量混じり、淡褐色～灰白色を呈する。口径は13.0cm、器高3.2cmを計る。992は越州窯系青磁の碗である。外底部には目跡がのこる。全面に淡オリーブ色の釉が施され、内面にはヘラの片切り彫の曲線文様がみられる。胎土には黒色粒が僅かに混じり、灰色を呈する。底部径は7.0cmを計る。993～995は朝鮮（李朝）雑釉陶器である。993は皿で、体部から段を設け外反しながら口縁端部へいたる。口縁端部には小さな切れ込みを付け、口縁部を輪花状にする。体部の下位を除いて全面に施された釉は内面が黄褐色、外面はオリーブ色～黄

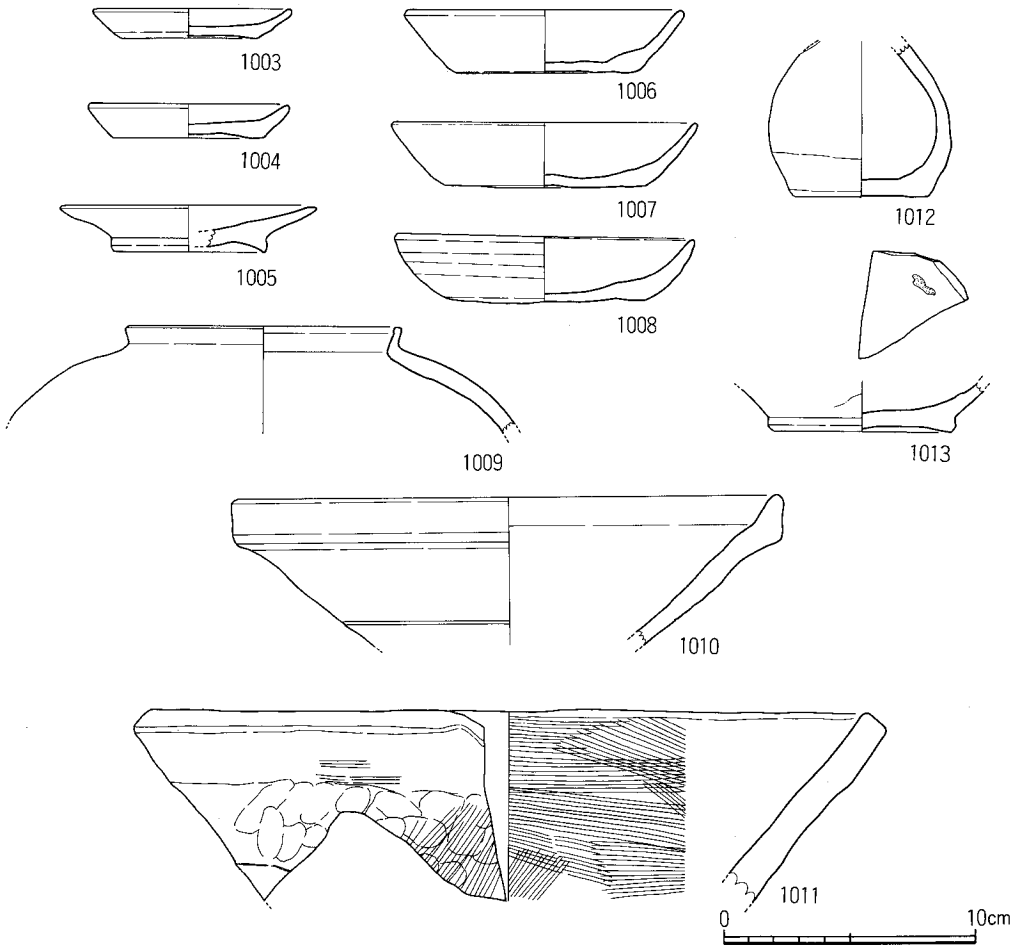


第106図　SX0432実測図（1/40）

緑色を呈する。胎土には黒色粒が多く混じり、淡灰黒色を呈する。994は碗の底部破片である。底部からただちに短く外反し段を設けて、内湾気味に立ち上がる。内底部には１条の沈線を巡らす。畳付を含む全面に施された褐色の釉はガラス質で、氷裂が密にはいる。目跡が内面に五ケ所、高台畳付には五ケ所にみられる。胎土は白色の砂粒が多く混じり、淡褐色を呈する。底径6.5cmを計る。995は碗で、全面に灰褐色のややガラス質の釉が施される。胎土は白色の砂粒が多量に混じり、暗褐色を呈する。口径は11.2cmを計る。996・997は中国陶器である。996は蓋の破片で、器面は横ナデ調整を行ったあと、黄褐色の施釉をする。胎土は比較的多くの砂粒が混じり、明茶褐色を呈する。997は壺の口縁部破片である。口縁端部を大きく折り曲げるように外反させ、内面には突起をもつ。黄褐色の釉は突起の下方で施されている。胎土は砂粒が多量に混じり、灰褐色を呈する。998は緑釉陶器の椀である。高台の畳付は欠損し、暗緑色の釉が全面に残る。胎土には僅かであるが砂粒が混じる。999～1001は備前焼のV期に属する擂鉢である。口縁端部は斜めで、平坦につくる。999・1000は口縁をほぼまっ直ぐに引き上げ、1001ではやや内湾気味に丸みをもつ。999、1001の内面には筋目が施される以外は横ナデ調整を行なう。

SD0436出土遺物（第105図1002）

1002は龍泉窯系青磁の碗である。外底部の釉をドーナツ状に削り取り、二ケ所に目跡がのこる。それ以外は全面にガラス質の淡オリーブ色の釉を施す。内面の見込みには印花が施され、その外側には片切り彫の曲線文がある。外面には２条の沈線が縦方向にみられる。胎土には気泡が比較的多く混じり、灰色を呈する。



第107図　SX0432出土遺物実測図（1/3）

10）土壙墓

検出したのはSX0432の１基だけである。

SX0432（第106図、図版24）

i区で検出した。長軸をN－14.5°－Eにとる楕円形状の墓壙をもつ。南北長2.62m、東西幅1.50m前後。深さは80cm。墓壙底は平坦で、中央部には大腿骨片が残存する。鉄釘が出土しており木棺とも考えられるが、上面は著しく攪乱を受けており、断定できない。

11）土壙墓出土遺物

SX0432出土遺物（第105図1003～1013）

1003～1008は土師器である。1003・1004は小皿で、外底部は回転糸切りで、上げ底をもつ。それ以外は横ナデ調整を施す。口径は7.8cmを計る。器高はそれぞれ1.2cmと1.4cmである。1005は高台付皿で、貼り付けた小さい高台は逆三角形の断面を呈する。横ナデ調整を全面に施す。口径9.6cm、器高1.9cmを計る。1006～1008は杯で、外底部は回転糸切りを行い、口径は10.9cm～12.0cm、または器高は2.5～2.6cmにおさまるものである。更に1006では外底部に板状圧痕をのこし、僅かに上げ底となる。内底をナデ、それ以外を横ナデ調整する。1007は横ナデ調整を全面に行なう。内底部には煤の付着がみられる。1008は口縁部から体部にかけて強い横ナデ調整による凹凸が著しい。更に外底部にも凹凸がみられる。内底部には煤の付着がある。1009は須恵器の短頸壺である。肩部外面には自然釉が小さい固まり状となって付着している。それ以外では横ナデの調整痕がのこる。胎土には砂粒が僅かに混じる。灰色を呈し、口径10.5cmを計る。1010は須恵質土器の鉢である。横ナデ調整を行ない、体部には太い１条の沈線を巡らす。胎土には砂粒が比較的少なく混じり、灰色である。口縁部外面には灰黒色を帯るが、その他は灰色を呈する。口径21.4cmを計る。1011は瓦質の鉢である。外面では横刷毛目痕、指圧痕、更に斜め刷毛目痕がみられる。内面には斜めの刷毛目が施されている。また口縁端部には煤らしきものの付着もみられる。体部には接合の痕跡ものこる。胎土には砂粒が比較的多く混じる。灰色を呈し、口径は28.6cmを計る。1012は緑釉陶器の小壺である。外底部はごく僅かくぼむ。ヘラ磨き調整を行った後に施釉する。釉はやや緑色を帯びる青白色を呈するが、外底部の中央部付近を除いて外面に施される。しかし釉は殆ど剝離した状態にある。胎土には僅かに砂粒が混じり、焼成は良好であるが、やや軟質ぎみである。底部径5.3cmを計る。1013は越州窯系青磁の碗である。外底部はくぼみ、更に体部下位まで露胎である。胎土には小量の砂粒が混じり、暗茶褐色を呈する。緑褐色のガラス質をした釉には氷裂もみられ内面と外面体部の一部に施されている。内底部には胎土の目跡がのこる。底部径7.0cmを計る。

8　その他の出土遺物（第108図～第110図）

今回の調査では多量の土器、輸入陶磁器類、鉄製品、銅製品、石製品等が出土している。包含層からもそれらは多数出土しているが、紙面の関係でほとんど掲載することが出来なかった。ここでは包含層出土遺物のうち、幾つかについて触れていく。

越州窯系青磁（1014～1025）

1014は碗である。体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は蛇の目高台である。釉は体部下半までかかる。見込みと畳付に目跡が残る。釉色は褐色を帯びたオリーブ色を呈する。器高5.7cm、口径14.6cmを測る。

1015～1023、1025は杯である。底部にはハの字形に開く高台が付く。見込みには1025以外片彫りの花文を施す。文様にはバリエーションがある。胎土は砂粒を少し含み、灰色、あずき色を呈する。釉色はオリーブ色を呈し、氷裂も見られる。高台内側には目跡が残る。博多遺跡群ではこのタイプの越州窯系青磁の出土例は少なく、第63次、第77次調査地点等の博多浜西側の冷泉町、店屋町での出土例が目立つ。

1024は碗で、細く高い高台が付く。見込みには毛彫りで草花文を施す。胎土は砂粒を少し含み、暗褐色を呈する。釉は全面にかかり、暗茶褐色を呈する。高台内側には目跡が残る。

青磁（1026）

1026は青磁碗である。見込みには型押しの花文を施す。胎土は砂粒を少し含み、灰色を呈する。釉は厚く、オリーブ色を呈する。

軒平瓦（1027、1028）

調査区西側で出土した瓦である。1027は「乗」、1028は「寺」の文字をもつ。調査区西側には戦前まで大乗寺という寺があり、これらの瓦はそれに関係するものと考えられる。

墨書土器（1029～1031）

1029は白磁碗である。高台内側に「十」の墨書がある。1030は白磁碗で、高台内側に花押が墨書される。1031は須恵器杯である。底部に「西」の墨書がある。

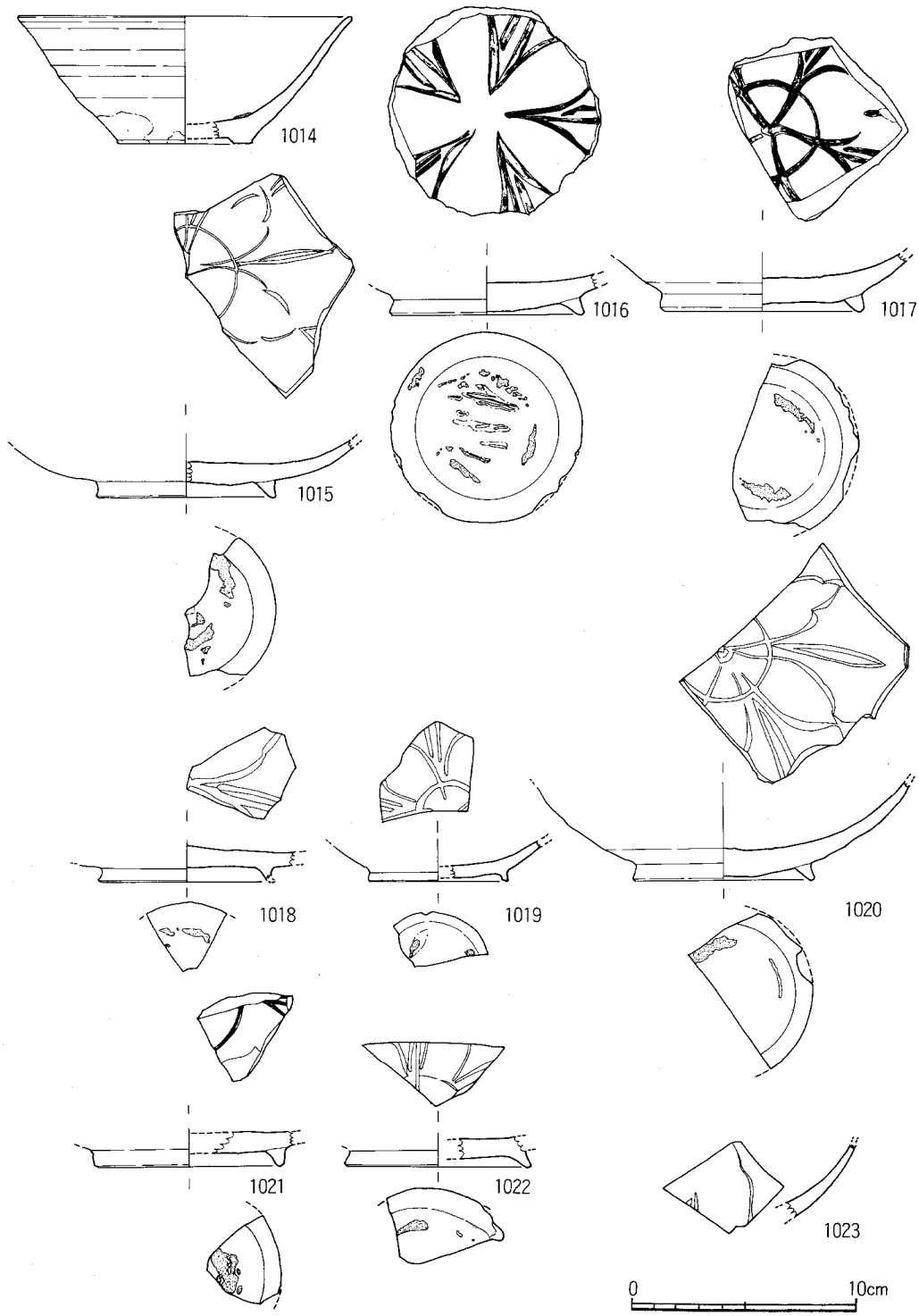
金製品（1032）

1032は棒状の金製品である。第Ⅱ面の掘り下げ中に出土した。断面方形で長さ18.5cm、重さ52.18gを測る。成分は金と数%の銀からなる。用途は不明。時期は16世紀代に位置づけられるものと考えている。

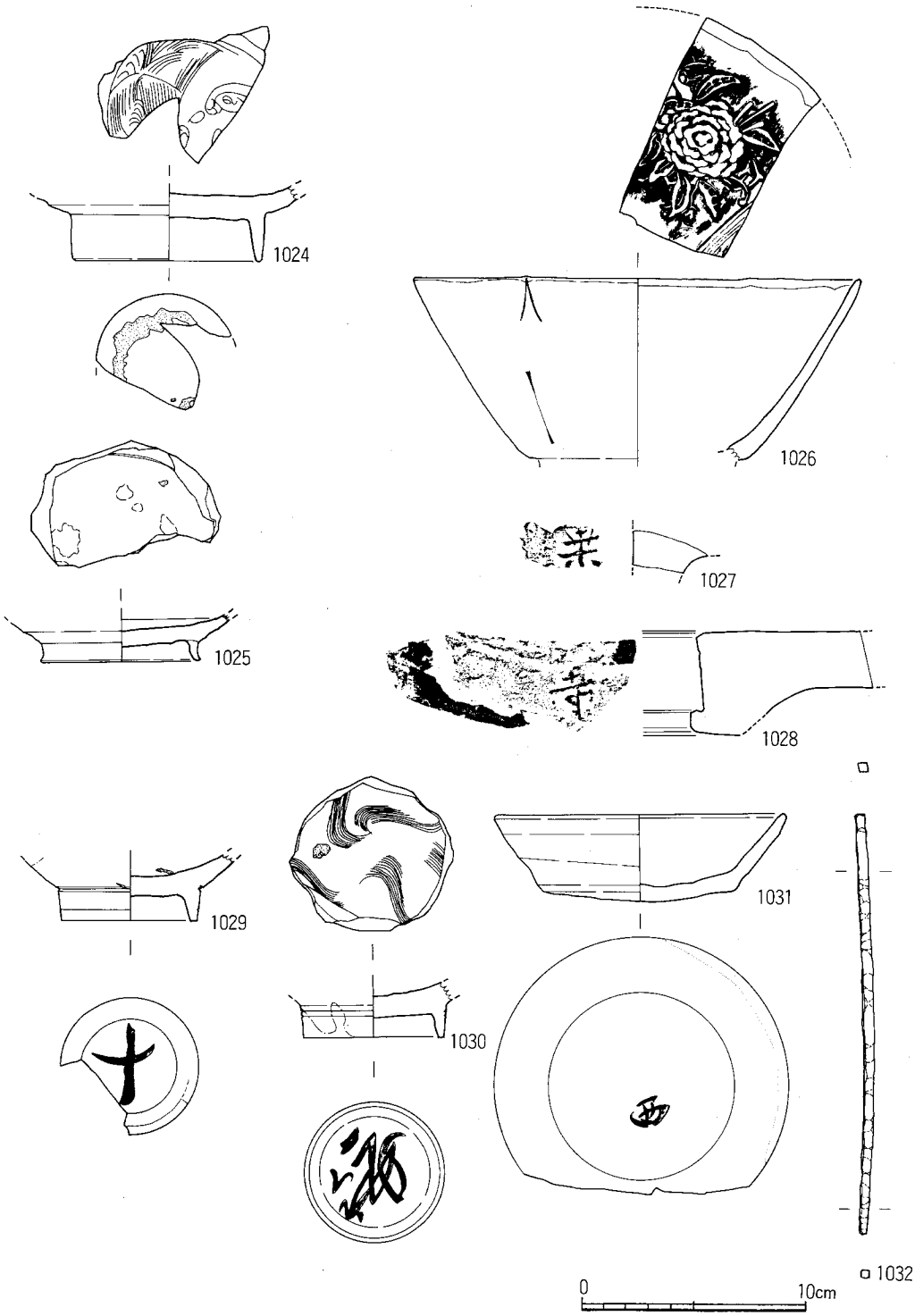
銅銭（1033～1065）

銅銭は第Ⅰ面から第Ⅲ面で出土した。その内、文字が判読できたのは33個である。銭名等は第5表の通りである。

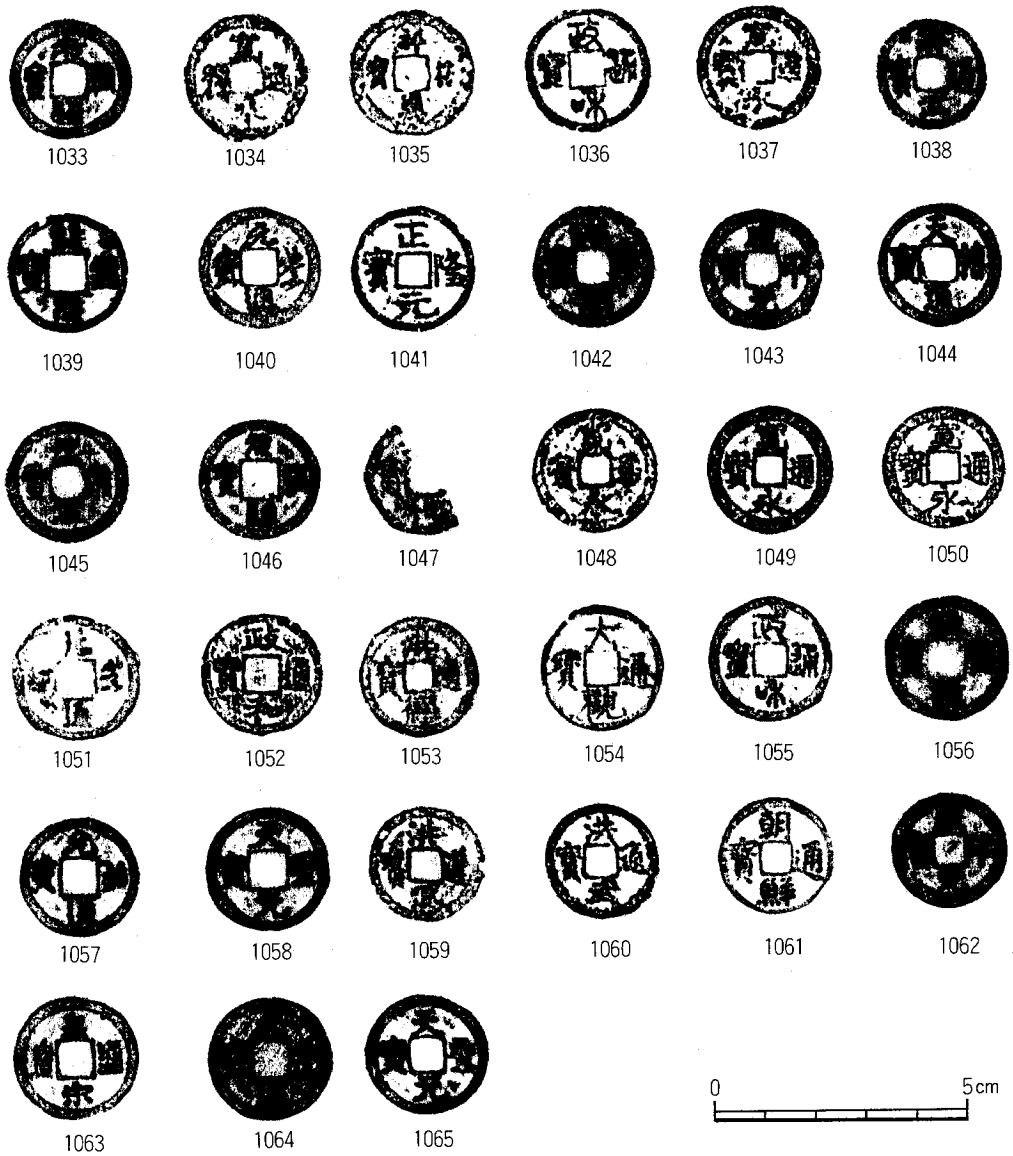
この他、包含層からは滑石製の石鍋、鉄製鋏、銅製帯金具、板碑等が出土している。



第108図　包含層出土遺物実測図(1)（1/3）



第109図　包含層出土遺物実測図(2)（1/3）



第110図　包含層出土遺物実測図(3)（1/3）

第5表　出土銅銭一覧

番号	出土面	出土地点・遺構	銭名	時代	初鋳	
1033	Ⅰ面	0021	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年
1034	Ⅰ面	0021	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年
1035	Ⅰ面	0023上面	祥符通寶	北宋	大中祥符元年	1008年
1036	Ⅰ面	0027	政和通寶	北宋	政和元年	1111年
1037	Ⅰ面	0034	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年
1038	Ⅱ面	0059	洪武通寶	明	洪武元年	1368年
1039	Ⅱ面	0083	○○元寶			
1040	Ⅱ面	0083	元豊通寶	北宋	元豊元年	1078年
1041	Ⅱ面	0104	正隆元寶	金	正隆元年	1156年
1042	Ⅱ面	0109	○寧○寶			
1043	Ⅲ面	0140	咸平元寶	北宋	咸平元年	999年
1044	Ⅲ面	0140	天禧通寶	北宋	天禧年間	1017～1021年
1045	Ⅲ面	0140	聖宋元寶	北宋	聖宋元年	1101年
1046	Ⅲ面	0140	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年
1047	Ⅲ面	0172	○○○寶			
1048	Ⅰ面	埋甕	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年
1049	Ⅰ面	包含層	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年
1050	Ⅰ面	包含層	寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年
1051	Ⅰ・Ⅱ面間	東側	元豊通寶	北宋	元豊元年	1078年
1052	Ⅰ・Ⅱ面間	東側	政和通寶	北宋	政和元年	1111年
1053	Ⅰ・Ⅱ面間	西側	洪徳通寶			
1054	Ⅱ・Ⅲ面間	中央南側	大観通寶	北宋	大観元年	1107年
1055	Ⅱ・Ⅲ面間	中央南側	政和通寶	北宋	政和元年	1111年
1057	Ⅱ・Ⅲ面間	中央南側	元○○寶			
1057	Ⅱ・Ⅲ面間	中央南側	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年
1058	Ⅱ・Ⅲ面間	中央南側	天聖元寶	北宋	天聖元年	1023年
1059	Ⅱ・Ⅲ面間	西南部	洪武通寶	明	洪武元年	1368年
1060	Ⅱ・Ⅲ面間	西南部	洪武通寶	明	洪武元年	1368年
1061	Ⅱ・Ⅲ面間	西南部	朝鮮通寶	朝鮮	世宋5年	1423年
1062	Ⅱ・Ⅲ面間	西南部	咸平元寶	北宋	咸平元年	999年
1063	Ⅱ・Ⅲ面間	西側北下層	皇宋通寶	南宋	寶祐元年	1253年
1064	Ⅲ面	包含層	元豊通寶	北宋	元豊元年	1078年
1065	表土		天聖元寶	北宋	天聖元年	1023年

9　小結

博多遺跡群の第56次調査は、遺跡群の西端部近くで、３面にわたって発掘を行なった。その結果、第Ⅰ面では18～19世紀代の遺構、第Ⅱ面では16～17世紀代の遺構、また第Ⅲ面では５世紀～14世紀に至る遺構を検出した。整理の都合上、第Ⅰ・Ⅱ面は概要程度しか報告できず、また第Ⅲ面の報告も十分とは決して言い難い。ここでは第Ⅲ面の遺構の時期について簡単にまとめておきたい。

第Ⅲ面の遺構は井戸、溝、土坑、土器溜りなどがあり、その時期は古墳時代から鎌倉時代の長きにわたっている。

古墳時代の遺構としてはSK0427があり、５世紀前後の土坑である。SK0304からも小型丸底壺が出土しており、また他の遺構にも土師器片の混入が見られ、一定程度の遺構の広がりが予想される。

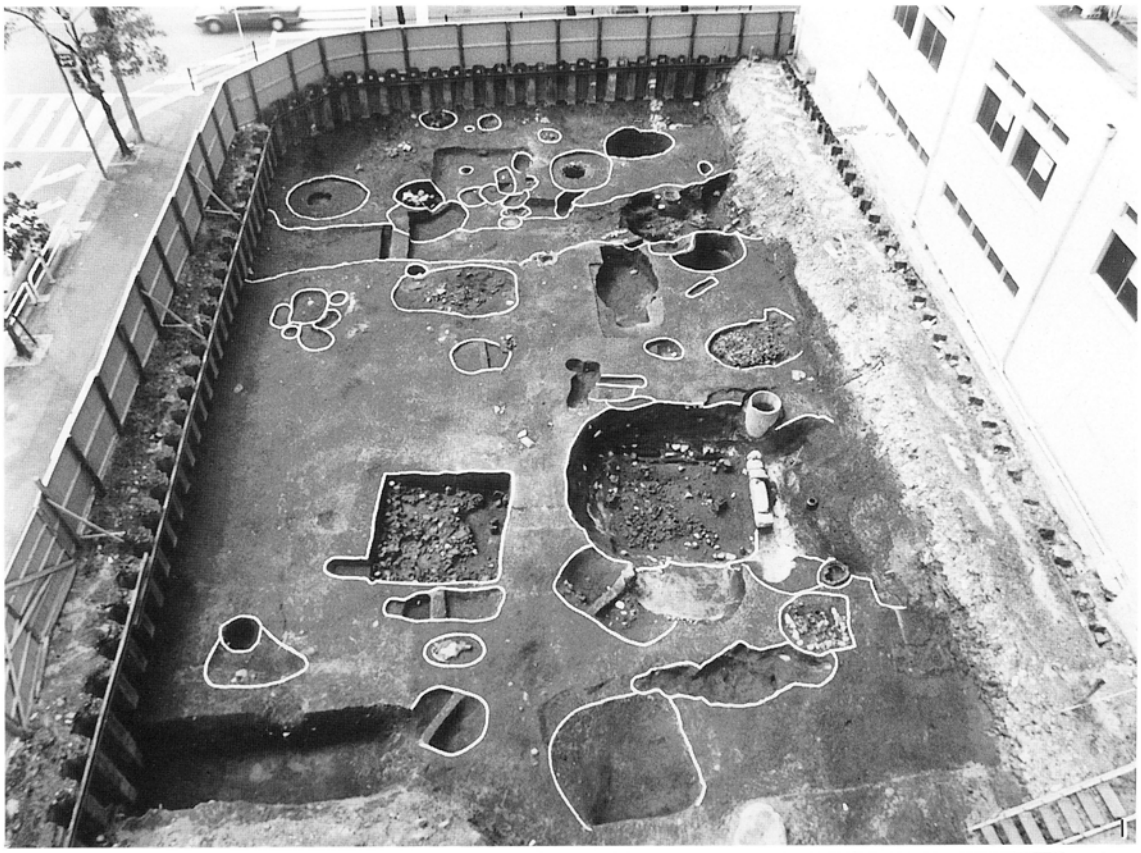
奈良時代の遺構は密に分布している。中・近世の遺構が及ばない標高3.00m前後には地山上に褐色砂層が見られ、この時代の遺物を包含するとともにピット・土坑・井戸などの遺構がこの層から掘り込まれている。検出したこの時代の遺構としてはSE0464、SK0234、SK0300、SK0429などがある。SK0234は竪穴住居跡の可能性があり、また下面で検出したピット群は掘立柱建物があったことを推測させる。後の時代の遺構や攪乱からも奈良時代の遺物の出土がきわめて多い。

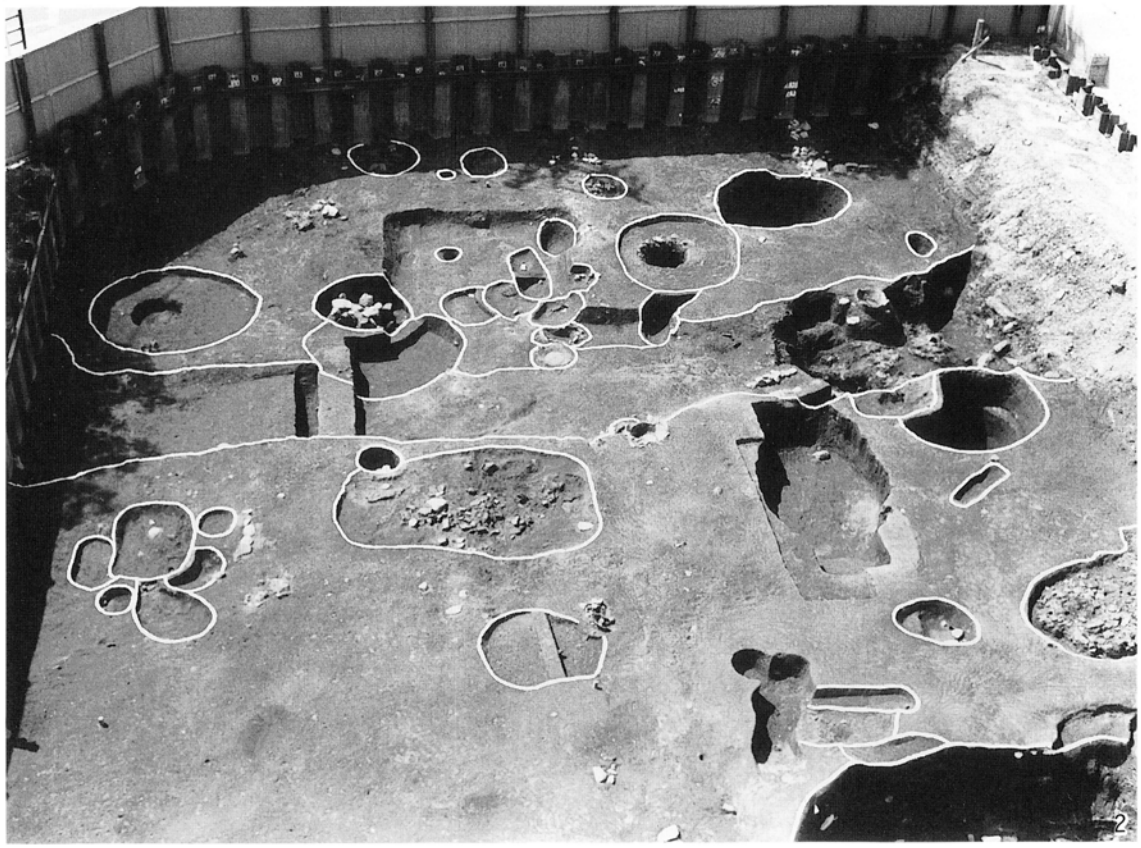
平安時代では11世紀後半以降、井戸や土坑などが増え、さらに12世紀代にその数はさらに増大する。また白磁を中心とした輸入陶磁器の出土量も膨大なものとなる。11世紀後半から12世紀前半の遺構としては井戸がSE0172、SE0223、SE0428の他、方形板組井戸側と水溜の構造をとるものはほぼこの時期までにおさまる。土坑は多量の白磁を出土したSK0281をはじめ多数ある。12世紀中頃から後半の遺構としてはSE0127、SE0166、SE0208、SE0421などが相当する。

鎌倉時代になると若干遺構が減少する。井戸もSE0401、SE0137など少数である。土坑も少ない。今回検出した溝は多くないが、南北に走るSD0298は13世紀前半、SD0141は後半頃には埋没している。また幅４m前後の南北溝であるSD0407は14世紀前半には埋没している。この溝の掘削は前時代の遺構との切り合い関係からみて13世紀前半を遡ることはなく、実際にはその後半ではないかと推定される。ただ南北方向の町割りがそれ以前からあったことは、c区からd区に連なる12世紀前後のSK0281からSK0214の土坑群の配列からみても明らかである。

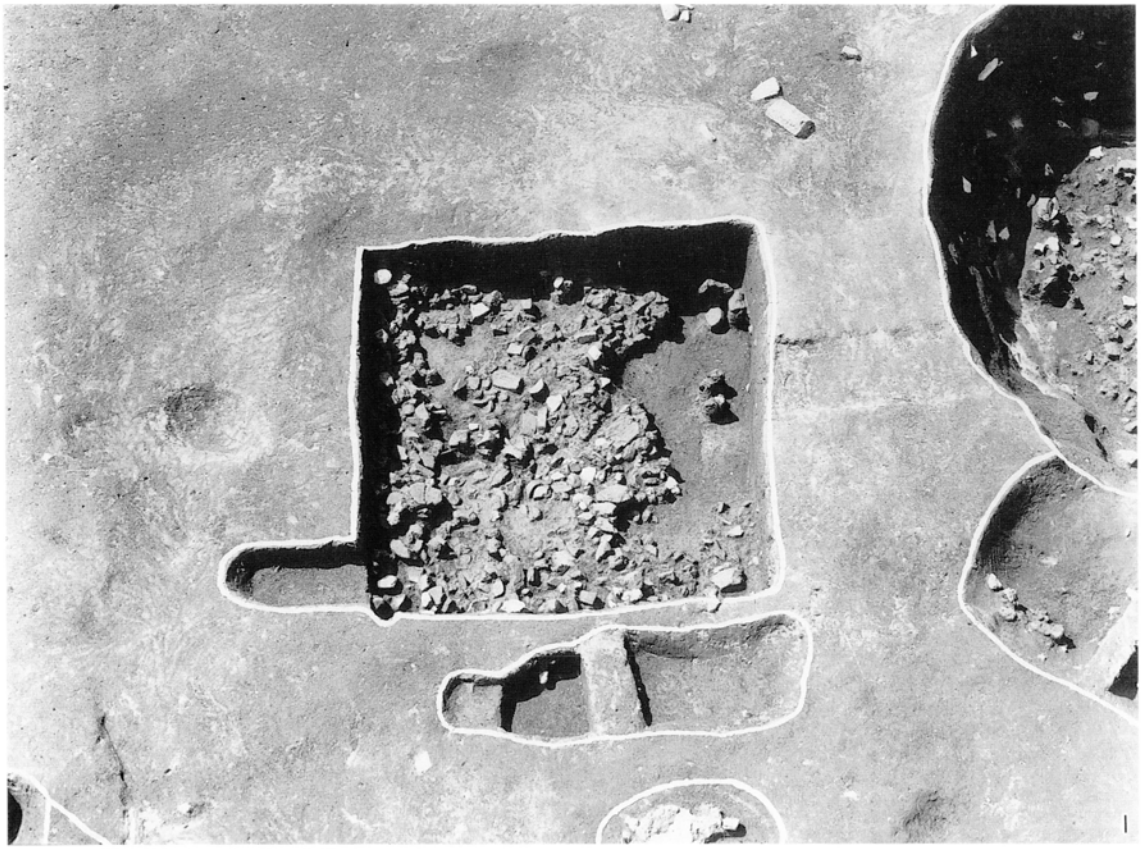
今回の調査地点は旧博多浜の西北部に位置しており、すぐ北側の第14次調査地点では白磁ばかりが山積に波打ちにうち捨てられた状態で出土している。貿易船から陸揚げされる際、不良品を一括廃棄した跡と考えられている。今回のSK0281の出土遺物も同様な状態をうかがうことができるが、14次調査地点と比べ土坑に廃棄され、また土師器類を少量混入することが異なる。第14次地点より今回の調査地点が若干内陸部に位置し、いったん陸揚げされた後、選別されて不良品を廃棄したものであろうか。完形品に近い白磁類の出土は、選別が比較的きびしく、またこの土坑の使用が短期間であったことをうかがわせる。

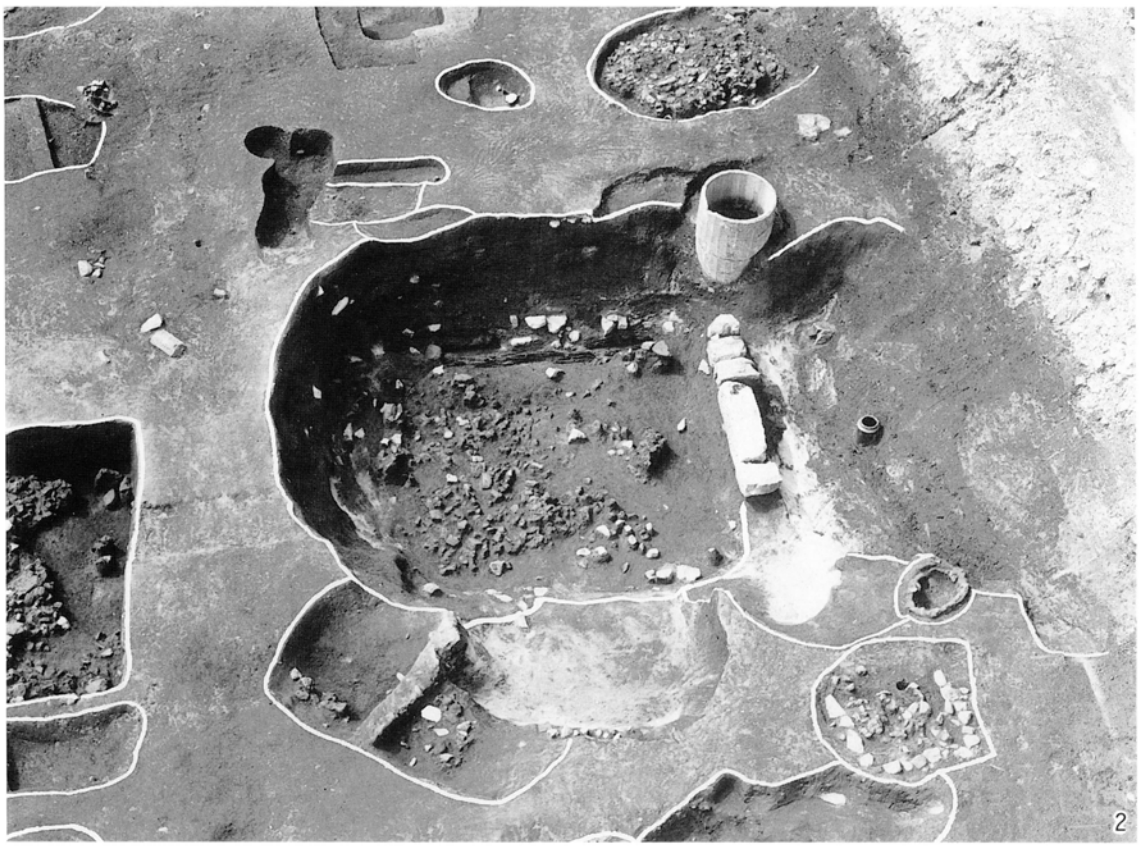
図　　版



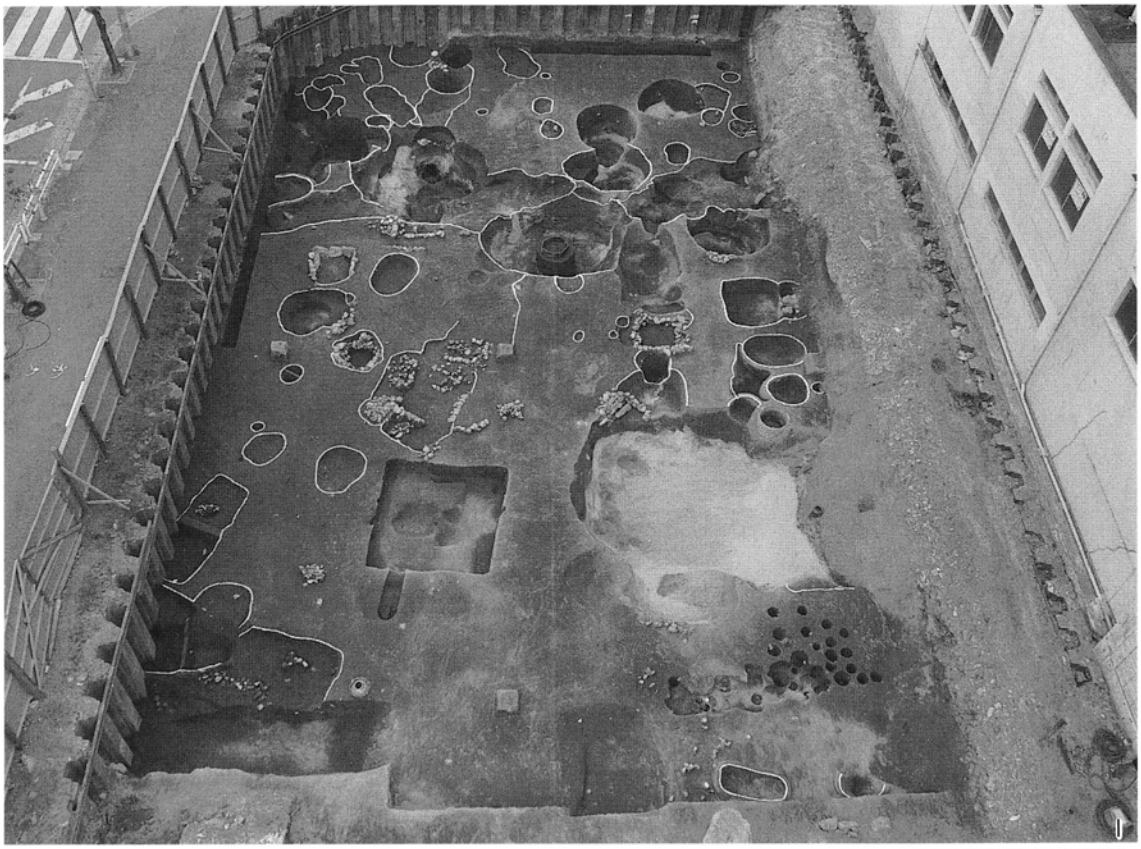


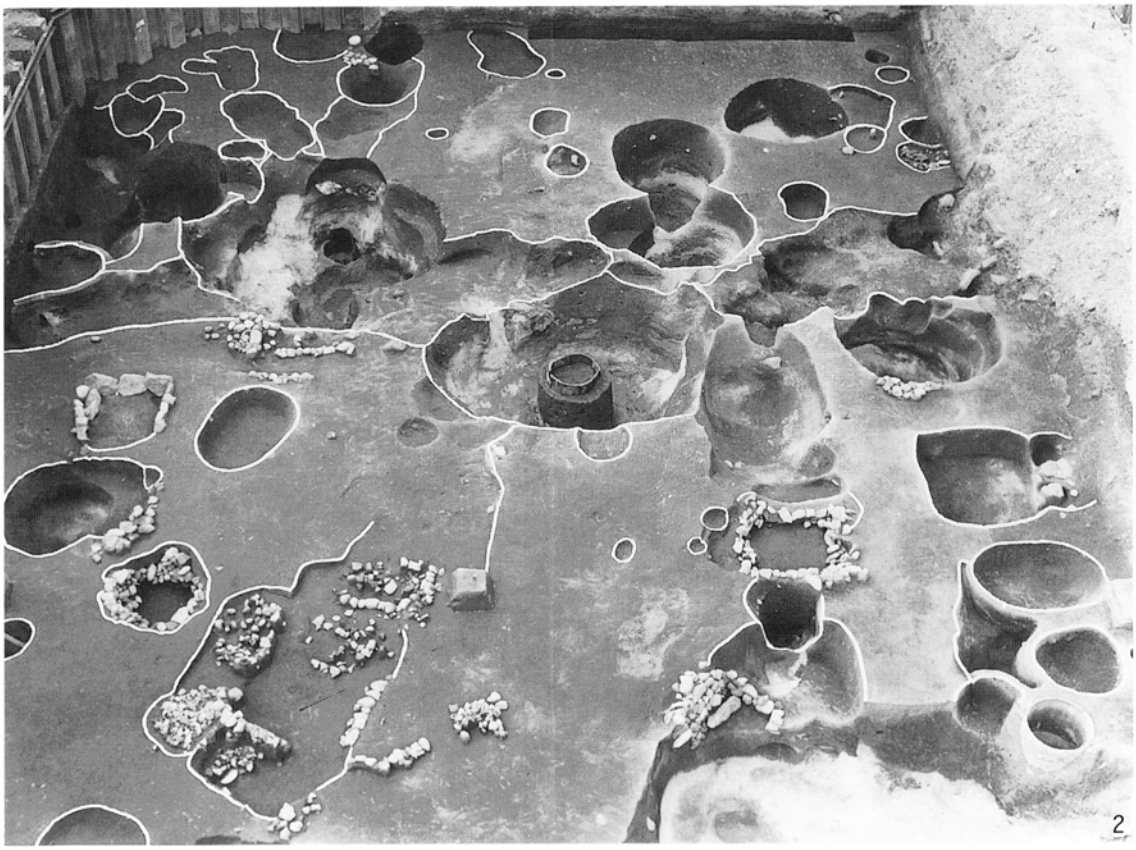
第Ⅰ面　1　全景（東から）　　2　西側部分（東から）



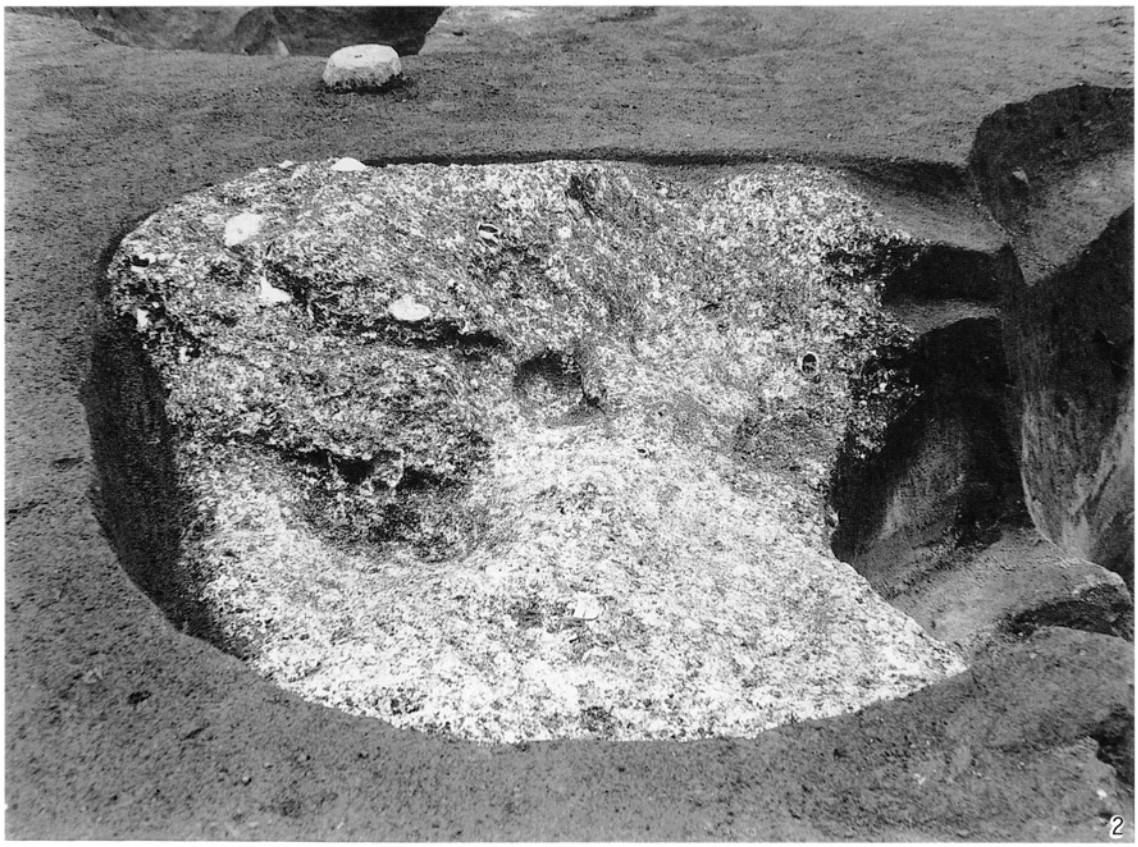


1　SK0023（東から）　　2　SK0024（東から）

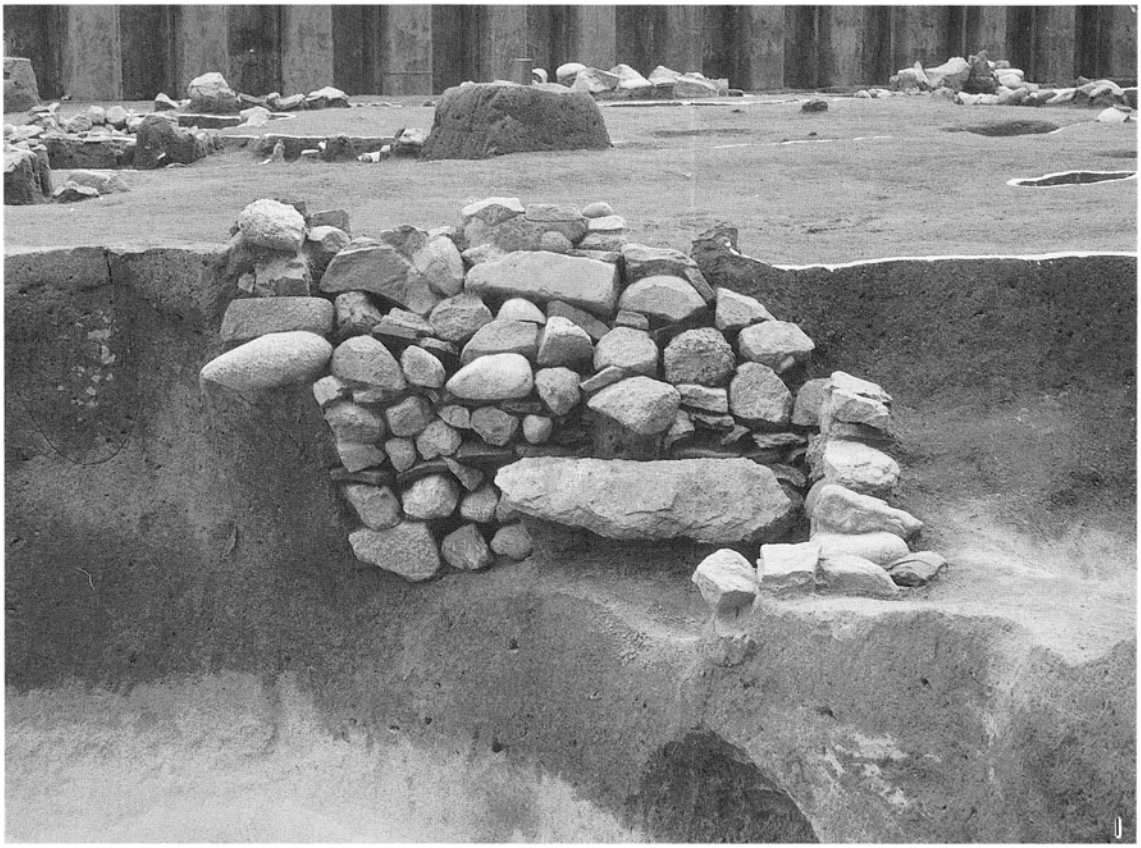


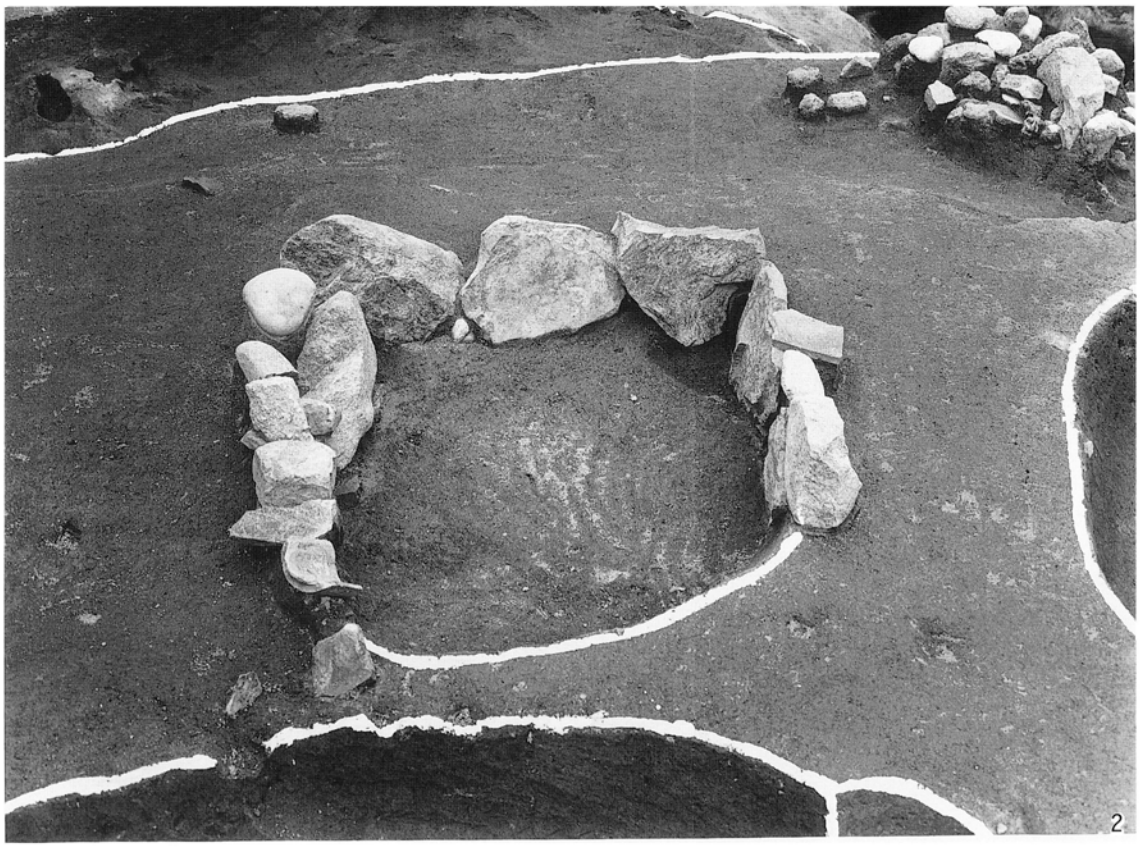


第Ⅱ面　1　全景（東から）　　2　第Ⅱ面西側部分（東から）

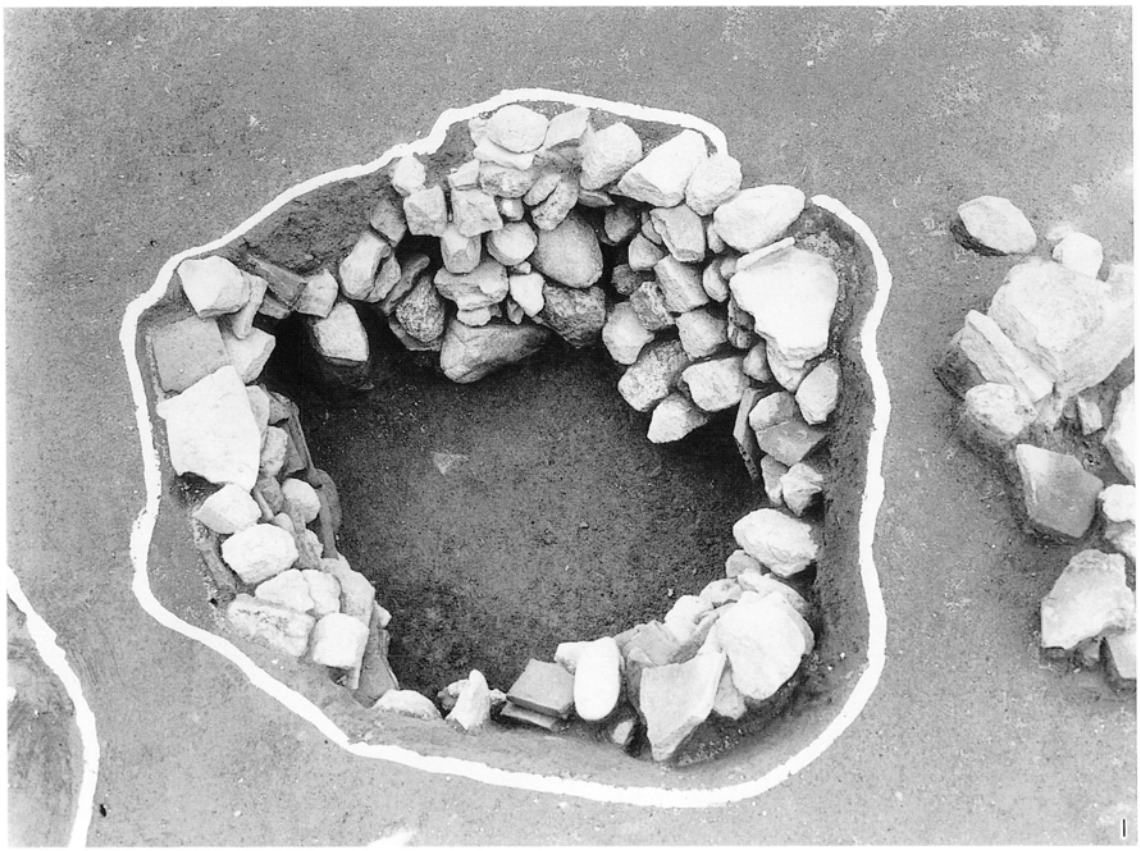


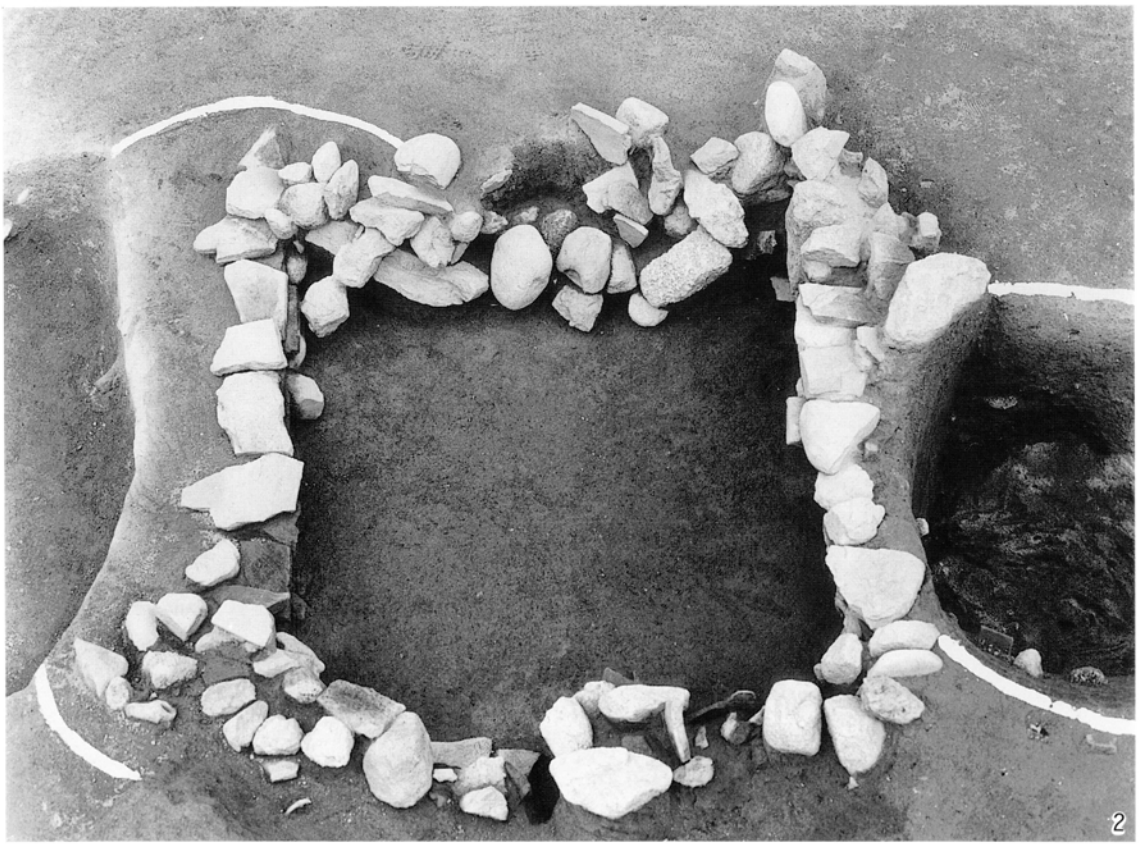
1　第Ⅱ面東南部分（北東から）　2　SK0116（南から）



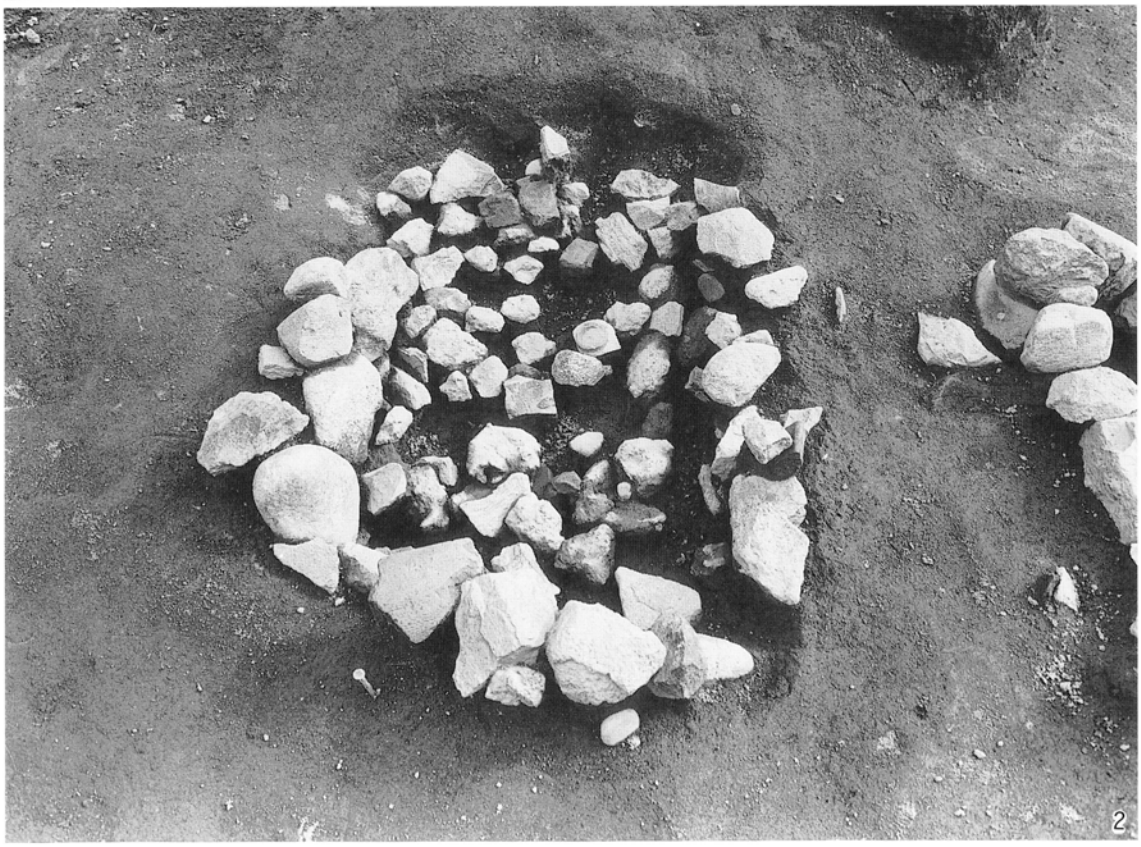


1　SK0072（北から）　　2　SK0076（東から）





1　SK0104（西から）　　2　SK0106（南から）

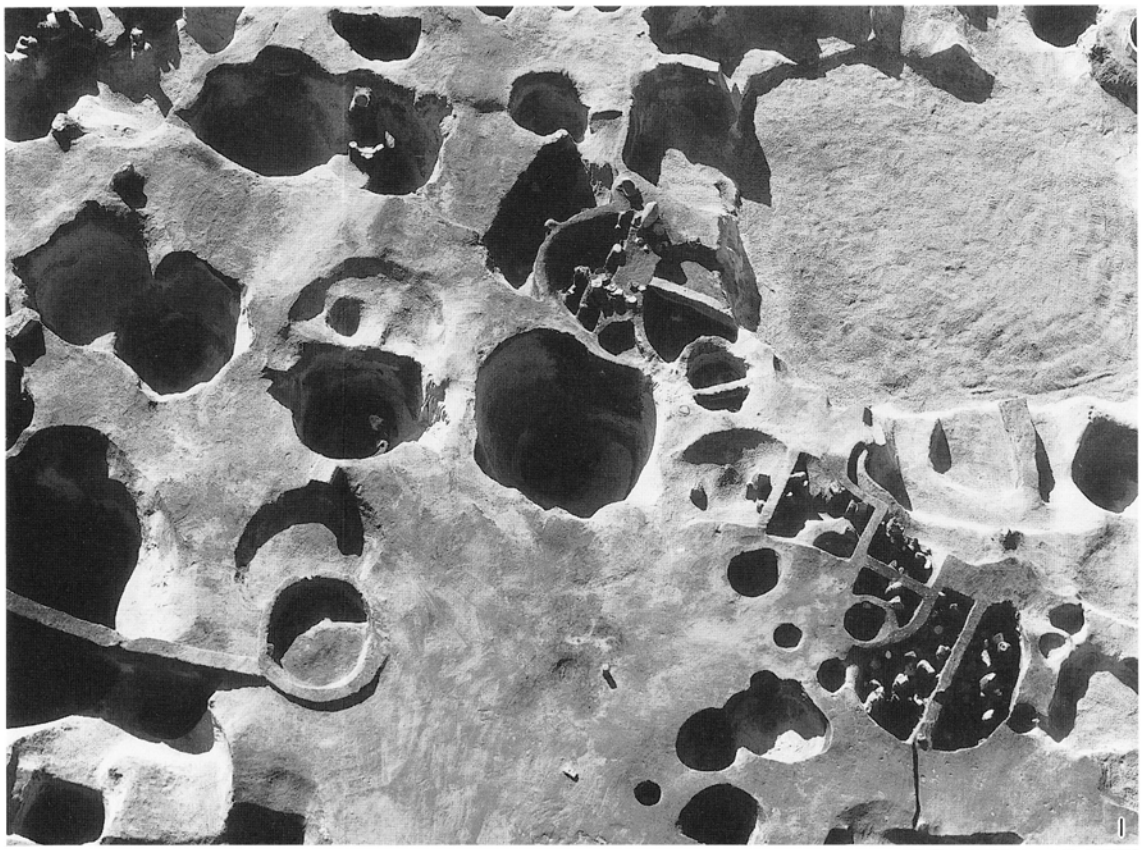


1　SK0131（北から）　　2　SK0132（西から）

1　SK0133（西から）　　2　SX0067（西から）

第Ⅲ面A区　1　全景（東から）　2　中央部分（東から）

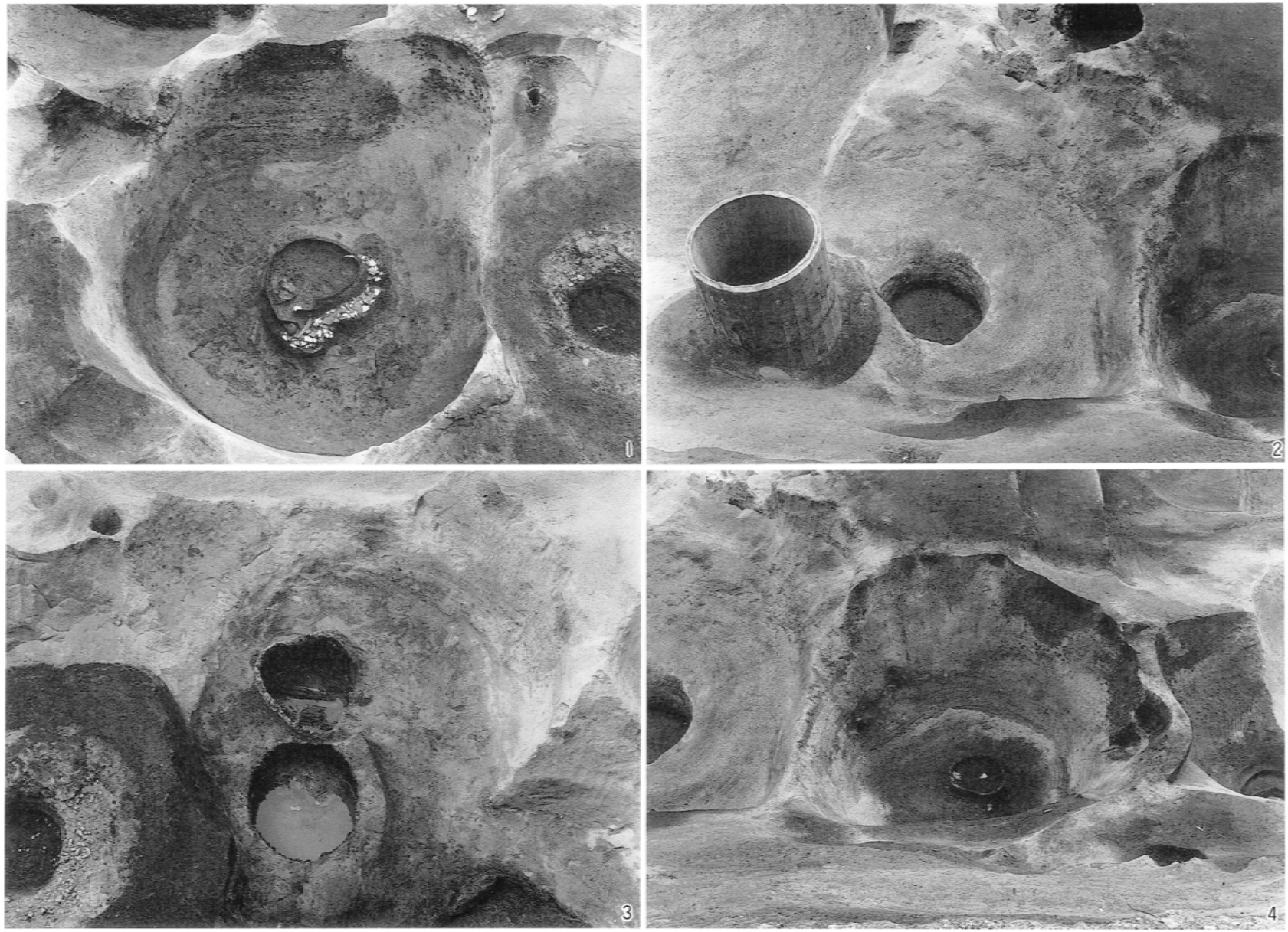
第Ⅲ面B区　1　全景（東から）　2　近接全景（東から）



1　SE0280周辺（東から）　　2　SK0332周辺（南から）

1　SE0411周辺（東から）　　2　SE0490周辺（北東から）

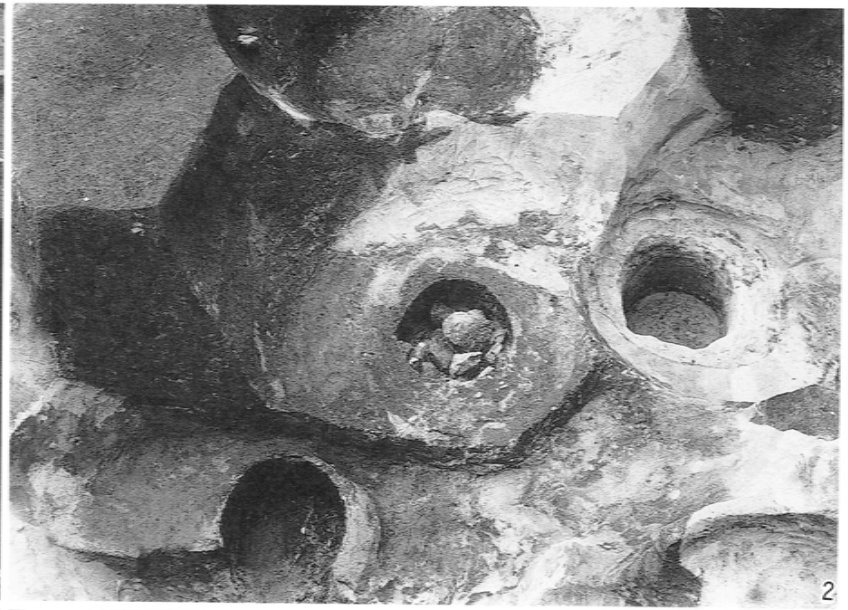
1　SE0428周辺（東から）　　2　SX0486周辺（東から）



1　SE0127（南から）　2　SE0135（北から）　3　SE0137（南から）　4　SE0166（北から）

1　SE0188（南から）　2　SE0208（北から）　3　SE0233（南から）　4　SE0280（東から）

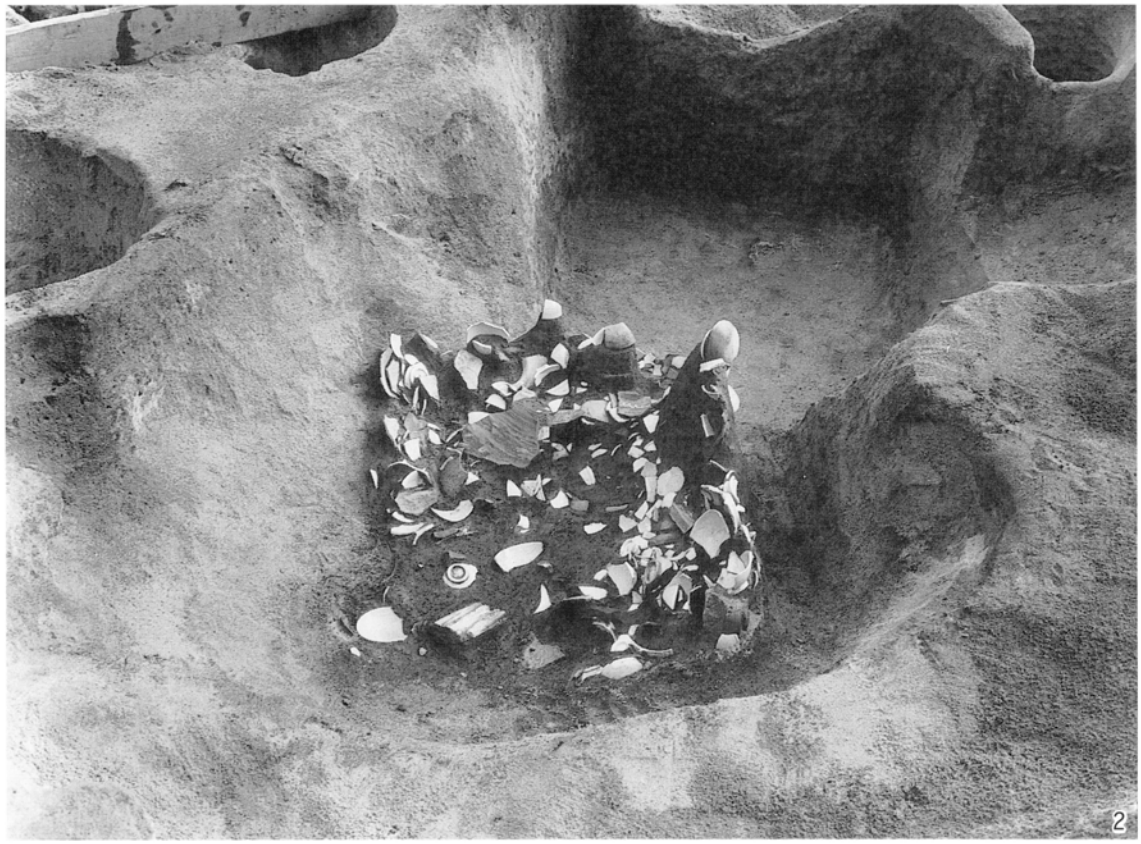
1　SE0295（西から）　2　SE0296（西から）　3　SE0302（南から）　4　SE0347（南から）



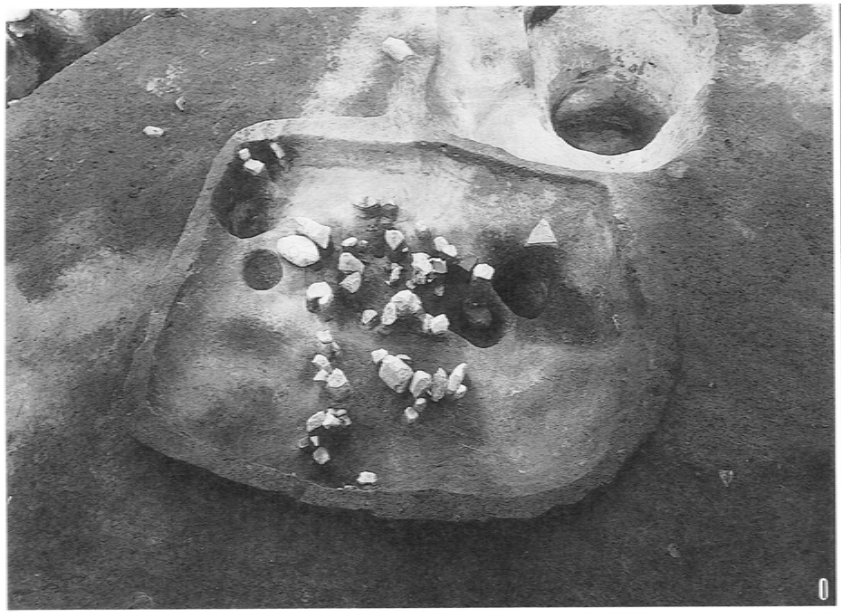
1　SE0401（北から）　2　SE0402・0483（南から）　3　SE0405・0430（西から）　4　SE0411（東から）

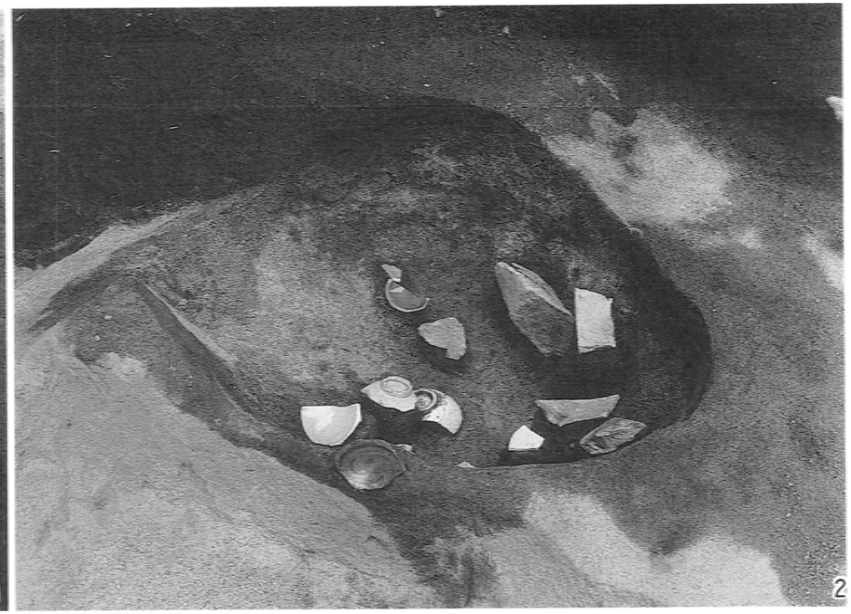
1　SE0428（西から）　2　SE0478（北から）　3　SE0490（東から）　4　SE0494（北から）

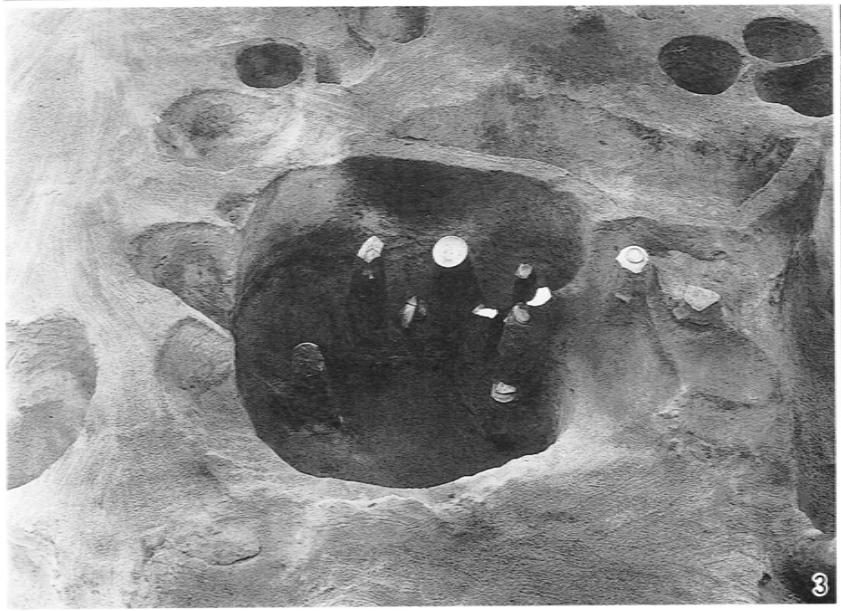
1　SE0496（北から）　2　SE0507（北から）　3　SE0521（北から）　4　SE0561（西から）



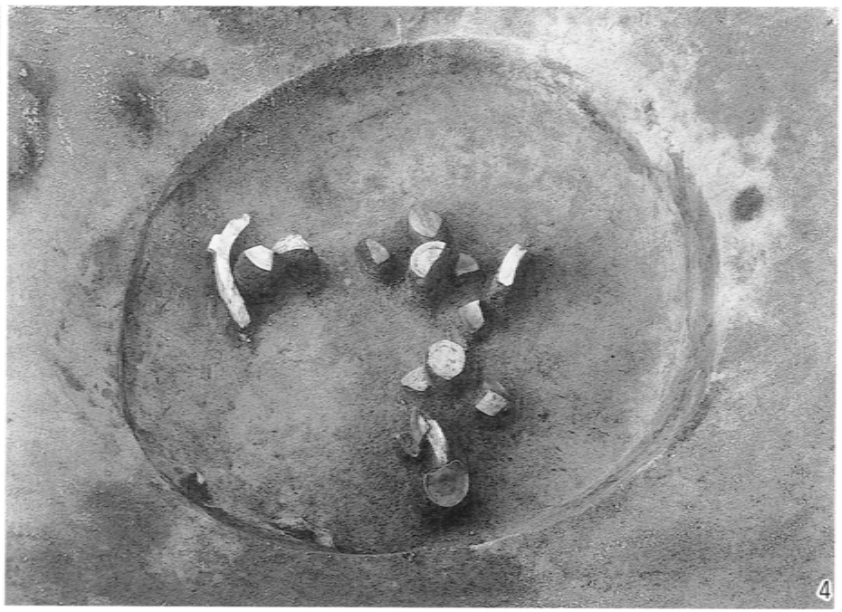
1　SK0170（東から）　　2　SK0281（北から）





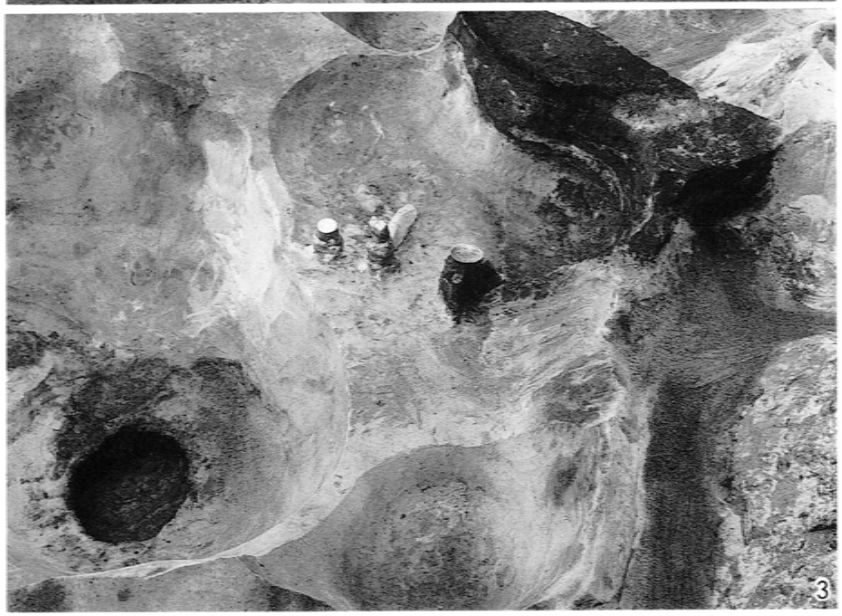


1　SK0140（南から）　2　SK0142（南から）　3　SK0196（東から）　4　SK0205（東から）



1　SK0206（北から）　2　SK0226（北から）　3　SK0346（南から）　4　SK0425（南から）

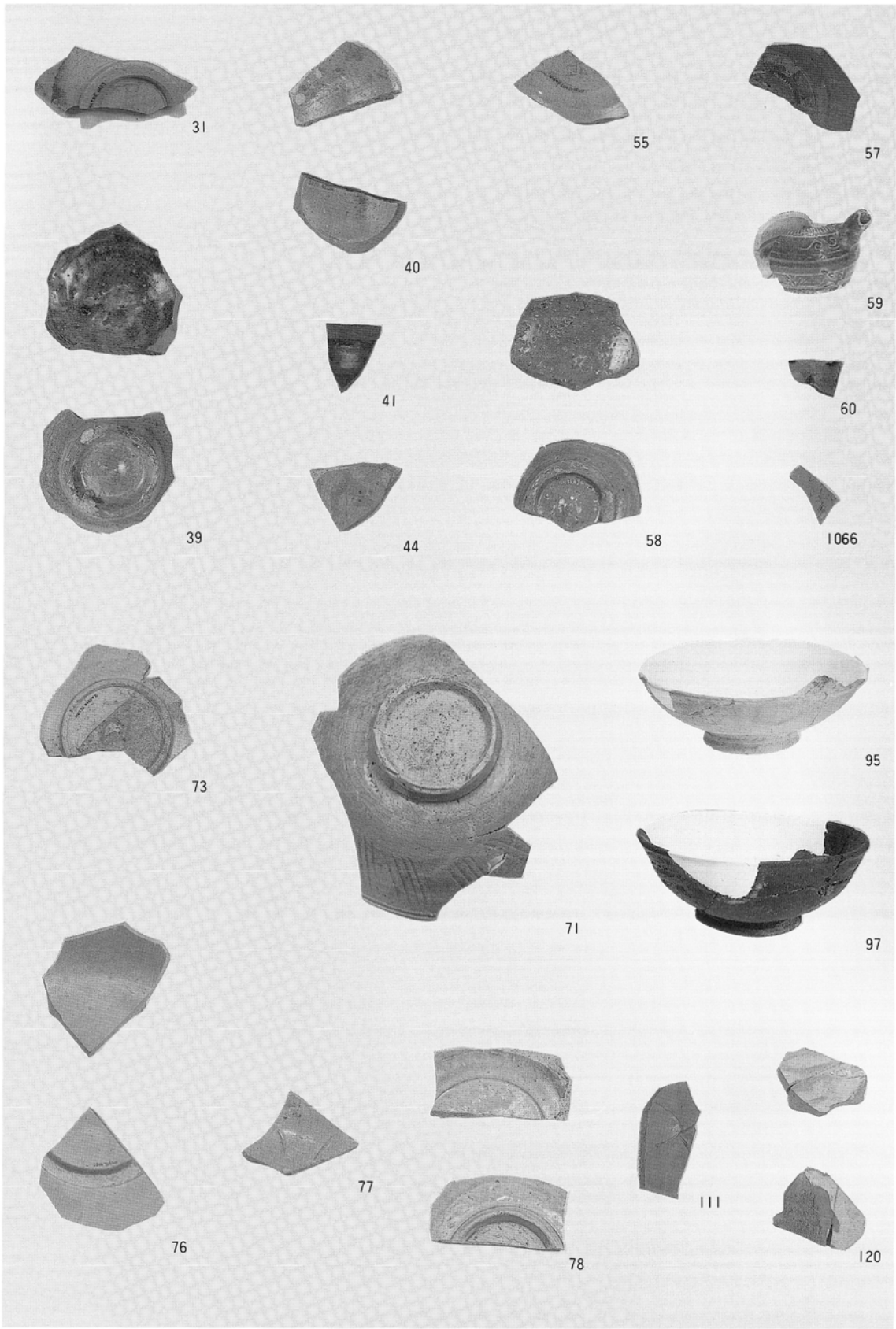
1　SK0427（南から）　2　SK0437（南から）　3　SK0463（南から）　4　SK0467（東から）



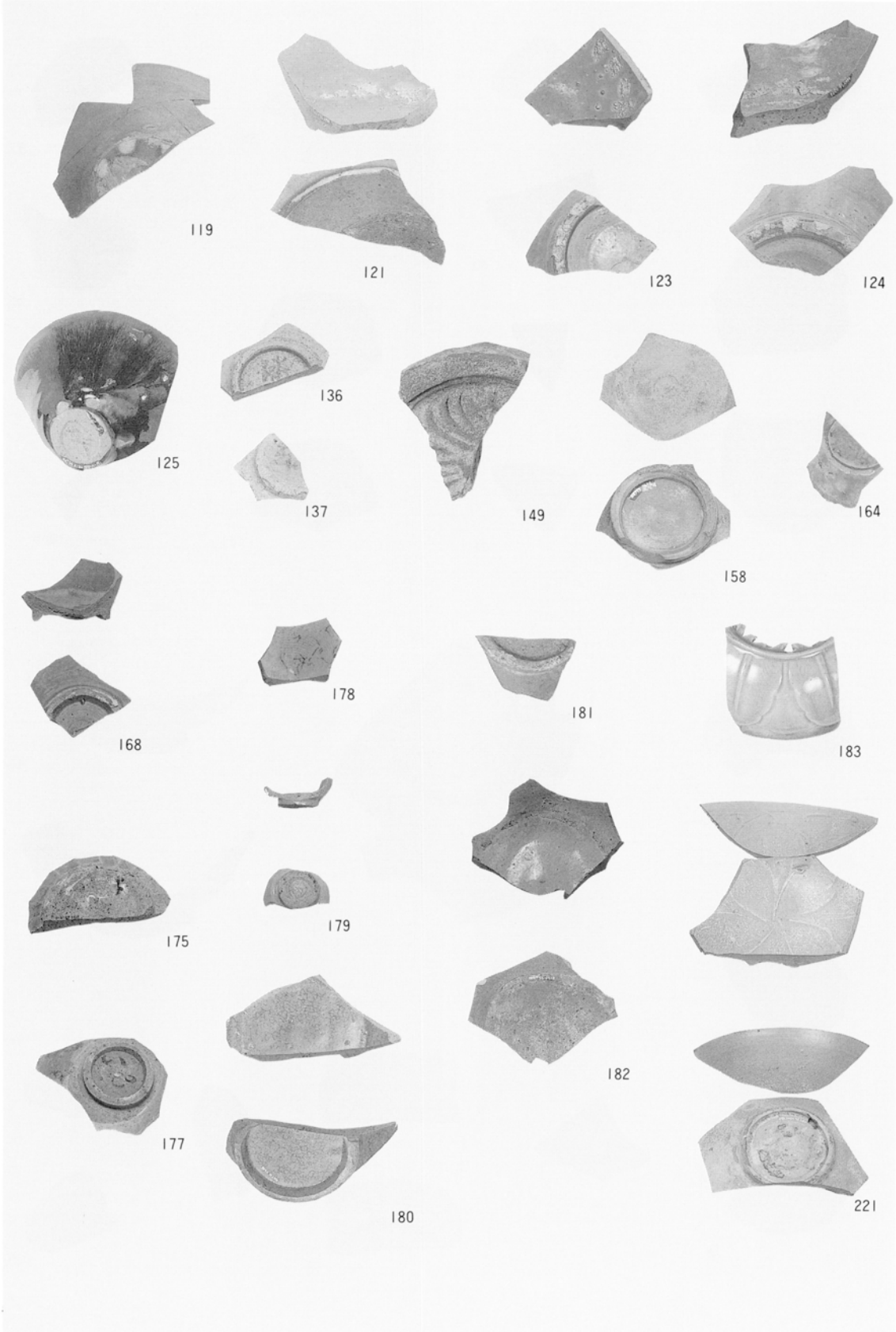
1　SK0469（東から）　2　SK0477（北から）　3　SK0512（南から）　4　SX0432（南から）

1　SX0400（南から）　　2　SX0422（南から）

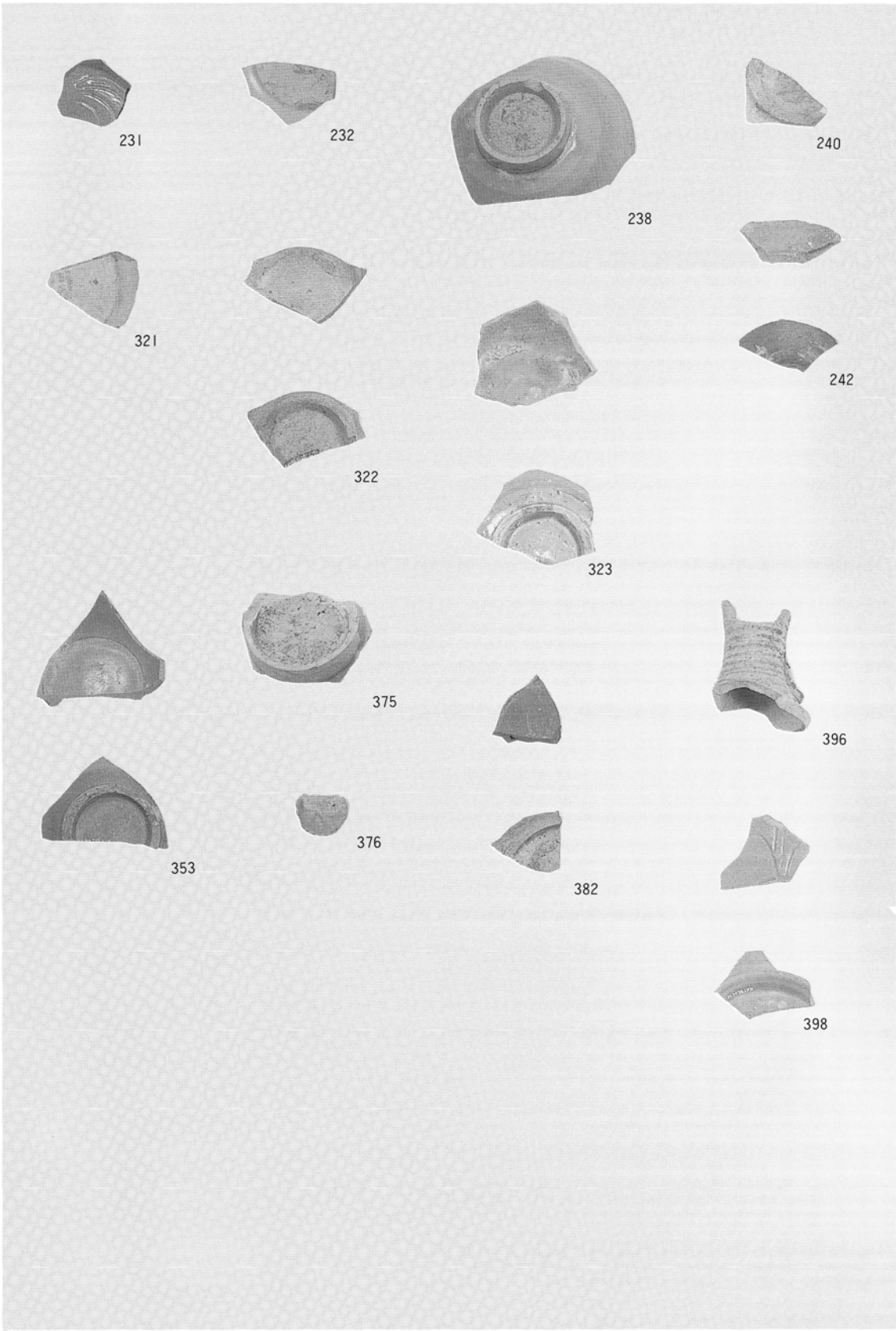
1　SX0465（北から）　　2　SX0486（北から）



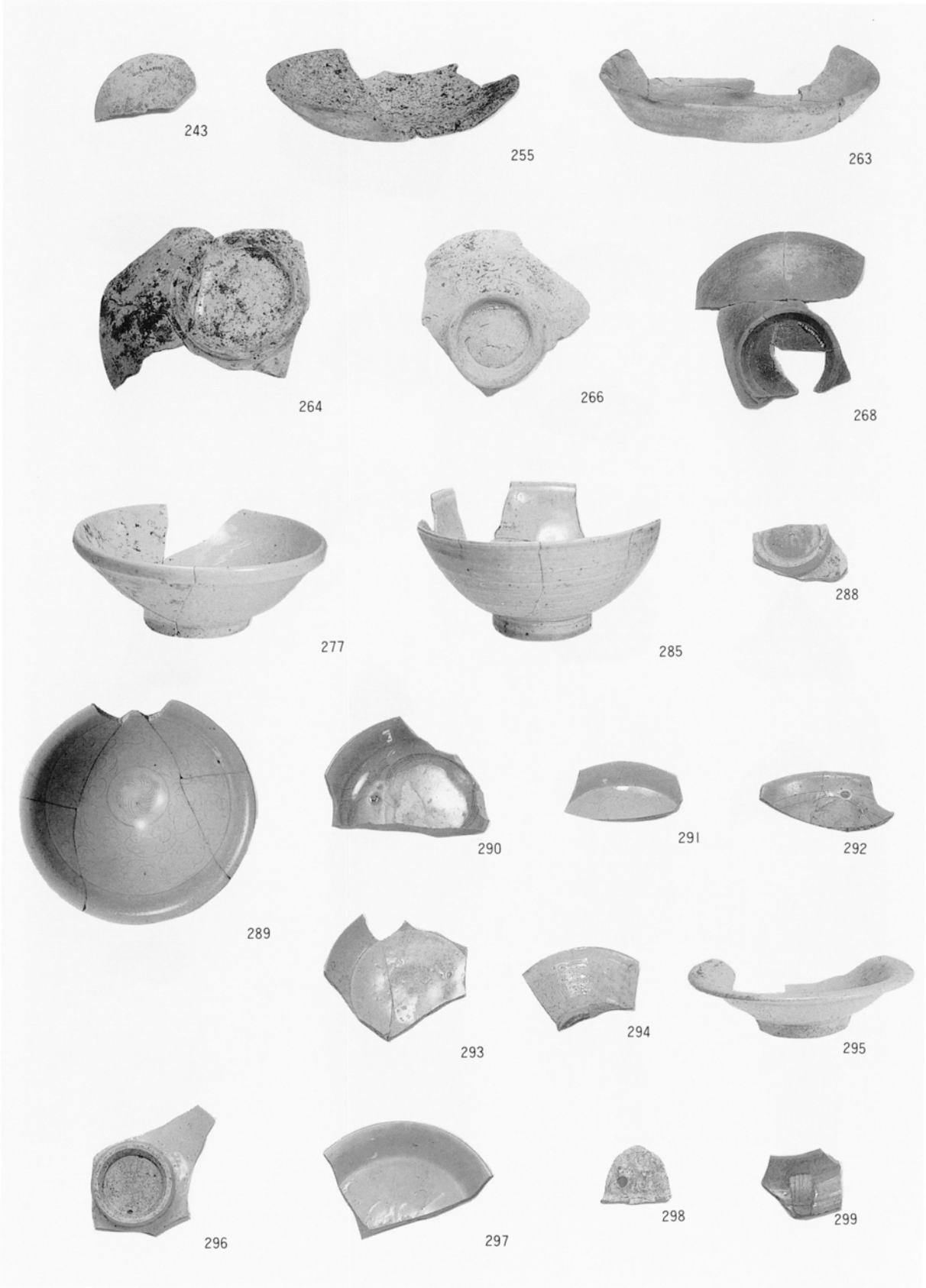
出土遺物１


119
121
123
124
125
136
137
149
158
164
168
178
181
183
175
179
182
177
180
221

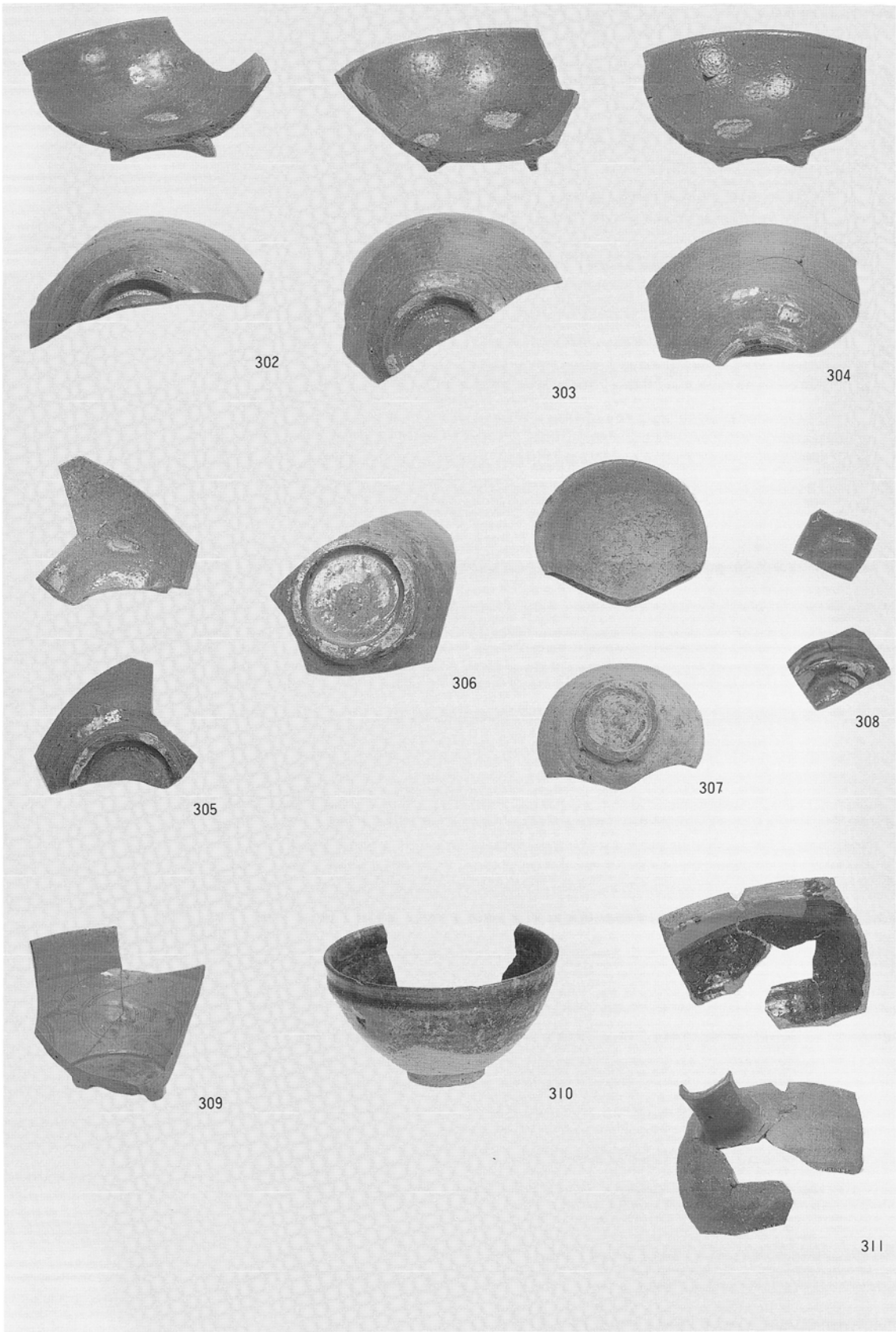
出土遺物 2



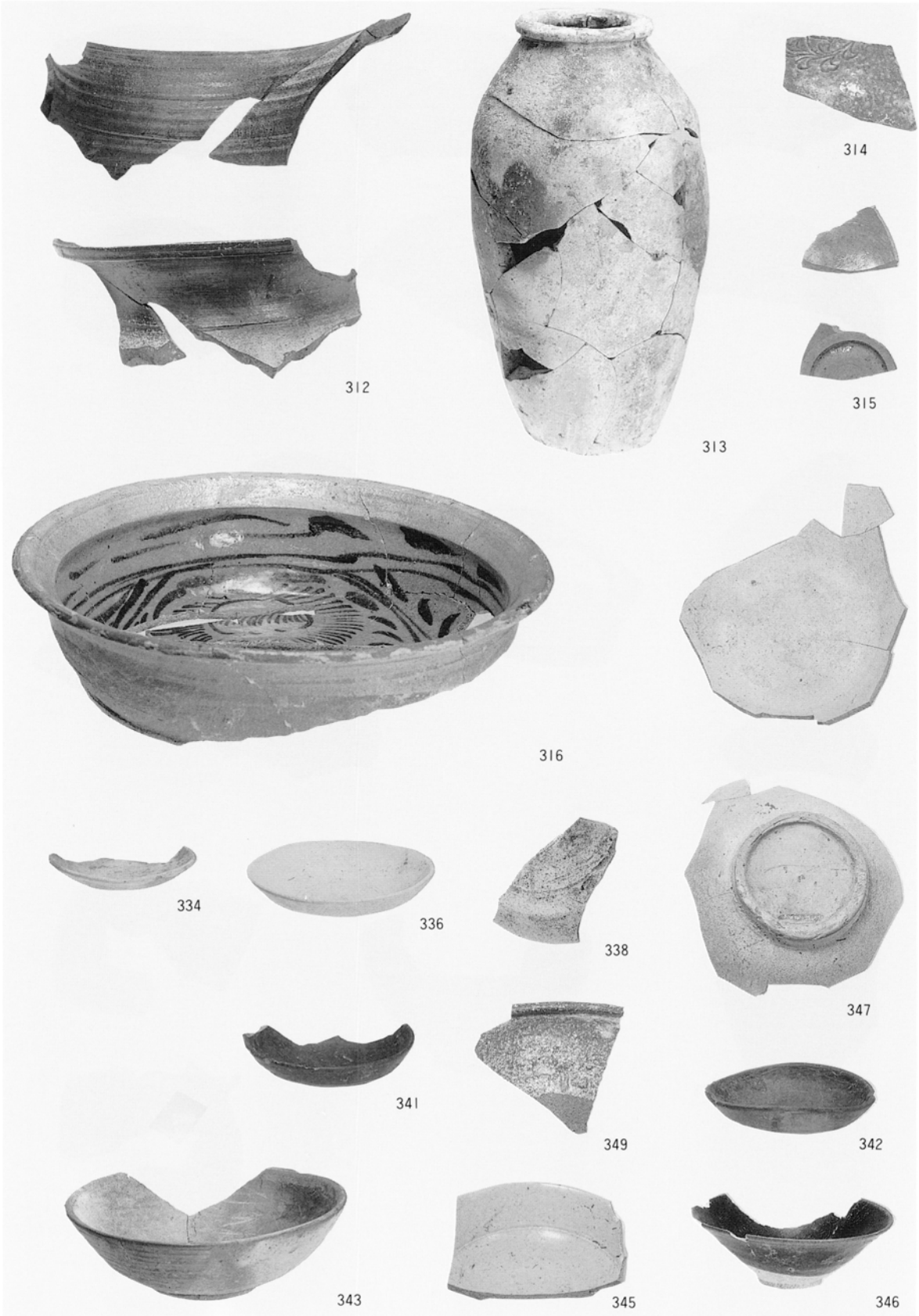
出土遺物 3


243
255
263
264
266
268
277
285
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299

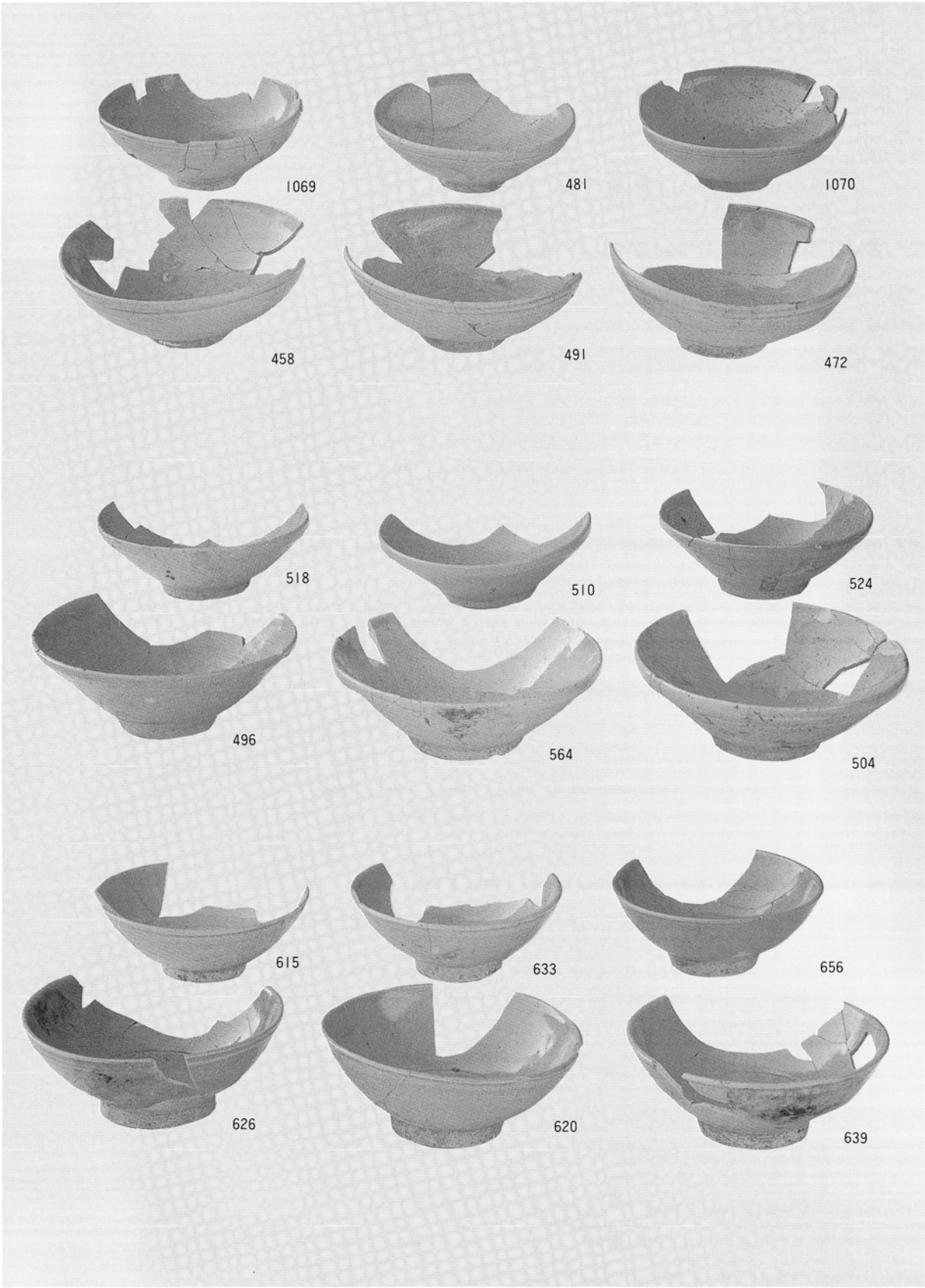
出土遺物 4



出土遺物5

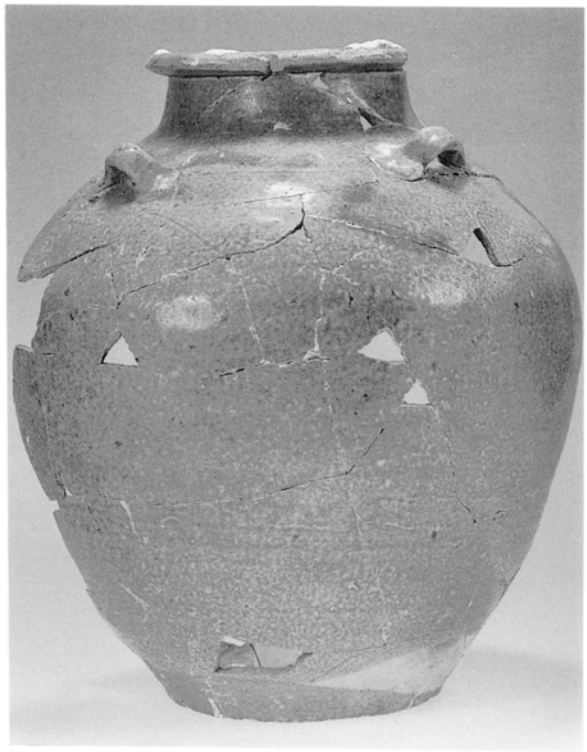


出土遺物 6


1069
481
1070
458
491
472
518
510
524
496
564
504
615
633
656
626
620
639

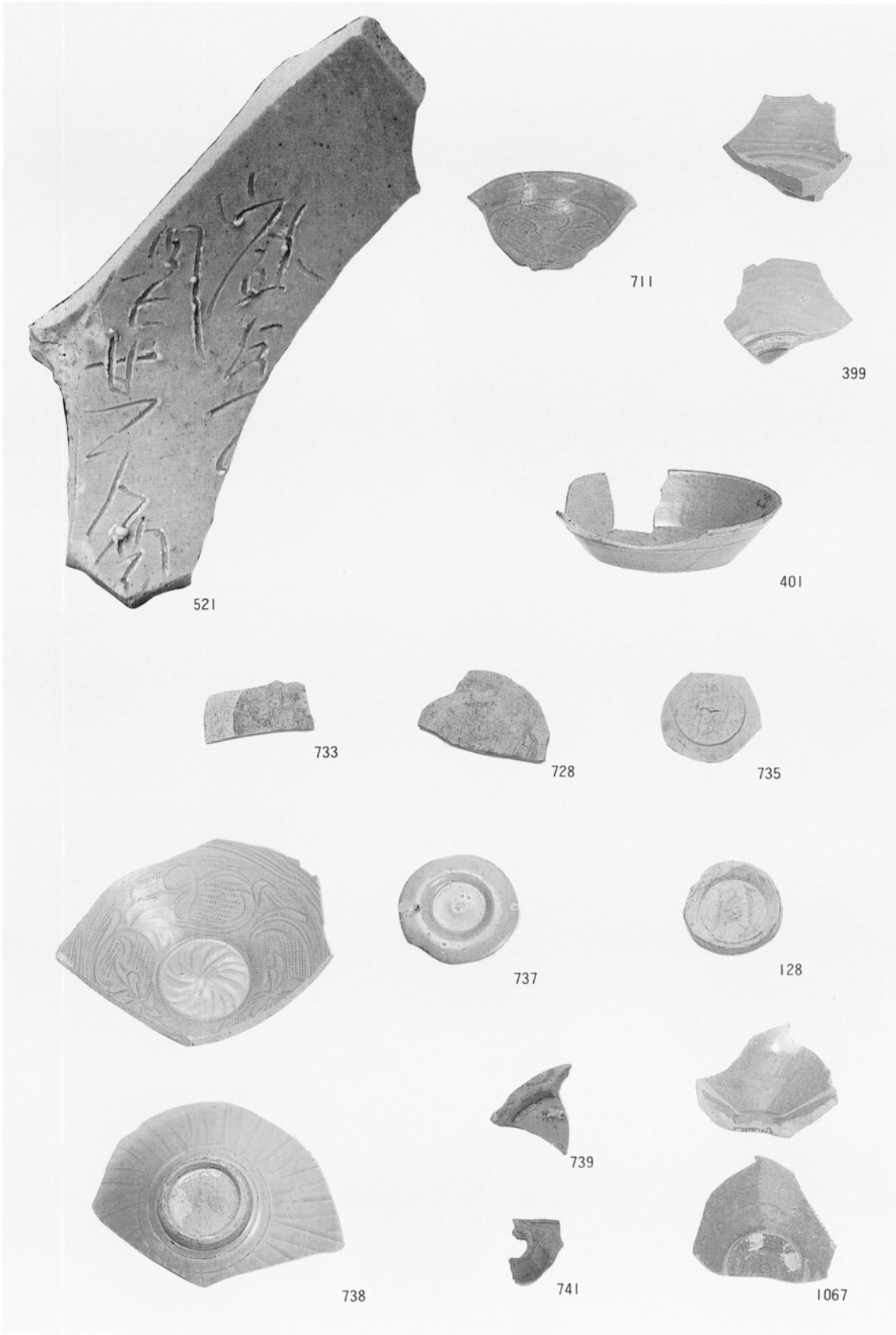
出土遺物 7

724

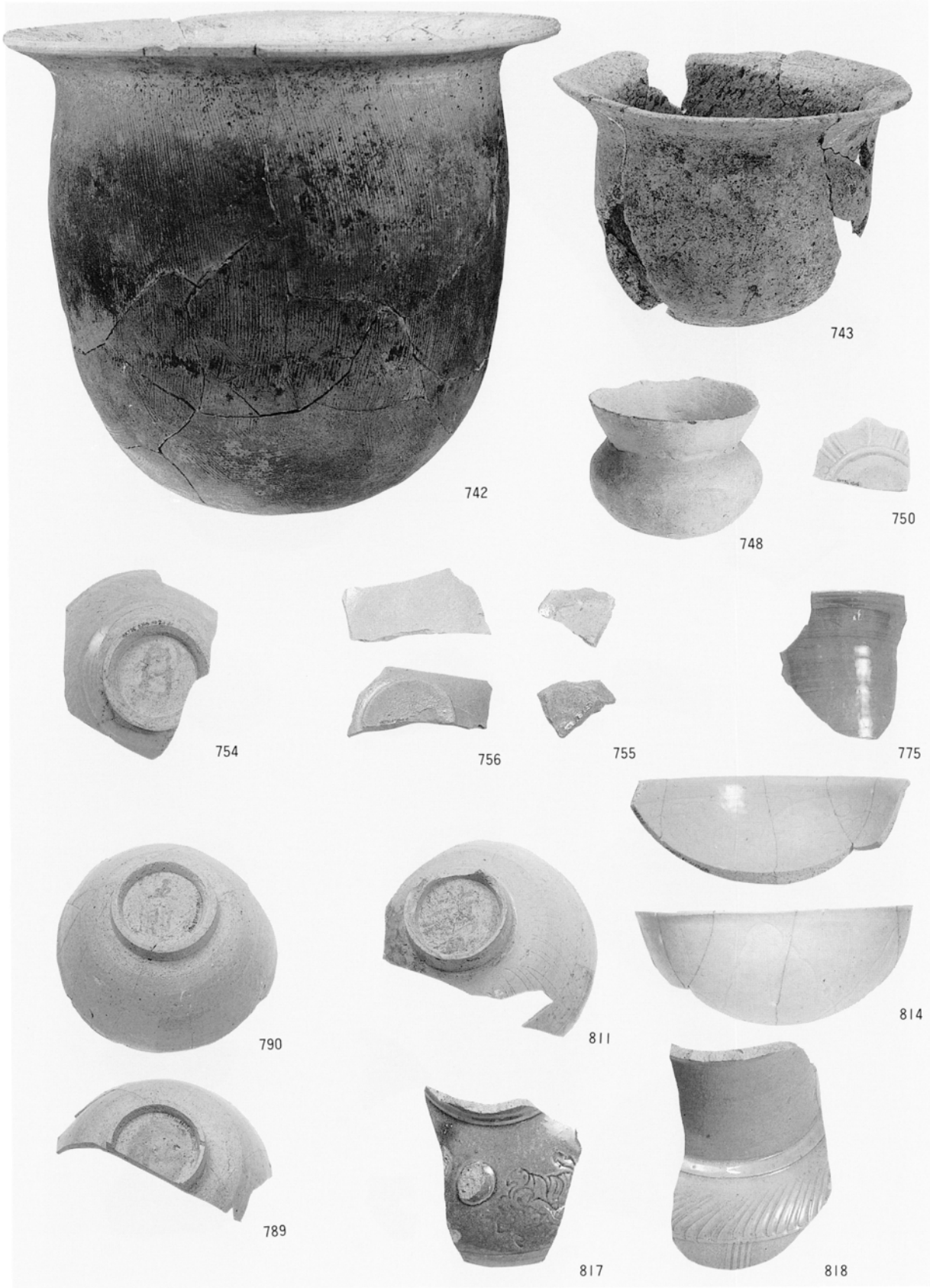


714

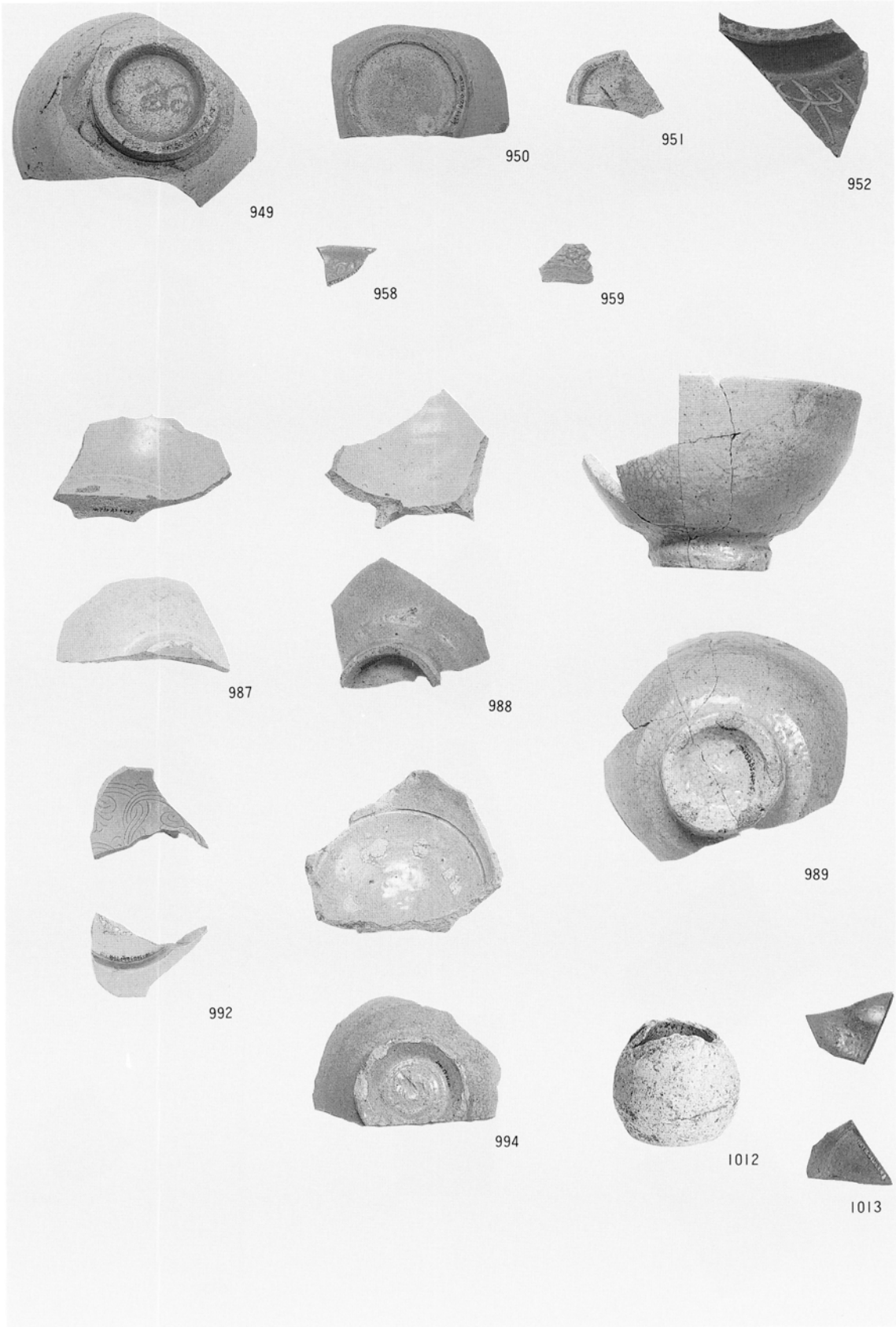
出土遺物 8



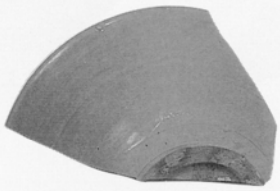
出土遺物 9

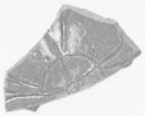


出土遺物10



出土遺物11

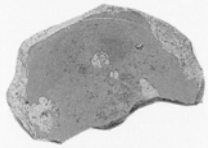

1014



1015

1016

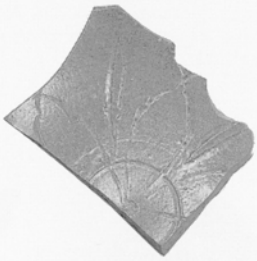
1019



1021

1017

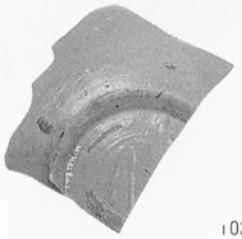
1025



1026

1032

1068


1020

出土遺物12

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第326集
博多　34
1993年３月15日
発行　福岡市教育委員会
（福岡市中央区天神１丁目８番１号）
印刷　アド印刷株式会社
（福岡市博多区博多駅南５丁目20番30号）